

---

# 真恋姫無双～新～

憂鬱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真恋姫無双〜新〜

### 【Nコード】

N6216H

### 【作者名】

憂鬱

### 【あらすじ】

目覚めたらそこは見知らぬ土地だった。そこで一人の女性と出会い旅が始まる。

\*初めに自分の小説には「三国志演義」「史記」等が混ざり合いそれに恋姫設定が入ります。

ですから単語や人名が解らなければWikiを見て頂ければすぐに出てくる

仕様になっております。

後、地名や州、郡などは恋姫設定 + 自分の独自設定です。

完全御都合主義の話な為にそういうのが嫌いな方にはお勧めできません。

## 一刃、古の大陸に降り立つ（前書き）

はじめまして憂鬱と申します。何もかもが初めての事で右も左も分からず手探りでここまで来ました。

誤字脱字など多数あるかも知れませんが温かく見守って下されば幸いです。

## 一刀、古の大陸に降り立つ

北郷一刀は混乱していた

昨日は学校が終わり、寮に帰って風呂に入り、部屋着に着替えて寝たはず。

だが、目覚めたら制服を着ていた。

しかも周りは見たことがない場所。どう見たって東京では無いし日本でも無い。

ただ、テレビでは見たことある。雄大な山々、果てし無く広がる地平線。

その風景は中国にしか見えない。

ここで混乱しても仕方ないと考えるの止め行動を起こそうと周りを見渡した時

足もとに落ちていた物に注目した。それは部屋に置いて有る筈の木刀と通学用鞆があった。

「なんでこんなのがこんな所に落ちてるんだ？」

と思いつつも、木刀と鞆を拾い歩きだした。

五分程歩くと街道を見つけ、その街道沿いに歩くことにする。

すると大声でこちらに話す声が聞こえ、声の方に振り返ると大声の主は、

如何にも時代劇に出てきそうな、盗賊の格好をした三人組であった。その三人組は俺の方を見ると一番偉そうな奴が言う。

「いい服きてんな。身ぐるみ置いてけや、兄ちゃん」

俺は言いたいことが他にも有ったのだがとりあえず即答した。

「嫌だ。消える」

三人組は見合つて大笑いし、俺の周りを囲みいきなり手に持った刀で斬りかかってきた。

だが、俺は冷静だった。

相手はただ武器を振り回しているに過ぎない。動きを見れば判る。

その刀は俺に当る事無く地面に突き刺さり、その間に三人組のうち一人の胸を木刀で薙いだ。

「があ」と持つていた武器を落とし、そのまま前向きに倒れこむ男。残りの男たちは何が起こったのか判らず、

「この野郎！！何しやがった」

と大声を挙げるが、俺は何も答えず二人に向き合つ。

「二人で一気にやるぞ」

「ああ」

と、残りの二人が同時に俺の方へ刀を向けてきたが、

先程と同じく、相手の刀を避けつつ男の胸を薙ぐ。示現流は忒ノ太刀いらずという言葉が有り

初手で仕留めるのが基本とされる。

「ぐえっ」

と、前の男と同じ様に倒れこむ男。

その様子を見ていた最後の男は、何が起こったのかも解らずに俺の方を向き構えるが

刀を持つ手が震えているのが解った。だから俺は

「まだやるか？」

と、少しだけ眼に力を込め言った。

男は言葉を聞いた途端に武器を捨て、脱兎のごとく逃げ出した。

だが、逃げようと背中を向けた瞬間、男の後方に槍を持った女性が立っており

槍把（そうは・槍のお尻の部分）を逃げようとする男の鳩尾に突き当て気絶させ、女性は

「ニヤツ」と笑いこちらに歩いてくる。

だが、歩きながらも警戒は怠っていない隙のない歩き方だった。そして女性は言う。

「お見事ですな。最後のは余計なお世話だったかな」

俺は、女性の問いに直ぐ答える事が出来なかった。先程、女性を見た時から汗が止まらない。

その女性は俺よりも身長は低く見えたが、威圧感が凄く正直怖かった。

だがそのままでは仕方ないので、木刀を握り直し乱れていた気組を立て直す。

そして彼女の問いに答えた。

「ありがとう。まあそいつは逃げようとしていたし、そんなに大した事じゃ無いよ。

それにしても見事なのはそっちじゃないか。俺に気配を悟らせず、近くに来るまで解らなかつたよ」

俺の言葉を聞き

「いえいえ。それこそ大した事では無いですよ。」

しかし、そんな棒切れで三人の内の二人まで伸してしまうなんて。しかも一撃で」

その空気が嫌で、俺は木刀を下げ、そして彼女に向かい合い鬪気を消し言った。

「ごめん。回りくどい事は嫌いだね。

とりあえず貴女の名前とこの地名を教えて頂けないか？俺は北郷一刀と云う。

どうも道に迷った様で近くの街まで行きたいのだが、何せ場所すら分らないのではどうしようもないからさ。

そして、貴女をずっと貴女と呼ぶのも失礼だしね」

と彼女に向って言った。注意深く俺の方を見ていた彼女が

「ふむ、九割方は本当の事を言っ居られる様ですな。

道に迷ったの所はどうも引掛かるが……まあ宜しかろう、私は趙雲と申す。

そしてここは許都と言う街の近くです。結構西には洛陽と言う街もあるが」

と自分の事を「趙雲」と彼女は言った。今話を聞いて一刀は声には出さず

(夢じゃ無いかなど思ったけど……やっぱり現実か。しかし三国志の時代か……)

そして彼女が趙雲だって。しかし趙雲は男だったと思ったが？)

と考えた時に漫画の知識が思い過った。



(タイムパラレルってやつか。誰だよ。タイムマシンは作れないとか言った奴は!!!)

と考えていると「北郷殿」目の前に趙雲の顔があった。

「うわあああー!!! 驚かせないでよ」

と一息入れ

「で、どうしたの趙雲さん」

と気を取り直して言った。すると趙雲は

「いやー北郷殿がものすごい勢いで考え込むので心配に成りましてな。

それで考え事は纏まりましたかな」

と趙雲が心配そうに聞いてきたので、

「ああごめんね、ちよつと自分の事なのに自分の事じゃないみたいな訳の判らない出来事に成っててさ。

それでさ悪いけどもうちよつと聞いていいかな」

と俺が言つと趙雲は「構わない」と言ってくれた。そのあとで彼女も

「私も聞きたい事があるのだが宜しいか」

と言つて来たので「構わない」と言い俺は質問した。

「今のこの国の皇帝と国の名前、そして有力な武将の名前を聞きた

い

趙雲は少し考えて

「ふむ、今の皇帝は靈帝で国の名は後漢、権力では大將軍の何進にその右腕の袁紹、袁術。

軍事では天水の董卓、長沙の孫堅、陳留の曹操かな」

それを聞いて自分の頭の中の知識と併せていくとゆっくりだが結論はでた。

場所は後の許昌で、時代は後漢末期、黄巾の乱が起きる少し前の時期だと。

それだけ考えると趙雲に向き直り姿勢を正し御礼を言った。

「ありがとう趙雲さん。お陰で助かったよ。で、趙雲さんも質問があるんだよね？」

彼女は何か信じられ無い物でも見た様な顔をしたが俺に相對し居住まいを正し問いかけてきた。

「ええ。そうですね二つだけ聞いても宜しいか。まず一つ目に北郷殿は何者だ？

見た所、高い身分の方のように見えるがそれでも無いように見える。更にそのように陽を反射する服はこの大陸にはまずあるまいし作れまい。

最近の噂の者でも無い限りはな。

もう一つだが考えが纏まった様だがこれから何所に行き、何をするのかお聞きしたい」

それを聞いた俺は彼女を見て言った。

「趙雲さん。これから話す事は本当の事んだけど信じる信じないは趙雲さんに委ねるよ。」

本当はあんまり話したく無いのだけど。自分が狂信者とも思われ兼ねないからね。

でも俺は趙雲さんなら話しても良いと思うし、貴女なら信じてくれそうだから話すよ」

俺は少しずつ言葉を選びながら話をする。

「俺の名は北郷一刀。この世界から千八百年後の世界から来たみたいだ。」

その証拠に趙雲さんの字は子龍で、たしか出身は常山郡だったよね。俺の世界では貴女は男性で人気の武将なんだ。此処までは良いかな」

趙雲を見ると俺の事を鑑定するように無言で俺の目を覗き込んでいた。

「一つ宜しいか。字や出身地なんかでその話を信じる事は出来まい。例えば同郷や私の友人に聞けば判ることだからな。」

だから私はもっと確実な物を見せて欲しい」

そう言うともた彼女は俺を鑑定するように覗き込んでいた。

（もっと確実な物と言うと未来の、いや俺の世界の物で良いだろうか？）

と考えていると自分のポケットに入っている、携帯の事を思い出し彼女に聞いてみた。

「趙雲さんこれは携帯というからくりで人や物を写す事が出来るんだけどその機能を試したいんだが良いかな」

と俺が言つと信じられないという顔をして

「それではその「けーたい」とやらで貴方自身を写す事は可能ですか？

可能なら貴方を写して頂きたい」

そう言ったので携帯のカメラを自分に向け撮影ボタンを押す。

「ぴろろ〜ん」

と音が鳴った時に槍を向けてきたが何事も無かった為退いてくれた。それから彼女に写した画像を見せる。

「はい。俺の顔だけど解るかな？」

と画像を見入り驚きながら趙雲は言う。

「おおー、本当に一刀殿が居られる。本当にすごい」

そして一通り堪能した後には彼女は姿勢を直し俺に向って頭を下げた。

「本当に申し訳ない。字を当てられた時点で間違い無いと思っただのだが何分私の性分で

確実な物でないと信じる事にしないと決めているのだ。気分を害してしまつて済まない」

趙雲が本当に済まなそうに謝る為に居心地が悪くなり俺も

「それは仕方ないと思うよ。俺だって信じて貰えるか半信半疑だったから。だからもう頭を上げてくれないか、趙雲さん。そうしてくれないと俺は如何したらいいか解らないからさ」

趙雲が顔をあげた時、本当に一刀が困っているのが目に入り彼女は微笑んでいた。そして

「ではあともう一つの質問だが答えて頂いて良いかな。

北郷殿が未来から来たのは信じよう。だからこの後はどうするのかをお聞きしたい」

俺は考えていた事を彼女に話した。

「その事なんだけど帰る方法を見つける事を第一にして、もしも帰れない時の事を考えてさ、

こちらの世界の知識を学ぼうと思う。最初に始めたいのは字を覚える事とお金を稼ぐ事かな。

どのくらい時間が掛るか分からないけどね」

と正直に言う一刀を見て趙雲は、

「ふむ其処まで考えておいでか。北郷殿、良ければ私も途中まで一緒にしても宜しいかな。

私は読み書きが出来るしこちらの世界の常識位なら貴方に教える事も可能だがどうだろう」

正直、今の俺は赤子とそんなにかわらない。誰かに助けて貰わねば生きていけない。

でも荷物には成りたくないのであえて聞いた。

「趙雲さんが良いなら俺としては正直願ってもない申し出で嬉しい。だけど、俺には金も無いし何もあげられる物も無いけど本当に良いの？」

「そんな事は気にしなくてよろしい。私が良いと言うのだから。私としても未来の事を聞けるなどそうそうある事では無いし。

それでも貴方が気になると言うのならいつでもいいから私に受けた恩とやらを違う誰かに帰してやって頂きたい。

私はそれで満足だ。では北郷殿準備はよろしいか？」

と俺の話も聞かず無理やり連れて行くこととする趙雲は少し照れているようにも見えた。

俺は覚悟を決めて彼女に向け頭を下げた

「趙雲さんこれからよろしくお願いします」

すると彼女は笑いながら言う。

「趙雲でよろしい。わたしも一刀と呼ばせて貰う」

目覚めてから色々な事が合った。

だが何だかこの人に会えただけでこの世界に来た価値が有ると思えるほど良い笑顔だった。

そして二人で歩きだした。空は透き通る様な青空だった。

## 一刀、古の大陸に降り立つ（後書き）

良く最後までお読みくださいまして有難うございます。SSは今まで読み専だったのですが色々な物語が有り、読む内に自分でも書いてみたいと思い素直に欲求に従う事にしました。何分初めてで見苦しい点などございましたらお教え下さい。

## 一刀の新たな旅立ち（前書き）

趙雲と旅をしていきいろんな事を吸収していく一刀だったが・



## 一刀の新たな旅立ち

一刀は趙雲と旅をし夜になると彼女にこの世界の事を聞いた。

最初に文字を習い、次に稽古を見てもらい最後に今のこの国の情勢を聞いた。

俺は昼間歩いて見た事と夜に趙雲に聞いた事を吟味し思案する事で自分なりの結論に至った。

この国は今、匈奴等の外敵と最近現れる様になった賊達との戦でボロボロの状態で、

しかもそれに対応すべき国の上層部は腐りはて機能してない。

更に官軍は將兵達共に弱卒で賊達にも負ける始末。

地方の有力軍閥の長たちは、虎視眈々と機会を覗って力を付けているとの事。

土地は痩せ細り、民は貧困に喘ぎ長江、黄河は度々氾濫し更に民を苦しめる。

俺は旅の途中に見た親を亡くした兄弟や戦火で家を焼かれ、家族を失い自我を無くした女性等、

自分の世界の身の回りでは考えられない、この世界の異常さを痛感していた。

そんなある日変な噂を聞いた。その内容は

「流星とともに白き衣を纏った天の御遣いが現れ、混沌のこの世界を救うだろう。」

この話は管路と言う易者の占いの結果であり、その話が瞬く間に大都市を起点に、まるで水面に波紋が

伝わっていくように広がっていった。この時はそんな話俺自身には関係ないと思っていた。

その間、俺と趙雲は宛州に入り濮陽と言う名の都市にいた。ここは交通の要所で  
到る所の都市に街道が伸びていた。  
交通の要所であるために、市は栄え治安も良く人々の笑顔も絶えな  
かった。

趙雲とはこの街で別れた。彼女いわく「もう君に私は必要ないだ  
ろう」との事で、

確かに日常会話や手紙を書く位なら問題ない。

旅費の方も濮陽に入って趙雲に自分の荷物の内ボールペンとノート  
(この時代は紙が貴重)  
を売ってもらい旅費を確保したので贅沢をしなければ結構持つと思  
う。

そして最後の日、街で買い物をして宿に戻り彼女と話をした。

趙雲はこれから北平に向かうとの事だった。北平太守は公孫贇と言  
い、

白馬義従と呼ばれる騎馬隊を率い北平を中心に勢力を伸ばしている  
という。

そして色々な話をした。彼女と知り合い一か月の間色々あった。

賊に襲われ初めて人を殺した事で呆然となったが、彼女に叱られた  
り話を聞いてもらおう事で

自分と向き合える様になり、それらを乗り越える事が出来た。

野宿の時の場所の取り方等を教えてくれたのも彼女だった。

かなりの時間に渡り話をし、自室に戻る時彼女は突然言った。

「実をいうと私はお前が天の御遣いだと思っている、一刀」

「いきなり何。俺が天の御遣いだって、冗談も程々にしないと怒る

よ。趙雲」

と俺が言つと彼女は本気らしく声を大きくし反論した。

「しかし、私は見たのだ。お前が賊共と争っていた方角に流星が落ちて行くのを。」

噂を知っていた私は、天の御遣いがどんな者かと見に行つたのだ。そしてお前を見つけ思った。お前が天の御遣いじゃないかつてな。お前の着ている服はこの大陸の物では無いし異様だ。

そして、お前が私と旅をし始めてから、考えは確信に変わった。真名を知らなかった事や読み書きが出来なかった事。

そして真綿が水を吸収するがごとく、読書をたつた三週間で覚えてしまった事……」

それだけ言つと彼女は姿勢を正し

「お前が天の御遣いならお前に仕えたい。だが他の太守も見てみない。」

我ながら呆れる性格だが、これが私なのだから仕方ないと思う。だから少し考える時間をくれないだろうか。

もし他の太守を見て、私の仕えるべき主でないと判断したらお前にこの槍を捧げよう。

その証として、お前に私の真名を預ける。私の名は『星』と言つ

その言葉を一言一句聞き漏らさず聞きつつ、俺は彼女の眼を見ていた。

そして彼女が言い終わると同時に俺も話しかけた。

「君がそこまで思っているなら何も言わない。でも良いの？真名つて大切な名前なのだろう？」

「構わない。むしろ呼んで欲しいのだ貴方に。」

「了解した。今度会える時はどうなっているか分からないけど呼ばせてもらおうよ」星『』

それから明日の用意とかも有りそのまま自室に戻った。

そして、これから何を為すべきか一晩中考える内に朝になっていた。朝早くに星と食事をとりそこで今後の事を聞かれたので俺は

「荊州に行つて見ようと思つ」

星に何故そこに行くのかと理由を訊かれたので要点を纏めて説明した。

「俺の知識どつりなら、荊州は土地も肥えており長江中域の拠点だろ。

だから人も物も集まる。人が集まれば情報も集まる。向こうに帰れる情報も有るかも知れない。

それにこれが本題なんだけど、後々荊州は大事な場所となるから、何か起こすにしろ、しないにしろ見て置くことは悪いことじゃないと思つ」

と、言うつと星は納得したのか何も言わなかった。

そして、そのまま食事をし部屋に荷物を取りに行き、街の外まで一緒に歩き星と握手をして

「じゃあ星、元気でね。」

「ではまた会おう未来の主」

と二人笑って別れた。

一刀は荊州に向かう。途中に自身の運命すら変えてしまふ事がある  
と知らずに…

## 一刀の新たな旅立ち（後書き）

ここまでお読みくださいましてありがとうございます。いきなりですが文才が欲しい……。

もしくは俺みたいなた文書きでも文豪になれる道具が欲しいと夢にまで見る。重症ですね。

さて次回ですがあの二人組が登場します。お楽しみに……。）  
本当にだせるのかなー）

またメールにてお知らせして下さった方に関してはもう感謝のしようも御座いません。

この場をかりてお礼申し上げます。

憂鬱

一刀初めの一步を踏出す(前書き)

星と別れて1人で旅する一刀だがそこにあの二人が現れる。

## 一刀初めの一步を踏出す

星と別れてから一週間掛けて、一刀は許都まで戻っていた。

二人で旅をしていた時は寄り道をして、街道のいきつく場所を聞いたり、

街でお金を稼ぐ方法とかを、星に教えてもらいながら旅をしていた為、

濮陽に着いた時は会ってから三週間程掛ったが、

今回は荊州に行く事を目標としている為、寄り道をせず真っ直ぐ許都に向かってきたが、

一人で長旅など初めてな為、焦らず歩いた。そして許都の宿屋で一泊し荊州に向かう事にした。

起きて朝食を摂り街を出て半日行った所の街道で、誰かがこちらに向かって来るのが見えた。

こちらに向かってくるのは少女の二人組。さらに後ろから三人組の人影も見える。

彼女達は追われているらしく、俺に気づくと「しまった」と思ったのだらうか、

今来た道に戻ろうとしたが、後ろから来た三人組に阻まれて立ち往生してしまう。

だが俺にはその後ろから来た三人組に見覚えがあった。

この世界に来て最初に会った者たちであり、俺に剣を向けて身ぐるみ剥がそうとして

俺と星に倒された盗賊達であった。俺はそいつ等に向かつて

「どこかで見ただ連中だと思ったらお前らか。まだそんな事やってたのか。」



もう少し痛い目に合わないとは分らないみたいだな」

と言い愛用の木刀を握り睨む。

すると三人組はこちらを見て、金魚のように口をパクパクさせ息を吐き出すように言った。

「てっ、てっ、手前はあん時の」「げっ、げげげ」「でっ、でっ、でたんだな~~~~~」

三者三様の驚き方をして剣を抜いた。が、手が震えまともな構えも取れていないので俺が、

「オイオイ、そんな構えで本気に俺とヤル気か。なあー!!」

最後に気を入れ奴等を睨む、すると三人同時に剣を落としそのまま回れ右で逃げ出した。

「ふー」と小さく息を吐き、少女達に向き合いそして笑顔で話しかける。

「大丈夫？、怪我はないかい？」

すると、その内の一人が警戒しながらも答えてくれた。

「ええ、おかげさまで大丈夫です。危ない所を有難うございました」と眼鏡をかけた少女が答えてくれた。

そして、もう一人の頭に某万博のシンボルみたいな物を頭に乘せた少女が

「いやー、お兄さんがいなければ危うく宝慧が切られてしまう所で

したよ」

(宝慧つて…何？いやいやそれ以上に自分の命を心配しようよ…)  
俺はこの間延びする少女に戸惑いつつ、

「それは良かったね。それで何で奴らに追い掛けられてたんだい」  
と聞くと、眼鏡をかけた少女が眼鏡を直しながら話してくれた。  
要点をまとめると彼女達は、自分が仕えるべき主を探して大陸を旅  
をしており、  
奴等は少し先の街道を歩いていた時に、いきなりぶつかってきて有  
り金を置いて行けと言いだし  
彼女達が隙を見て逃げ出すと、追いかけてきてここまで来たのだと  
言う。

その話を聞いた後、彼女達二人で大丈夫か心配になり、次はどこに  
行くのかと聞いてみると  
「南陽」まで行くと言う。自分も途中まで一緒にいいかと聞くと  
「構いません」と言われたので一緒にいていった。歩きながら自  
己紹介をお互いにした。

眼鏡を掛け黒髪の利発そうな少女を戯志才といい、  
頭に太〇の塔らしきオブリジェを乗せた、金髪の少女が程立と言った。  
彼女が程立、後の程？かと思ひ少し驚いていた。

俺が自己紹介をした時に、字は無いと言うと二人がお互いに目を  
合わせ、こちらを見入っていた。  
そして俺の事は「一刀」か「北郷」と呼んでくれと言うと、  
戯志才は「一刀殿」、程立は何故か「お兄さん」と呼ぶようになっ

た。

理由を聞くと「お兄さんはお兄さんですから」と理解不明な答えを返してきたので諦めた。

それからは、彼女達の歩く速さに合わせて街道を一路、南陽に歩いて行つた。

途中休憩を挟みながら、次の日の夜半に南陽の城門前に着いたが、城門は閉められていた。

翌朝まで開けてくれそうにも無いので、

その日は俺らと同じ、夕暮れまでに門を通れなかった、一人の商人と野宿することにした。

商人は張世平と名のつた。

交替で見張りをし一刀が番をしていた時、何人かの気配を感じ、戯志才と程立そして張世平を起こし、皆を森に隠し様子を覗う。やってきたのは六人の男たちで、自分達がいた所に誰もいない事に気づくと、

慌てて辺りを探索し始めた。その内の一人が

「おい、辺りを探してこい。まだ、そう遠くには行ってねえ筈だ。久しぶりの獲物だ抜かるなよ」

と、頭らしき奴に命令され辺りに散っていった。それを見て一刀は木刀を握り絞め

「皆、ここにいてくれ、ちょっと始末してくる」

とだけ残し森の闇に消えていった。それから2分もしない内に「ゴツ」「バキツ」の音と共に

「グエツ」「ギヤア」と、人の声が聞こえ辺りが静かになった。

そして5分程して皆の後から一刀が現れた。  
魏志才がこちらを見て

「殺したのですか？」

と聞いて来たので、

「いや、眠って貰っただけだよ」

と辺りを気にしながら言った。すると程立が

「何人眠って貰ったのですか？」

と間延びした口調で訊いてきたので「4人」と短く答える。

そして暫くの間、息を整えてから、闇に紛れて頭の方に向かって行った。

辺りの声の異変に気付いたのだろうか？奴らの頭らしき男が口笛を吹き

皆を集合させようとしたが、集まったのは一人だけだった。

何度吹いても、手下達が帰ってこないで口笛を止め、元来た道に戻ろうと、

森の入口付近に来た時だった。手下を先頭に歩かせ、自分は後方を気にしていた頭の脇腹辺りに

イスノキの木刀がめり込んでいた。撃った自分が「これは痛い」と思う程の打込みだった。

その場で頭は倒れこみ、それを見た手下は、慌てて剣を振りかざしこちらに向かってくるが

動揺した剣先が相手になるわけも無く、難なく躲され一刀の打込みによって意識を失った。

そして、頭と手下5人を縄で縛り寝場所に帰り夜明けを待つことにした。

寝場所に帰ると、戯志才と程立のふたりに少し話掛け寝た。二人はそのあとも何か話をしていたが：

夜明けまで寝て、起きるとそろそろ城門が開く時間になっていた。起きたのは自分が最後だった。すると、張世平が俺に向かって話かけてきた。

「昨夜は有難うございました。おかげでまた商売に戻る事ができます」

日本人の俺としては一度謝辞を言って貰えば十分なのだが、一緒に旅をしていた星によると、こちらでは受けた恩以上の事をしなくてはいけないらしい。

「本当に何と言えがいいのか、感謝のしようもございません。礼と云っては何ですが」

今日は南陽で宿を取らせて頂きたく存じます。どうか一緒にの方もどうぞ」

と言ってくれたので彼女達にどうするか聞いた時、戯志才が何か言おうとする前に、程立が

「いいではないですかね」

と言った途端、戯志才が反論する。

「!?!?ちよ、ちよつと風、良い訳ないでしょう?私達には目的が…」

…」

と話す戯志才の言葉を遮り

「稟ちゃん。ここは任せて貰えませんかね？」

と稟と呼んだ少女を見る。彼女は眼鏡を直しながら言った。

「何か、考えがあるのですか風？」

風と呼んだ少女と視線を合わせて、諦めたように『ふう』と小さく息を吐き出し

「一刀殿、私達は構いません。貴方はどうなさるおつもりですか？」

自分としても、断るのが失礼というなら受けるしかないと思っていたので

「では張世平さん、お世話になります」

と言い、頭を下げ、そのあとあの6人組を門番に引き渡してから南陽の門をくぐった。

南陽の街は、今まで見てきた街よりも栄えていた。

街に人が行きかい、市には物資はあふれ、治安も街の中に関して言えば良い様に見えた。

市場を通り抜け、街の中心地に宿屋があった。宿屋の扉をくぐり記帳を済ませると

侍女が出てきて「荷物お預かり致します」と言い荷物を俺から受け取ると

「お部屋にご案内いたします」

と言って、先頭に立ち歩いて行った。そして部屋の前に立つと

「どうぞこちらです」

と扉を開け俺に先に入る様に促す。

部屋は入ってすぐにリビングがあり、その奥にベットがある。

リビングには椅子が四脚と机があり、それら以外の調度品は無かった。

部屋で一息ついていたら、張世平さんがやってきて自分の友人だという蘇双さんを紹介した。

昨夜あった事や俺の身の回りの話、彼等の昔話などして盛り上がる。夕飯は程立や戯志才達も呼び、5人で色々な話をした。その時「天の御遣い」の話が出る。

許都の近くに流星が落ちたといい、近所の住民や旅人の多数がそれを見たと言う。

俺は、なるべく自然に見えるよう話題を違う方に持って行く事に努めた。

俺が話を逸らそうとしていた時、程立と戯志才は俺の方を見ていた。

楽しい時は過ぎ、皆が部屋に戻り俺も部屋のベットで寝て3時間程した時だった。

部屋の扉がノックされ戯志才が控えめな声で言う。

「一刀殿、夜分申し訳ございません。戯志才ですが御話があります。開けて頂けないでしょうか」

「今開けるから少し待って」

と言い木刀を持ち扉を開けた。そこには戯志才と程立がいた。

「どうしたの二人して？立ち話も何だから入りなよ」

「じゃあ失礼しますねー」「失礼します」

と二人とも入って椅子に座って貰った。

「ごめんね白湯しかないけど。じゃあ聞こうか。どうしたのこんな夜更けに？」

「回りくどいのは嫌いなので聞きます。一刀殿。貴方何者です？」

と戯志才が眼鏡を持ち上げながら言う。

「何者って言われても。俺は俺としか言い様がないけど」

俺が言うと彼女は小さく息を吐き

「訊き方が悪かったですね。言い直します。『貴方はこの大陸の人では無いですね？』」

と言いたいのです。夕食のとき話を聞いておりましたが、聞き慣れない言葉が出て来ましたし

服の話の時も聞かない名前が出てきましたね。単語を上げれば

「ぼーりえすてる」「まっち」「てすと」「げーむ」とかですね」

と言いこちらを見て

「更に私達の名前、風の名前を聞いた時、少し緊張しましたし、い



や、驚いたというべきか。

そして、私の名前の時は疑うような眼つきで、私を見ておりました」  
彼女の視線が突き刺さる。

「先程、私達との話の中で噂の「天の御遣い」の話が出た時だけ話題を逸らそうとなさいましたね」  
と言い程立に話を振ろうとした時

「……………」

彼女は寝ていた。

「ちょ！？ちよつと起きなさい、風！！」

戯志才が慌てていると云う、珍しい光景であった。

「！？……おおー。稟ちゃんの話が長い為、本気で寝てしまったのですよ。ええとですね、

風が思うにですよ。お兄さんは風の事や稟ちゃんの事、そして「天の御遣い」の事などを

詳しく知っているのかなーと思ひまして。単語の事は地方の独特の言葉と言う事であれば

納得出来ないことでも無いですし、なにせ、風達も全てを知っている訳でも無いですから」

と眠そうに言った。だが、

「でも、風達の名前の時と「天の御遣い」の時の不自然さは納得はできませんね」

説明して頂けますか、お兄さん？」

そこで俺は真剣にこちらを見る程立の眼に気づいた。だから俺は彼女を見て

「俺が天の御遣いだったらどうする？」

と訊いてみた所、程立は

「ええと。何もしません。唯、ついて行くだけです」

と、事も無げに言った。言われた俺は

「はあ、……はい？」

と不意を突かれ変な声が出る。それを聞いた戯志才も慌てて

「ちよっ！？風本気ですか？貴女何を考えているのです。説明しなさい！！」

それを聞き、この場を混乱させた張本人はやっぱり事も無げに

「言葉の通りですよ。お兄さんに着いて行く。唯それだけですな」

すると戯志才が

「それでは説明になってないでしょう風！！もっと詳しく言いなさい」

と声を大きくし言った。

「稟ちゃんもお兄さんも。夜中なので声は控えて下さいね。ええと  
先程寝ている時に夢を見ました。」

風と稟ちゃん、二人の目の前に太陽が落ちてきて辺りが真っ暗にな  
りました。

ですから、二人で落ちた太陽を持ち上げると辺りは明るくなりました。  
だから思っただのです。

『太陽とは天の象徴』これは稟ちゃんと二人で天の御遣いを支えよ  
とのお告げだと、これが理由です」

それを聞いていた戯志才が驚き顔を真っ青にして程立に話しかけた。

「風！！その夢の話本当ですか？」

友人のそんな姿は初めて見たのだろう。程立の声も心配そうに

「稟ちゃん？どうしたのです。そんなに慌てて……まさか！？稟ち  
ゃんも！」

「ええ！！私も同じ夢です。貴女と二人で太陽を持ち上げる夢です」

二人が興奮と驚きで、言葉を継げなくなっていたので俺が話をする。

「オイオイ。俺が「天の御遣いだったら」という話をしただけで俺  
がそうとは……」

「言っていないよ」と言う言葉を遮る様に二人の眼が言っていた。冗  
談事ではないと。

真剣に視線を向けているので、俺は小さく息を吐き、姿勢を正し二

人に言った。

「これから話す事は、俺には真実だけど、君達には嘘言にしか聞えないと思うけど聞いてくれるかい？」

俺の声色が変わった事に気付いたのだろう。二人はお互いを見合い、俺の方を向き頷いた。

俺が説明すると、信じられないという顔をする二人に程立の字を言った。

「君の字は「仲徳」だったと思う。それと戯志才さん、君は偽名だよね。」

本物は曹操に仕えているはずだから。そう俺は知っていたんだ、君達の事を。だから驚いた」

だから俺は二人の反応が返ってくるまで待つことにした。少しして二人はお互いを見合い何か囁くと魏志才が

「偽名を使い申し訳ありません。私は姓は郭、名は嘉、字は奉考と申します。」

と聞くと俺は言った。

「君が郭嘉さんか。会えて光栄だよ」

と言って彼女に微笑かけて

「で、話を戻すけど俺の言葉を信じる？」

彼女達に問いかける。

少し間が空いて郭嘉が問かけてきた。

「一刀殿にお聞きしたい。貴方は未来から来られたと言われた。では、このあとこの大陸に起こる事もご存じかと思われませんが、貴方は何をなさるおつもりでしょうか？」

俺は言葉を選びつつ、彼女の質問に答える。

「つい此間まで俺は、自分の世界に帰る事を考えていればいいと思っていたんだけどね。」

最近、それだけじゃ駄目なのかなって考えたりもする。

眼の前で助けを求められているのに、見知らぬふりなんか俺には出来ないし。

でも、俺に出来る事と言えば、自分の範囲内で人を助けるくらい。

今からさらに治安は悪くなり、大混乱が起きて弱い人が更に弱い人を襲う、そんな時代が来る。

一ヶ月間旅をして、？州辺りでは兆候もあつた。

でも、俺一人では救える数は限られてくる。どうしようか考えている所だよ。

荊州に行くのは自分のケジメの為で、そこに情報が無ければ、

この世界に根を張り、この世界の為に生きようと思う」

彼女達は俺が話終わると同時に、座っていた椅子から離れて片足をひざまずいて、郭嘉が

「一刀殿、いきなりで申し訳ないが我ら二人の主になって頂けないでしょうか？」

私達二人、己で武器を取り闘う事は出来ません。

しかし、貴方の頭となり知恵を振り絞り、共に考える事はできません。我ら二人、色々な国に行き、色々な人に会い主となって頂く人物を探しております。

しかし、今ここで我ら二人の主となって頂く方に巡り合え、我らの旅はここに終りを告げたものと信じます。どうかお願い致します」

いきなりの事にびっくりして言葉を無くした一刀だったが、

（彼女達が真剣に俺の事を主とってくれているのに呆然自失としていたら彼女達に失礼だろう）

と自分を奮い立たせ

「自分じゃ、どこまでやれるか分からないけど、君達が俺の事を主と呼んでくれる限り

俺は、君達の期待を裏切らない様に努力していきたいと思う。

けど本当に俺でいいのか？二人とも。俺で良いなら顔を上げてくれないか？」

二人が顔を上げた時、二人とも眼が真っ赤だった。そして自分の真名を告げた。

「私は姓が程、名を立、字を仲徳、真名は風と申します。」

「私は姓を郭、名を嘉、字を奉考、真名を稟と言います。」

二人が言った後

「俺は姓が北郷、名は一刀、字は無いし、真名も無い。一刀が真名に近いので一刀と呼んで欲しい」

そして、二人に席に着いて貰い、これからの事を話し合った。まず俺から話した。

「これから俺達はどうしたら良いと思う？。風、稟。君達の考えを聞かせて欲しい」

すると稟が

「向こうの世界の情報を集めるなら……」

と続け様とするのを遮り、

「俺の情報の事は考え無くていいよ、稟。君達が仲間になってくれたのなら話は別だよ。」

俺はこつちの世界に残るよ。それが君達への礼儀だし。俺も覚悟を決めたよ」

「本当に宜しいのですかー？」

「いいよ、風。後悔はするかも知れないけど、俺はこつちの世界で今、出来る事をする。」

それこそ、俺がこつちの世界に送られた理由だと思っから」

すると稟が短く「解りました」と言い、風も「了解したのですよ」と言ってくれた。

そして朝まで今後この世界で起こると思われることとそれに対する対策とを話し合っていた。

## 一刀初めの一步を踏出す（後書き）

途中に出てきた張世平と蘇双の二人ですがいずれ大役を任せようかなと思ひ登場させました。

横山さんの三国志にもそんな人が出てたので・・・

WIKIで調べて貰えばすぐ出てきます。

もっと早く投稿するつもりでしたが友人と酒を飲んでいたのでこんな時間になってしまいました。

あと書いていても読み返しても思ったのですが長い。

なぜこんなことに・・・Orz

次回ですがわかりません。まだ何も書きあがってません。今から必至に書きあげてみようかと思ひます。

ここまでお読み頂きありがとうございます。



一刀の覚悟くそして荊州へく（前書き）

一刀の目の前に自分の主を見つめる者がいる。  
一刀は皆の前に立ち決意を話した。

## 一刀の覚悟、そして荊州へ

一刀の目の前には兵が集まっていた。しかも完全武装した兵達およそ五千。

こんなにも集まった理由は大きく言えば3つあった。

- 1・張世平と蘇双の2人が軍資金を出してくれたこと。
- 2・風と稟が南陽周辺に「天の御遣い」が現れたと噂をばら撒いたこと。
- 3・冀州の鉅鹿で太平道の教祖張角が一斉蜂起し全国に反乱軍が広がったこと。

まあ他にも条件が重なったが、やっぱりこの3つによる事が大きい。

1つめと2つめは関係が有り、風と稟と俺の3人で今後の話を話し合っていた朝に

張世平が扉の向こうで聞いていたのだった。しかも途中からは蘇双も一緒に。

俺としては恥かしいが全然気付かなかった、それほど彼女達と真剣に話し込んでいたのだ。

彼女達との話を終え、自分達のやるべき事を頭の中で整理し、寝ようとした時だった。

「失礼します。張世平ですが、少し宜しいでしょうか」

と扉の向こうから声がする。

「少し待って頂けますか？今開けます」

と、言つて扉を開けると張世平と蘇双の2人が立っていたので、部屋に入れ椅子に座つて貰う。

俺が椅子に座つた処で張世平が話を始めた。

「単刀直入に言います。貴方の手伝いをさせて頂きたい。横にいる蘇双も同じらしいです」

「私も1枚噛まして貰う。私が軍資金で張世平が馬ではどうだ」

俺は何が何だか分からずに聞いていたが、我に返り聞き直した。

「何の話をされているのか分かりませんが……一体どうなされたのです？御二人とも。」

馬だの軍資金だの。言っている意味がわかりませんが……」

すると張世平が顔は笑ながらも眼は真剣に

「聞いてしまったのですよ貴方の話を。違つ世界から来られたとか」

それを聞いて俺の頭の中が真っ白になった。真っ白になった頭で考えて彼等に言った。

「俺の与太話かも知れないのに信じると仰いますか。本当に良いのですか？」

すると張世平が少し表情を緩めつつ

「私達は商人です。その人の性格や人柄を見抜く力がないと話になりません」

彼等は俺と話していた時も俺の眼を見ていた。俺もそれに気づいていてた。俺も覚悟を決め、

「それならば聞いて頂きましょう。俺の世界の事を。向こうで何が起こつて、

そして、今からこちらで起こる出来事を」

そして風達に話した事を彼等にも話した。

はじめは信じられないと言う顔をしていたが聞き終わると蘇双が俺に向かって言った。

そして「少し待ってくれるか」と言つて蘇双は部屋の外に出て行った。

5分程して蘇双は稟と風の二人を連れて戻つて来た。

「一刀様」稟は俺に仕えると言つた時より俺の事をこう呼ぶ様になつていた。

風は「ご主人様」こう呼ぶようになった。風にその呼び方を変えてくれと言つたら

「貴方」と呼ばれたので

「マジ、勘弁して下さい」

机に両手を付き頭を下げた。一応俺って風の主になってんだよね……（こいつは絶対わかつてやってる！。確信犯だ）

結局、風には「ご主人様」で手を打った。

なぜか風が「貴方」と言つた時に、稟が顔を真っ赤にし、息を乱していたのが不明だったが……

蘇双は風と稟に今までの事を話した。そして気持ち良いくらいの笑顔で

「私らも1枚噛まして貰おうと思う。だから貴女達と私達は仲間だ。はっはっは」

すると張世平が稟や風の方を向いて微笑みながら言った。

「そうですね。私達は剣を持ち闘う事は出来ませんが、貴方達を金銭で支える事はできます」

俺は自分にここまでしてくれる、2人に失礼を承知で尋ねた。

「お二人に聞きたいことが有ります。なぜ、俺にそこまでしていただけるのでしょうか？」

俺はこの世界に来て時間が短いので、余り詳しい事は解りませんが大度と器量でしたか。

俺の世界では貸し借りと云いますが、もう充分に貸しは返して頂きました。

反対に借りを作っているぐらいです。俺にそこまでの価値が有るとも思えない。

だから、そこまでしていただける理由を俺は知りたいのです」

その話を聞いていた4人はいきなり笑いだした。

俺が何が起こったのか解らずに啞然としてみると張世平が風と稟に向かって、

「貴女達は良い主人を見つけましたね。しかし底抜けな器量の為に人の気持ちを読めないと見えます。」

そこで貴女方が必要だと思われます。この方を支えてやって頂けま  
すか？お願い致します」

稟達二人は協力してくれる二人に向かい

「もちろんですよ。私達のご主人様ですからね。ね、稟ちゃん」

「もちろん初めからそのつもりです。しかしお互い苦労しそうです  
ね」

と俺の訳が分からない所で話が進んでいるし、張世平の隣では  
蘇双が一体何が可笑しいのかまだ笑っている始末。

「おいおい。皆、何の話をしてるんだ？蘇双さんも一体なにがそん  
なに可笑しいんだ？」

というと、蘇双はさらに大笑いし、残りの3人は「ふふふ」とほほ  
笑んでいた。

その場は風と稟が後で説明すると言う事で納まり、その後張世平  
と蘇双が真名を教えてくれた。

張世平が利準、蘇双が利祉と言った。そして皆で真名の交換をし、  
これからのことを話し合った

俺がこれから恐らく起きると思われる事を順次話していく。

黄巾の乱、宦官と何進將軍との朝廷内の争い、董卓の暴政、反董卓  
連合、群雄割拠である。

黄巾の乱に対してはここ南陽と荊州も激戦地な為、ここで名を挙げ  
るのが良いと言う事に決まる。

今の内から少しづつでも兵糧や武器を集める事になり、それらは利

準と利社に任せた。

稟と風は各地の情報を集めるため、利社達の商人達の情報網を使うと共に

自分たちでも密偵を放ち情報を集めた。

そして各地の都市に、ここ南陽に「天の御遣い」が現れた事をばら撒いた。

そして俺は集まった兵に戦い方を教えていった。今戦えるのは俺だけだった。

教えたのはスリーマンセルつまり3人ひと組で戦い、

1人目が盾を、2人目が槍、3人目が剣を持ち、

攻撃を盾で防ぎつつ、近距離なら剣が、敵が離れているなら槍で攻撃し、又は同時に攻撃し

どちらかが攻撃している時は周りに注意をしつつ、相手の攻撃も防ぐ事を繰り返す。

そんな戦い方だった。慣れるまで時間は掛ったが、慣れてしまえば有効な戦い方だった。

後で、稟にも見て貰い、組を入れ替え修正したりして熟練度をあげる事を行う。

そして、俺は兵達と共に過ごす事により、この大陸の知らない事等をさらに吸収していく。

稟は最初、兵達と過すのに反対だった。俺の威厳と尊厳性を損なうと言う事だったが、

俺と兵達とが、親しく話して一緒に食事をしているのを見て諦めてくれた。

そんな事で2週間ほど過ぎた時だった。とうとう冀州、潁川、豫州で反乱が起きた。

黄巾の乱の勃発だった。

反乱は瞬く間に全国に広がり、当初は太平道の信徒だけだったが、食い詰め農民や盗賊等を加えて、膨張し続け総数30万にまで膨れ上がった。

黄巾党は到る所で官軍を破り、破竹の勢いで戦線を広げていった。

後に稟曰く

「私に、黄巾党の初期段階で指揮を執らせて頂いていたら、全国制覇できた自信がありました」

との事でそれほどまでに凄まじい勢いだった。

でも、彼等は所詮烏合の衆だった。補給路を無視し、戦線を拡大し続けた為に限界が近付いていた

しかも、官軍も黙っていない。優秀な指揮官を投入し戦線を立て直し始めた。

皇甫嵩、朱儁、盧植がその例である。

ここ南陽にも初期段階より、黄巾党の攻撃はあったがその全てを撃退した。

南陽太守は初老の女性で、俺を客将として迎えると共に色々な面で優遇してくれる。

俺達は当初、自分達で物資は賄えると言い断っていたが、最後には太守自ら俺達の所に来てたので

彼女の面子を潰さぬ様に、俺の方から頭を下げて客将となったのである。

そして、この街の外側、つまり城壁の警備を願い出て受入れられ、何度も黄巾党を追い払った。

そう、俺達の初戦は籠城戦だった。

自分達の3倍は有ろう敵を追い払い皆、自信を持ってくれたみたい



だった。

でも、籠城戦であるから城壁や城門等の身を守る物が有るから戦い易いのも事実。

平地で戦えば、自分達はどうなるか分からない。だから俺としては素直に喜べないのだ。

皆の前では顔には出さず、喜んで見せていたが。風と稟には気づかれたが。

それからしたある日のことだった。

太守から呼び出され、何事かと思いつつも稟と風を連れて城まで行った。太守は俺を見るなり

「こつちに来て貴方に見せたい物が有るの。この書簡よ。後ろの2人も見て御覧なさい」

そう言われ太守から書簡を受け取った。それは荊州で官軍を率いている偉い人からの手紙。

内容は回りくどく、難しく書いてあるが簡単に言えば

「荊州の黄巾党が強くて手に負えないから助ける」

である。それを見た太守は

「貴方達の強さなら如何にか出来るんじゃないかと思って受けたの。どう行ってみない？」

俺としては余計な事を…と思ったのだが風と稟は違った。

彼女達はこれを好機と捉えた様だ。太守に少し考えさせて頂けませんかと城を後にし

俺達の詰め所に戻り話合った。まず稟が

「これを好機と捉えて荊州に入り名を更に挙げるべきと思います。しかも、向こうから手伝えと言つて来ているのですから。これに乗らない手は有りません」

と稟は賛成する。すると風も

「そうですね、向こうから遠回しには言え、援軍要請ですからね、これに行くだけでも諸侯に名前は売れますし、欲を言えば美味しい所を取りたいですね」

と風も賛成する。でも俺は怖かった。成功すれば名声と力が手に入る。しかし失敗すれば

俺の命位なら安いものだが、皆の命まで危険にさらし奪う恐れがあった。

俺はその事を稟と風に伝えた。すると稟が風に何かを告げ風は詰所の外に出て行った。

「お優しい一刀様がそう思われる理由は解ります。兵は何十人、何百人と死ぬでしょう。

しかし彼等がなぜ貴方に、命を掛けてまで貴方と共に戦う事選んだのかを考えた事がございますか？

それは貴方が、貴方こそが、この乱世の世に終止符を打つてくれると信じ

皆が笑つて暮らせる、世の中にしてくれると信じているからこそに他なりません。

私はもちろん、風もそう思っているからこそ、貴方に何かあれば命を投げ出す覚悟です」

そこで一旦区切って俺に厳しい目をしながら続ける。

「しかし貴方は今、御自分の命を安いと仰せられた。それは、この前の戦闘で命を落とした者達への裏切りに他なりません。」

貴方の命はもう貴方だけの物では有りません。味方は勿論、敵にも志あつた者も居りましょう。

その者達全ての犠牲の上に成り立つのが「天の御遣い」北郷一刀。貴方の命です。

私の言葉が信じられなければ外に出てください。

それで解らなければ、貴方にこの乱世を鎮める事は出来ません」

稟はそう言つと外に向かつていった。

俺は稟の言葉に反論出来なかつた。いや稟の眼を見る事さえ出来なかつた。

俺は上辺だけの覚悟はしていた。自分の命は自分だけの物で、それをどう使おうが人が助かるなら

俺の命なんか、どうなつてもいいと思つていた。

しかし先程の稟の言葉は、それらの覚悟を全て叩き壊した。

彼女は、稟や風や俺についてくる兵は、自分の命を犠牲にしてまで俺を生かすと言つている。

それは言いかえれば、皆の命を握っているのは俺だと言つ事。

皆の命を奪うのも俺。皆の命を守るのも俺だと言つ事。

彼女は責任を持つと言つている。皆の命を預かる責任を。

俺にそんな重いものが持てるのか……

そんな事を考えていると外から

「をoooooooおooooおooooおooooおooooおooooおooooー！！！！」

ものすごい喚声があがった。驚いて外に出てさらに驚いた。そこには

俺に共に闘ってくれる者達、俺を主と呼んでくれる者達、俺を後方から支えてくれる者達。

皆がいた。俺が詰め所より顔を出すと、また

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお

と喚声をあげる。ヤバイ ヤバイ ヤバイ

俺は詰所に戻り溢れる涙を拭った。でも零れる。すると後から、

「解りましたか。貴方が持つべき物が。聞えましたか？貴方の事を信じる者の声が」

俺は涙を堪え稟に向かって笑おうとした。が無理だった。そこに風もやって来ていう。

「大丈夫ですよ。そうならない為に、私達が貴方の先に罾があれば、罾を外し進む道に

虎がいれば虎を排除するなり、安全な違う道を探し出す。それが私達の仕事です」

「一刀様には、貴方を信じる者の声と覚悟を覚えて頂き、それを一生背負って頂きます」

2人に背を向け気持ちを落ち着ける。そして詰所の外に出て集まった皆に向かい

これからどうするべきかを考えつつ、自分の考えを皆に言う。

「俺は弱き者を助け、弱き者を害する者に天誅を加え、時には手を貸し、時には突き放し自律を助ける。そんな君主を目指す。」

その為には君達の力が必要だ。俺は武力を使う。その時君達の内の誰かは死ぬだろう。

それでも俺に付いて来てくれるだろうか？ 俺は君達の死を乗り越え、また一步前進する。

それでも俺について来てくれるだろうか？ 俺は君達の命を預かる。

でも、俺は約束する。この戦乱を終わらせ、皆が笑い合える世界を。

そして、戦乱を終わらせ平和になった時に聞こう。その答えを……」

俺が言い終え、詰所に入ろうとしたその時、

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ」

その歓声を止め、ただ一言「ありがとう」と言い、詰め所に入って倒れた。

## 一刀の覚悟〜そして荊州へ〜（後書き）

憂鬱です。

この章の稟の言葉の何割かは実話です。

昔に働いていた人に言われた事を思い出し、それに少しアレンジを加えました。

張世平と蘇双の2人に真名を付けました。

張世平が利準で利益は二の次と言う意味です

蘇双が利祉で「祉」の字は広い意味で安寧とかの意味もあります。

まだこの二人には活躍して貰おうと思ってます。

次回は荊州に一刀の軍が出陣します。

荊州編〜荊州襄陽にて（前書き）

南陽を発ち襄陽に着いた一刀達は黄巾党の大部隊と戦い、  
そして劉表と会う。

## 荊州編く荊州襄陽にて

一刀が皆の前で決意を述べて9日後、彼は荊州北部の入口に来ていた。地名を新野と言う。

一刀が決意を述べてからは大変だった。

まず城民からの苦情が倍増。理由はもちろんあの時の喚声だ。

勿論太守にそのことで呼出しを受けたが、御咎めなしで済み、その時に太守に援軍に行く事を告げ

太守に援軍要請の承諾書を書いてもらい、武具、兵糧の輸送準備、詰所の整理整頓を行う。

俺達の軍勢の旗を「十」に統一した。そして部隊編成に取り掛かった。

俺は例の3人1組を基本にこれを1000組の3000名を主力に利準が持つて来てくれた騎馬1000騎と弓兵1000名に後、秘密兵器を

持つて行く事にしたのだが、騎兵は訓練がまだまだ必要な為に、投入する時期は稟と風に任せた。

後は概ね「大丈夫でしょう」と及第点を貰った。

兵糧は利社と利準が集めてくれた1年分の内の半分を持って行き、半分は置いて行く事にした。

《利社曰く、色々な所から集めまくったらしい。後に彼はこう言うていた。

やり過ぎたと……又、その食糧を見た時の俺の顔は見物だったとも》

夜には荊州の情報を2人と吟味していた。



今の所、荊州で黄巾党と互角以上に戦えているのは、襄陽を拠点とする劉表と長沙を拠点とする孫堅だけである有様であった。

その2人も積極的に官軍を助けようとはせず、自分の勢力を増やす為に動いているようだった。

「密偵からの情報と商人の情報網からも同じ様な事を言っております」

「その御二方もし信用は出来るかは微妙ですね」

「じゃあ基本方針はこの援軍要請をしてきた盧植將軍に会うと言った事でいいかな」

「ええまずこの人に会うのが筋かと思えます。それからですね考えるのは」

「今この盧植將軍はどこにいるんだい。近所に居てくれると助かるけど。風どつ」

「……………ぐう」

「!? ええい、起きなさい風」「起きてくれ」。風」

稟と俺が起こす。

「!! おおう。2人で起こすとは。ええとですね。江陵ですね」

江陵は荊州の中部に位置しており、どう考えても劉表か孫堅が行く方が早い。

「この二人はどう考えても、次の事を考えていると思っ  
ていいのかな？稟」

と意見を聞く。稟は眼鏡を拭きながら

「ええ間違いなく。まだお二人には余裕が有ると思われ  
ます。」

余裕が有るのに動かないとなれば、何か考えていると思  
う方が対応はしやすいでしょう」

「俺はもう1つ気になる事が有るんだけど。この盧植つ  
て人たしか冀州で戦っていたと

思っただけ。なんでこっちに、そんな少ない兵隊だけ  
で来たんだ？」

「風が調べたのですけど、この人は、軍の監察官に賄  
賂を要求され、断つたみたいで、

その監察官が色々と無い事を報告して、その結果こ  
ちらに送られたみたいですね」

俺の知っている歴史でも同じ様な事だったと思う。  
が荊州に送られた記憶は無かったが。

とりあえず2人と他にやる事が有る為、その考えを  
追いやり今後の事に集中した。

それから3日間は黄巾党の事で大変だった。

ここ南陽に黄巾党の將軍張曼成が現れて、その対応に  
追われていた。

黄巾党の攻撃は苛烈を極めたが、2日後の夕方に俺  
の軍の流れ矢が偶然、張曼成に当り、彼の軍は統制  
を失い壊滅状態に陥りここ南陽は助かった。

その後、密偵の情報によるとそのまま亡くなっ  
たみたいだった。

張曼成を失った事により、ここら辺の黄巾党は空中分解を始めた。新しく頭をたて、反抗しようともがくも他の地方の反乱を鎮圧した將軍に敗れ南陽方面の黄巾党は壊滅した。俺達はまた荊州に行く準備をし5日後に出発した。

南陽を出て暫く後、新野城に着き更に南下しようとした時、方々に出していた密偵の一人が

「申し上げます。孫堅軍が長沙の南にて、黄巾党と戦闘を開始しました。

更に、劉表軍も同じく襄陽の近くの黄巾党と戦闘を開始したとの連絡が有ります」

「おやおや。俺らが来た途端、真面目に仕事をするなんて。どう思う。二人とも」

2人は少し考えて、稟が言った。

「やっと噂が広がり始めた様ですね。一刀様に手柄を獲られたいが為に思います」

「おうおう、兄ちゃんに手柄を取られたくないからなんて、卑怯な野郎たちだ」

と風の上の宝慧。初めアレが喋ったときは驚いたがもう慣れた。

「これこれ宝慧。でも噂が効いたのは事実でしょうね。ここに来たのが張曼成を破った「天の御遣い。北郷一刀」だと聞けば」

そう俺に内緒でこの二人が噂を全国に流していたのだ。

『荊州に援軍として行くのは、張曼成を討ち取った「天の御遣い、北郷一刀」だと』

初めて聞いた時は「はあ？」と思った。慌てて稟と風に聞くと

「私達が流しましたが」

と稟があつさり認め、

「これもご主人様の為ですよ」

と風が言い、俺は何も言えなかった。俺の為と言われては。

次からは、俺にも報告してくれるように2人に頼み、その話は終わったが……

このまま南下し、盧植に会っても良かったが、劉表にも会って見たかったのと

稟と風に聞いて見た処、有力者に挨拶に行くのは悪い事では無いと2人が了承してくれたので、襄陽に挨拶に行く事にした。

襄陽城に着き兵達に休憩と食事の準備をさせ、俺と軍師の2人と親衛隊の2人を連れ

劉表に会いに行った。

城内に入り待合室に連れて行かれて5分程して従者が呼びにきた。

「お待ち致しました。劉表様がお会いになられるそうです。こちらへどうぞ」

従者を先頭に俺らについて行き、謁見室に通されて劉表が来るのを

待った。

「貴方が今、噂の天の御遣い様の北郷一刀さん？」

と体格の良いおばさんがこちらに向かい視線を向けて来た。

「初めまして劉表さん。俺が噂の北郷です」

と嫌味たっぷりと言ってやった。

「ふうん。まあ良いわ。今日ここに来た用件は何？遊びに来た訳では無いでしょう」

「はい。貴女の領地を通らせて頂きますのでご挨拶をと。それと貴女にお会いしたいと思い……」

と本音で語る。

「ふうん、で私は貴方から見てどう見えた。ご立派な太守？もしくは愚君？」

「俺がどう見たかなんて大した事では無いのでは？」

「貴様黙って聞いておれば抜け抜けと……」

と劉表の横に居た女性が腰の剣に手を掛けた。

「やめなさい蔡瑁。これも駆け引きよ。先程の事だけど聞かせて貰える？」

私は貴方から見てどう見える」

俺は正直に自分が思っていた事を話す。

「狸ですね。表裏が見えにくいですが、それは貴女がわざと見せて居るのでしょうけど……」

「ふ、ははははははっ。ふうん、天の御遣いなんて大した事無いと思っただけ……」

そしてこちらを見て

「今から盧植のお爺さんの所に行くのでしよう。一つだけ忠告してあげてあげる。」

お爺さんはお人好しで、兵も精兵で大したもんよ。お爺さんだけでも下手すれば、

ここいらの黄巾を片付けられたかも知れないわ。長沙の孫堅さえいなければね……

長沙の孫堅が、自分の所の黄巾党を全て爺さんに押し付けた。

だから、お爺さんは江陵に閉じ籠らなければいけなかった。長沙の孫堅には気を付けなさい」

それだけ言うと彼女は自室に戻っていった。

陣に戻り2人と劉表の言った事を話し合った。

俺の世界の孫堅は知勇兼備の武将で劉表は狸だと話していた時外から兵がやってきてこういった。

「劉表様が御出ですが、いかが致しましょう?」

と兵から聞いて2人に向き直り「どう思う?」と聞くと

「予想は出来ませんが、会ってみては？」

と稟。 風も

「そうですね。私もそう思います」

此方に呼ぶ様に言い待った。

少しして向こうから劉表が現れて、「失礼する」とだけ言い天幕に入ってきた。

「こんな時間にどうされました、劉表殿？何か御座いましたか？」

と俺が尋ねると

「率直に聞こう。私の下に来ないか北郷？」

と本当に率直に聞いて来て続けた。

「私は黄巾党を叩いた後、孫堅と雌雄を決せねばならん。

しかし、まだ奴と戦って勝てるかどうか微妙な処だ。兵は多いが将が少ない。

だがお前が来れば、かなり優位に立てると思っっている。その2人も頭が回りそうだしな。

どうかな北郷？お前が望むなら城もやるが。悪い話ではあるまい」

「お断りいたします劉表殿」

と俺は即答した。劉表はこちらを見ると

「ふん即答か面白くない。ではお前は孫堅に付くのかそれだけはハ

ツキリしときたい」

「今の処そんな予定は無いですよ。まだ孫堅さんに会って無いから如何とは言えませんが。」

俺の眼をみて安心したのか

「まあいい。困った事があれば相談しろ。それまで待つてやる」

そのまま元来た道を帰っていった。2人に「今の本気だと思つ」と聞くと稟が笑いながら

「解つて居られるでしょう、意地悪い。釘を刺しに来たのでしょ」

「……………すう」

「はあゝ風。起きなさい。ほら風。」

と稟が起こして、

「おおゝ!!ええとゝ孫堅さんと手でも組まれると大変ですしゝましてや、孫堅さんの下に行かれるともっと不味いですしねゝその辺の確認でしょう?」

「孫堅からも話が有ると思つて良いのかな?」

と聞くと2人声を合わせて言った。

「もちろんです(でしよ)う(」



聞かずとも解っていた事なのだが……その日はそこで解散した。

次の日、襄陽を発ち南下し、江陵に向かう途中に黄巾党が向かって来ていると情報が入った。

さらに詳しい情報を持った兵が来て

「敵の軍勢、約8000。そのまま直進して此方に来ます」

「さて、大きな部隊と当たるのは初めてだね。大丈夫かな？稟、風」

「問題ありません。騎馬の練度の確認がたら丁度良い数かと」

「そうですね。秘密兵器も使ってみましょうか。何処まで使えるか試したいですし」

「そうかじゃあ皆、用意槍！！槍2で、盾1の構え」

一刀が言うと盾が先頭で、盾の隙間から槍が飛び出していた。

更に、後から前方の槍よりもう1m以上は長い槍が後方から覗いていた。

前列に盾をその後方に槍を、更に後方に長槍を、最後に弓兵を並べる。

盾も普通の盾では無く、地面に食い込む様に突起を付けて動きにくくし

相手の動きが止まれば、2種類の槍で突き刺すという戦法である。

槍も3mを基準とし、長槍は3mの槍に鉄の筒で延長出来る様にし、4・5mまで伸ばした。これが秘密兵器の長槍である。

戦闘が始まると敵がこちらを飲み込もうと押し寄せてくる。

牽制する為に弓隊で威嚇し、相手の勢いを止めてから、徐々に前進し相手の攻撃を盾で防ぎ

槍で反撃する事を繰り返す。ある程度前進すると、その場で停止し弓兵による斉射。

それを3回繰り返した時だった。

「今です！！旗を！！」

稟の声で、側に居た兵が旗を振り、それを合図に騎馬隊が敵の左側面を襲ったのだった。

これが決定打になり、相手は蜘蛛の子を散らす様に去っていった。

俺達はそのままそこで陣を張り、次の日まで休んだ。

それから2回程、自分達より多数の敵に当たったが、退かす事に成功し一路、江陵を目指した。

荊州編〜荊州襄陽にて（後書き）

こんにちは憂鬱です。

聞いて下さい。話が進みません………。今回色々有りまして物語を書けず今日となりました。本当に不況なんですかね。

今回劉表を登場させましたが、真名を考える余裕すらなくこの後考えます。

今回は孫堅と孫策と周瑜。

それにあの人を戻そうと思います。武将が少ない為此処までお読みくださいまして有難うございました。

荊州編 荊州江陵にて（前書き）

劉表と会い、襄陽に向かった一刀達は  
そこで真つ赤な髪をした女性に会う。  
そしてもう一人大切な人にも会う。

## 荊州編 荊州江陵にて

江陵に着く少し前黄巾党と戦闘を行った。

結果は勝ったが黄巾党の数が1万と思いのほか多く更に援軍まで現れる始末。

此処に居る敵の数が半端無く多いと悟りこの近くの見渡しの良い平原に陣を張り  
兵に休憩を摂らせていた。そこで思わぬ来客を受けた。

「申し上げます。表に孫堅と名乗る方が御遣い様に御目通りを求めて御出でですが。  
いかが致しましょう」

供の数を聞くと3人と答えた為こちらに通す様に答えた。

少しして美しい燃える様な髪で更に燃えるような眼をしたスレンダーな女性と

桃色の髪だが眼にはもっとハッキリした意志を持つ俺より年上そうな少女

それと漆黒の髪を持ち知的な顔だちをし眼鏡をしたこちらも年上に見える女性の3人。

天幕に入ると同時に俺に向かいこう言った。

「そなたが天の御遣いか。それに横の2人も気を抜けん相手みたいだな。どう見る冥琳？」

稟が何か抗議しようとしたのを手で止めそのまま続けさせた。

冥琳と呼ばれた女性はこちらを見て

「紅蓮様と同じ考えです。兵も規律、士気共に良く先程の戦闘でも

完勝に近い戦いでした。

それにそちらの女性の抗議を止めたのも我らを探るものと判断致します。

それにそこのお二人は私と同等かそれ以上かと」

「ふむ、雪蓮は？」と雪蓮と呼ばれた女性がこちらを見て、

「気に入らないわ。さっきからこちらを覗く目で牽制してるもの。3人共。

それに天の御遣いは何か有ったら二人を庇う気満々よ、お母様。私達2人には及ばないけどそれでも武力は高いと思うし、覚悟は私達より本物よ」

そうかと呟きつつ、

「私が孫堅だ。こっちが娘の孫策、こっちが軍師の周瑜と言つ。いきなり済まなかった。

天の御遣いがどんな者か興味があつてな」

と孫堅が頭を下げた。俺が自己紹介をして

「どうでした、俺を見てガツカリされたのでは」

「いいや。会いに来て正解だったな。何も知らずに戦っていたら負けていたかも知れん」

「ちょっと大袈裟ですが、ここに来られた理由をお教え願えますか？」

「劉表と同じと言えば分るか？。俺の下へ来ないか北郷。まあお前

が此処に居ると言う事は

劉表のは断つたと言う事だろうし、俺のも断る気だろお前」

「ええ、劉表さんからもお誘いを受けましたが丁重にお断りしました。もちろん貴女の

御誘いを受ける気は有りません」

稟が横で「どこをどう取れば丁重に聞えるのですか？」と陰口を叩いていたが無視した。

「あいつとは何れ決着を着けねばならん。お前がこっちに付くならば勝ったと思つたが。

まあいい、盧植の爺さんを助けた後お前はどつする気だ？。誰かに付くのか？

もしくは自分で独立するのか？」

「鶏口牛後と言う蘇秦の言葉も有ります。俺は自分と仲間達の身が守れば良いのですが

どうやら時代は許してくれない様です。なら俺は自分の身と仲間たちの身を

守れるように力を着けようと思います。その第一歩として名声と武力を求めます」

一刀の宣誓とも取れる言葉に孫堅、孫策、周瑜の3人はお互いを見合い孫堅が

「私の姓は孫、名は堅、字は文台、真名は紅蓮こうれんと言う。

お前との不戦を確約する証だ取つとけ。雪蓮、冥琳お前たちはどうする」

と連れて来た二人に聞くと

「しょうがないわね。母様が認めたのなら私も。

私は姓が孫、名を策、字を伯符、真名は雪蓮よ。よろしく」

「紅蓮様と雪蓮が真名を許すか……。私は姓を周、名を喩、字を公瑾、真名は冥琳だ、よろしく頼むぞ北郷殿」

いきなり真名を渡された事に驚きながらも

「3人とも一刀で良いよ。それと不戦の件は了解した。こちらもちかもこれから大変

だしね。ただ一つだけ聞きたい事が有る。盧植將軍に黄巾党を押し付けたって本当？」

紅蓮が訝しげな顔をして

「劉表かそれは。まあ傍から見ればそう見えたかも知れんが盧植の爺さんとも

話し合った結果だ。簡単に言えば黄巾党が南部の色々な所に散らばっておってな

それらを1か所に集合させようと南部の黄巾党を俺達が江陵辺りに集めて大体集まったら

一網打尽にしてしまおうと考えたんだよ。そして盧植の爺さんには3度ほどわざと負けて貰う

江陵に黄巾党を集める役を頼んだわけだ。そこで江陵には食糧がたつぷりと

備蓄されていると噂を流しておいた。すると集まる事に今は6万を数えるまでになった。



奴らの食料も今日には無くなると報告を受けている。俺達が糧道をスタスタにしたからな。

そこで我らは2日後に攻撃を仕掛ける予定だ。一刀お前にも手伝ってほしい」

紅蓮に言われ「どう思つ稟、風」と意見を仰ぐ。先ず稟が、

「宜しいかと思えます。ここの黄巾党を片付ければ残りは曲陽の軍のみと聞いております。

我らが黄巾党を倒したと言つ名声はあつて困る物ではございません」

風は何故か喋らない。いやな予感がした。

「おい一刀。寝てるぞお前の軍師。」

そう紅蓮に言われ

「おゝい風おはよう起きて」

「風！いいかげんにしなさい。いつもいつも」

2人に起こされる軍師を見て雪蓮と冥琳は「・・・・はあ」「ふむうゝ」と風を見ていた。

起こされた張本人はいつもと同じ様に言う。

「おおつう！！長話についてウトウトと。ええとゝですねゝ2日後なら問題無いかと。

アレも届きますしね。アレを試すには丁度良いかと思いますがゝ」

それを聞き一刀が訊ね風が答える。

「今どこら辺だつて風？利準さんが最後に連絡くれたのはたしか南陽だったよね」

「ええとですね〜早ければ明日の夕方遅くても朝には着くとの事ですよ〜」

二人の会話に興味を持った雪蓮と冥琳は一刀を見ながら話す。

「へえ〜貴方達まだ何か隠し玉があるんだ」

「ふむ、興味深い。何が来るのか楽しみだ」

四人のやり取りを聞きながら最後に紅蓮が訊ねて来る。

「では手伝つてくれると言う事でよいな一刀？」

「ええ構いません。俺の軍師が言ってますので」

「一刀が信じる軍師か。よしお前達も俺の真名を呼ぶと言い」

それから皆で真名を交換し紅蓮達は帰っていった。

稟と風に3人の印象を聞いてみたが俺と同じで「信じても良い」との事だった。

紅蓮達もまた一刀達の事を同じ様に思っていたが冥琳だけは

「紅蓮様、雪蓮あの北郷軍、私は危険だと考えています。二人の軍師は曲者だしあの北郷も

あの年であそこまではつきりと自分の目標と決意を持った者も少な

い。

ただ御人好しの面もあつたしまだ孫家の敵になるかは解りませんが  
紅蓮が少し笑いながら

「ふつ。冥琳、お前がそこまで考える人物も珍しいな。そうか、そ  
こまでの男か」

横に居る何かを考えている娘に

「雪蓮、お前の覇業も大変そうだな。陳留にも面白い者がいると報  
告があるし  
俺もしばらく退屈しないで済みそうだ」

少し間が空いて

「母様、冥琳面白い事考えたんだけど、良いかしら」

「却下だ（よ）雪蓮」

と2人同時に即否定されて、ふて腐れた雪蓮が

「ぶ〜ぶ〜、まだ何も言っていないじゃない〜」

「お前がその顔をする時は9割方、ろくでも無い発想をするときだ  
からな」

と黒髪の軍師は迷惑千万といった感じで言う。

「え〜、ただ天の御遣いの血を孫家に容れようかと思っただけなの

に」

「はっ?」「えっ?」と2人が固まった。

「私か、蓮華、シャオ、一人でも良いから天の血が混ざれば孫家は安泰だと思っただけど」

「それは何か?お前達の中で一刀に嫁に出せというのか。雪蓮」

「そうよ母様。そうすれば孫家は神秘性を持てる。面白いと思わない」

「却下だ雪蓮。俺はあの者を認めしたが、本物と決まった訳ではない」

紅蓮はそう言うたとさっさと自分の陣に帰っていった。

その夜は紅蓮は宿将の黄蓋と飲み明かした。お母さんは大変そうだ。

次の日の午後に江陵城に密書が届けられた。内容は明日の朝に総攻撃を行う

と攻撃側は孫堅と援軍に来た北郷軍だけである。とだけ書いてあった。

盧植はこれを見て側近に

「ふっ。紅蓮の鼻垂れがわしに合わせろだとよ。それに援軍は噂の天の御遣いか。面白い長生きはするもんよのう。しかしあれだけ援軍要請して来たのは天の御遣い唯一人か。ここでもし黄巾党を叩ければ一気に名が売れるな北郷とやらも紅蓮も」

とだけ言い笑っていた。

その日の夜一刀の陣に100名の騎馬隊が着く。これが秘密兵器その2である。

一刀達の前に利準と見慣れない服装をした者たち100名が居た。

「一刀殿、烏丸の傭兵100名をお連れした。それと向こうで商売をしていた時にこちらの

女性が貴方に会いたいと言うので連れて参ったが……。お知り合いかな？」

利準の後から現れたのは星だった。

「星!!。久しぶり!!。なんで幽州の公孫贇の所に行ったんじゃ・  
・  
まあいいや。会えて嬉しいよ。でもどうしたんだいこんな所まで」

星は「相変わらずですな」と笑い、稟は「はあ」と呆れ、風は「  
・・ぐう」寝ていた。

稟が風を激しいツッコミで起しつつ俺に言った。

「風!いいかげんに起きなさい!!。それと一刀様彼女がなぜここに来られたか本当に解らないのですか?」

俺は「うん」と一言。すると風が

「!!おお。今日の起し方はきついですね。で、貴女がご主人様が言っ居られた、

趙雲さんですか。初めまして風は程立というのですよ。」

「私は郭嘉と申します。お噂はかねがね聞いております。一刀様がお世話になったとか」

俺の事は諦めたのだろう2人は星に向かって挨拶を شدした。いきなり挨拶され戸惑いながらも星も2人に挨拶し

「一刀良い配下を持ったな。続けるぞ。とりあえず私は伯珪殿の所でお世話になっていたのだが黄巾党や烏丸も静まり色々と回ってみようと思いい街道に出るとそこに居られる張世平殿と会い、声を掛けて話してみればお前の為に働いていると言うのではないか。そこで無理を言いここまで連れて来て貰ったわけだ。こっちに来る途中に色々噂を聞きましたぞ。」

張曼成を討取ったとか、南陽の街の守護神だとか、荊州の黄巾党が敵になって無いとか」

星の話を通り二人の方を振り向くと稟は眼鏡の手入れを、風は宝慧と話した。

「あれだけ言ったのに相談してつて。はあっもういいよ。星続けてくれる」

「いいので。ええとそれから貴方がこの乱世を静めると宣言したと彼から聞きました。」

「一刀に一つ尋ねたい。その言葉に嘘偽りはないか」

星が真剣な眼でこちらを見ていた。そこで目を逸らさずに「ああ」

と一言だけ言った。

「ふつ。良い目をする様になった」

そこで星は膝をつき

「この趙子龍。私は天と共に有りとうございます。私の槍はこれから貴方の牙となり  
貴方に立塞がる者を噛み砕きつつ粉碎し貴方に勝利を捧げます。  
どうかこの槍を御取り下さいませ」

それだけ言うと両手で槍を俺に捧げた。

「趙子龍。君の気持ちは解った。俺は君の槍を世の平和の為に使わせて貰う。」

もし俺が冥府魔道に落ちた時その牙で俺を引き裂けそれも君の使命とする。

これは稟、風、君達にも使命として与える」

「たしかに命を受け取りました。ですが貴方に限りそのような事はないと思われませう」

「私達がいる限りそんな事にはさせませんよ」

「風の言うとおりですよ。そうなる前に貴方に徹底的に帝王学を学んで頂きます」

「俺もそうならない様に頑張るさ」

と言い歩きだした。

その後二人が真名の交換をしている間に利準の方に行きお礼と烏丸の者達の事を聞いていた。彼等は漢語を話せる者達ばかりで武芸も秀でていているが故郷は滅ぼされ行き場も無い者達だと言う事。家族を養うために傭兵になったと言う事だった。その話を聞いていると後から真名の交換を終えた三人がやって来て俺に訪ねた。

「この者たちに何をしてもらおうとしているのです、主は？」

「この人達に騎馬隊の訓練と騎射を習おうと思ってね。それに彼等の戦い方もかな？」

「ええ、彼等の戦い方を学べれば、我軍の騎馬隊も大幅に使える所も増えます」

「星には明日の戦いから出て貰おうと思うけど大丈夫？」

「もちろん。今からでも問題は有りませんよ」

と頼もしい言葉が返って来た。



荊州編〜荊州江陵にて（後書き）

此処までお読み頂き有難うございます。

ええと〜昨日からお休みで書き続けていたのですが  
こんな時に限って用事やら幼児やらが襲って来て  
大変でした。

今回は荊州の黄巾党編の最後になればいいな〜と思ってます。では  
次回もよろしく願います。

荊州編〜荊州黄巾党の最後〜一刀の恋（前書き）

荊州黄巾党との最後の戦いでとる戦法とは。

紅蓮と盧植はどう動くのか。

## 荊州編〜荊州黄巾党の最後〜一刀の恋

次の日の朝、星が加わり彼女を部隊長以上の者に紹介し今日の決戦に向かう。

途中、紅蓮達からの伝令がやって来て江陵を囲むように陣を組む敵を各個撃破し、本陣を攻撃するとあった。敵本隊には盧植將軍が当たるとのことだった。

稟と風に詳しい話を聞き自分達の作戦を決めていく。

「江陵城は後方に長江が流れており三方からのみ攻められます。

彼等は城の正面に本隊の3万を、城の左右に1万ずつ配置して、負傷兵など戦えない兵1万が

本隊の後方に陣を張って居ります。我らは左の敵に当る事となります。戦い方はいつも通りですが

今回は連戦となりますので、なるべく初戦で被害を出したくありません。

ですから今回は盾の枚数を増やしたいのですが宜しいでしょうか？」

稟が席に座ると同時に風が立った。俺は寝て無い風は珍しいと思っ  
たが

言葉には出さなかったのだが風は、

「風はいつも寝ている訳ではありませんよ。」

と心を読んだように言い稟の話に続けた。

「ええと〜本隊には南陽で倒した張曼成さんの腹心の韓忠さんです。

副将に孫夏さんですね〜。

両名ともこちらに逃げて来たようですね〜。士気は紅蓮さんが言われた通り

兵糧も無くて最低みたいです。それと稟ちゃんの盾の話ですがあの  
大盾を使ってみませんか？」

大盾とは普段は陣を張ったときに周りに柵を作るのだが、

俺の所では普段戦闘で使う盾を大きくした物を前面に並べ倒れない  
ように固定し、

周囲を盾の壁にして囲っていた。

強い風が吹いても、強く蹴っても倒れない事は実験済みだし、  
その方が早く陣を作れ、

兵達に休憩を多めに摂らせてやりたい為  
に家の雨戸から考えた物だ  
った。

もちろん長対陣する時はちゃんとした陣を作るが。

しかし弱点もあった。重いのだ。一人では運んで固定するのが限界で  
戦場で使える物では無いと思っていた物を、風は使おうと言ってい  
る、なので俺は尋ねた。

「風はアレをどう使うつもりなんだい。聞かせてくれないか？」

そう言うと風は

「1人で重いなら2人で持てばいいと思いますが〜。百聞は一見に  
しかずですね〜。

ちよつと外に出て貰っていいですか〜」

と言うとスタスタと外に出て行った。

俺達も続き外に出ると大盾を持った二人組が4組整列していた。部  
隊長が敬礼すると

命令を出し始める。

俺は感心した。自分が作らせて言うのも何だが、本当に重いのだ。火矢や敵の攻撃を防ぐ為、

鉄板を厚くしてあるので普通の盾の3倍は重いし、壁にする為、大きさも3倍はあったのだが

隊長の命令に忠実に動いて行く。俺は風に、

「いつから大盾を戦場で使おうと思ってたの？」

と聞いてみた。すると風は

「最初からですよ。その為に秘密裏に訓練もさせてきましたからね」

と事も無げに言う。本当に俺にも秘密だった。

「稟、星、どう思う。俺は良いと思うけど……」

稟は眼鏡を直しつつ

「ええここまで動けるのでしたら問題は有りません。しかし、風。この者達の他に後どれだけ大盾を使えますか？それと盾は何枚あります？」

と聞くと風が少し頭の中で整理しつつ

「250枚ですね。盾を持てる者は全員ですよ。稟ちゃん。それとですね」

大盾を持つ者達の装備ですが、稟ちゃんと話していたアレを使い

ますよ」

すると稟が「そうですか」と言い考え出した。

今、稟の頭の中では作戦の修正が行われているのだろう。その間に星に聞いた。星は

「私は作戦が何であれ戦うのみですよ。主。しかし凄い者達が味方になってくれた

ものですね。これほど凄いとは……」

と言葉を失う星に

「本当に有り難いよ。星も入れて3人とも俺には勿体ないよ。だから皆の主にふさわしくなる為、

これからもそれだけの努力は惜しまないつもりだよ」

「頑張ってくださいよ主。我らも後から支えますゆえに」

そんな話をしていると考えが纏まった稟と風が俺に説明しにきた。

「大体の作戦は先程と同じですが、風と話してこの大盾部隊を先頭にし

指揮を風に任せようと思います。それとこの者達の鎧ですがこれをご覧ください」

稟が指示し現れたのは、腕と脇腹を守る部分に特化した鎧だった。

「この鎧を盾を持つ者に装備させます。盾を持つ者の弱点を補強しよう」と

風と二人で考えていた物で、昨日持って来て頂きました。耐久実験

などはしておりますので  
強度は問題ないはずです。

次に烏丸の騎馬と我軍の騎馬を星に預けたいと思います。星には我軍が戦っている間、  
敵側面を攻撃しつつ敵本隊への監視をお願いしたいのです」

それだけ言うと俺の方をみて判断を仰ぐ。

俺は、もし敵の本隊が3分割し動いた時の事を尋ねる。

「敵本隊は動けません。盧植將軍ですが、自軍の3倍もある敵に圧勝した事もある戦上手ですし、  
將軍の部隊は1万。3万の相手に無理やり戦っても勝てるでしょうが、

將軍の性格が慎重な為、守りに徹して被害を少なくし、我らや紅蓮殿と挟撃した方が  
遙かに被害も少なく出来る上、確実に荊州の黄巾党を鎮める方法だと考えるでしょう」

稟は眼鏡を直しつつ、話を続ける。

「ですから、盧植將軍が考える手と言えば、自分達に黄巾党本隊を惹きつける為、

例えばですが、わざと後退し相手があたかも有利に見える様にしつつ、その陰で、  
少しずつ戦力を削っていく戦いをするなどの方法を取ると思われません。

それでも、もし敵が軍を2分割もしくは3分割にしたとしても、  
盧植將軍が総大将の韓忠を倒し易くなるだけです。ここ近辺の指導者を失えば

あとに残るのは指揮も出来無い者達です。恐れる必要はございません

ん

それだけ聞くと安心して稟の作戦に了承し、それからは準備に取り掛かった。

そして左陣での戦いが始まると俺が考えるより遙かに予想出来ない展開になった。

余りに一方的に左陣を蹴散らしてしまった。俺達は5千で敵は1万なので苦戦すると思った。

だが、結果は襲って来る者達は大盾を乗り越えられず、後方からの攻撃に倒れていく。

その姿はアメリカであったキルドーザーを思い出す程だった。盾を超えれず止まった者には

隙間から槍で刺され、後方からの弓矢に射ぬかれ、側面から騎馬の騎射と突撃に対応できず

成す術なく数を減らしていった。

敵が俺達の側面に回り込もうとすると、風が盾を巧みにコントロールして防ぎ、

動きが止まると、星が回り込もうとする敵の先頭に騎射を射かけ突撃する。

風や星の連携の前に、敵は短時間で壊滅した。

後に、その光景を見ていた紅蓮（孫堅）はこう語った。

「あれは城が攻めて来ていた」と。

「固い守備に止められて前から槍、後から弓矢、側面から騎馬が攻撃する。

わしなら逃げるがね。それが一番の対処法だ。盾に囲まれているので動きは鈍いはず。



後は追つて来る騎馬だけに対応すればいいからな」

と盧植も後に語る。

俺達が集団戦で相手を崩す戦いなら、紅蓮達は個人の力と戦術の融合した戦闘を披露する。

紅蓮の軍は赤一色に染められていた。鎧、盾、旗の全てが赤であった。

先頭に立つのは武将で後から兵が続く。彼等が通った後には敵の骸だけが残り、

特に雪蓮、黄蓋、本隊の程普、韓当、朱治と言った武将達は恐ろしく強く、

更に、戦っている最中でも指示を出し陣形を保つ姿は、まるでマスゲームを見ているようであった。

そして、それを見事に操るのは冥琳こと周瑜である。

「雪蓮に連絡。左翼から切り崩せと」

「黄蓋殿にそのまま締め上げてくださいと伝える」

「伝令！中央の紅蓮様にそのまま後退してくださいと」

と的確に指示をだし、半包围を完成させながら、自分達に有利な状況にしていた。

こちらも短時間で自分達の倍の敵を葬り去る事に成功する。

盧植は、両陣営共にこんな短時間で戦闘が終わると思っておらず、

防戦し敵の勢いと兵の数を削る事に徹していた。その為、黄巾党は

自分達に有利な状況にあるのだが  
攻めきれず兵だけを失うという事を繰り返していた。  
少しして本陣に

「左陣大将、程遠志敗死したとの事」

「右陣大将、登茂敗死」

と両陣ともの大將を討取ったと北郷、紅蓮の2人から  
伝令がやって来て盧植は驚いていた。紅蓮の戦闘は間近で見た事が  
有る為に

この伝令が持つて来た結果には驚かなかったが北郷は別であった。

正直に言えば北郷達には、左程期待して無かった。ただ黄巾党を逃  
がしてくれなければ、

それで良いと思っていたのである。初めの方だが北郷の軍の戦い方  
を見て「防戦か？」と思った。

それから自身は正面の敵に対応をする為、指揮に専念する。

有る程度指示だしが終わった為、北郷の方に向くと、向こうは戦  
闘がほぼ終了し、

陣形を整えこちらに向おうとしていた。自分が指揮に専念して居た  
のは長くても40分である。

戦闘開始から1時間30分程で、自分達の倍の敵を倒してしまった  
のだ。

盧肅は北郷の方を監視させていた者呼び、戦闘の経緯を細かく  
聞いた。聞きながら何度も

訊き直し考えを纏めた。『防御しながら攻撃する』つまりこの相反  
する事を彼等が行っていた。

攻防一体である。しかし「本当に出来るのか？」と考えていると、

紅蓮、北郷の新たな伝令がやって来て、内容は同じ

「我、敵を殲滅せり。敵本陣の攻撃に移るとの事だった」

盧植は伝令を見送ると北郷の事を頭の端に追いやり、自軍の伝令に指示を出し始めた。

そんな盧植の考えなど知らない、一刀達は次の行動に移っていた。稟から行軍しながら詳しい事を聞き、前衛の風と遊撃隊を任せた星に指示を出し、敵本陣の左側面に接近すると5千程の敵部隊がこちらに向かって来る。

紅蓮も敵の右側面に近づくと、こちらも5千程が近付いて来て戦闘を始めようとしていた。

中央では盧植の部隊が攻勢を掛け、敵の前衛が壊滅し始める。

1万で止め切れなかった軍を、士気の落ちている5千の部隊で止めるのは難しく

北郷、紅蓮の部隊はこちらに向かって来た部隊を、あっという間に殲滅させていた。

敵本陣は混乱の極みに陥っていた。

敵將韓忠も孫夏も楽勝だと思った。何せ南陽では敗れたが、こちらに来てからは連戦連勝し  
やっぱり官軍など我らの敵では無いと思っていた。紅蓮や盧植が仕掛けた罠だと知らずに……

戦闘が始まると左右は苦戦していたが中央は押していた。もう少しで敵將を討てる。

そう思っていた。

だが2時間経っても敵将は討てずに、左右は壊滅。同士も討取られ、しかも敵の左右が近付くと同時に中央も壊滅し始めていた。更に追討ちを掛ける様にして、後方の部隊が降伏したと連絡を受けた時に、ここは終わったと思った。後方にも敵がいるのだ。彼等は敵陣を突破し逃げようとし、突撃を敢行するが失敗に終わる。韓忠は逃げる途中に雪蓮に、孫夏は後方を押さえた星に討たれ、他の者は全て降伏した。

戦闘が終わって3日たったある日の事。盧植將軍に呼び出され会い江陵城の執務室に行く。執務室に行くと、そこには紅蓮が居り、俺に気づくと

「お前も呼ばれたのか？何の用だろうな。報告書は冥琳に任せてあるし、俺のする事は終わらせてあるし報告もした。呼ばれる理由なんてないよな」

と独り言も交えながら色々と話をした。話の終盤に

「なあ、やっぱり俺んここにこないか？お前達の戦い方をみて思ったんだが、あれだけの戦闘をしながら、殆ど被害を出してねえだろ、お前んとこ？

初めは何やってんだと思ったんだよ。俺の眼に間違いはねえと思っ  
ていたからな。

裏切られたと思ったよ。あの言葉は口だけかと。あのまま防戦一方

だったらな。

しかし、お前らはそのまま敵に突っ込んでいきやがった。そのあと色々攻撃してたよな。

冥琳もたまげていたぞ。あんな攻撃方法見るのも初めてだしな。

喰らった奴らはもつとたまげただろうよ。攻撃が効かない。回り込めないなんてな」

と言い自分の前にある飲み物を飲みほして続けた。

「あの戦力とお前の世界の知恵に稟と風の2人の軍師。これだけあれば勢力は築ける。

お前はまず力と名声を獲ると言ったな。今回の事で第1の目標は達成出来ただろう。

俺とお前と盧植の爺さんの名は上がった。張曼成を討ち手柄を立てたからな、それで力も増す。

お前は、もうその年で背負う物を解っているし責任も持っている。

俺はお前がハッキリ言って怖い。しかし気に入ってもいる。だからお前に頼みが有る」

と俺に何か言おうとした時に盧植將軍が現れた。

「おお、すまん、鼻垂れども。部下との話が遅くなってな。ん？

何じゃ紅蓮。わしの顔に

何ぞついとるか？」

盧植將軍は俺達の事を鼻垂れと呼ぶ。紅蓮いわく愛情表現らしい。

紅蓮は盧植將軍の方を見て、ため息を吐き

「いいや、今日は何の用だい。やる事は大体終わっただろう」

「おう、お前達のおかげで大体片付いたぞ。だからなお前達に褒美をやるうと思つてな」

俺と紅蓮の方を見つめ、

「紅蓮、お前は長沙太守を与えるように進言した。今は唯の県令だがお前は太守になる。」

まあ大將軍はあの何進だが、わしに任せておけ」

「一刀、お前は蜀の諷陵太守だ」

將軍は俺の事を戦後の挨拶に行つた時から「一刀」と呼んでくれる。俺も向うの世界の爺ちゃんみたいで懐かしく嬉しかった。

そして俺達を見て

「わしはお前達がここに来てくれた事を嬉しく思う。お前達はちゃんと次の事を考えて行動しておる。」

そんな奴は、わしの知っている限り、今までで三人しかおらん」

「ふうん、光栄だね。爺さんに誉められるなんて明日は雪かね」  
「有難うございます」

と紅蓮と俺は礼を言う。盧植は笑いつつ、こちらを見回しながら、更に続ける。

「だから気付いておるう？この後に何が起きるかを。今回の戦いでそれが露見してしもた。」

しかし、朝廷ではそれに気づいておらん馬鹿者どもが好き放題やつておる。

何進と張讓の事じゃ、行くとこまで行かんと分からんらしい」

盧植は呆れながらも話を続ける。

「その後は乱れに乱れるであろう。その後に群雄割拠が来る。その時、一番の被害者は民じゃ。

だからな、お前達だけでもせめて民の事を考えて行動して欲しい。今回お前達の領地を中央より

離れたのはそんな迷惑が有る事も解って欲しい。それだけじゃ」

それだけ言つと目を瞑り後ろを向いた。俺と紅蓮が礼をし帰ろうとすると、

「おおそうじゃ、一刀だけに少し話が有るんじやがの。残ってくれんか？」

と言われたので俺だけその場に残った。紅蓮が出て行った後少しして、

「お前の事じゃ紅蓮に、いや劉表の奴もかの？両方に誘われて居るじゃろう？」

その時どつちに味方するんじや？奴らもその時が来れば何するか分からんぞ。今回その事も

含めてお前を荊州から離すことにした。お前が居れば奴らは自分の陣営に引き込む事に奔走し

さらに他の諸侯も巻き込んでまたこの荊州が争いの場になるからの」

俺は盧植の話を頷きながら聞いていた。盧植は更に話を続ける。

「まあ、言わんでも解って居るなお前なら。一刀、お前はわしの教

え子の一人に似ておる。

しかし決定的に違うのは、あ奴は戦う事を「悪」だと思っているし、何より戦いを恐れておる。

だが、お前は戦いを恐れてはいるが、仲間を守ろうとする為には戦いも「善」と考える。

他の者から見れば、お前やあ奴の考えは臆病者と罵られるやもしれん」

そこで話を区切り盧植は、

「しかしな、お前のその考えは大事だぞ。お前が考え抜いて出した答えなら尚更だし、

その考えに導いてくれた者が居るなら、その者を絶対に大事にせいやあならん。

そこまでお前の事を考えてくれとる証拠だからな」

そう言つて話を止めて笑いながら

「おお年を取ると長話になるな。わしからはそれだけじゃ。もう下がって良いぞ」

俺は礼をしてその場を去る。

盧植の隣に副官がやつて来てお茶を淹れていた。

「あの若さで大変な器の持ち主ですな。しかし陳留で見たあの曹操やここの孫堅、

冀州に援軍にきた董卓、先生の教え子の劉備、そして北郷、大変な時代ですな」



副官はそれだけ言うと去っていく。

「ふん大変どころではないわ！でも最後に残るのは  
うな。」  
である

俺は盧植の話聞いてる最中より自分を支えてくれる3人の顔が  
頭より離れなかった。

今までの自分では考えられない事だった。自分が誰かに恋をしてい  
るなんて。しかし

俺は迷っていた。彼女達に自分の気持ちを伝えるべきかどうかを。

何せ、向うの世界でもこんな気持ちになった事は無く、告白された  
事はあるが全て断っていた。

「仕方ない。しかし俺に告白してきた女の子達はこんな気持ちだった  
んだな」

等と何処か他人事のように独り言を言うと、彼女達のプレゼントを探  
しにそのまま街に繰り出した。

そして俺は陣に戻り今日あった事を3人に話した。俺への褒美の  
事、盧植の話の事等である。

そして最後に3人に立ってもらい俺の気持ちを伝えた。

「俺はこれからも君達を何があっても信じる。だからこれは俺から  
君達への忠誠の証として  
持っていて欲しい」

そう言うと江陵の露天で買った指輪を稟と風に、星には武器店で捜  
した短剣を渡して

3人を見渡した。そして皆に向かって

「これからも俺を支えて欲しい。公私ともに……いいかな」

辺りが静けさを増して少しして

「もちろん貴方が離せと言ってもはなしませんぞ。主」と星。

「もちろんですよ。私達の御主人様は貴方だけですよ」と普段通りな、風。

「わ、わ、わ、私も、ぶはああああ」そして、見事なアーチ型の鼻血を吹きだす稟。

稟は風を起こされて

「はい稟ちゃん、トントンしますよ、トントン」

と風に止血(?)をしてもらいながら、

「風もついいです。私達は一刀様にこれからは一生涯面倒を見て貰わねばなりません。」

だから、その言葉を取り消すことは出来ませんよ。一刀様」

「俺は承知の上だよ。3人には俺が道を踏外さないか間近で見つけないとね」

と言い彼女達と新たな道を歩き出した。

それから1週間後に綺麗な服を着た朝廷の使者がやって来て

「諷陵の太守に任命する。有り難く頂戴せよ」

と言い印綬と書状を仰々しく渡していった。

「さてとじゃあ与えられた領地とやらを見に行きましようかね。3  
人とも」

そのとき外から衛兵がやって来て、

「申し上げます。陣の外に御遣い様に面会を求めている少女が来て  
居られますが」

稟が「名前は何と言ってますか？」と訊き直すと衛兵が

「司馬徽の門下生の徐庶と言って居りましたが」

## 荊州編〜荊州黄巾党の最後〜一刀の恋（後書き）

従妹の子供にライダーキックを決められ悶絶した作者の憂鬱です。子供恐怖症に陥りました。だって手加減を知らないんだもん。従妹にやあ逆らえないし。

今回の話で出てきた大盾の戦い方はアメリカであったキルドーザーの話を基にしています。

キルドーザーの本体はコンクリートや鉄板で被われていて銃や手榴弾すら効かなかったと言います。そして全てを破壊し続けました。詳しく知りたい方はWIKIにてお願いします。

この話を基に今回の戦い方をかいてみました。

次回ですが最後に出てきた彼女の話と？陵に行く話です。本拠地は白帝城にします。

此処までお読み頂き有難うございました。

荊州編く新たなる旅立ちと出会い（前書き）

一刀を訪ねてきた少女が質問をする。

「ある街で洪水が起き10人が流されそうになっている。でも貴方が助けられるのは2人だけ。他の8人を  
貴方ならどうしますか？」と一刀が答えた答えとは？

## 荊州編く新たなる旅立ちと出会い

衛兵が言った。

「司馬徽門下の徐元直殿と申しておりますが。如何致しましょう?」

俺は稟達に徐庶のことを掻い摘んで伝えた。そして衛兵に

「こちらに通してくれる。丁重にね」

と言い稟達と待った。しばらくして衛兵の声がして

「申し上げます。お客様をお連れ致しました」

稟は「どうぞ」とだけ言い入室を促した。

少して衛兵と共にピンクのリボンを付けた麦わら帽子を被った黒髪のロングヘアの

女の子が現れた。よく見ると手には分厚い本を持っていた。その子が

「貴方が天の御遣い様でしょうか?」

と訪ねてきたので俺が肯定すると

「そうですね。申し遅れました。私は徐元直と申します」

と言って頭をさげた。

「君が徐庶さんか、俺が北郷一乃。天の御遣いなんて言われてる」

「はあ、さすがですね。私の名をご存じとは。それも天の知識で知

っていたのでしょうか？」

と言うので、俺は正直に

「そつだよ。俺は君の事がある程度は知っている。君がいた司馬徽さんの事や同級生の事もね」

と言う。すると彼女が

「同級生と言うと朱里や雛里の事でしょうか？」

と訊き返して来たので

「その2人はもしかして諸葛孔明さんと鳳統土元さんかな？。臥竜・鳳雛と称された」

と言うと顔色が変わり俺を睨むように言うて来た。

「はあー2人の事もご存じですか。しかし私の事といい2人の事といい、

そこまで知られていると余り気分の良い事では有りませんね」

と言うて、俺から1つ席をずれた稟と風、それに星の方を向き彼女達を見て考えていた。

（はあー彼女達程の者が居るからには、何か訳が有るんでしょうね。軍師らしき者達は朱里や

雛里にも負けず劣らずという処でしょうか。もう一人の方も凄いいんでしょうね。切れ者みたい）

彼女が考え込んでいる時に不意に一刀が声を掛けてきた。

「で、徐庶さん今日此処に来た理由を教えてください。考えてる最中に悪いけどさ。」

色々と含む事もあるだろうけど腹を割って話をしない？俺ってこう言う事嫌いでさ」

と正直に言うと彼女が俺に視線を戻してこう言った。

「すみません。私の悪い癖で何か有ると考え込むのです。解りました貴方に訊ねます。」

正直に答えて頂けますか。とある街で洪水が起きました。貴方の目の前に

10人の子供がいます。今にも流されそうです。貴方が救えるのは2人だけです。残りの8人を貴方ならどうします。正直にお答えください」

俺は少し考えて自分の考えを言う。

「俺が2人だろ稟が2人で風が2人、星が2人で、残り2人は君が助けてくれないか。」

徐庶さん。そうすればちょうど10人じゃん」

と言うと静まり返った後

「何故、私なのですか？その場合は兵達とか言いませんか。普通は」と訊き返してきたので

「えっ、でも兵の皆は他にも助けられる人がいたら助けて貰わないと



いけないし、

それに俺等が帰って来た時に、色々やって貰わないといけないし」

と言うと彼女は

「だから10人だと言ったでは無いですか。何を聞いていたのです？」

と声を荒げて言う。俺は

「それは君が決めた数字じゃないか。本当の災害だったらそんな事じゃあ済まないだろう？」

と俺が素で言うと、横から3人が吹き出し星が

「徐庶とやら、我が主にそんな事言っても無駄だぞ。その人は本当にそんな事が起こったら

真っ先に助けに行つて無茶ばかりして倒れるがオチだな。それと先程の話も我が主1人で

無茶をして4〜5人助けてしまう可能性の方が高い。他に考えられると言えばそうだな

10人は全員無事で主1人だけ犠牲になるというのもあり得るな」

と星。横では稟と風がウンウンと頷きながら笑いを堪えていた。

その話を横で聞きながら俺は泣きそうになった。いや、心の中では泣き叫んでいた。

(俺って君達の主だよ〜星、風、稟)

そんな光景をみて、馬鹿にされたと思つたのか徐庶が大声をあげて

「私を馬鹿にしているのですか？大体貴女達の主人でしょう。そんな事をする前に貴女が止めるとかいうのが普通でしょう。最後の事も冗談にしては度を越しているとは思わないのですか？」

すると星が声を下げて

「本当に1人で行くとしたら私が止めるさ。大怪我をさせてでもな。そうでしょう、主？」

「大怪我は勘弁してくれ星。まあ皆で行った方が大勢救えるから一人ではいけないよ」

すると風が

「まあ、大怪我させるかどうかは置いてもですね」

『否定しろよ風』

「まあそこまで無茶はしなと思いますよ」

といい、稟も

「そうですね、私達が止めれば良いだけです、一人で行くこととされたらですが…」

と一旦俺の方を見て、俺が

『行かないって！！』

と言つと

「気絶させるにしろ、させないにしろ我らが一刀様の分まで救えば良いだけです」

と、あたかも俺が星によって気絶させられるのが決定しているかのように答えた。

その光景を見ていた徐庶が大声をあげ笑いだした。そして気が済むまで笑うと

「無礼をお許し下さい。やっぱり盧植將軍の言う通りですね。貴方達は」

と言うと片膝を折り頭を下げ言った。

「私の持上げるべき太陽は貴方の様です。北郷一刀様。どうか御願致します。」

私を貴方の末席にお加え下さい。御役にたってみせます」

俺はいきなりの展開に驚いたが、稟と風はもつと驚いていた。

星も顔つき変わっていたが、俺は話を続け

「何が何だか分からないけどさ。とりあえず二つ答えてくれる。」

1つめは盧植將軍の事。2つめは太陽って何？」

と俺が聞くと徐庶は

「盧植將軍の事です。私は初め盧肅將軍に仕えようとしたのです。しかし將軍が仰るには

『わしなんぞ年寄りに仕えるより、もつと若くお前さんみたいな有能な者を自分の下へ、

欲しがっておる者の方へ行く方が良いでしょう。』こゝらで言えば孫

堅かちと遠いが曹操じゃろ。

それが一刀、いや北郷じゃな。これらの者は、これからお前さんみたいな人物が必要となるじゃろ』

と仰りまして私が迷っていると

『一番近い孫堅か北郷の所に行けばよいじゃろう。孫堅は長沙を抱えこれから他を狙うじゃろう。

そんな時、お前さんみたいな者が必要じゃ。軍事も政治も出来る者がな。

北郷も必要じゃが、今あやつに必要な者は武芸者じゃ。1人しかおらんしの。

あやつも戦えるが2人じゃの……だからあんな集団戦を思い付たんじゃろうが』

というと考え込まれました。私が

『ちなみに將軍ならどちらに行かれますか』

と訊いて見た所迷わずに

『一刀じゃな』

と仰り理由を尋ねてみますと

『孫堅はこれから大きくなるじゃろう。しかし配下に猛将、智将が沢山居る。』

だから、お前さんがすぐに使って貰えるとは限らん。

しかし一刀、いや北郷の所は別じゃ。武芸者が欲しいと言っても居らんものは仕方ない。

しかも今回、諷陵を手に入れた事で軍師2人では回らなくなる。あ

そこは色々と大変な  
土地だからな。ここでお前さんの出番じゃ。2人の軍師がやりきれ  
ん仕事がお前さんに  
確実に回ってくる。そこで成果を出せるかどうかはお前さん次第だ  
がな。

まあ一刀の事じゃお前さんの事も知って居るんじゃないか？あ奴は  
天の御遣いだからな』

と言われた後に、笑っておられたのが非常に印象に残りました。そ  
して最後に

『あ奴は不思議な奴での周りの者が常に笑っておる。普段は笑い顔  
なぞ見せん孫堅すらも

笑って居ったわ。ありやあ多分本人も気付いて居らんじやろう。そ  
んな奴じゃ一刀はな。

それとのあ奴の周りにおる者達を見てみよ。面白いぞー』

と聞き私の心は決まりました。そして私は將軍に言いました。

『盧植將軍が御遣い様を、どれだけ気に入って居られるかが解りま  
した。

將軍は訂正したおつもりでしょうが、3回訂正せずにそのままお呼  
びになられました。

それを聞き決心しました。私は御遣い様に会ってみようと思いません。  
將軍』

と言い、江陵を後にしてきた次第です」

「へー、盧植將軍がね。でも俺もあの將軍好きだよ。向うの爺ちゃ  
んみたいでさ」

と俺が言うと少し笑って話を続ける。

「それと太陽の事ですが、貴方様が荊州に入って間もない時だったと思います。夢を見ました。

私が歩いていると何人かの方が、何かを持ち上げようとされています。私もお手伝いしようと

その方たちに混ざって持ち上げようとする物を見た時です。その物とは太陽でした。

私は驚きましたが、しかしその方達は、私に気付く事無く太陽を上げようとしています。

ですから、私も必死になって太陽を上げようとした時に辺りが明るくなり目が覚めました。

その夢の事を先生に話してみたのです。すると先生は

『それは啓示かも知れませんが。貴女にも旅立ちの時が来たのだという。』

それにしても太陽とは大変な物を………』

と言われ先生は

『貴女はこれから各地を回り自分に相応しい主人を見つけなさい。』

手近な所で江陵の盧植將軍から当たってみてはどうでしょうか？

この劉表さんは貴女が仕えるに値しません。力はありますが器量不足です。

孫堅さんか盧植將軍。そう言えば天の御遣いさんも来てましたね？

貴女が自分に相応しい人物に会える事を心より願っていますよ』

と言われ旅に出た次第です」

それだけ言つと俺に向かい

「私を配下にお加え下さい。お願いします」

俺は席を立ち彼女の方へ行き片膝を付いている彼女に

「顔を上げて徐庶さん。今から言う事を聞いて欲しい」

と言つと彼女を席に着かせ

星や稟、風にも言った事を話し始めた。自分の世界の事、これから起るであろう事等を彼女にも話し、そして最後に言つ。

「こんな与太話をする奴をそれでも信じる？」

徐庶は最後まで俺の眼を見たまま逸らさなかつた。そして、

「私は信じます。貴方がその言葉のままに世を納めて下さる様に精一杯仕えさせて頂きます。

それが私の使命だと今、改めて感じました。ですから私の真名をお受け取り下さい。

私は姓を徐、名を庶、字を元直、真名を万里ばんりと申します。主様」

俺は

「分かつた。君の真名を受け取るよ。万里。俺の事は一刀と呼んで欲しいけど。

まあ好きに呼んでくれたら良いよ。稟、風、星、万里を俺達の仲間とするよ。良いかい」

「まあ、主が認めたのなら構いませんよ」

と言い自己紹介する星。稟と風が二人して話していたが、こちらを向き稟が言った。

「我らと同じ夢を見た者を歓迎しない訳もいかないでしょう。私は一刀様に従います」

「風も問題ないのですよ」。後でその夢の事を聞かせて下さいね」と言つと稟と風が自己紹介をし始めた。そして両方共の自己紹介が終わると風が言った。

「星ちゃんに聞きたいのですが、太陽の話の所で顔色が変わりましたね。もしかして……」

すると星は風の方を向き頷いた。そして、

「あれは伯珪殿の所を去る前日だ。夢を見たのだ御主たちと同じ夢をな。

しかし、私のは内容が少し違うようだ。私は太陽を持ち上げる役ではなくその周りに居た者達を守っていた。太陽を上げようとする者に襲い掛かろうとする奴がおつてな

奴等を倒していた。大変だったぞ1人で守るのは。しかし1人、また1人と増えていった。

それで太陽が上がるうとした時に目が覚めたのだ。しかしこれで納得云った。

私の使命は主と御主たちを守れというのだな。言われるまでも無いがな」



と言つと彼女達は自分の夢の事を話していた。

その光景を見ながら考えていた。自分に本当にそんな事が出来るのかを。

しかし、ある程度考えた所で星が横に来て

「主、難しい顔をなされるな。1人では無く皆で頑張れば宜しいと思います。どうかな？」

と言われ自分に返り、星にお礼を言い皆に向かって言った。

「さて、夢の事は置いといてそろそろ諷陵に行く準備をしようか。皆に訊きたいんだけど俺達のいく諷陵の情報は集めてあるよね？それを万里にも教えてやって欲しんだけど……」

最初に稟が立ちあがり、

「私達の行く諷陵ですが、主な産業は烏江や長江を活かした水運業が主です。

しかし、蜀地方にとっては荊州側の防衛の拠点であり、結構な数の兵を置いている為

他の地方に比べれば治安も良いと言えます。しかし今回の黄巾の乱にて荊州より、

追い払われた者達が多数逃げ込み混乱しております。まずそこから手を着けませんと

いけないといけません」

そして風が

「私の情報では、黄巾党より官吏達の方が性質が悪いですね。税

を余分に取り賄賂を

受け取るなど当たり前という輩が片手では足りませんね、まず彼等をお掃除しませんと。

それをした後に税制改革と他の事もやりませんと。」

俺は万里に

「万里は風と一緒に官吏達の方を頼む。星は軍の指揮をして黄巾党の鎮圧を。

人手が足りないなら俺も頭数に入れていいよ。」

「稟は作戦準備を『終わって居ります』」

と稟。

……が終わっているなら官吏達の動向を監視しといて。」

と言い撤退準備を始めた。俺は万里を呼止め

「君のお母さんを今の内にこっちに連れておいで。

俺の知っている歴史では、君のお母さんは曹操の下で死んでしまう。だから今の内に手を打っておこう。親衛隊を50と兵100を連れて行って。」

万里は礼を言うのと急いで出て行った。

横で聞いていた稟に兵の指示を頼み俺も準備に取り掛かった。

盧植將軍に挨拶しに行き万里を仲間に加えた事を話しお礼をいい、雑談して帰ろうとした時

「一刀。これから伸びるも縮むもお前に掛ってくるぞ。その事を片

時も忘れるでないぞ」

とだけ言い見送ってくれた。

紅蓮は陣を引き払い帰る途中だった。紅蓮は俺を見ると笑い

「俺ん所と同盟でも結びに来たかと思つたぜ。しかしお前の所は大変そうだな。

此処に残つてた、黄巾党の奴らの殆どがそっちに行つちまつたみたいだな。

まあ落ち着いたら連絡でもくれ。

俺の所としても、お前の所が落ち着いてくれると有り難いしな。じゃあ俺達はいく。元気でな一刀」

と言つた後、去り際に俺が彼女の耳元で言つた。

「袁術と劉表に気を付けて」

それだけ言つて彼女の目を見て「じゃね紅蓮」と言つて馬を返した。紅蓮は

「やっぱり首輪付けてでも持って帰ればよかつたかねー」

とその場で独り言を言い自分の軍に追いついて行つた。

荊州に集いし者が皆、与えられた領地や自分の領地に帰って行つた。これからの事を思うと

自分が評価した者がどうなるか楽しみではあるが、素直に喜べない盧植だった。

荊州編く新たなる旅立ちと出会い（後書き）

こんにちは。この前のあとがきで従妹の子供に蹴られたと書きましたが、訂正します。ひびが入ってました

ライダーキック恐るべし。まあ確かにいやな場所に蹴りが入ったなーと思ってはいたんですけどね。

俺が弱いのか、従妹の子供が強いのか。

ええと気を取り直して次回予告です。

次回に巴郡のあの人を出します。後、その時に他の場所で起こった出来事まで書けるか微妙な所です。

此処までお読み頂き有難うございました。

## 諷陵にて自領内の整備と改革（前書き）

諷陵での事がメインで財政再建や農地改革、悪徳官吏の排除を皆でやっていきます。

## 諷陵にて自領内の整備と改革

荊州を発ち俺と星は2千程の兵と共に先に諷陵に入っていた。稟と風と万里は俺達の本拠地となる

白帝城に向かわせ彼女達に俺達の最精鋭部隊をつけ官吏達の掃除と税制改革の基本計画を頼んである。

俺達は稟が建ててくれた計画に基き排除する者を討伐していく。一番兵が多い所で1500程で

そんな勢力が大小合わせて19程あった。苦戦を覚悟し行くと降伏する者が多発したので不思議に思い

降伏した者に何故降伏したのか話を聞くと帰って来た言葉の多くに驚く。荊州での戦闘の話が

独り歩きし背びれや尾ひれが付き大きくなっていったのだ。

例えば、1分で敵部隊を倒したのだ、俺一人で敵部隊を壊滅させたのだ、ここらはまだマシで

俺は天の御遣いでは無く悪魔の遣いで逆らうと魂を刈り取り食べてしまうとか

拳句の果てには呪文を唱えたと敵兵が消えたとか言つものも有った。

俺は呆れて物も言えず、

横で話を聞いていた星に至っては、

「あつ、主。くつくくすみません少しわらつ、いや天幕にいつてまいます。くつくく」

と声を殺して笑うも我慢できなくなりその場を立ち去り自分の天幕で大笑いする始末で、

後から他の兵達も「ぶっ」だの「くつ」と声が聞こえて来たので笑っているのだと解る。

今回連れてきた兵達は旗揚げ当初からの者達なので皆、俺の事は知っているのだ。

これは余談だが後に星と酒を飲むと必ずこの話をする様になった。誇張してだが……

それから彼等と話をしてこれからは略奪などしない事を条件に俺達と共に来る事を許す事にした。

そんな事もあり2千の兵が6千近くまで膨らんだ事によって食糧事情が悪化しようとした時に稟から

輸送隊が到着し大量の食糧と手紙が届く。手紙にはこうなる事は予測しており、集めていた分と

利準が残っていた食糧を送ってくれた分の食糧だと書かれていた。もう一通は指示書で

降伏した者達の中より戦いが得意な者と元農業従事者とそれ以外を分けて置いて下さい、とある。

最後に一遍竹簡があり曲陽で最後の黄巾党部隊が官軍によって滅ぼされたと書かれていて

これにより最後の部隊が負けた事で黄巾の乱は終結する。しかしここらみたいになら大陸の到る所で残党が残っていた。

手紙を読み終わると俺と星は稟の支持通りに選別作業をこなしつつ、残りの黄巾党勢力に

攻撃を行い降伏させていった。それと並行して街や村の状況や田畑の状態の調査、

町民や村民と話をし今の問題点、苦情等を聞いて、それらを纏めた竹簡を稟と風の下へ送る。

半月程した頃には大体の黄巾勢力が降伏し、それに伴い総数が1万超にまで昇り稟の支持通り

兵士候補は星に預け農業従事者は稟の下へ送る。討伐が終わり白帝城に帰還時の出迎えは凄かった。

大通りが城の住民や近所の街の人で溢れていた。俺を一目見ようと

集まったらしい。

それから俺達は3か月の間、やる事が沢山あり寝る暇も惜しみつつ領内の整備をしていた。

主に3つの事を重点的に取り組んだ。

1つ目は俺と星が討伐し連れてきた者達の処分である。兵士候補の者はそのまま星に預けて星と万里に

幹部候補生と星自身の副官を何人が選ばせ、そして募集し集まった者と合わせ二人に調練を任せる。

農業従事者とそれ以外の者は農地整備と治水工事を行わせる事にし両方とも俺が監督し作業形態から作業日まで決めた。

何故、俺なのかという先日、白帝城の執務室で書類と格闘していると稟と風が来て

「一刀様にやって頂きたい仕事があります」

と言う稟といつも通りの口調で風が

「そうですね。ご主人様にしかできない仕事なのですよ」

「これを片付けてからじゃ駄目かい？」と聞くと二人して「駄目です(ですよ)」とハモリ

無理やり治水工事現場と農地整備地区の2か所を連れ回され最後に言われる。

「この二つを一刀様に御願したいのです。一刀様の好きにやって構いません。しかし

この二つが遅ければ民に迷惑を掛ける事だけは忘れないで下さい」

と稟。風は

「ご主人様なら大丈夫なのですよ」

と茫然とする俺を置き去って行く。我に返った俺は執務室で他の書類を片付けてから考えていた。

考え事とは勿論、稟と風から与えられた仕事の事である。途中、星



が来て俺と話をし最後に

「あの二人が主の為にならない事をする訳無いではないですか。これも勉強だと思ひ取組んでは如何かな。主」

と言われ

「分かったよ星。二人に、いや違うな。万里に宜しく言つといてくれ」

と言つと星も

「お見通しですか。解りました、ちゃんと伝えましょう」

と言ひ去つて行く。それからまた色々考えた。まず考えたのはこちらの工事の仕方。

両方の作業人数は2500人ずつそして作業方法の書いてある本を読み漁り自分が向こうで読んだ

豊臣秀吉の漫画の話に似たような事が書いて有つた事を思い出す。

それを実践しようと脳内の記憶を

思いだしつつ竹簡に書き留ていった。そして朝に現場責任者達を集めて説明し次の日に作業員の

皆の前でも説明した。

まず持つて来た銭の山を見せびらかすようにして

「これからは10人1組で作業をして貰う。そして作業速度の速い組と作業の出来が良い組を選び

その組には給金を倍出す。更に良い知恵を出した者、勤務態度が真面目な者にも同様に褒美を与える」

と俺が言った後、作業者の眼の色が変わつた気がした。

それから俺は彼等の闘争心を煽り自ら知恵を出させ作業効率を上げさせるよう努め、それと同時に

5日毎に休みを与え疲労をなるべく溜めさせずに作業させた事もあつて予定通りに頑丈そうな堤防を作り

作業を終わらせる事が出来た。

しかも工費も抑える事に成功し浮いた銭で作業員全員に大宴会を開

き労をねぎらった。

宴会の時に何処からか訊き付けた星が現れ（宴会の事は作業責任者にしか教えていなかったのだが…）

言う。「この者達は色々な所で使えそうですな」と聞き宴会が終わった後、稟と風に俺の世界の

レスキュー隊の話をした。そして災害時には救助隊として平時には土木工事や堤防管理や修理などを

行う部隊と部署を作り発足させ農業従事者以外をそこに組み込んだ。農地整備の方は区画を一定に決めそれと同様の物を作り、更に俺の知ってる限りでの土壌改良の方法や

肥料の作り方を教え、その成果があったかは解らないが、その年の作物の出来は上々であった。

2つ目は悪徳官吏とその利権に群がる商人の摘発と処分と財産没収である。

風と万里に任せていたが報告書が来ていたので読んだ。

官吏の方を摘発していた時に賄賂を贈って来た者を記した帳簿を見つけたので風と相談し

賄賂を贈った者も摘発と事情聴取を行った。その時に万里へ賄賂を贈った者が多数現れ

その者達も悪徳官吏と同様に財産没収の上で国外追放とした。

しかし官吏に強要されやむを得ず賄賂を渡していた者は処分を免除し商売を続けさせ、

嘘を吐いていて何かしらの証拠が出て来た者は処分を重くした。

また信賞必罰の言葉通りに罰すだけでなく商人の中でも優秀な者や良い知恵を出した者や

商売をし街に貢献した者には税を軽くする等の対策を取りそれを白帝城と諷陵城下とで同時に行い

街道も整備し街道には警備兵を1日2回程巡回させた事により街道

の治安も保たれ街は発展した。

3つ目は税制改革と人材登用である。3軍師がこの財政状況と税率を照し合せ税率が重いと判断し

6割の税率を4割5分まで下げる。その後の報告で風が言ってきた。「この前追放した人達だけですな」6割の税込の内2割を取っていったのですよ」

その者達を排除し下の役職の者達から有能な者達を引き上げ、追放した者の役職に付け人事を一新した。

年貢の徴収方法も改正を行う。初めに戸籍を作りそこに田畑の有者と広さを記入して

田畑の広さから3割の作物を年貢とし残りの1割5分を銭で納めさせた。

これには通貨制度の普及促進も思惑にある。

高い給料を取っていた官吏達は更には売官も行っていた。俺は3人の話を聞き売官自体は

さほど悪い事では無いと聞いた。売官によって財政を補う事もあるというのだ。

ただ登用した者が有能な者ならまだしも、無能でありしかも自分の親族で固めていたのである。

そこで3人は容赦しなかった。売官で役職を得ても3人が使えると思つた者はそのまま登用し

無能と判断した者は容赦無くバツサリ切り捨てていく。

新しく登用した者や切り捨てた者の下に居た者で有能な者を上にあげ仕事をさせた。

人材も法正を筆頭に蒋宛《エンは王へんに宛》、費緯、董允等の軍師や官僚の幹部候補生から、

李厳、トウ芝《トウは登におおざと》の武官を登用した。稟曰く

「中々の人材が揃いましたし制度の方も概ね機能はしている様です。まあ色々問題もありますが…」

との事だった。稟がここまで言えば大丈夫だ。  
また兵士数も3万に及び政治、軍備ともに充実させていた。

俺達が領内及び軍備を整備している頃、中央では歴史通りに進んでいた。

## 諷陵にて自領内の整備と改革（後書き）

遅れてすみません。憂鬱です。本当なら昼までに更新するつもりでしたが諸事情により遅れました。今回の話で豊臣秀吉の事業を思い出しましたので話に入れてみました。今回の話は山岡荘八先生か横山光輝先生の本をお読み頂けば出てきます。

次回ですが自分の話の一刀と万里の紹介を一度しておこうと思います。

そうしないと自分が忘れそうで……。

その後は反董卓連合の話に持って行こうと思います。此処までお読み頂き有難うございました。

一刀とオリキャラの補足と紹介（前書き）

一刀と万里の紹介です。

## 一刀とオリキャラの補足と紹介

登場人物の補足とオリジナルキャラの紹介

北郷一刀

この話の主人公で「天の御遣い」 剣道部所属

祖父が薩摩・示現流の師範で幼い頃から鍛えられたお蔭で祖父と肩を並べる位に力を付けている

そのお蔭もあつてか、高校剣道の全国大会の試合で常にベスト4以上の結果を出している。

困っている人を見過ごせない。超お人好し。

冷静そうに装っているが1枚めくると熱血漢の顔を覗かす。

学園の成績は中の上であり得意科目は日本史。歴史マニアで戦国時代や三国志が好きである。

学園内外に男女問わず友人がいるが鈍過ぎる為に友人から親友になっても恋人には成らない。

こっちの世界に来て初めて自分から恋をし告白もしたほどである。

子供や動物等に好かれるフェロモンが絶えず出ており街に出ると

両方が寄って来て大変な状態になり街の者は一刀の困った顔を見無  
いと1日が終わらない。

逃亡癖有り。最後には捕まり稟に説教されるもあまり効果なしで説  
教中に寝る事もある。

原作よりかなり強くして有ります。愛用の木刀はイスノキという木  
を乾燥させた固い木。

「天の御遣い」の名が大変な物だと教えられ歴史の表舞台に立ち稟  
や風、星に支えられて

フ陵太守になる。全ては自分を支えてくれる者を守る為と思い愛用  
の木刀を振るう。

徐庶 元直 《真名 万里》

水鏡塾出身の奇才豊富な少女。朱里や雛里の同級生であり彼女達  
のお菓子作りの先生でもある。

家事全般において彼女が仕切っており、彼女が来るまでは一刀が食  
事を作っていた。

(稟と風は食事を作れず、星においては食事と言えばメンマしか出  
さない為)



彼女が来てから一番喜んだのは一刀であり、他の者も手際良く食事を作ってくれる彼女には

逆らわないようにしている。

ピンクのリボンをつけた麦わら帽子と分厚い本を持っており両方も彼女の母に買って貰った

物であり彼女の宝物となっている。服装はシンプルで上下が同じ色の物を好む。

母子家庭で育ち母の事が大好きで休日は必ずと言って良いほど一緒に居る。

軍事、政治共にそつ無くこなし現在の食糧調達や出兵時の兵糧準備の部門の最高責任者。

予想外の出来事が有ると考え込む癖が有る。朱里や雛里より背も高く言動も大人に見えるが

胸は標準サイズであり本人も気にしている。髪は黒髪のロングヘアで眼も同じ色。

作者の大好きな宮崎あおいさんがモデルとか……。

## 一刀とオリキャラの補足と紹介（後書き）

立て続けにこんばんわ。憂鬱です。

次回ですが反董卓連合のちよつと前の話から入ろうと思います。

次回の更新ですが少し遅くなるかもしれません。

来週2日間死のロード（出張）に行かなくてはいけませんので。携帯で少しは書こうと思いますが。

今回もここまでお読み頂きありがとうございました。

## 益州の覇権争い（前書き）

一刀達が領地の整備をしている頃に中央では朝廷の利権争いが激化していた。

また一刀達に手紙を送って来た者の真意とは？

## 益州の覇権争い

一刀達が領内で悪戦苦闘している時に中央では何進の推す弁皇子派と

現皇帝の母董氏が推す劉協派に分かれ激しく争っていた。

一旦は董氏達が排除され何進が権力を握ったかのようにみえたが、今度は何氏同士で争いを始めた。そこで何進は地方の諸将を呼び寄せて敵対する

妹とそれを支える宦官たちに圧力を掛けようとした。

しかしその詔をだして間もなく何進が宦官たちに暗殺された。

その事を知った何進の側近だった袁紹と袁術は宦官達を討伐する。

しかし彼女等も程なくして大軍を引き連れた董卓によって都より追い出されてしまう。

そして董卓は弁皇子を廃徐し劉協皇子を新たに献帝としほかの宦官達も排除した。

その情報を密偵からの報告や情報網からの情報を受け自分の将達を集めて議論をしていた。

そしてこれからどうするかを話そうとしていた時に伝令が走って来た。

「申し上げます。巴郡太守嚴顔殿より使者がおいでですが。如何致しましょう。」

稟の方を向くと頷き、風の方へ向くと

「・・・ぐう」寝ていた。「おゝいきる風」というと

「おお！これは失礼したのですよ。会う方がよろしいかと」  
「いい万里も

「私もそう思います。巴郡太守といえはかなりの人物と聞き及んでおります」

と賛成した。

「こちらに御通ししてくれるかい」

といい使者の到着を待った。星がその間に

「厳顔といえは弩の名手と聞きます。手合わせをお願いしたいもの  
ですな」

と物騒な事を言っていた。

そして案内する従者と使者が現れた。使者が挨拶をして俺宛の手紙  
を差し出した。そして

「我が主、厳顔よりの御言葉を申し上げさせて頂きます。その手紙  
の中が全てだそうです」

といいその場で直立不動のまま俺が手紙を読むのを待っていた。

俺は手紙を従者から受け取り読んでみた。書いて有る事は大きく言  
つて3つであった。

1つ目は朝廷の混乱や領地整備に追われ忘れていたが  
先日益州州牧の劉焉さんから手紙が来ていて

その手紙を開けて読むと「自分の配下になれ」と目上からの物言  
いで書いてあった。

軍師や武将達と相談した結果俺はその場で手紙を書いて向うから  
来た使者に手紙を渡した。

「その件につきましては丁重にお断りいたします」と書いて。

その手紙を見た劉焉さんは激怒し兵を出そうとしたが諸将に止めら  
れ諦めたと聞いていたが、

厳顔さんの手紙には諦めきれずに兵を出そうとしていると書かれて  
あった。

2つめは1つめの事で自分達にも火の粉が降り掛かりそうだと書  
かれていた。

益州の土地の多くは元々は劉焉さんの任命された領地では無く色々  
な豪族達が領有していた。

そこに黄巾の乱が起きこの土地にも黄巾の者達が現れて各地を荒し回った。

其の乱は平定されたが劉焉さんは乱を平定した者を含め自分に逆らう者を排除した。

この益州で自分の地位を固め終わったと思つた矢先に俺達がフ陵に任官されてきて

領内を整備し劉焉が密かに送り込んだ者達を排除し更には、自分の配下になる事も拒否されて彼には面白くないらしい。

そこで敵顔さんやその周りの將軍達に軍を出し俺を追い出せと言つているらしい。

彼女の領地巴郡やその周辺の將軍達の領地は益州の黄巾の乱で一番被害が

大きかつた場所で領地復興の最中であり戦える状況にないのが本音である。

しかし俺達の領地諷陵は概ね復興及び改革は終わりつつあり新体制で機能しているか様子見している状態だった。

軍もほぼ完了しており全軍とはいかないが9割の部隊を展開できる準備は出来ていた。

そんな対象的な状況では兵数は倍以上あるがまともに戦えるはずも無く

しかし益州の中で最大勢力を誇る劉焉さんに逆らう訳にもいかず参つていたのである。

そこで皆を代表し敵顔さんが俺達に手紙を送つて

「自分達が間に入るから劉焉さんと仲良くできないか？」  
と言つて来た。

3つ目は敵顔さんが俺に「今度の事は関係なしに会いたい」と書いていた。

この話を皆にすると軍師を除く全員が声を揃えて反対した。星や李  
敵は叩き潰せば良いと

過激な発言をしたが、3軍師は皆「早計です（ね〜）」と言っ  
た。

理由を訊くと稟が

「戦いは否定はしません。いずれ劉焉殿とは一戦交えねばなら  
ないでしょうし。

しかし武力を用いるのは劉焉殿だけで敵顔殿や他の者に用い  
るべきではございません。

もし敵顔殿達に武力を用いて勝ったとしても駐屯できる兵力は  
ございません。

被害も多少なりとも出ます。喜ぶのは劉焉殿だけです。それ  
ならば私は会談の方を推します。

そして少しでも敵を減らす事に努めたいと思います。」  
万里も

「私達はここ諷陵の生産性、経済力を大幅に高めました。  
しかしまだ完全に軌道に乗った訳では有りません。

今、戦を起こせば行って来た政策が無駄になる可能性も出  
て参ります。

それならば敵顔殿や周辺の太守達と和睦し劉焉殿自身が動  
くのを待つのが上策と考えます

彼さえ叩ければ他の者は恐れるに足りません」

風はというと「……………ZZZZZZ」やっぱり寝ていた。俺  
が「静かだと思つたよ。風起きて」

と起こすと本気寝だったらしく「おお！？ついつい寝ていま  
したよ、ええと〜稟ちゃんと同じく戦

う事に反対はしないですよ。しかしその手札は最後まで持  
つときたいのですよー。手札が多いに

越した事ないですし

その手札は稟ちゃんの言う様に劉焉さん用に残しとく事が  
最善と考

えます。

今ここで敵顔さんや他の太守に切る手札では無いですしー。彼女達はこうやって机に座る手札を提示してます。

今は話し合いに応じ情勢を見極める方が得策でしょうねー」

3人の話を聞き少し考えて俺は皆に言った。

「俺は敵顔さんと話そうと思う。

争う事は否定しないけど無闇に切る手札じゃないという軍師達の考え方に俺は賛成だ。

だから星と稟以外は皆で内政、軍事を推進してくれ。星と稟は俺について来て。

彼女と話そうと思う。その間は風と万里を中心に全てを任せる。じやあ出発は明日でいいかな？」

と訊ねると了承してくれたのでその旨を使者に伝えた。

会議場を出て行く時に稟が風と万里に何か言っただけに他の者にも指示を出していた。

次の日に俺達と使者を含めた4人と護衛の部隊100人で敵顔の巴郡まで会いに行った。

そして翌日に巴郡にある敵顔の居城に着いた。

城の方に伝令を出していた為に敵顔さんは城門の外まで迎えに来てくれていた。

初めに御互いに自己紹介をした。俺が挨拶した後

「よう来てくれた、私が敵顔だ。しかし御主も変な奴じゃのう。私が言うのもなんだが

この話が策略とは疑わんかったのか？策略だったら今頃この世におらんぞ。皆な」

と言った。俺が

「貴女の人柄は旅商人や旅芸人に聞いてます。そんな策略が出来る



人物じゃないってね」

そう言つとそのまま歩きつつ会話しながらその日は彼女の城で一泊した。

そして次の日に会議場に通され席に着くと彼女と少し談笑し本題に移った。

「ここにきてくれたという事は劉焉様との話し合いに応じるという事で良いのかな？」

と訊いて来たので

「いえ。まず貴女と話そうという事になりました話合いをするかは……」

と言つと悟つた様で

「どうしても劉焉様と戦うと申すか？」

と言つと俺は「向う次第です」と言つて言葉を繋げ様とした時だった。

星に向かって俺の護衛が何かを告げていた。星が

「主、稟。今すぐここを撤退しましょう。劉焉の軍勢4万がここに向かつて進軍中だと。」

しかも会談をする様な雰囲気では無く完全武装だそうです。旗印は劉璋と高沛と楊懷との事」

それを聞いた敵顔さんは叫んだ。

「何!!。劉焉様は今日の事は知らぬはず、どこから話が漏れたのだ!」

稟が

「多分ですが……。貴女の周りに間諜を放ち、監視していたのでしよう。」

それとは別にすぐに軍勢を動かせるよう前もって準備もしていたのでしょうか。

失礼ですが噂に聞いた所では貴女は劉焉殿に事有る毎に意見したと聞いております。

劉焉殿としては五月蠅い存在です。

ついでに貴女も消せれば五月蠅く意見する者と邪魔な者の2人も消す事が出来ますし……

一刀様や貴女を消せば他の太守や領主は逆らう事は勿論意見する事も出来なくなります。

そこで御2人が集まった今この時を狙った物と判断致します」

稟がそう言うのと蔽顔さんは大声で笑い出した。そして笑い終わると同時に俺に向かい

「お主、いや、貴殿達だけは絶対に領地に送り届けて見せよう。皆の者よ戦の準備をせい！」

わし等を謀りおった劉焉めに思い知らせてやろうぞ……！」

と言い準備をしようとした時に俺は聞いた。

「いいの？準備も整ってないのでしょう。その状態で益州最大勢力と喧嘩する事になるけど」

と訊くと蔽顔は

「普段の6割も出せんが、それでも奴等に一泡吹かせつつ貴殿を逃がす事は出来るぞ。だから心配なんぞせんで良い」

と言った後で部下達に指示を出し始めた。その姿をみて稟に尋ねた。

「稟。如何にかならないか？このままだと彼女が潰されちまう」

と言うと稟は

「今しばらくお待ちください。もう暫らくで来る筈です」

と言った。それから20分程して

「申し上げます。東方より軍勢が進軍しております。旗印は十文字。数は約2万」

俺は振り向き稟に

「読んでいたのか？劉焉さんがこうすると」

と聞いた。すると稟は

「はい。しかし本当に行くかは微妙だったので、残してきた者達に指示はしていました。」

私ならこの機を逃さず一網打尽にしますので、敵も考えるのでは無いかと」

横で聞いていた敵顔は驚きを隠さず俺達の話聞き最後に笑いながら「ふっ・・・はっはは、これではどちらが嵌められたのか分からないの？」

わしはおるか自分の主君まで餌に使つとはな...

しかし劉焉軍は4万に対し、貴殿等は2万だ。勝算はあるのか？」と尋ねて来たので稟と星が同時に

「勿論です圧勝して見せましょう！」「無論！我が槍で打砕いて見せよう」

と2人が自信満々と言つので俺も

「まあ見ててよ貴女の領民には迷惑が掛らない様にするから。

あと敵顔さん達は城の守備に専念してくれるかい。俺達はあの軍を叩いてくるから」

と言いつのまま城を後にし自分の部隊に合流した。率いていたのは万里、李嚴、費緯だった。

彼女達をみて、始めにお礼を言つた。そして5人にどうやって向うの軍を叩くか聞いた。

劉焉軍は自分達の領土の西側に居る羌族を雇い青羌部隊という部隊を作りこれが1万程いた。

彼等は戦車（馬2頭で2輪の馬車を繋いだ物）に乗り機動力でこちらを攻撃してくる事を

稟と万里は知っていた為、この城の横に流れる嘉陵江の両側に向かい合つて対陣した。

彼女達は嘉陵江の渡河出来そうな所に杭を打ち戦車が渡河出来ない様にして

歩兵や騎兵がくれば弓矢の雨で迎撃した。敵顔さんも自分達の領地が攻められているのに

何もしないのは武人の恥だと言いつ参戦してくれた。

その時横で「さすが桔梗様です」

と言っていた少女が魏延と後で知った時は驚いたが……

3日経つても河を渡れずにいた劉焉軍の大將の劉璋は焦りを覚えて船で深い所を渡り浅瀬と同時に攻撃しようとし攻撃を開始し様とした時だった。

2日前に星に任せて大きく迂回させ河を渡らせた騎兵3千が劉焉軍の後方を襲った。

それに合わせて本隊と嚴顔軍も両方に同時に攻撃をしかけ大損害を与えた。高沛と楊懷は

星によつて討取られ劉璋は船で嘉陵江を下り逃走した。

青羌部隊は良く防いでいたが自分達が不利と悟ると撤退していき残った者は全て降伏した。

降伏した者の代表者に話を聞くと今回出陣した者達の殆どが黄巾の乱を避けて

家族とともに益州に来た者達で構成された「東州兵」と呼ばれる者達であり

家族の生活の為に劉焉の徴兵に応じたといった。また俺の領地に殆どの者が家族が居ると言い

出来る事なら俺の兵として働かせて欲しいと代表者は言った。

その話を横で聞いていた稟と万里は2人で少し話合いその後で星も交えて最後に俺に言った。

「万里とも話したのですが、彼等を取り込む事は劉焉軍の戦力低下につながる為に賛成です。

しかし彼等の戦闘を見ておりましたがいきなり我が軍に加れる程訓練度は高くありません。

そういう事なので一度全員を再編成させて新たな部隊として運用しようと思います。

ですからこの部隊を星に預けて彼女に再訓練して貰います。それで宜しいでしょうか」

「給金や食糧の方は大丈夫かい？彼等を雇う事で俺達は総数が4万5千近くにまでなるからさ。」

その事で財政悪化や食糧不足が起きては元も子もないからね」と俺が訊くと我が軍の食糧関係の長である万里が言った。

「兵糧の方は特に問題ございません。」

先月利準殿、利祉殿より古米を安く買わせて頂きまして兵糧は万全です。

ただ給金の方は少し何所かで節約しませんと足りないかも知れませんが。

節約する所は後で稟さんと協議します」

そして万里に続き領土の殆どを把握する稟が

「給金ですが、星の酒代と風の猫の餌代、一刀様の小遣いを節約すれば大丈夫でしょう」

と言った。その言葉の後、横で星が涙を流しつつ稟に直訴していた。また時を同じくして…

「くちゅん……。おかしいですね。稟ちゃん辺りが風の事を噂してるのでしょうか？」

彼女の予測は当たり稟が領地に戻った後に彼女も涙を流す事となる。俺の事はもう諦めた。

後で聞いた話だと星は酒と肴（主にメンマを全国から取寄せていた）を経費で落していた。

風の奴も町中の猫の餌代といつも啜えている飴を経費で出していた。

そんな話をした後に敵顔さんに呼ばれ彼女に会いに行った。そして執務室で少し話をした。

「貴殿の部隊は強いのが。あの青羌部隊と東州兵が敵にならんとは……。」

しかもあの気の荒い東州兵が自ら配下になりたいと申すとは驚きませんでしたぞ。

そこでその強さと貴殿の大徳にお願いしたい。わしの領土の者を守って下さらんか」

と頭を下げられた。横に居た魏延も彼女から話を聞いていたのだから彼女も頭を下げていた。

俺は皆の方を向き「構わないかい？」とだけ聞いた。皆も黙って頷いてくれた。

俺は2人の方に振り向き

「厳顔さん、これからは仲間だから顔を上げてくれないか。魏延さんも」

とだけ言い

「仲間になってくれたは良いけど彼女達の領地は劉焉さんの領地にも近い。」

現状じゃ守るのも精一杯の状況じゃないかな？

だから彼女達を劉焉軍が迂闊に攻撃出来ない策なんてあるかな？稟、万里」

と言うと稟が前に出て

「私は厳顔殿だけでなくこの近辺の太守達にも声を掛けておいた方が良いと思われませぬ。」

今回、劉焉殿の部隊は叩けましたがまだ彼に従う太守達は無傷です。その者達が攻めてきますと今回みたいな大勝は出来ませぬ。

ですから私達と厳顔殿だけでなくこの近辺の太守連合という形をとられた方が彼等も

うかつに手は出し辛いと思います。一刀様」

と稟。そして万里も

「私もそう思います。軍事同盟という形と共に交易や産業も含めての連合という形にすれば

他の太守達も話に乗って来易い物と思うのです。私達の街の話や経済状況はもう知れ渡って

おりましようから私達と争う事より、自国の経済を復興する事に専念したい太守達は

手を組んだ方が自国の為と考えましょう」

横で聞いていた嚴顔さんは俺達の話が終わると魏延さんと何か話を  
して片膝をつき

「北郷殿。１つだけお聞きしたい。貴方はこれから何を目指すおつ  
もりか御聞かせ願いたい」

と訊いてきた。俺は

「俺の目標は戦乱を鎮めるだけだよ嚴顔さん。そして頼ってくる人  
がいれば他の土地の人も

守りたいと思う。これから嚴顔さんや他の太守さんやその土地の民  
達を守る為に必要なら

俺は劉焉さんや他の太守さんを滅ぼしてでも力を手に入れるよ。

皆を守る為なら鬼にだってなるし神とだって戦う。これで良いかな  
2人とも」

これを聞いた2人は

「これより我ら2人を貴方様の配下として働かせて頂きたい。

私の領地も貴方の覇業の為にお使い下さい。そして忠誠の証として真  
名を御受取り下され。

私の姓は嚴、名は顔、真名は桔梗と申します。ほれ焰耶お前もじゃ  
そう言われ渋々

「うつつ桔梗様がそう言うなら仕方ない。私は姓を魏、名を延、字  
は文長、真名は焰耶だ。

よろしく頼む」

と言って皆で真名の交換を終えた時だった。諷陵から伝令が来て俺  
に手紙を渡した。

読んだあと稟達に見えるように渡し彼女達の言葉を待った。

手紙には袁紹、袁術の連名で董卓討伐の為の連合に参加せよと仰  
々しく書いてあった。

皆が読み終えてから意見を聞いた。俺の仲間達は経緯をしってるの  
で慌てずに皆賛成した。

しかし桔梗達は「これは大変な事になりましたな、御館様。如何なさる御積りで」

と訊くと

「参加はするけど積極的に戦う事はさげようかなーってね」

と俺が言った後、焰耶が

「董卓が如何に強かろうが私がいる限り安心していいぞ。御館。ふぎゃ」

と言うと同時に桔梗の目にも止まらぬ拳骨が焰耶の脳天に突き刺さった。

「馬鹿者、お前なんぞそこに居る星殿の攻撃を一合も防げぬわ！！」  
星は笑って

「ふっ、星でよろしい。桔梗殿も中々に食えん御方みたいだ」

と2人で見合っていた。稟が

「何をやっているのです。まったく…一刀様、私は一度フ陵に戻った方が宜しいと思います。」

多分風の事です、情報を集めてくれている筈ですから。そこでですが桔梗殿には

ここに残って頂いて周辺の太守達へこちら側への呼び込みをやって貰わねばなりません」

と稟が言うると万里も

「そうですね。後、費緯さんと李厳さんには桔梗さんのお手伝いをお願いしておきました。」

あと残す兵は1万程を巴郡とフ陵に分けて駐屯させたいと思います」と言い急ぎフ陵に引き返す準備を行った。そして俺達が帰る時だった。

帰り際に桔梗に呼び止められ焰耶を連れて行って欲しいと頼まれた。理由を聞くと

「焰耶は巴郡より出た事が無い。その為に見識不足であり視野も狭い事を気付いておらず

更になまじ強い為にそれを過信し相手の強さを過小評価する癖が有



る」  
との事だった。だからこれを機に大陸の中を見せて自分の見識不足や視野の狭さを悟らせてやりもつと上の武將に育ててやりたいと言い、その為に俺に一肌脱いで欲しいと言った。

焰耶は巴郡から出る事に抵抗したが桔梗に説得され今は俺の横に居る。

帰りは俺と主要人物のみ船を使った為、1日も掛らずフ陵に着いた。そこで風が待っていた。俺達を見るとまず

「お帰りなさい。とりあえずお土産を先に頂きますよ」

と言いお土産を受け取ると

「おーおー兄ちゃん。もつと良いもんなかったのかよー。兄ちゃんはいいい女掴まえてよー」

と宝慧が俺の後ろに居た焰耶を見て喋り出すと風も

「これこれ宝慧。ご主人様は遊びに行つたわけでは無いのですよー。それにしてもその方は

どなたなのでしょうねー。蔵顔さんはもつと年上だと聞いてました  
が」

俺が風を見て啞然としている焰耶を風に紹介した。

「ただいま風。彼女は桔梗、いや蔵顔さんから預かつた将で魏延と  
言う」

と言い焰耶にも

「焰耶。彼女が俺の3軍師の最後の人で程立と言つ」と2人に紹介した。

2人はとりあえず真名の交換をし皆でそのままフ陵城に入って会議を行った。

## 益州の覇権争い（後書き）

出張から帰ってきてすぐインフルエンザが流行したりし、自身も風邪をこじらせてしまい更新がおくれてしまいました。やっと脇腹の方も治ったというのに

次回ですが焔耶を少しパワーアップさせる為にすこし叩いてから連合に出かけようかと思えます。

今回もここまでお読み頂き有難うございました。

## サブキャラ紹介（前書き）

すみません。本当は董卓編を書こうと思ったのですが、出張中に彼女達の事ばかり考えてしまいました、

携帯に色々と書きとめていたのですが気にいらなかったのもう一度考えなおしていました。

彼女達はこれから時々ですが出現させようと思ってます。どうかお見知り置きを。

## サブキャラ紹介

法正 考直 真名 明実<sup>アケミ</sup>

一刀が諷陵赴任時に登用した軍師候補。優秀だが極度の面倒臭がり家。

返事をするのも躊躇うぐらいである。口癖は「面倒臭い」「かつたり」「うざい」である。

一人称は「俺」。しかし酒は飲めない。飲むと倒れて復活すると最凶の絡み魔が誕生する。

一刀を「お前」と呼ぶが一刀も気にせずにいるし、そんな一刀を見て彼女も気に入っている。

髪色は茶髪で髪は手入れするのが面倒臭いという理由で短髪にしている。眼も同じ茶色。

費緯 文偉 真名 彩加<sup>サイカ</sup>

一刀が諷陵赴任時に警備隊の隊長だった彼女を星が稟と風に推薦し現在は

軍部にも官僚にも顔の利く者として両方の監察官としての役職についている。

軍を率いる事もあるし、官僚として地方に行く事もある。

賭け事と酒が趣味で酒を飲むと一変し虎となる。賭け事の方も余り強くない。

呼ばれれば、必ず賭け事や宴会に出ているが、仕事でのミスや遅延は一度も無い。

万里と共に北郷軍の料理上手の双壁と呼ばれる。

一人称は「自分」。自分の事を過小評価する癖有り。一刀を「主人」

と呼ぶ。

髪色は黒で肩まで伸びたら切っている。眼も同じ黒。

蔣エン 公炎（エンは王へんに炎） 真名 昇華<sup>シヨウカ</sup>

一刀が諷陵に赴任時の秘書官だった。側で一緒に仕事をしていた  
一刀が稟に推薦した。

下級官僚の出という事で、不当に扱われてきたが内政の手腕は抜群  
で稟や風に劣らない。

自分を引き上げてくれた一刀を敬愛している。酒量は半端無く酔っ  
た事がない。

料理の腕は壊滅的であり、見た目や香りは超一流なのだが、味は暗  
殺用の兵器として使えるほど。

一度皆に振舞い、一刀と風を三途の川の一步手前まで招待した事が  
有り、それ以後料理禁止となる

一人称は「私」、公私の差が激しく休日は寝間着で過ごす。一刀を  
「一刀様」呼ぶ。

髪色は朱色で腰辺りまである髪が宝物。瞳は茶色。

李巖 正方 真名 還樹<sup>カンキ</sup>

元々は劉表に仕えていたが一刀が劉表に会った時に一目惚れしそ  
のままついてきた。

それ以来、親衛隊の一員として一刀のそばに居たが星と万里が彼女  
の才能に気づき

將軍となったがその事により一刀の側から離れた事を悲しんでいる。  
統率力や武力、知力共に申し分なく軍部では星、万里に次ぐ有力者  
しかし

官位や金品に興味なく、それより一刀のそばに居る方が何千倍も彼女にとって意味が有る。

昇華を（恋の）ライバル視しているが、もっと沢山いる事に気付いてない。

一人称は「あたい」一人を「一刀」と呼び捨てにする

銀髪でロングヘア。髪は背中以上になると切る。瞳は青色。

トウ芝（トウは登におおざと） 伯苗 真名 真佳<sup>シンカ</sup>

諷陵で軍の食糧備蓄の官について居た処、万里に才を認められた。軍才、内政とマルチに才能を発揮する。初めは何合も打合えない星に何度も向かって行き

最近は10合以上打ち合えるようになった程の努力の人でもあるが極度に朝に弱い。

しかし気にしない常にマイペースの人でもある。

一刀の事を「一刀ちゃん」と呼び、一人称は「私」

血行不良かと思われるほど白いが、至って健康体である。

その肌に対し漆黒と言って良い程の黒髪でロングヘア。瞳は黒色。

董允 休昭 真名 信思<sup>シンシ</sup>

費緯の幼馴染であり良き理解者でもある。費緯が推薦し主に一刀の補佐を行う。

政事を黙々とこなし仕事が終わると豹変しお洒落に食事にと普通の女の子に戻る。

北郷軍一のお洒落さんであり費緯の服は彼女が選んでいる。

酒は強く、費緯と飲みに行くと、いつも酔い潰れた費緯を連れて帰るといふ役目が有る。

一人称は「私」で一刀の事を「一刀殿」と呼ぶ。

褐色の肌に映える白銀の長髪をツインテールでまとめている

## サブキャラ紹介（後書き）

こんにちは憂鬱です。少しでも話をさせていただきます。家には犬がいます。名前をリンと言います。

しかし気管支が弱くいつも咳ばかりしています。

母がいつ死んでもおかしくないねと言います。

それから時は流れてもう6年まだ母は同じ事を言い続けています。

朝晩に缶詰を一缶ぺろりと平らげる病犬

がそうそう死ぬわけ無いだろう母よ。

次回ですが焰耶のパワーアップ編をメインに反董卓連合に参加させます。



焰耶の苦悩とついで連合へ（前書より）



堂々と寝ていた。しかも本気寝だ。稟が起こす。

「はー、風起きなさい。ほら風つたら！」

「おお！。素晴らしく良い夢を見ていたのに……。ええとですねー。それだけじゃあ

欲深い諸侯の方々は納得しないと思うのですよー。自分達が痛い目に合わないのですねー。

それと今回の中心人物の曹操、孫堅と袁家の2人は名が欲しいでしょうからそれだけじゃあ

無理でしょうねー。だから風は思うのですよー風達を除く皆に痛い目に合つて貰おうかと。

それには向こうに行つてみないと分からない事もあると思うのですよー。

ですから先ずは向こうに行く事にしませんかー」

その後、俺達が居ない時の領内の軍事を明実に、蔣エンこと昇華シヨウカに内政を任せる事を決め、連合に参加する準備を始めた。

連合に参加する事を決め向こうに向かっている行軍途中で焰耶が俯いている事に気付いた。

俯いてる理由は先の連合に参加するかどうかを決めた会議の後の事である。

会議を行っている時に焰耶が俺の方を見ている事に気付いた。

暇なのかと思ひ声を掛けようとした時だった。稟が自分の意見をどう思うか焰耶に訊いた。

「そんな事は貴女達で決めれば良いでは無いか。私は戦う事が仕事だ何故私が考えねばならん

考える事は貴女達、軍師の仕事では無いか」

焰耶がそう言つと星が大きな声で

「ふむ、その程度の腕で戦う事が仕事と口走る根性は素晴らしい。桔梗が自分の右腕と言つて

いたが腕の方では無く性根の曲がり具合の右腕だったらしい」

「貴様、桔梗様の事も私の事も馬鹿にして死にたいのか？」

と言った瞬間だった。焰耶の喉元に星の槍の先端が止まっていた。

焰耶は動く事も出来ず口をパクパクさせていた。俺が

「焰耶！今のは君が言い過ぎだ。星。もう降ろしてやって焰耶も分かっただろうからさ」

「ふむ、しかし主。この程度でこ奴の性根が治るとは到底思えませんが。

一度徹底的にお灸を据える荒療治も必要だと思えますぞ」と言いつつも槍を下げた。

焰耶は信じられないと言った顔をしてその会議中はずっと星の方を見ていた。

俺はその様子を見て会議の終了後に焰耶を残して話をした。

「焰耶、君はもしかして將軍は戦うだけが仕事と思つて無いかい？

そう考えているなら

それは間違えているよ。將軍が戦うのは一騎討ち以外そんなに大事では無いと俺は思つてる。

君の戦いを劉璋達との戦いで見せて貰った。その時君は敵に突っ込んでいくだけで指示らしい

事を出している様には見えなかった。指示は副官辺りが出していたんだろう」

「そのどこが悪い。私が戦う事で兵達の負担を減らしているのだ。だから兵への指示などは

副官に任せて置けば良いではないか」

「じゃあ聞くけど君が敵の將軍と戦い倒されてしまったらどうするんだい？

君がやられてしまったら兵達は動揺してしまう。そうなったら副官が何を言つても、

立て直す事は無理だ。君の部隊の敗走を見た他の部隊にも動揺が広がる。そうなれば

立て直す事に気を取られて敵の攻勢を支え切れない。その時点でもうその戦い負けだよ」

「そんな事はない。私が負けるなど…」

「じゃあさっきの星とのやり取りはどう言い訳するんだ。焰耶!」

「あれはあいつが・・・そう!あいつがいきなり槍を私の喉元に」

「じゃあ槍先が自分の方に向かってくるのは見えたんだな?焰耶」

「あつ当り前だろう。私は武将だあれ位なら見える。馬鹿にしないで貰おう」

その言葉を聞き、俺は部屋の外に居るであろう衛兵に星を呼んでくるようにつけた。

2分程して星が会議場に現れた。

「人が準備をしている時にいきなりお呼びですかな主」

「悪いね星。頼みが有るんだけど良いかな?焰耶に本気で相手してやって欲しい」

「焰耶と本気でやれと仰いますか。宜しいので?手加減出来ませんよ」

「ああ構わない。本気でやって欲しい。それが焰耶の為だ。焰耶もそれで良いな」

「ふん。正々堂々するなら負ける気もせん。しかし良いのかお前の武將を潰しても」

焰耶がそう言った時星が大笑いして訓練場に向かって行った。後姿は笑っていなかった。

そして俺も焰耶も訓練場に向かった。

訓練場につくと星は刃を潰してある自分用の武器を持ち中央で待っていた。

それを見た焰耶も自分の武器を取りに行った。

いつの間にか横に稟と風が来ていた。そして

「思い切った事をさせますね一刀様は。しかし自分の实力を知るの  
は良い事です。」

良い方に転ぶかどうかは別にしてもですね。たしかに今の彼女に兵

は預けられません。

これを機に少しでも変わってくれば良いのですが」

それを聞いていた風も

「そうですねー。焰耶ちゃんに今必要なのは完全な敗北でしょうね。そうしないともも

気付かないし変われませんしねー。焰耶ちゃんの副官さんに話を聞くこと

接近戦では彼女に敵顔さんも負けた事もあると言っていましたし

それだけ自信を持ってもいるのでしょう。だからその自信を粉々に砕くのは

荒療治としては有効だと思いますよー」

と話していた時に星が俺に向かって合図を送って来た。俺は中央に行くこと

「じゃあ始めるよ。準備はいいかい？…試合始め！！」

そう言い離れると焰耶が自分の武器を振りかざし星に向い振り落とした。訓練所の中央に

砂埃が巻き起こり辺りが見えなくなった。焰耶は始め笑っていたが少しすると表情が曇った。

俺はその理由が分からずにいると砂埃が晴れてきて信じられない光景が見えた。

星が焰耶の武器を軽そうに受け止めていた。そして

「ふっ。これくらいで私を潰すだと笑わせてくれる。もっと腕を磨いて出直してこい」

そう言うのと焰耶の武器をはじき返し焰耶の態勢が崩れると

「これが趙子龍の光速の槍だ。受け止めて見せよ」

そう言った後、少しして焰耶が武器を落とした。そして

「そんな…」

とだけ残しそのまま前向きに倒れこんだ。

見ると焰耶の鳩尾の所に星の槍がめり込んでおりその途中の槍の軌跡は全く見えなかった。

俺は衛生兵に焰耶を救護室に運ぶよう指示し星に話しかけた。

「星の本気は怖いな。でもどうだった焰耶は？最初の一撃はかなり重そうだったけど」

「ええ。初撃としては十分でしょう。並みの将や雑兵達が相手ならですが。」

しかし私より強い将や良く訓練された兵には効果はありません。むしろ隙が生まれます。

将との一騎討ちではその隙をつけば容易く倒せるでしょうし、訓練された兵には困まれてしまい良くて捕虜、悪ければ討死にするでしょう。

戦ってみて分かった事はあ奴は考えずに本能のまま戦っておるのです。

しかし本能のまま戦っても強い者は存在します。彼等の多くは身体が戦い方を覚えている様で

それは天性の才能としか表現のしようが無い戦い方ですがな。

しかしあ奴の戦い方はそうでは無く表現するなら無智無謀な戦い方です。

言った通り雑兵相手なら何の問題も御座いません。猛将相手では何合持つか分かりませんが。

でも先程の戦いも少し考えればもっと苦戦したかもしれませんぞ。例えばですが

初撃の前に間合いを取り、隙の少ない横薙ぎからの連携で相手を崩しつつ

初撃の攻撃を叩きこめばかなり良い攻撃になったでしょう。それだけでなくも相手を

慎重にさせる事は出来た筈です。そうならば良い勝負になります。

今あ奴に必要なのは考える事です。何でも考えれば良い物ではないかもしれませんが。

考えて物事を慎重に運ぶ様になれば一皮剥け、そうすれば戦い方にも変化が出て参ります。

そして戦場での事や自分の部隊の事など色々な事について考行を出来る様になれば

名将として名を残す事も可能かと思われませう。

でもしかし生半可の事では身に着きますまい。でも焦らず一歩ずつ確実にやっつけていけば

必ずやあ奴は主の悲願の為に必要な者と成りましょう。

後は主次第です。あ奴を活かす事も殺す事も出来るのは「

そう言うとは星は準備があると言って戻って行った。稟と風は自分の仕事がある為戻っていた。

俺は訓練場を後にし救護室に向かった。焰耶を診察してくれた男の老医師に話を訊いた。

「おおこれは一刀様。ようこそいらっしやいました。しかし心配する事はございませんぞ。

骨や内臓に異常なく激しい傷も無いですぞ。さすが趙雲殿。鳩尾に一撃で決まった様ですな」

「うん。怪我がなければ良いのだけど。今、会えますか焰耶に？」

「大丈夫ですぞ。しかし医者として余り興奮させないで欲しいのですが」

「善処はしますが、これも彼女の為と思いますので」

とだけいい焰耶のいる寢室にノックして入って行った。

「誰がはいつて良いって言った。今は誰にも会いたくない。出て行けよ」

そう言っていたが俺は構わず焰耶の横の椅子に腰かけて彼女に話しかけた。

「星は強かっただろう。あいつはああ見えて知略もあるし自分で考えて行動する事も出来る。」

しかし俺の知識通りなら、星の強さでも勝てるかどうか解らない奴がこの大陸には

まだ十指以上いる。君が強いと言ってもそれ以上がいる事が解って



貰えたと思う」

「それがどうした！！そんな事を云う為にここに来たのか。それなら出て行ってくれないか？

私にはそんなこと関係ない！私には私の強さだけが全てだ。その私を一撃で倒した奴以上の

強い奴がいても関係ない。今の私にはあいつを超える事以外は興味無い」

焰耶が自暴自棄に陥っている事は医者言葉で何と無くだが分かっていた。

だから俺は焰耶の気持ちを反対に逆なでする様に話し続けた。

「それならそのまま不貞腐れていると良いよ。その間にも星は自身を強くする為に

努力する事だろう。普段のあいつからは全く想像出来ないけどね」  
そのとき連合への準備をしていた星がくしゃみを立て続けに2回していた。

俺は更に言葉を続けた。

「星だけじゃない。稟も風も桔梗さんも、それこそ兵士の皆もこの大陸に平和をもたらす為に

今この時間にも何かしらの努力をしている。それに比べてお前は何だ！！焰耶

たった一回だけ負けたからって不貞腐れて、それが星を超える？笑わすな！！。

星は俺の国で最強の武将だ。あいつとだったら一緒に心中でも何でもしてやるよ。

そんなに簡単に超えられてたまるか！！」

俺は焰耶の言葉が許せなかった。

それだけ言つと部屋を出て行こうとした。すると焰耶が、

「待てよ。御館」

俺が振り向いて焰耶の方を見ると目を真っ赤にしてこちらを見てい

た。そして

「私が星に勝てないと言ったな。もし勝ったらどうする」

俺は焰耶が元の焰耶に戻っているのを確認しながら

「今の焰耶では一生掛っても無理だよ。あいつは戦闘中も会議中も頭を使ってる。」

それは言いかえれば自分で思索考行しながら行動しているって事だ。しかし焰耶。お前は戦闘中は本能で戦い、会議中は自分の領域では無いと駄々を言う。

言いかえれば子供と一緒にさ。したくない事は嫌。行動する時は考えも持たず本能のまま。

それが今の星と焰耶の差さ。大人と子供程の違いが有るんだ。今すぐ勝てる状態じゃない」

俺はそれだけ言うつと部屋を出た。そして外の治療室にいた老医師に「すみません。言いつけは守りませんでした。焰耶の奴を宜しくお願ひします」

とだけ言い自分の執務室に戻った。それから現在の領内の状態確認や登用試験の立会いや

謁見者との対面と立て続けに職務をこなしていった。最後に桔梗さんの下に行っている

費緯こと彩加サイカと李廠こと還樹カンキの報告書を読み終わり自室に戻ろうと訓練場の前を通った時だった。

誰かがいる気配がしたのだ。気になって様子を見に行くと焰耶が居た。しかも汗だけで。

俺はしばらく見ていて近くにいた衛兵にどの位こうやっているのかを訪ねてみた。

衛兵は姿勢を直し俺に敬礼をして

「もう3時間以上になります。私が3時間前引き継ぎの時に同僚に言われましたから」

それだけ聞くと俺は小さな声で勤務に戻る衛兵にお礼をいって焰耶に声を掛けた。

「それだけ君の得物を振っていたんだ、何か良い考えは浮かんだかい。焰耶」

「ふん、御館に関係ない事だ。黙っていて貰おう」

そう言うときまた豪快に素振りをはじめた。しかし見ていて思う事は星に挑む前までの

豪快さが無くどちらかというとき丁寧に振り回している感じだった。

そしてよく見ていると仮想の誰かと戦っている様にも見えた。

俺は焰耶の邪魔にならない様に静かに立去ろうとした。その時素振りが止み焰耶が小さな声で

「これから言う事は独り言だからな、気にするな。これで良いのか解らないが何かしないと

いけない事は分かってはいたんだ。しかし何をすれば良いのか解らなかつた。

桔梗様に聞いても教えては頂けず、それでも如何にかして聞こうとしたが

「それはの焰耶、お前自身で気付かねばならん。わしが教えてもお前の為にならん」

と言われて私は先ず自分の弱点を考えた。その時自分の武力の事だと決め込んだ。

それからは一層、自分の武を磨く事だけに心血を注いだ。それがあの結果だ。

でも倒された事で何と無くだが分かった気がする。如何すればよいのか。

それを気付かせてくれた者達に礼を言いたいが私は言えそうにも無い。だからこれからの

態度や行動で示していきたいと思う。それだけだ」

とそれだけ言うときまた素振りを始めた。俺は何も言わずそのまま自分の部屋に戻って行った。

そして次の日の会議が大体終わり稟が皆に質問が無いか聞いた時だった。俺が手を挙げ

「稟、俺は焰耶を連合に連れて行くことと思うんだけど良いかい？」  
俺がそう言つと皆が何事かと焰耶の方を見たが当の焰耶は何故自分がと鳩が

豆鉄砲を食らつた様な顔をして俺の方を見ていた。稟がそのやり取りを見て

「一刀様がどうしてもというのであれば反対はしません」

それを聞いていた風が俺の方と焰耶の方を見て

「風も構わないのですよ。ただ何が有ったかはあとで教えて下さいね」

風も賛成してくれた事でみんなが静かになり会議は終了した。終了後、焰耶に声を掛け

「昨日の言葉は嘘じゃないよね？準備だけしといてよ。俺は信じているからな焰耶」

それを聞いた焰耶も部屋の出口の所で

「ふん礼は言わないからな」

それだけ言つて出て行った。その光景を見ていたうちの軍師や武将達から説明しろと

詰め寄られ大幅に省略して説明すると星と風があらぬ方向に話を持つていくわ

風と星がしていた話を聞き稟が鼻血を噴き出すわ、蒋エンこと《昇華》は泣きだすわで

会議室は修羅場と化していた。その場を纏めてそれから3日後に連合が駐屯している所を

めざし総数2万人で出発した。

## 焰耶の苦悩といざ連合へ（後書き）

こんばんわ憂鬱です。先週の日曜日に休日出勤をした為に本日はお休みでした。

ですがまったくと言える程に話が書けませんでした。それに話が進みません。道筋は出来てるのに。

まあめげずにゆっくりやらせて頂きます。

今回は連合に着く前の話と着いた後の話です。

此処までお読み頂きまして有難うございました。

連合にてゝ諸侯との出会いゝ（前書き）

今回は連合に合流する為の移動中の話と  
連合に着いてからの話です。

## 連合にて諸侯との出会い

連合に参加する為に連れてきたのは軍師の稟、風、万里の三人と將軍の星と焰耶の5人で

兵糧や武具等を多めに持って来た為に2万の軍勢の進軍には時間が掛りそうだったので

ゆっくりで良いと通達し物見遊山の様な進軍となった。

そして南陽を過ぎて連合軍の駐留している場所に向かっている時だった。

焰耶が風と話しているのを見かけた。後で風に聞いてみると

「それはですね、焰耶ちゃんに訊かれたのですよ。今から読むとして焰耶ちゃんに必要な

書物は何かと訊かれたのです。ですから礼記と六韜を奨めて置いたのですよー」

その時に話を聞いていた稟が横に来てこう言った。

「焰耶殿は今、変化しようとしています。しかも良い方にです。今私達が出来る事は

彼女が迷わぬ様に道を照らす事だけです。時間は掛りましようが有能な武将が増える事は

良い事です。彼女が今のまま努力すれば必ずや良い結果と成りましよう」

俺も良い傾向だと思いきのまま今日の野営を張る予定地まで馬を走らせていた。

陣地を張り終え皆が食後の一服をしていた時だった。俺は向こうか

ら来た星に話しかけた。

「如何だい兵の皆の疲労度は。何か問題があつたらすぐに対処できるようにはした

つもりだけど。特に気を付けといて欲しいのは疫病だからさ。これは駐屯地に着いても

徹底するように全軍に伝えて欲しい」

「ええ他の者にも気を付ける様には連絡しておきましたぞ。しかし主、

酒の手洗いと塩水のうがいでそんなに変わるものですかね？」

「ああ。俺の世界では消毒の為に酒に近い物で消毒していたんだ。疫病の原因は目に見えない

微生物によるものが殆どなんだよ。お酒を作る時に発酵してブクブクと泡が出ているのを

見た事無いかい？。あれはお酒を作る時に使う微生物が生きてる証拠で米と水を

お酒に変えている証なんだよ」

それを聞いていた稟と風が関心していたところに万里が聞いてきた。

「でも、お酒はその微生物から出来ているのなら危険なのでは無いのですか？」

「いや、お酒の微生物は俺達の体には無害な奴だから大丈夫だよ。しかし例えば食べ物を腐らしたときにつくカビも同じ微生物だけどあれは駄目だよ。

カビの中には有毒な物が有ってそれが体内に入るとお腹を下したり、最悪の場合は死んでしまう者もいるからね」



そう言つと一息ついて、

「それとついでだから茸についても話とくよ。茸も同じ微生物から出来てるんだ。

正確に言えばあれもカビと同じ奴に近いんだけどね」

というといつの間にか俺の周りをも3軍師を筆頭に星や焰耶や暇な兵士たちが取り囲んでいた。

そして茸の話をした時に大きなどよめきが起こった。そして星が次に焰耶が質問した。

「しかし主、それでは茸は全部危険なのではないですか？カビは危険なのでしょう？」

「そつだぞ御館。カビは危ないのなら食べていい茸などないのではないか？」

「ええと、星と焰耶の質問だけど茸を食べれない人がいるだろう？」

食べるとお腹を下したりもどしたりする人がそつだよ。

あれは自分の身体が拒否反応を起こすからなんだ。

俺達の体には体に入ってくる悪い物を追出そつとしたりする機能が備わっているのだけど

その機能が現れた時に起きるのがさっきの症状なんだ。これは人によつて差があるんだけど。

あと茸の中には物凄い猛毒を持つ物だつてあるけど、食べれる椎茸なんかは良い例だよ。

ただ椎茸も生で食べると大変だから絶対に火にかけなきゃいけない」

そんな話を皆としこみユニケーションを取りながら夜は更けていった。

そして幾日か掛けて連合軍の駐屯地に着いた。駐屯地に入ると金色の鎧を着た男性が帳面を持ってやって来て俺達に向かつて

「遠路ご苦労様です。お名前を教えてくださいませんか」

「諷陵太守の北郷です。少数ながら兵も連れて来ました。総大将殿にお会いしたいのですが」

「それがまだ総大将を決めておられる最中でして。詳しい事は私みたいな下の者には…  
それでは陣を張って頂く場所までご案内いたします」

そして連れていかれた場所に陣を張る様に指示して軍師の三人を呼び意見を求めた。

「どう思う？総大将が決まって無いなんて異常じゃないか？。俺達が最後だって言うのに」

そう言うつと稟が呆れながら言った。

「おそらくですが、擦り合いをしているのでは無いでしょうか」

それに続き宝慧と風も

「狸と狐の化かし合いか…嫌、妖怪と言った方が良いのじゃねえか？」

「これこれ宝慧。皆が解つてても言わない事を」

「でもそうでしょうね。稟ちゃんの言うとおり美味しい所は欲しいでも余計な責任は負いたくないという所が本音かと」

最後に万里が

「それも有るでしょうが色々な者の思惑も忘れてはいけないと思います。

全てとは言いませんが、殆どの諸侯が自分の立場を少しでも良く見せようと

画策しているのではないのでしょうか？

そうなれば、一刀様に話を持ち掛けてくる者も出て参りましょう。

おそらくは袁紹、袁術、曹操、孫堅のこの辺りが来るかと思われませんが……」

そう言つて話をしていたら門の衛兵がやってきて

「陳留太守の曹操殿がおいでですが、いかが致しましょう？」

俺が皆に目配せすると3人とも頷いた為こちらに通す様に伝えた。

衛兵が去つた後に星と焰耶が陣張りの作業が終了したと言いに来たので2人にも居て貰つた。

「お初にお目に掛るわ。私が曹操よ。隣に居るのが夏侯惇と淵の姉妹で私の両腕よ。

早速だけど貴方達なら分かるでしょうね、私が此処に来た訳も。だから率直に言わせて貰う。

私と手を組みなさい北郷。そうすれば貴方に名誉と富を与えましょ

う

そう言うと俺の方を覗きこむように直視して返答を待った。その時に衛兵が現れてそれを万里が聞きに行きそして俺に告げた。

「一刀様に申し上げます。孫堅殿がおいでになられました。如何致しましょう?」

こつちに通す様に伝えた時に曹操が退室しようとしたので俺はそのまま留め紅蓮を待った。

「久しぶりだね、紅蓮、雪蓮、冥琳。君達もこちらの曹操殿と用事は一緒かい?」

それだけ言うと横に居た曹操に笑いかけ紅蓮が

「ほう、珍しい所で会うな曹操よ。お前も一刀を引き込もうとしているのか?」

それは無理だぞ。こいつはそう言えば言う程に離れて行くからな、なあ一刀?」

やっぱりあの時に首輪を付けてでも連れて帰るんだったよ。そうすれば俺の所の長沙も

お前の所の諷陵と同じくらい栄えていたんだろうな」

そう言うと俺の斜め横に座って曹操に話しかけた。

「では本題だ。お前はどちらにも付く気はないんだろう。お前にも曹操にも言っとくが俺は

この戦で名前が欲しい。何の罪も無い敵の董卓には悪いがな。その

為に袁術のガキの御守をやってるんだ。曹操よお前も似たようなもんだろっ」

そう言うと曹操は笑って

「ええそうよ。何が悲しくて麗羽のいや、袁紹の尻拭いなんかしなきゃいけないのよ。

ええ、私もこの戦の背景は知っているわ。袁紹と袁術の2人が洛陽を追い出された腹いせに

起こした喧嘩にすぎないわ。しかし私にとっては好機なの。ここで名を挙げる事で自分に

有利な状況に持って行ける、だから袁紹に付いたの」

すると曹操から視線を外し俺に向かって紅蓮が

「お前が両方に付かないのは俺は黙認する。だが戦では協力してくれるか？」

その言葉を聞き曹操は驚いていたが俺は気にせずに

「まあ無茶を言わない限り協力はするよ。でも俺の目的はもっと違う所にある事だけは

覚えといてね。その目的から外れない限りは約束してもいいよ」

それだけ言うと曹操が俺に向かって言った。

「その目的とやらを教えてはくれないのかしら？そうしないとこちらにも迂闊に動けないわ」

「曹操さんは解っているはずだよ。この後に何が起こるかぐらいは、

だからここに

来たんでしよう。その為の準備をしに来たんだよ。俺達は」

それを聞いていた雪蓮が

「一刀。貴方少し変わったわね。前に会った時はもう少し甘ちゃんだったのに。」

今はかなり太守らしく見えるわよ」

そう言うと紅蓮達に向かって

「お母様。曹操。一刀もここまで言っているのだから信じない？それに一刀も何か言いたい事が有るかしら？それなら聞くけど」

「俺の方は特に無いよ。ただ今のまま君達が袁家の陰に隠れて主導権争いしていても

喜ぶのは董卓だけだろう。それなら袁家のどちらかを総大将にしてもう一人を副将にでもして

早く？水関を攻めた方が良くないかい？」

そう言うと紅蓮が諦めたようにため息をつき

「分かったよ。袁術の方は俺が説得する。曹操よ、お前は袁紹の奴を総大将に推薦しろ。」

ただし？水関での先鋒は俺達が貰う、それで良いか？」

曹操は目を瞑り少し考えて

「ええ、分かったわ。しかしどういう風の吹きまわしかしら？北郷

の一言で折れるなんて。

昨日や一昨日まで少しも譲らない姿勢を見せていたのに」

そう言つと俺と紅蓮を見まわして

「貴方達がそう言つなら麗羽に袁術が連合の副将になる事は説得するわ。2人共帰るわよ」

そう言つと俺の方を一度見て天幕から出て行つた。その姿を見て紅蓮も

「さて俺も袁術のガキの所にいくか」

そう言つて出て行こうとした時に俺に向かつて

「これで貸し1つだからな。一刀。この貸しはでかいぞー。はっはっはっ」

と笑いながら出て行つた。俺はこの事を予測していた3人の軍師に言つた。

「これで良かったのかい3人とも。とりあえず総大将は袁紹さん、副将に袁術さんつて事に

なりそうだね。それに？水関の先鋒は紅蓮が持つていった。俺達は  
どう動こうか？」

そう言いそれから呼ばれるまで彼女達と会議をしていた。

それから夕食を皆で食べて話している時だった。金色の鎧に身を包んだ兵が現れて

「北郷様に申し上げます。これより袁紹將軍の天幕で連合軍の軍議を行うとの事ですので

ご足労願えますでしょうか？」

とだけ言い残し次の所へ走って行った。それを見て稟が

「やっとですか。何と対応の遅い事でしょうか。それでは一刀様、行きたくは無いですようが  
袁紹の天幕まで参りましょう」

稟はそれだけ言うと先に歩いていった。俺は、

「じゃあ風と万里に陣の事の全てを頼むよ。星は俺と一緒に、焰耶は警備をお願い」

とだけ言い星と二人で先に行った稟を追いかけた。

袁紹の陣に行く途中、俺達3人を見つけた紅蓮と冥琳に呼び止められ一緒にいく事にする。

その途中で冥琳が俺の世界の事を色々と尋ねてきたのだが別段隠す事では

無いので話しながら説明していった。すると冥琳は

「ふむ、北郷殿の世界はかなり進んでいるな。特に物の考え方なんては特に面白い。

これは民族性の違いも関係するのだろうか」

それだけ言うと冥琳は何かを考えて黙ってしまった。それからしばらくして紅蓮が



「ふーん、生活習慣や風習、更には民族まで気にしないか……面白  
いなお前の所は。」

その話が本当な事はお前を見てりゃあ解るもんだ。お前は分け隔て  
なく接しているからな。

しかし世の中にあそんな事が理解出来ない輩だつて存在する。俺  
みたいな奴には面白いと

思つても、これから会う袁家の奴等には到底理解すら出来ない世界  
だろうよ」

そう言つて何かを思い出したのか、少し溜息を吐いて、

「しかし袁術のガキを説得するのに苦労したぞ。」

『なぜ妾がああ麗羽の奴の下に付かねばならんのじゃ紅蓮』とかい  
つて聞きやがらねえしよ。

側近の張勳は馬鹿のくせしやがつて、

『そつだそつだ。美羽様の言う様に何故あのお馬鹿3人組みの下に  
付かなきゃいけないんだ』

とかいいやがるしよ。聞いてて頭は痛くなつてきたぜ。でも納得は  
させたからな」

と言つて紅蓮とそれから雑談しながら向かつた。

天幕に行くつと殆どの諸侯は来て居り俺達が最後の様だつた。天幕  
に入る前に皆に会釈をして

俺達と紅蓮達は中央に置かれた机の両側の空いてる所に座つた。

まず机の先頭に座つてゐる金髪パーマの袁紹が

「この度、この連合軍の総大将に推薦されました袁本初ですわ。お  
ーほつほつほつ。」

まあこの名門である私が連合軍の大將になつたからには董卓さんも

これまでですわ。  
ギッタギッタンのポイで倒して差し上げます事よ。おーほっほっほ  
っ

それを聞いていた曹操がこのままでは話が進まないと思ったのだろ  
う、

副将の袁術を紹介して、その後俺の方を少し見て

「ここに来て初めての人もいる様だし他の人も自己紹介して貰いま  
しょう」

どんどん諸侯の紹介が進み

「涼州の馬寿成の長女馬超と言う。母様から袁紹殿に宜しくと頼ま  
れている」

「幽州の公孫贇だ。よろしく頼む」

「平原の相の劉備です。隣は軍師の」

「はわわ、諸かちゅ孔明でしゅ。はうー」

と噛み噛みの自己紹介をして次に紅蓮が

「長沙の孫堅だ。隣が俺の軍師の周瑜だ、宜しく頼む」

と言って冥琳が頭を下げた。そして最後に俺が

「諷陵太守をさせて頂いてます、北郷一刀です。隣は軍師の」

「郭嘉と申します。以後お見知り置きを」

「私は趙雲と申す。一刀様の下で將軍をさせて頂いております。同じくお見知りを」

と2人が言つと皆が俺の方を見てざわめきだした。それを曹操が静めて最後に

「今回連合軍の軍師として総大将より任命された曹猛徳よ。では本題に入らせて貰うわ」

それだけ言つと？水関の先鋒を決める事になった。

これは先程の俺の陣で交わされた約束通りに紅蓮が先鋒を取る事と決まつたが、

そこで紅蓮の兵数では少ないという話が出て、誰かと一緒に攻撃させるという話になったが

誰も名乗り出ずに推薦しては辞退するという事が続く。

誰もが自分の軍の被害を抑えつつ手柄の横取りに必死に見えた。そんな時に紅蓮が

「誰も出ないというのなら俺が勝手に選ばせて貰う。北郷殿にお願いしたいが宜しいか」

そう言つとまた皆の視線が俺に注目した。俺は少し考えて

「孫堅様が仰るのなら喜んで御供致しましょう。総大将殿も宜しいでしょうか？」

と袁紹に尋ねて了承されたので俺達も先鋒に入る事が決まつた。その後は順調に決まつた。

先鋒を俺と紅蓮が、左翼に馬超率いる涼州軍と右翼に曹操軍、中陣に袁紹軍と袁術軍、最後尾に劉備軍と決まった。最後に話が出陣日の事となり明後日と決まった。

そして最後にどうやって？水関を攻めるかと話が出た時にそれまで黙っていた袁紹が

「それなら私に良い案がありますわ、皆さん聞いて下さいな」

そう言って少し咳をして皆の注目が集まると

「そう作戦とは雄々しく華麗に前進し、美しく敵を葬り去る事ですよ」

そう袁紹が言った後、数秒程時間が止まった気がした。

そんな中、俺は思考を整理して考えてみた。自分はこれからどう動くべきで有るかを考え

俺は横に居る稟に話掛けてその考えを了承して貰って席を立ち、袁紹に話しかけた。

「あの～袁紹さんにお聞きしたい。その作戦通りなら何をしてもしいのでしょうか？」

その場に居た皆が俺の方を見る。何人かは驚いている様に見えた。しかし袁紹は

「ええこれが連合の基本方針ですから、後の細かい事は皆さん方にお任せしますわ」

俺はその言葉を聞き『よし』と思ったがそれは何人かの諸侯にも同

じ様に思った。

紅蓮や曹操はこれで好き勝手出来るし、後方の劉備も袁紹の了解さえ得れば何でも出来る。

それでその日の軍議は終了した。そして帰る時に「北郷」と呼び止められる、曹操だった。

「ふーん、貴方ブ男のくせして頭は回るのね。しかも配下も優秀と見える。気に入ったわ。

私と本当に組む気は無い？悪いようにはしないわよ」

そう言つと俺の態度を見ていたのだろう。少しして、

「まあ答えは今度で良いわ。良い答えを期待しているわよ」

とだけ残し去つて行った。そして紅蓮に曹操との会話を聞かされていたのか

「一刀お前も大変だな。曹操にも目を付けられたか。まあ俺も諦めた訳じゃあ無いからな」

そう言つて冥琳と天幕を出て行った。最後に劉備がやって来て

「星ちゃん久しぶりー。元気にしてた」

と星に抱きついてた。その横で紫色の帽子に大きなリボンを付けた少女がやって来て

「初めまして諸かちゆ孔明でしゆ。はわわー又噛んじやった」

と独り言を言っている少女に俺が

「諸葛孔明さんですよ。水鏡塾出身の。万里から話は聞いてるよ。俺の事は一刀で良いよ」

そう言つと色々と言いたい事が有るのだろうが、先に「万里」と言う言葉に食い付き

「ええ、万里ちゃんが来ているのですか？ここに。はわわ、離里ちゃんにも報せなきゃ」

とだけ言つて本題を思い出したのだろう少し深呼吸をして

「ええと、一刀様って天の御遣い様って呼ばれてる方ですよ」

「うん、一応そう呼ばれてる。でも俺は見ての通り1人では何もできない人間だよ」

そう言つと孔明が俺を探るような眼で俺を見て

「いえ貴方はそう呼ばれるに相応しい人物のようです。先程の袁紹さんのやり取りや

貴方に付き従っている方の顔ぶれを見ていれば解ります」

そんな話をしていると一通りの顔合わせが済んで星と稟、劉備さんと孔明さんの4人で

真名の交換をしていた。俺には真名が無いと言つと驚いていたが劉備さんも孔明さんも

真名で呼ぶ事を許してくれた。劉備さんが桃香、孔明さんが朱里と言ひ呼び捨てて良い

と言つてくれた。その後少し雑談し各々の陣に戻って行った。

それから俺達は陣に帰って軍議で決まった事を皆に説明し風に聞いた。

「風に言われた通りに先鋒になったよ。この後どうする??水関の守将は華雄と張遼だつてさ  
兵数は約3万程らしい」

「そうですねーなるべくならここで手柄を立てて、後は領地での見物と行きたいのですがねー  
今回の目的が他の諸侯達に打撃を与える事を絶対的な目標としてますからそうはいかない  
でしょうね。ですから?水関で最低条件を満たしましょう。その後は例の手紙を各地に  
ばら撒けば終了ですよ」

そこで今日の話を終了した。そして万里に朱里に会った事を伝え会いにいつでも良いと言い

俺は自分の天幕に戻って執務を始めた。

連合にて諸侯との出会い（後書き）

こんばんわ朝晩はかなり冷え込んできました。  
更新が遅くなってしまい申し訳ありません。

今回の話は殆ど出来ていたのですが色々と仕事が  
重なり時間が取れず今日に至りました。

次回も少し遅くなるかも知れません。

次回ですが？水関の攻防戦に入ろうと思います。

自分の話では虎牢関での戦鬪は殆ど起こらない様に  
するかも知れません。

今回もここまでお読み頂き有難うございました。



出陣前日〱それぞれの陣にて〱（前書き）

まず最初に謝らせて下さい。？水関までいきませんでした。理由  
はいろいろあるのですがそれは後書きに書かせて頂きます。

出陣前日、それぞれの陣にて、

、曹操の陣にて、

「華琳様。我が軍が放ちました密偵の情報が纏りましたので報告に上がりました。」

「桂花ね、入りなさい。それでどうだったの？貴女の考えも聞かせてくれるかしら。」

そう言いながら筆頭軍師である桂花（荀？）から報告書を受け取って読み始める。

そして先ず劉備の項目に目を通した時に軍師の欄のとある事に気が付いた。

「へえ、2人とも水鏡の私塾の出身なの。しかも首席と次席。勿体無いわね。」

そんな優秀な人材が私の所じゃなく、何の取柄も無さそうなお人好しの所に居るなんてね。

後は、関羽はやっぱりあの者には勿体ないわね」

それだけ言つと他の項に目を移した。そして孫堅の所で

「あの盧植が認めた人物の一人か。さすがに配下も凄い人物が揃っているわね。周瑜、黄蓋

周泰、韓当、呂蒙、陸遜、それに娘の孫策、孫権。皆欲しいけど彼女に忠誠を誓っているから無理ですって残念だわ」

しかし、そこには街の状態や施策の事は書いてあるのに、人物の事は名前以外書かれてなかった。

尋ねてみると警備が厳しく、城に近づく事すら出来ないと言われ

「そう流石、江東の虎と呼ばれるだけはあるわね。でもここまで調べられれば文句は無いわ」

その後、袁紹や袁術、馬騰、劉表、劉焉などの人物の事や配下の事が詳細に書かれてあった。

しかし最後に有る筈の北郷一刀の情報がない事に気付き桂花に尋ねる。

「桂花。なんで北郷の情報がないの？説明してくれるかしら」

「はっ。我が軍の密偵達は領内には入れるのですが、一時すると消息不明になるのです。

余りに不気味ですので、改めて何度も優秀な者を送り込んだのですが駄目でした。

更に軍師や將軍の周辺には隠密が大勢、側に居り、たまに城外に出てきても、

近寄る事も出来ないとの事です。

これ以上密偵の者を減らす訳にはいかないので短期で集めさせました。

そして、それを隣の劉焉と劉表の領地で入手した情報と合わせて私が洗い直し形にしてみた物がこの書簡です、お読みください」

そう言い曹操に持っていた書簡を渡した。そして桂花は続ける。

「北郷の所も諷陵に入って最初の内は結構情報が漏れていたようなのです。」

しかし段々と体制が整って来るようになるにつれ、情報が漏れにくい様になったようです」

「へえ、検地を行ったの。これは税收を安定させる為の策ね。次は人材の選別ね。そして役所の設立？桂花これは何なの？それと街道の整備の所の『バス』ってのも分らないわ」

「はっ、先ず私も余りよく分かって無いのが実情なのですが、諷陵からの情報と照らし合せると役所と言つのはどうも戸籍を管理する為の施設らしいのです。」

そして『バス』の方ですが街から街を繋ぐ馬車を定時間に安価な料金を走らせ、

それを国で管理しているようなのです。更にその『バス』には護衛の者も付いて居り、安全かつ大量に人を運べる事や、乗る人が少ない時には、荷物等をこれまた安価で預かり、運ばせているのが分かっております。

しかし、その二つ以外の他にも何の為の施設か解らない物が何個もあるとの情報が有ります」

それだけ聞くと曹操は1つずつ考えて行った。考え終わるともう一枚の書簡に目をやった。

そこには全て桂花の予測値だが、今の北郷軍の総兵士数や国力、將軍と軍師の名前とが事細やかに記されてあった。

最初に將の名を見て、次の項目に前年との国力比が最大で5倍にもなるとあり、そして、それに比例し1年後には益州を、3年後には漢中にまで勢力が及ぶと予測してあった。

「ふーん、聞いた事無い者達ね。ここにも水鏡の関係者がいるのね。しかし桂花。これは少し警戒しすぎな上に、多く見積もり過ぎではなくて？」

最大で国力が5倍は無理でしょう。彼等は半年前に赴任したばかりなのよ」

そう桂花に言うと、彼女は曹操の目を見つつ言った。

「まず税収の方ですが、私服を肥やしていた官吏達や悪徳商人を追放し財産も没収しました。

没収した財産で治水、農地の整備を行いつつ、治安の回復や商業の推進も行っております。

これだけ事業を行っても、彼等の財布は余裕が有ると思われませう。

しかも商業が回復した事で、今期の税収はかなり増える物と思われ、

農地の方も安定し兵糧の確保は容易になります」

そこで次の用紙を指さして、

「しかも劉焉から東州兵を吸収し、更に自分達でも募兵し大きく兵力を伸ばしております。

更に敵顔が傘下に入った事によって、劉焉への防波堤も出来ました。敵顔が防いでいる間に訓練も順調に進めば、大変な兵力を運用できます。

食糧、資金、兵力が整いこの戦いで名前を上げれば華琳様にとって恐ろしい敵になります」

そう言い自分が絶対と信じる主を見ると、嬉しそうにしていた。そして

「桂花良くやったわ！流石は天の御遣いって処ね。私の思いもよらない事をしているわ。」

しかも配下の者達も良い人材がいるみたいね。そうでないと説明の出来ない事もあるわね。」

そうこなくては面白くない！！。今後の楽しみが増えたわ」

嬉しそうに笑みを浮かべ、情報を持って来た桂花に

「そうそう、桂花。今夜私の所に来なさい。うんと可愛がってあげる」

「はい、華琳様……」

そう言い時は彼女は出て行った。

曹操は見つけた玩具が面白くなりそうな予感がして微笑んでいた。

～ 同じ頃 孫堅の陣 ～

「やっぱり別れ際に連れて帰るべきだったな一刀の奴を。雪蓮。見る面白い事が書いて有るぞ」

母親から言われ書簡を受け取り、目を通してみると色々な事に驚かせられる事となる。

「へえ～街道や街中での犯罪件数が大幅に減ったんだって。」

軍事と切り離して治安維持組織を作ったの。冥琳はどう思う？。」

「ああ、私はその中で素晴らしいと思うのは、領内の住人の戸籍と

商売人への証明書を発行し

商売人を認定した事だな。そうする事によって、税を払う者を確定する事が出来る。

普通、そんな新たな改革をすれば反対する者が大勢出るものだが住民には祭りや税の軽減策を取る事によって熱狂的な支持を受けている。

これだけの事を考えた者が17歳なのだから末恐ろしい」

それだけ言つと彼女は眼鏡を直し更に続けた。

「そしてだ。肝心な軍事の事だが……今、分かっているだけでも総兵数が5万近い。

連れて来ているのが2万、領地に約3万だそうだ。これは明命の情報だから信用は出来る。

自分達の領地の隣に、こんな国が出来るとは思ひもしなかつたぞ。今は紅蓮様がいるし、同盟相手でもあるから特に国境などの心配はして無いが、

もし敵になつたらと思うと、気が気じゃ無いぞ私は」

そこで目の前にあつたお茶を飲み続ける。

「しかもだ、もしもの事を考えて、情報を集めさせた明命でさえ、警備が嚴重すぎて入れない場所が複数存在するとくれば、それが何かは解らんが用心するに越した事は無い。

味方にすれば頼もしいが、敵になれば厄介な相手とは北郷や曹操みたいな連中を言うのだろう」

その話を聞いていた紅蓮が

「冥琳。その心配はあまりせずとも良いと思うぞ。一刀の根っこの部分は善人だ。

俺達みたいに両方持ち合わせている訳では無い。そう言う奴は困っている奴なんかを見捨てる

事は出来ないのさ。そんな奴が同盟破棄して、攻めてくるなんて大胆な事は出来やしない。

まあ注意して置くことは必要だけどな。世が世だからな」

そう言つて次に雪蓮が

「そうよ冥琳。あの一刀がそんな事出来るはず無いじゃない。昨日会った時はちよつと違和感

が有つたけど、多分あれはこの戦争で何かをする為の布石よ。心配する事無いわ。

まあ貴女が言いたい事が解らないでもないわ。軍師達のことでしょう。貴女が言いたいのは」

「そうだ。北郷がその気が無くとも、彼の軍師達は注意すべきだぞ、雪蓮。特に稟と風にはな。

あの2人なら北郷に隠れて何かをやるなんて造作もない。私が心配するのはそこだ」

聞いていた紅蓮が2人に向かって言う。

「それも、さほど心配して無いんだがな俺は。あの2人はかなりの切れ者だと俺も思うが、

それも全て一刀の事を思えばの事だと考えてみれば分かる。もし俺達が敵対しようとするなら

容赦なく、俺達に色々な策略や妨害を仕掛けて来るだろうが、それ以外なら大きな行動は



起こさないとと思うぞ。まあ精々情報を集めるのが関の山だろうな。これに関して言えば俺達も情報収集を行っているので文句は言えねえし、それ位しなければ同盟相手としては頼りないと俺は思うぞ。雪蓮もそう思うだろう?」

「ええお母様に賛成よ。でも、冥琳の言う通り少しは警戒して無いといけないと私は思うの。だから余り一刀達に、必要以上の警戒を与えない様な注意はしておく事も大事だと思うの」

そう言つて彼女達の出陣前日が過ぎて行つた。

～ 更に劉備の陣 ～

「朱里ちゃん。ここに来て色々な事が分かつて来たから書簡に纏めて来たよ」

声気付いた朱里こと諸葛孔明は自分を読んだ鳳統こと雛里に天幕に入る様に促した。

そして雛里が持つて来た書簡を読み始めた。

読み始めてすぐに、自分達の密偵が持つてくる情報の精度にバラつきが有ると書いてあつた。

「やっぱり私達の密偵達は出遅れたね。雛里ちゃん今、私達にとって要注意なのは袁紹さんと

曹操さんの所だからそこに優秀な人を送ろう。そうしないと重要な情報が、如何でも良い情報と一緒に

送られてきてしまつて、欲しい情報が分からなくなつてしまつてる様だしね」

「うん、朱里ちゃんがそう言うと思って指示だけはしてあるよ。でも、孫堅さんと北郷さんの所は送つとかないと、いけない様な気がするの、私。だから二人の所の最低限の情報は集められる体制を築いて置いて良いかな」

「うん。でも御二方の領地は孫堅さんは長沙、一刀さんは諷陵だから今すぐ私達に関係が有るとは思えないのだけど……」

「これは、私が独自に調べただけで、朱里ちゃん見てくれる？」  
そう言い、何かを書かれた用紙を渡した。読み始めると朱里は動けなくなっていた。

「雛里ちゃん。これって本当の事なの？ たった半年でこんなに大きくなれるなんて……  
いくら稟さんや万里ちゃんがいても、こんなに大きくする事なんて無理だよ」

「でもそれはたぶん本当の事だよ、朱里ちゃん。旅芸人さんや旅商人さんの情報だもん。  
彼等がこんな情報でご飯食べてるの知ってるでしょう。」

しかも聞いてみたらこの情報を持って来た人は長安、洛陽、陳留、

そして、私達の平原にやって来たって言うてたから。その前に行った所が蜀地方なんだって。

後で私の密偵さんに探らせたのだけど、怪しい所は何にも無いって言うてたから信用できる情報だよ」

更に雛里はもう一通の書簡を朱里に見せた。それを見て朱里は

「曹操さんも孫堅さんも、色々と派手に動いているね。しかし北郷さんの所は分からないか。

こうなると不気味だよ。もしかすると北郷さんのは別の方法で情報を集めているのかも」

それを聞いた雛里は聞き返す。

「でも朱里ちゃん、向こうの密偵さんが優秀なだけかも知れないよ。それに北郷さんを領地内で

見掛けたって情報は沢山あるよ。でも皆、近寄れなかったみたいだけ。こういう情報なら

沢山あるんだけど、肝心の機密情報や軍事関係の情報は殆ど、皆無と言って良い程無いんだよ。

そこから考えれば、自分を餌にしているって事も考えられるんだけど」

それから二人は夜遅くまで自分達の今後の事やこれから起る出来事などについて話合っていた

〽 翌日 〽

その日は朝早くから聞きたくない声を響かせながら全軍に指示する袁紹がいた。

「さあ孫堅さんと北郷さんにこの袁本初が命じます。思う存分戦い私達の為の道を開いて下さいな。」

おーほっほっほっー」

それを聞いていた紅蓮が俺の横に近付いて来て言う。

「一刀。お前、あの声を聞いて頭が痛くならないか？俺はあの声を聞く度に、

あいつの首を切り落としたいくなるぞ。これまで何度も実行に移そうかと思つた事か」

そんな物騒な事を言う紅蓮の横に冥琳が現れて

「何をこんな大勢の者達がいる場所で、馬鹿な事言ってるのです紅蓮様。

この間も軍議の時に手が震えていたのを、皆にばれない様に止めるのにどれだけ苦労したことか」

その話をしていたら袁紹の話が終つたらしく曹操が皆に向かつて

「ではこれから巳水関に向かう。先鋒は朗報を期待する。以上」

そういつて巳水関の戦いが始ろうとしていた。

紅蓮も俺も自分の軍を率いてそのまま？水関に進軍して行った。

出陣前日々それぞれの陣にて（後書き）

毎度ここまでお読み頂き有難うございます。

本当はもっと書きたかったのですが、風邪をこじらせて更にそれが悪化してしまいました。

自分が住んでいる九州の田舎は朝晩の冷え込みが半端無くなってきました。皆さんも自分みたいに寝冷えなどしない様に気を付けて下さい。

次回は絶対に？水関の戦いです。

？水関の戦いゝ焔耶奮闘ゝ（前書き）

初めに前回のあとがきにも書きましたが今回から  
？水関と書かせて頂きます。

○・・・この回は書いてる時に夏風をこじらせた為  
変な文章になっているかも知れません。

自分でも何度も確認はしましたが、もし何か  
誤字、脱字がありましたらお知らせください。  
すぐに訂正させていただきます。

？水関の戦い／＼ 焰耶奮闘／＼

？水関に向かっている時に俺の後方から稟が情報を持って来た。

「申し上げます。？水関に居るのは華雄と張遼との事。総数は約3万との事です。」

あとですが曹操軍、涼州軍との間隔が開いております。おそらくは様子を見るつもりかと」

俺は風に尋ねてみた。

「これからどうする。風」

「……zzzzzzzzzz」

馬に乗りながら熟睡しておられました……稟と俺が直ぐに起こす。

「風！！起きなさい」「風、起きろ〜」

「おお〜！！このうらかな陽気に誘われ気持ち良く寝ているのに……」

横で見ていた焰耶と星が俺達のやり取りを見ていて

「まったく、これから戦が始まるっていうのに……」

「ふふ。でもこれくらいが我が軍には丁度良いではないか。変に気張っておる御主より」

主の方が自分の力を出せよう。緊張も大事だが、それも度を過ぎれば足枷となる覚えて置け」

そう言っただ俺達の方に2人がやって来た。そして俺はもう一度尋ね

てみた。

「で、どう思う風？」

「ええと、？水関の事でしょうか？。それなら一昨日の軍議の通りに猪さんを誘き寄せて

捕える方が私達に取っても重要だと思えますよ〜。

あと曹操さんの事はこちらにとっても好都合かと思うのですよ〜。

自分達の後に味方がいない

と言う事はかえって私達には願ったり叶ったりですよ〜。好きにさせて貰いましょう」

そう言つて徐々に見えてきた？水関を見て俺が言う。

「さて誘い出すのは紅蓮に頼んであるし、華雄將軍と当たる役は焔耶に頼む」

焔耶はそれを聞き静かに頷く。

それをみて俺はやっと焔耶が最初の一步を踏み出してくれたのだと思つた。

昨日の軍議でこの話をした時は大変だった……

「何故私なのだ。御館。聞かせて貰いたいのだが」

「俺が推薦したんだ。星には今度の戦いで騎馬隊を率いて貰わなければならぬ。

知っているだろうけど騎馬兵の半数が新兵だからね。今回が初戦つて奴が大勢いるから

あまり被害を出さない為に星には指揮に専念して貰う事としたんだ。まあ殆ど騎射だろうけど。

あと軍師にこの役を頼む訳はいかないだろう？華雄將軍と戦わなければならぬのだからね。



そうなると思はれない。反対する者もいたけど君なら出来ると思  
って俺が推したんだ」

そう言われ焔耶が何かを考えていたので

「自信無いかい？それなら言ってくれ。俺も君を推した責任を取っ  
て君と一緒に戦うから」

俺の方を焔耶が見る。そして

「あんたって人は……いいだろうやってやるよ。ただ一つだ  
け頼みが  
有るんだが良いか？」

そう言う焔耶の顔が緊張しているのを見て聞いた。

「何だい？頼みって」

「御館に私の後ろで見ていて欲しい。それでもいいか」

稟がそれを聞き慌てて、

「貴女は一体何を。駄目に決まってる……」

「いいよ俺で良ければさ。必ず華雄將軍を捕えてくれるって信じて  
るよ」

稟の言葉を遮り俺は言った。そして俺はさらに続けて言おうとした  
が風が

「ええと、御主人様がそう仰るなら止めませんが信じる根拠を教え  
て頂けませんか」

そう言うので俺は自信を持って

「俺は最近の焰耶を見て思ったんだ。そろそろ焰耶に色々な事を経験させる時かもってね。」

でも最大の理由は俺は君達を信じている様に焰耶も信じてる。

焰耶なら必ず華雄將軍を捕えてくれるってね。ただそれだけだよ」

その場が静まりかえった。外の声が聞えるくらいにまで。その時

「くつくつくつ、はっはっはっ。主がここまで言っておるのだ、御主らの負けだ稟、風。」

それにしても面白い。面白過ぎますぞ主。そこまで信じられたら焰耶も期待に応えぬわけには

いくまい。流石は私が認めた方だ惚れ直しましたぞ！！」

それを聞いていた稟が猛抗議をしたが、俺が手を付いて頭を下げていった。

「稟、風、万里頼む。俺の我儘を聞いてくれないか。これは良い機会だと思っんだ」

それを見た風と万里は2人して言った。

「仕方ないですね。そこまでご主人様が信じているなら、今回は目を瞑りましょうかね」

「解りました。一刀様がそこまで仰るのなら何も申しません」

それを聞いていた稟は大きく息を吐き

「これでは私だけが悪者では無いですか。しかし一刀様がそう仰つても私は認めるわけには参りません。私には一刀様に危険が迫るのを黙って見過ごすわけにはいかないのです」

それだけ言うと稟は焰耶に向かって尋ねた。

「焰耶殿に聞きます。貴女に一刀様を任せるかどうか今、私は迷っております。

そこで貴女に二つ程問います。

貴女は如何して、一刀様に後ろに居て貰いたいのか説明して頂けますか。

それと最後に貴女はもし一刀様にもしもの事があればどうする御積りですか？」

それを聞き焰耶は少し考えて立ち上がり、皆から見える位置までいき

「私はこれまで自分は強いと思っていた。しかし、星に自信を粉々にされ自暴自棄になっていた処を救ってくださったのは御館だ。しかもこんな私に機会を与えて下さるうとされる。

そんな私が出来ると言えば今回、敵将華雄を捕える事だけだ。だから御館に本当を言えば皆にも華雄を捕える時を見て欲しい。

しかし皆には与えられた仕事がある。だからせめて御館だけでもと思ったのだ。

あと御館に何か有ったときは……」

そう言い、一息いれて稟の方に視線を向けて

「覚悟はしている。ただし御館に害を加える前に絶対に始末する」

そう言われた稟は一時何かを考えて

「解りました。しかし敵将華雄は任せますが、一刀様にはもしもの事を考えて親衛隊に側面の

護衛を任せますが前方は貴女に任せて宜しいでしょうか？魏延將軍」

(えっ、今焰耶の事を「將軍」って言わなかった？)

と心の中で思いつつ稟と視線を合わせて互いに頷き焰耶に言った。

「さて、稟のお墨付きも出た事だし、華雄將軍は焰耶に任せる。親衛隊は俺の側で待機って事で

今日はこれで解散する。明日の為にゆっくり休んでくれ」

そう言うと言語が出て行くのに焰耶は残って俺の方にやって来て

「御館、明日は絶対に守ってやるから安心しろ。と言うか期待してくれ。絶対に御館の期待は裏切らない」

そう言うてゆっくり出入口に向かったが途中で立ち止まって

「今回、機会を与えてくれた事に礼を言う」

そう行って出て行った。すぐして星、稟、風の3人がやって来た。そして星が

「流石に主ですな。主に掛ると人の成長が早まるというか何というか……」

もう何週間前の焰耶はいませんな。最近は色々な事に関して考えている様ですし、

私も悪役に徹した甲斐もあるというものですな」

続いて稟が

「ですが大目に見るのは今回だけですよ、一刀様。確かに今回成功するなら彼女にとっては大きな経験となる筈です。しかし失敗したなら彼女は元に戻ってしまってください。」

私達の為、彼女の為に絶対に成功させなければいけません」

風は少し考えながら

「ええとですね。今回のご主人様に付ける親衛隊は選りすぐりの者を集めたものですから」

そこら辺の兵に太刀打ち出来ない程の人達なので安心ですけど、やっぱり気になるのは焰耶ちゃんの事ですね。星ちゃんから見てどう思いますか？」

星は風の質問に即答する。

「うむ、私は良い所までいくと見ている。前の奴ならば絶対に反対しただろうがな。」

今の焰耶は、この前訓練場で見たが明らかに変わっていた。それでも絶対とは言えぬ。

聞くところによると華雄も歴戦の猛将とか。猪とか言われるが、それでも、それを補って余りある武勇があるからな」

そんな話をしながらその日は過ぎて行った。

そして、それから少しして？水関に向かって歩いてゆく部隊に語りかけた。

「もう少しして孫堅殿が敵將華雄を挑発する。そこで出て来てくる華雄の軍をいなし包囲する。」

そしてその隙に孫堅殿に？水関を占拠して貰う。

皆は心配せずに部隊長の指示に従って欲しい。この戦いは戦う前から決まっているのだから。

我らの勝利として」

？水関にて

「申し上げます。敵の先鋒部隊、約3万5千がこちらにやってきます。」

旗印は「孫」「十」おそらく長沙の孫堅と諷陵の北郷かと思われるます。

しかしおかしい事に後続が結構離れております。何かの策かも知れません」

それを聞いていた華雄と張遼は伝令を下がらせて張遼が

「ふん、孫堅は知つとるけど北郷はあんま記憶にないな。アンタはどないや？華雄」

「ふん。私は誰が来ようともここで奴等を地獄に送り届けるだけだ。ただ孫堅とは少し因縁があるがな。北郷の事は私も知らん。」

ただ一時噂になった「天の御遣い」の名がそんな名前だったような気がしないでもないが……」

「それなら聞いたことあんで。何でも流星に乗って現れて、あつという間に荊州の黄巾の奴等を平定してもうたとかいう噂の奴やな。それにしても気になるのは後続が離れてるってなんやろな」

そんな話をしている2人に敵軍から何者が現れてこちらにやって来た。紅蓮だった。

「そこに居るのは華雄か久しぶりだな。お前に話が有る。もうこの戦いの結果は見えた。だから損害が出る前に降参しろ。そうすればお前の武名も傷付かなくてすむぞ。」

どうだ華雄。お前が俺に勝てないのは身を持って知っている筈、どうだ良い話だろう？」

すると聞いていた華雄は烈火のごとく怒りだす。

「ええい、離せ張遼！！此処であいつの首を刎ねねば私の気が収まらない。ええいこの離せと言っているだろうに」

「アンタの気持ちはようウチにも分かる。しかしここは我慢やで華雄！！。奴等はこの要塞の堅固さに齒が立たんと思うて、あないなごとしとんのや」

そう言われ少し落ち着いていた時に紅蓮がとどめの一言を放った。

「さすが凡将華雄だ。それに付き従う者達も一緒にあの世に送ってやるうかと思っただが。」

もういい。そこまで臆病者だとは思わなっただぞ華雄。もう会う事は

あるまい」

そう言つて自分の部隊に戻ろうとしている紅蓮を見て、華雄は我慢の限界に達していた。

「者ども出陣の準備だ。あそこまで暴言を吐いた孫堅を八つ裂きにしてくれようぞ。」

すまんが張遼、これ以上邪魔をしないでくれ、頼む。

そうしないとお前まで手に掛けてしまいそうだ。私はあの者達を皆殺しにして来る」

それを聞いていた張遼はこれ以上は無理だと悟つたのか何も言わず華雄を離した。

そのまま自分は無口で自分の部隊の所に行き

「ウチの部隊は虎牢関に退くで。ここは間もなく落ちるかな。華雄を止め切らんかった

ウチにも責任はあるがそれは虎牢関で帳消しにする。ほな退く準備しいや」

そう言つて自分の部隊に指示を出し、自分の部隊に行った華雄に

「華雄よ先に逝つとき。ウチもすぐ後にアンタと同じところに行くやろ」

それだけ言つて自分も撤退準備を始めた。

外に居た紅蓮達は関の中に動きが有つた事に気づき、自分達は後退し一刀達がその前に出て

華雄が出てくるのを待った。そして暫くし、門が開き華雄の部隊が



出てくるのを待つ。

「敵は烏合の衆だ恐れるに足らん。我が軍の突破力を奴等に思い知らせてやるうぞ。」

狙うは敵将孫堅と北郷の首二つで良い。余計な雑魚に目もくれずただ粉碎せよ」

そう言う物凄い勢いで俺達に突進してきた。

それを見た稟は鶴翼の陣で迎え撃つ。しかし軍同士が当たる寸前に稟が合図をすると……

「今です合図なさい。中央は両翼に分かれなさい」

その合図とともに真ん中が開き真ん中を通って行く華雄軍に攻撃を加えた。

華雄はそのまま当たるものと思っていたが敵が左右に別れ側面からの攻撃により

勢いと少数ながら兵を失った事に更に怒りだし、

「ええい何だあの軍は。我らはこのまま引き返し奴等にもう一度突撃を敢行する」

そう言っていた時だった。自分達の側面から騎馬隊が騎射を仕掛けてきた。それを率いる星が

「そんなに力む事は無いぞ、的を狙って打つだけの訓練と一緒にだ」

そして攻撃後は元の部隊の方に引き返していく。華雄は齒ぎしりし

「くっ、騎射だと。ふざけた真似を。ええい、全軍密集隊形をとり

再度突撃するぞ」

そして自軍の態勢を整えた時だった。北郷軍から大量の矢が飛んで来たのだった。稟が

「今です。華雄軍は我が軍の的となるような陣を組んだ。ありつた  
けの矢を撃ちなさい」

華雄自身は己に飛んでくる矢を戦斧で叩き落とせたが他の者はそうはいかなかった。

この攻撃でかなりの者が倒されてしまい、矢が刺さった者も大勢いた。

その光景をみて、更に怒り狂い自分の副将が止めるのも聞かず自ら敵陣に突撃しようとして一刀達の軍の近くまで来た時だった。

敵陣から攻撃が止み、一人の将が棍棒のような武器を持って歩いてくる。

更にその後ろには、白色の見た事無い服を纏った男が現れ話しかけてきた。

「そこにいるのは華雄將軍か？。俺の名は北郷一刀。北郷軍の大將だ」

その姿を見た華雄は一瞬嫌な予感が過るが、それを振り払い一刀の言葉に耳を傾ける。

「華雄將軍に一騎討ちを申し込む。ここに居る魏延と勝負して貰いたい」

そう言って魏延を名指しして言った。華雄はそれを見て

「ふん、貴様が北郷か。私は構わんがそいつが私に勝てると思  
うのか？」

「はっははは、焰耶が負ける？それは無いよ、彼女には「天」が付  
いてる。

「だけど、そうだね、もし焰耶が負けたら……俺の首を貴女に指しだ  
そう。」

「そんな事はあるまいけどね」

その言葉を聞き、後ろに居る自分の軍勢から、どよめきが聞こえた  
が無視して

「で、そちらは如何だい。怖じけ付いて逃げだすならさっさと帰っ  
てくれないか？」

「そう言われ華雄はまたも頭に血が上り

「良かるう。その勝負受けて立ってやるうではないか。しかし約束  
は忘れるなよ？」

「そう言つて馬で前に出てきた。そして馬を下り焰耶を待った。

「焰耶はと云つと、一刀が話掛けるといきなり平手で一刀の頬を叩き

「本当に御館は何を考えている。私が負けたらどうするつもりなの  
か？」

「と呆れたように言った。すると一刀は焰耶の肩に手を置いて言った。

「華雄に言つたる。君には「天」が付いてるんだから負ける事は無  
いよ。絶対に！！」

それを聞いた焰耶は、何も言わず華雄の方に歩きだした。焰耶を見て華雄は

「フン、貴様みたいなのが将とは北郷とやらの軍もかなり人手が足らんと見える。

貴様位なら我が軍には両手に余るほどおるわ。逃げ出すなら今だぞ」

と挑発するも相手にされない処か、こちらを睨む目を見て反対に驚いてしまう。

そして………どちらが合図したわけでもなく武器を撃ち合い始めた。

華雄が戦斧を振り回しながら焰耶を攻撃するが、焰耶は自分の武器で防ぎそのまま前進する。

そして自分の間合いになると攻撃を受け止めそのまま反撃する。そんな攻防が一時続いた。

兵達は自分達の将が戦っているのを見て両軍とも戦闘が中断していた。

そして自分の将の後ろに付き見守っていた。それから20分程2人は武器の打ち合いを続けた。

ずっと続くかと思われた一騎討ちも、終わる時がやって来る。

両人とも絶えず攻防を繰り返したおかげで息は荒くなり、最初のような余裕は何処にも無かった。

一騎討ちの最後の方は、焰耶が防戦一方になっていたが眼は死んでおらず、

如何にかして突破口を開こうと、攻撃を受けながら何かを探していたのである。

そして…

焰耶は華雄の攻撃時に僅かだが、戦斧を持ち上げる方に体が倒れる事に気付く。

前の攻撃時もやっぱり戦斧を持ち上げた時に身体が倒れた。

そこで焰耶は華雄が、決着を着けようと戦斧を上げようとした瞬間に華雄に向かって走り出す。

華雄は一方的に攻めている事を、自分の武が相手より上回っているのだと思って攻撃していた。

「お前は良くやったが最後に笑うのは私だ。これで得物ごと、たたき潰してくれる」

そう言った時だった。自分が武器を振り上げる瞬間に魏延が自分の方へ走り向かってきた。

華雄は慌てずに、自分の戦斧を焰耶に突き出し先端で刺そうとしたが、

それも焰耶にかわされて懐に入られてしまう。

焰耶は懐に入ると同時に、自分の武器を振上げるのではなく、剣で刺す様に前に突き出し、

そして夢中なのだろう、大声を上げて華雄に自分ごとぶつかる様に武器を突き出していた。

「うおおおおおおお!!」

華雄は自分の目の前に棍棒らしき物体の先端が見え、それが胸に当たると同時に、

吹っ飛ばされ意識を失う。

焰耶は華雄が倒れるのを見て、そのまま華雄の側に行き大声を出

し叫んだ。

「敵将華雄。北郷軍の将、魏文長が捕えた。まだ相手をして欲しい者はいるか!!」

それだけ言つとその場に片膝をつき、自分の武器を杖にして踏み留まる。

華雄の軍は自分の将が倒されるとは思つても見なかつた様で、茫然自失となり沈黙していた。

反対に北郷軍からは、焰耶が名乗りを上げた瞬間に天にも響くような大きな声上がる。

後から一刀と親衛隊が共にやって来て焰耶に自分の服を掛けて、

「最後まで良くやつたね、焰耶。君の仕事はここまでだよ。お疲れさま。ゆっくり休んで」

その声を聞いた瞬間に焰耶は意識を失い倒れる。それを見て一刀が華雄の残存兵に向かい

「君達はまだ続けるつもりかい？自分達の周りを見てみな。それと？水関の方もね」

そう言われ、辺りを見ると自分達は北郷軍に半包围され、？水関には「孫」の旗が翻っている。

？水関は華雄が出た後に孫堅が空き家同然の関に押し入り、あつという間に占拠していた。

更に後方からは遅ればせながら、連合の本隊が近付いてくるのも見えていた。

そのまま戦えば自分達に残るのは「死」しか無い事に、誰もが気が付き皆が武器を落とし降伏した。

華雄とその軍の事を3人の軍師と星にまかせ、自分は親衛隊と共に焔耶を休ませる為に紅蓮が占拠した？水関に向かう事にした。

後で稟に聞いた所によると、華雄は肋骨が何本かひびが入っているものの他は擦り傷、切り傷だけで特に問題はないという事だった。華雄の兵達は一か所にまとめて自分達の捕虜として管理すると袁紹に使者を出しそのまま了承された。

最後に焔耶の状態は打ち身、切り傷だらけだがその他は特に大きな怪我は無いとの事だった。

く ? 水関の外に張った一刀達の陣 く

そこには焔耶を除く主要人物が集まっていた。まず最初に一刀が

「今日は皆が頑張ってくれたおかげで、俺達は殆ど被害らしい被害もなく済んだ。礼を言う」

それを聞いていた稟が

「今日の殊勲者は焔耶殿です。私達は自分達に与えられた仕事をしたにすぎません」

風も万里も同じ様な事を言い、最後に星がニヤニヤしながら、

「ふむ、今日の焔耶であれば私も苦勞するでしょうな。しかし主。

焰耶が華雄と対峙する前に

何を言ったのですかな？あの前までは身体が硬かったのですが、それから後は、自然な動きが出来ていましたからね」

「大した事は言って無いよ。君には天が付いてるっていっただけさ」  
それを聞いた星は

「ふっ、そうでしたか。今度から私にもその言葉を言って下さるのでしょうか？主」

そんな話をし、そろそろ本題に入る事とした。

「さて、？水関で俺達はとりあえず名をあげる事には成功した。そろそろ第2段階に入る時かと思うんだけど、風」

「そうですね。次の虎牢関は予想するに後方待機でしょうし私達が被害を被る事は少なくなりましたね。ですからここが仕掛け時だと私も思っていますよ。使者の選別と洛陽の利準、利祉さんも準備はできたと返事が来ましたからね。」

それと馬騰さんに連絡が付き了解したとのことでした。こちらはいつでもいいですよ。後はご主人様の命令だけです」

風が言った後、万里が言った。

「私達が連合に参加したすぐ後に、私達の領地に劉焉、劉表の軍が攻め込んだと連絡が入ってます。」

明美さんや桔梗さんが対応しますので問題ないかと……  
それと袁紹・袁術軍の食糧の事で不備が見つかり調査中です」



俺は領地に劉焉と劉表が攻め込んだとの情報は聞いていたが気にな  
っていたので

「領地の状況は？」とだけ尋ねた。すると稟から

「全て私と法正（明実）が思い描いた通りですので問題ありません。  
私達が帰る頃には大勢が決まっている筈です」

と帰って来たので安心し他の話に移った。

？水関の戦い〜焰耶奮闘〜（後書き）

前書きでも書きましたが今年の風邪はきついです。

初めはインフルエンザかと思いましたが検査結果は

陰性で良かったと思いきや家に帰ると地獄が待っていました

熱は上がるし昼間外は30度近くあるのに寒いし

凄かったです。昔インフルエンザにかかった事が有りますがそれと同じ位きつかったです。

皆さんも気をつけて下さい。

次回ですが虎牢関を攻める前日の話を書きたいと思います。

今回もここまでお読み下さって有難うございました。

虎牢関の戦い前日　　暗躍　　（前書き）

今回は一刀が仕掛けた事が少しだけ解ります。  
後、今回も急仕上げで作ったために誤字、脱字が  
有るやもしれません。文の確認はしましたが、  
もしありましたら報告お願いいたします。  
すぐに訂正させて頂きます。

虎牢関の戦い前日　　暗躍　　

俺達が華雄を捕えて、紅蓮が巳水関を占拠した日の夜、巳水関にて軍議が開かれていた。

次の先陣を決める為である。そこでまず袁紹が

「孫堅さん、北郷さん共にお疲れ様でしたわね。では次の虎牢関の先鋒の事ですけど

次は私こと袁本初と美羽さんこと、袁術さんが先鋒を取らせて頂きますわ」

それを聞いていた紅蓮が

「まあ好きにしてくれ。俺はもうやる事はやったからよ。後ろに居させて貰うぜ」

そう言つて俺の方を向きウインクをした。そして俺も

「では俺達も袁紹さん達の邪魔にならない様に後ろに下がらせて貰います」

それを聞いた袁家の2人は曹操が俺達2人が後方に下がることを止める様に言つても却下し

俺達が後ろに下がる事を了承した。

そして虎牢関に進軍するのは明後日と決まった。

先鋒に袁家の2人。両翼は袁家の兵が多すぎて置けない為袁家の別動隊で構成する事とし

中陣に他の諸侯達と劉備軍で固め、右翼に曹操軍、左翼に涼州軍と決まった。

俺と紅蓮は最後尾でゆっくりやらせて貰う事とした。

それだけ決まつてその日の軍議は終了した。

袁紹の天幕を出る時に何人からか呼び止められ話をした。まず紅蓮から

「一刀。今日は有難うな。おかげでこっちの被害は殆ど出さずに済

んだよ。

それにしても今日出て一騎討ちしてた魏延だったか。あいつはいいな！。

まだ若いしこれからもっと鍛えれば良い将になるぞ。俺ん所にくれねえか？」

そう言つて来たので俺が速攻で断つてくると

「だよな。欲しいのは山々だけど一番欲しいのはお前だからな。諦めるよ」

そう言つて自分の陣に帰つて行つた。次に劉備が

「一刀さんお疲れ様です。今日は大活躍でしたね。明日は私達が頑張らせて頂きます」

そう言つて帰ろうとしたので

「後で話が有るので桃香の陣にお邪魔したいのだけでも良いかな」

俺がそう言つと桃香も頷いてくれたのでそのまま別れた。最後に曹操が

「今日はご苦労様。後から貴方達の戦い方を見せて貰つたわ。良く訓練された軍だけど

こんな所で本気を出す気はないみたいね？まだ隠し玉が有るみたいで面白いわ。

やっぱり本気で欲しくなつたわ。貴方と軍の両方が」

そう言つてくるので「何のことやら」と誤魔化していると

「ふふふ。覚悟しなさい。私は欲しい物は必ず手に入れる主義ですよ。絶対にね」

そう言つて帰つて行つた。

最後に馬超がやって来て辺りを警戒しながら言った。

「母様から手紙が来たんだ。あんた達に従えつてさ。

そう言われても信じられないからさ、あんた達のする事を聞かせてくれるかい」

そう言つので明日、俺達の陣に来てくれるように頼みその場を後にした。

〱 一刀の陣 〱

一刀が1人で政務を片付けていると親衛隊の隊長がやって来て「申し上げます。郭嘉様と程立様、趙雲様がお会いしたいと申して居られますが」

俺がここに通す様に言っただけでしばらくして3人がやって来た。まず稟が「準備が整いました。5日前全員ここから領地に帰る者として出発させた者達からの連絡が

参りました。内容は皆同じで『仕込みは終了した』との事です。

それと利社殿から連絡が有りまして向うの軍師と接触できたとの事です。

そしてむこうからの条件としては自分達の安全の確保と兵の全員の無事帰郷だそうです」

続いて風が

「私達の領地の事ですが、明実ちゃんの手紙から推測し3人で話しあった結果

現在劉焉軍が巴郡まで、劉表軍が江陵を発ち夷陵に差し掛かる位ですかね。」

もうそろそろ明実ちゃんが劉表軍に対し動くと思いますよ。

仕掛ける所はあそこしか無いですからね。劉焉軍にはそろそろ彼等が牙をむく頃でしょうしね。」

と言い終わって最後に星が

「捕虜の事です。もっと捕虜らしく扱っても宜しいのではと連合軍の色々な所から聞こえて来ますぞ。主に我が軍の外からですがな。

曹操は何も言いませんが袁家の2人が不満を持っている様で捕虜は捕虜らしくさせると

大声を上げて皆を煽ろうとしておりますな。自分達が認めたのでしようにな」

そう言っただけで星は俺の斜めの椅子に座り稟は星の対面に座った。俺は

今の政務を片付けるまで

何も言わず政務が終わると同時に

「稟の件はそのまま受けて良いと思うのだけど。どう思う稟？」  
聞かれた稟は

「はい。私も良いと思います。後は袁家と他の諸侯の兵が傷付いてくれれば終了です。」

馬騰殿の事も了承したとの事です。昨日にも馬騰殿と韓遂殿が攻め込んでいるでしょう」

それだけ言つと稟は黙った。次に風に

「夷陵で戦闘か。そこで決着がつかない劉表さんと。けどあの人もやっぱり狸だったね。」

俺達がいる時は攻め込まないとか言つといてさ」  
それを聞いて風は

「それは仕方ないと思うのですよ。私達が部隊を引き連れて行つている今こそがフ陵を

己の物に出来る最大の好機でしょうし、私達の領地の事は色々探つていたようですしね。」

色々な産物があるので喉から手が出るほど欲しいでしょうね」  
最後に星には

「捕虜の事なら連合の馬鹿二人組にも言われたよ。貴重な食料を捕虜に食わせるなんて

勿体ないつてさ。これからは食糧の量を減らすか自分達の食料を与えよつてさ。」

先程の軍議で帰りがけにそう言われたよ。だから自分達の食料を与えると云つてきたのさ。」

本当は別の目的でかなり多めに食糧を持って来たのだけと思わぬところで役に立ったよ」

俺達の捕虜となった者には普通の量の食事と運動をさせて不満を溜めさせない様にしていた。

普通の量と言つても他の者からすれば充分に多いのだが。

そう言つて一刀が笑っているのを見て

「ふ、そうでしたか。では今の状況で続けるという事で万里には言つておきましょう」

それらの報告が終わつた後に万里と星を連れて桃香の陣に向かう事にした。

〽 桃香の陣にて 〽

桃香の陣に付き皆に自己紹介をして少し談笑していた。

そしてしばらくして俺が彼女に提案した。明後日の戦闘時に関羽と張飛と一緒に星も

連れて行つて欲しいと。朱里と雛里はすぐに賛成してくれた。

彼女達は次の虎牢関に居るのが飛將軍呂布だと知っていた為に俺が持ちかけた提案を

解つてくれたが関羽こと愛紗と張飛こと鈴々が最後まで賛成しなかつた。

しかし最後には桃香が愛紗と鈴々を

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、一刀さんの提案を受けよう。朱里ちゃ

んや雛里ちゃんも賛成

してるんだし絶対にその呂布さんは危険なんだよ。提案を無視して

2人に万が一の事が

有つたら私は・・・」

そう言われて2人とも説得され話は決着した。

俺は万里の側に行き言った。

「朱里達とゆつくりとしておいで」

とだけ言つて星を伴つて2人で話しながら自分の陣に帰つた。

〽 時間は遡り連合が結成される少し前の涼州・武威

涼州・武威の太守馬騰は迷っていた。今回諸侯の嫉妬により標的



とされた董卓とは  
親しくしていたが彼女達を庇えば自分達にも被害が及び兼ねない。  
しかし董卓が送られてきた檄文の様な暴虐非道な真似をするとは考  
えられない。

そんな彼女が考えた末に出した結論は連合に参加するというもの  
だった。

しかし自分はここ武威から離れる事が出来なかった。彼女の領地の  
周りには羌族や鮮卑等の  
異民族が隙あらばと狙っているのである。そんな事もあり自分の娘  
の馬超（翠）に

従妹の馬岱（蒲公英）を付けて連合に参加させる事にした。

当初この連合に参加するのに反対していた翠では有ったが馬騰が

「翠。貴女は連合に参加し内部から月（董卓）を助ける為に動きな  
さい。」

しかしそれを悟られてはいけませんよ。悟られてしまえば月は勿論  
私達も危うくなります。

私も色々と動いては見ますが、多分貴女の行く連合内部からの方が  
確率が高いでしょう。

それと蒲公英。貴女は翠を手助けしなさい。貴女の方が翠よりそっ  
ちの方は得意でしょう。

私の方に何か有ればすぐに連絡しますが貴女達は自分達で考えて行  
動なさい。

下手にそちらから連絡すれば悟られる可能性が高くなる為です。解  
りましたね、翠、蒲公英」

と言って娘達を連合に行かせてから、翌日に一通の手紙が届いた。  
手紙には

「董卓の救助の事で話がしたいので自分が泊っている宿屋まで来て  
頂きたい」

とだけ書かれてあった。馬騰は手紙を見て少し考えて  
自分の配下を呼び手紙に書いてあった宿屋に向かった。宿屋に着く

とそこには商人がいた。

「ここまで太守であられる馬騰様にご足労頂き誠に申し訳ありません。

私は商売人をさせて頂いてます張世平と申します。手紙を見て戴けて何よりでした」

そう商人は笑顔で語り出した。それを見ていた馬騰は

「それは良い。貴方が豪商で有名な張世平殿か噂は聞いている。その貴方が何故に

董卓の事を助けようとなさるのかお聞きしたい。もし嘘偽りを申すなら……」

そう言つて利準の事を睨み剣を握つて威嚇した。彼は両手を挙げて「私が助けると言つたのではありません。私はある方に頼まれてここに来たに過ぎません」

そう言つて両手をゆつくりと下げ自分の懐に手を入れ手紙を馬騰に差し出した。

馬騰は何か有ればすぐに切れる様に構えていたが、懐から手紙が出てきたためゆつくりと

受け取り剣を持ったまま手紙を読みだした。手紙にはこう書かれてあつた。

「初めまして自分はフ陵太守の北郷一刀と申します。張世平さんに頼み手紙を送つた用件は

大方気付かれて居られるでしょうが袁家や他の諸侯の嫉妬により標的にされた

董卓殿を救う為です」

そこまで読み両手を上げている張世平に尋ねた。

「この北郷殿は一時管路の占いで噂になった「天の御遣い」と呼ばれているあの北郷殿か？」

それに何故、北郷殿は董卓を助けるのです。彼にとっては関係無いではないですか」

そう言われ張世平は

「はい。その方こそ私が命を賭しても良いと思う、「天の御遣い」北郷一刀様です。

後、一刀様が何故董卓様を助けるかはその手紙に書いて有ると思います」

それだけ聞くと又、手紙の方に視線をもどした。そして手紙を読みつつ

「もう手を下げても結構です。貴方に危害を加えるつもりはありませんよ」

そう言われゆっくり手を下した。そして手紙を読み終えて言った。

「貴方はこれから洛陽に帰られるのでしょうか。その時に今から書いて渡す書簡をそのまま

董卓殿に渡して頂けますか。そして彼女に『貴女の家族の事は私が面倒をみるから

心配いらない』と伝えて下さい」

そして張世平に筆と紙を借り手紙を2通書きそれを彼に渡し言った。

「これは董卓殿に、そしてこれは北郷殿にお渡しく下さい。そして北郷殿に

娘を宜しくとお伝え頂けますか」

それだけ言うと彼女は出て行った。その後利準は自分の商隊を二つに分け一方を連合に

もう一方を自分が率いて洛陽に向かった。

　　～ 次の日的一天達の陣 ～

一刀の天幕には一刀と軍師3人と焰耶、馬超と馬岱の7人が机に座っていた。

星には自陣と天幕の周りの警護を兼ねて外に居て貰った。

先ず一刀が馬超と馬岱に自分達の目的と彼女の母親の馬騰に頼んだ事を説明した。そして

彼女らにやって貰う事を説明した。それを聞いて馬超が

「ふえゝあんた達は一体いつからこの準備をしていたんだ。1週間やそこらじゃあ無理だし」

それだけ言つて馬岱も

「叔母様に手紙を送つたのだから私達が領地を出た後、すぐに送つたのでしょうか？」

最低でも1か月以上は先を読んでないと無理だつて。翠姉さま」

そう尋ねて来たので万里が質問に答えた。

「まず準備期間は3か月です。戦いが始まる前に手紙を持って行って貰う方に

その場所で商売を始めて頂きました。それと同時に洛陽、長安にもそれぞれ拠点を

何か所か作つて頂きました。そしてこの後必要となるものを揃えて頂きました」

それだけ聞いて馬超は何かを考え込みはじめた。その間馬岱はこちらをキラキラした目で見て

いたが少しして馬超が

「北郷殿に聞きたい。あんたは董卓と面識は無いと言つ。それなら何故見ず知らずの董卓を助けようとする。それだけ聞きたい」

そう言われたので

「理由は単純。」困っている人を助けるのに理由は要らない」唯それだけ。しかも今回は

董卓さんに非は全く無い。彼女は困っている人を助けただけに過ぎない。

しかし俺達も表立つて助けるわけにはいかない。俺達と董卓軍の兵力を合わせても連合には

遠く及ばないし世論は殆ど檄文の事を信じてる。少々の事では連合は揺るがない。

それなら内部と外部から同時に揺さ振つてやろうと思つたんだ。そ

れが今回の策さ」

それを聞いた馬超は馬岱と少し話して言った。

「分かった。悔しいが私達は洛陽に一番乗りして董卓達を救う事しか考えられなかった。」

しかしあんだ達は救うために準備し実行してきた。だから私達はあんだ達に協力する。

その協力の証として我ら2人の真名を預ける。受け取って貰えるか？」

俺が黙って頷くと馬超と馬岱は姿勢を正し

「我が姓は馬、名を超、字を孟起、真名は翠という。これからよろしく頼む」

「私の姓は馬、名が岱で、真名は蒲公英と言います。皆宜しくね」それからは普通に話し合いをし彼女達と談笑しながら時は過ぎて行つた。

そして帰りがけに蒲公英が俺の事を「一刀様」って言ったのを聞いて翠が注意すると

「お姉さまも呼べばいいじゃない。一刀様ってさ」

そう言われた翠がいきなり

「#%\$%○&%\$%x\$」

と何だか分からない言葉を言っているのを見て皆で笑っていた。結局翠は俺の事を一刀と

呼ぶ事で決着が付いたみたいだった。

く 一刀と翠が話し合いをしている頃、曹操軍陣地で く

「華琳様大変です。我が領地でこの度の連合軍参加について色々な情報が流れております」

そう言つて軍師の桂花こと荀イクが曹操の居る天幕に入って来た。それを聞いた曹操は

「どういふ事なの桂花？詳しく説明なさい」

それを聞き桂花は自分の持っている情報を話し始めた。

「我らが領地の陳留を始め、孫堅の長沙、北郷のフ陵  
袁紹の業等の主要都市に噂が流れて居ります。」

内容はどれも同じくこの連合を疑問視する内容で檄文に書かれていた事を

全て否定する文をその都市の大通りに張り付けているとの事です。

我が領地ではそれを見た者達の中で少数ながら疑心暗鬼になっている者も出て参りました。

残してきた者が上手くやってはいますが何か手を打ちませんとこのままでは……」

それだけ言つと主君の思案の邪魔にならない様に黙つた。

その噂は至る所で発生し手を着けず何もしない地域では噂が噂を呼び手の着けようがない

所まで広まつてしまった。連合の内部でもその噂が広がり始め諸侯は対応に苦慮していた。

流した本人とその事を知っている者を除いては……

その日の夕刻に有る情報が袁紹の天幕で軍議の為に居た皆に教えられた。

「皆さん。董卓さんの本拠地である天水が3日前に馬騰さんと韓遂さんによつて

落とされたと今情報が入りましたわ。さすが涼州に馬騰有りと言われた馬騰さんですわ。」

これで董卓さんは後にも引け無くなりましたわ。

後は私が虎牢関を落すだけになりましたわね。おーほっほっほっ「その情報を聞き皆が安心する者もいれば、何やら考えている者もいた。そしてその日の

軍議は明日の手順（殆どは袁家の事であつたが）を確認し終了した。

そのような状況の中で次の日の虎牢関の戦いは始ろうとしていた。

虎牢関の戦い前日

暗躍 ～（後書き）

今日はきつかった。一日で上げたのは初めてで  
自分自身が驚いています。

やっと風邪が治り三連休だと喜んだのもつかの間、  
電話がかかって来て連休明けの生産会議の資料  
宜しくですって……。

最後の3日目はそのために半日消えてしまいそうです

次回ですが虎牢関の戦いとその後起こった事を  
書けたらいいなと思ってます。

ここまでお読み頂き有難うございました。



## 虎牢関の戦い（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。言い訳はあとがきでさせていただきます。

今回は北郷軍は戦闘に参加しません。

呂布と戦う春蘭、秋蘭の前に現れた者は？

\*この前指摘くださった方々には申し訳ありませんが自分にはこれが限度の様です。良くなったのか悪くなったのか自分では

判断できませんので、またコメント下されば幸いです。

## 虎牢関の戦い

前日の軍議通りに袁紹軍と袁術軍は大軍勢を率いて虎牢関に進軍していた。

彼女達の両名が自らの勝利を疑って無い。その根拠は自分達と董卓達の兵力差が5倍近くある為と

巴水関を孫堅、北郷の両名だけで落とした事により、その3倍もの兵力を持つ自分達にかかれれば

すぐに虎牢関を落とせると侮っていたのである。その為、顔良が提案した偵察をせずにそのまま

虎牢関に向う事という愚拳を犯していた。

彼女達が向かう虎牢関には、黄巾の乱の時1人で3万を退けたともいわれる武を持つ最強の武将と

騎馬軍を率い攻撃の速さでは、神速と称えられる将の2人がいる事を知らずに……

） 虎牢関 ）

関の上から見ていた褐色の肌を持つ赤い髪の少女が言った。彼女こそ呂布（恋）である。

「……ちんきゅー……霞、出る」

「恋殿。この陳宮にお任せ下さいなのでござ〜」

それを見ていた張遼（霞）がすかさず2人を遮る様に

「ちょっと待ちーな、出るってあんた等本気で言つとるんか?」

「霞殿。これにはちゃんとした訳があるのでござ〜」

と自信を持って陳宮（音々音）が言うので霞は聞くことにした。

「今、連合軍は？水関を落とし勢いに乗っておるのです。

しかし何を考えたか、こちらに向って来ているのは総大将の袁紹。

奴の首さえ取ってしまえば、奴等は自然的に空中分解するのは目に見えているのです。更に……」

音々が喋っている間、霞は聞きながら目を瞑り考えていた。

自分達の状況はかなり悪い。？水関で連合を防ぎきれず、華雄と多くの兵を失い

士気も自分と恋が率いる兵を除いて大幅に下がっていた。

それを考えると長期戦は望めない。そこまで考えて音々の台詞を遮って

「ふん、ついでに士気も上げるんか。そして出来る事なら首も上げようちゅう

一石二鳥を狙っとんか。それで無理やったら撤退するんやな？」

自分が言おうとした台詞を言われて不貞腐れながら

「ええ。その通りなのです。撤退するときには持っていく柴と油で敵軍を……」

そう音々は言うが霞は迷っていた。恋の武力は認めるが、迂闊に出て行って良いかどうかを。

その横で一連の話を聞いていた恋が、自身の武器である方天画戟を持ち上げ

「……大丈夫。霞強い。恋も音々も頑張る」

まるで遊びに出かける様に言う恋を見て彼女は笑いだし、  
全てを恋に任そつと虎牢関から討つて出る事に賛成した。

「にははは。で、恋はどつちに当るんや。ウチ等から見ても右が袁紹、  
曹操。左が袁術、馬超や」

そう聞かれた恋はジーと両陣を見渡して右を指さして

「…あつち」

とだけ言つて歩き出し後から音々が

「恋殿まつてくだされ」と付いて行く音々と寡黙に歩いて行く後ろ  
姿を見て霞は、

「あれが天下の飛將軍、呂布ちゅうんやからな！。しかしウチは袁  
術軍と涼州軍か」

それだけ言つて自分も自軍の所に向かった。

そして準備ができると軍勢とともに虎牢関の外に出て連合を待った。

董卓軍が外に出ている事に気付いた連合の対応は様々だった。

関の外に出ている事を馬鹿にする者。反対に慎重になつて護りを固  
めようとする者とそれぞれだった。

曹操は正に後者であり

「こちらに呂布が来るとはね。春蘭、秋蘭は前衛に行きなさい。あ  
の馬鹿が呂布の進軍を

抑えきれるか微妙だわ。もしもの為に季衣と流琉は親衛隊を率いここにいなさい」

それだけ言っつて、桂花に向かつて助言を求めようと名を呼ぶ。

「桂花。他に何かすることはあるかしら？」

名前を呼ばれた、猫耳フードをかぶった曹操軍の筆頭軍師は

「もし袁紹が持ち堪えた時に、こちらから逆撃が行えればいいのですが……」

助言を求められた彼女は、そこまで言っつて少し遠慮がちに

「やたらと数だけの多い袁紹軍が邪魔で、おそらく無理でしょうからこちらの被害を少なくする事に  
重点を置いた方がよろしいかと思われまます」

それだけ言っつと、曹操の近くに行っつて耳打ちをした。

「後は、あの脳筋（春蘭）がどれだけ呂布と渡り合えるかにかかっつてくるかと」

それを笑いながら聞き先端が開かれるのを待っつた。

袁紹と袁術の部隊が先に攻撃を仕掛ける形で戦闘は始まっつた。

戦闘が始まると両袁家の軍と董卓軍の練度の違いは一目瞭然であり、戦闘序盤は数に勝る両袁家軍が推してしたが、呂布が先頭に立っつと戦況が途端に変わる。

赤兔馬に乗りながら常に先頭において、袁紹軍の大群に猛然と突撃し手当たり次第に、  
葬り去っていく呂布を見て、袁紹軍の兵は恐怖を感じ堪らず武器を捨て逃げ出し始めたのだった。  
反対に彼女が率いる兵は、将の雄姿を見て奮起し彼女の後に続いて同じく敵を葬り去っていく。

袁術の方も同じく、騎馬隊を手足のように動かし戦う張遼に翻弄され、  
動きを止めようとし包囲を試みるもあっけなく突破されて更に兵を削られていった。

戦闘が始まり無惨にも屍を晒しているのは主に袁紹、袁術の軍の方であり、  
袁紹の二枚看板である顔良、文醜が呂布の勢いを止めようと二人で挑むがあつという間に撃破され、  
配下の親衛隊に護られて後退している始末。

袁紹も後退途中に呂布と目が合い自身の生命の危険を生まれて初めて感じたのである。

呂布はそのまま勢いで後方の曹操軍に突入し先陣を粉碎しようとするが  
そこに二つの影が現れて呂布に戦いを挑むのだった。

叩き潰されたのは袁術も同じであり、彼女も張遼に瞬く間に本陣近くにまで押し寄せられ、  
七乃に抱きしめられ泣きながら後退をしていた。

彼女達の後方に控える諸侯達も袁家に加勢する為に、二手に分かれ董卓軍に当たるも結果は、  
無惨としか言いようがないほどに打ち負かされて後退するしかなかった。

互角に戦えているか、無傷で戦場に居たのは右翼の曹操軍と左翼の涼州軍と

中央にて戦況を見守っていた劉備・公孫贛軍、後陣の紅蓮と一刀と数える程しか無かった。

劉備軍は公孫贛とともにその場で待機し、ボロボロになり僅かな護衛を率い後退してきた

袁紹を見つけ、初めは気が立っていた彼女を丸め込み、そのまま自分達が護衛となる事で

堂々と後方に下がる大義名分を手に入れて、悠々と後方に下がっていた。

しかし、そこに1人の使者が現れて彼女達に書簡を渡して去っていった。

一方の張遼は、袁術軍と援護に来た諸侯軍を踏み潰した後、涼州軍とにらみ合いをしていた。

一気に潰そうとしたが、涼州軍の動きが余りに素早く、迂闊に手を出せば自分達が手痛い打撃を

受ける恐れがあり慎重に対応する事にした。

対する馬超も張遼の軍に同じ様な感想を持っており、その為、普段ならすぐに突撃する性格を抑え、

慎重に動く事とした。

張遼と馬超が膠着状態に陥っている時、両陣営に使者が訪れた。使者が持ってきた書簡には

「両名に軍が睨み合っている中央に来て欲しい」

とだけ書いてあるのだった。

その書簡を見て、張遼はここに来る前に洛陽であった事を思い出し

ていた。

張遼は？水関に行く前に、軍師の賈馱（詠）に呼止られて話をしていた。

「霞。貴女に聞きたいのだけど、私達これからどう動けば良いと思う？」

普段は絶対にこんなことは聞いてこない詠に、違和感を持ちつつも張遼は

「大丈夫やて。何があってもアンタと月は逃がしたる。それは恋も音々も華雄も

この気持ちだけは一緒やと思うで」

それを聞き賈馱は張遼に対し言った。

「霞。貴女にお願いがあるの。？水関か虎牢関で敵方の諷陵太守、北郷一刀が接触して来るから

貴女はその話に従って動いてくれる？こんな事は貴女にしか頼めないの！！」

そこまで言って詠は溜息を一つ吐き

「華雄は猪だし、音々はまだ腹芸が未熟。恋には難しい話は無理ときたら貴女しかないのよ」

「敵の指示に従え」と言われて困惑しながらも考える。

霞の知る詠は絶対に冗談でこんな事を言う訳がなく、何かあると考え詠を問いたです。



詠は霞に尋ねられても黙っていたが、少しして懷に手を入れ手紙を取り出し、それを霞に渡し、

「この内容を知っているのは月（董卓）、僕、そして貴女の3人だけよ。音々にも見してないわ」

手紙を受け取つてすぐに

「詠！！これ」

霞が詠の方を向いて真意を問おうとするが、彼女は眼をつぶって何も答えない。

何をして無駄だと思い、先に手紙を読み進めて行く内に、この手紙を書いた者とその者の目的が明らかになった。

霞は自分の考えをまとめて詠に言い、最後に

「月はこの事を知つとんやろ、それならウチも何も言いわん。ウチは何をすればいいんや、詠」

詠は自分の行った策と手紙の主の策、そして虎牢関の後の事を霞に話し、

「後は貴女が手紙の差出人、北郷一刀に会つてその後の事を聞いてくるだけよ」

聞かれた霞は、自分の知らない所で起こっていた事に戸惑いながらも理解し、

「しかし、北郷ちゅう奴も何考えとんやろな」。これが明らかになったら、自分等もお尋ね者になるちゅうのにな。

まあ面白そうになって来からいいか。ほな、行ってくるわ」

そう言っただけ歩いて行く、彼女の後姿を見た詠は、後にこう語る。

『猫耳と尻尾が生えているように見えた』

霞と翠が睨み合っている場所に、白い制服を着た一刀が現れ、睨み合っている二人に言う。

「二人で武器を持って、遣りあうのは勘弁してくれよ」

言われた翠は一刀の方を見て、

「フン、遅いよ一刀。もう少しで遣りあう所だったよ」

とだけ言って霞から離れ、霞はやって来た一刀にずっと視線を向けていた。

それを見て一刀が霞の方に歩いて行き彼女の目の前に立って

「貴女が張遼さんですね。自分は北郷一刀と言います」

それを聞きながら霞は、一刀から視線を外さず聞き終えると、

「アンタか。詠、賈馱から話は聞いたんで。それじゃあ早速やけど聞かせてんか？」

ウチはこれから何をすればいいんや？」

一刀は懐から手紙と通行手形と書かれた割符を出し、霞に手紙だけ

を先に渡し説明を始めた。

手紙を受け取り、読み終えて少しして、

「アンタの考えはよう解かった。そこで一つ聞きたいんやけどな？  
何で見ず知らずのウチ等に、

ここまでしてくれんのか？もし、ばれてもうたらアンタもお尋ね者  
やで」

そう言い霞は一刀の方を見て尋ねた。一刀は霞に向かって頭を掻き  
ながら

「人を助けるのに理由があるのかい？しかもその人が唯、困ってい  
た人を助けた為に、

無実の罪を着せられ命を失うなんて馬鹿げた事、俺には見過ごす事  
なんて出来ない」

そう言うと一刀は、照れ隠しながら、

「只、それだけさ」

一刀が喋っている間、霞はずっと一刀の目を見ていて、そして気づ  
く。

自分の主である月と同じだという事に。

（こいつは月と一緒にか。しかしこいつは月より気合い入っとなん！。  
いざとなったら何するか解らんわ）

まだ自分を信じて無い霞を見て、自身の懐から小刀を出し彼女に差  
し出して、こいつ言っ。

「洛陽で董卓さんの身に何かあったらさ、それで君が俺の命を取り  
に来なよ。張遼さん」

それを真横で聞いていた翠も驚いたが、一刀が喋っている間、視線を放さず見ていた霞は、  
もつと驚いたが、言葉に嘘が無い事を悟り、そのまま手紙と小刀を受け取り、一刀に向かって

「ウチはアンタを信じる。その証としてウチの真名を預けるわ。ウチは霞や。よろしゅうな」

一刀は自分の気持ちが届いたのが嬉しく、霞が差し出した手を握り締めて子供の様に喜んでいた。  
少して興奮が収まった一刀は、

「これからの事を言うよ霞。少し予定が狂ったからね。呂布さんが曹操に当たるとは思わなかったよ」

それを聞いた霞は

「決めたんはウチやあらへん。何やウキウキしとったさかいなく何人か曹操の武将死んどんちやうか？」

そう笑いながら言う霞に、苦笑しながら話を続けた。

「君は曹操軍に突撃した呂布さんを連れて、虎牢関まで退いて夜に紛れて洛陽まで下がってくれ。」

その後は、誰になるにしろ虎牢関を落として、休んでから洛陽に向かうだろう。その時に……」

その説明を聞いている時に、先程一刀に貰った割符に目をやると

「全漢中通行許可乃符」

と書いてあるのに気付き一刀に聞いた。

「アンタこれを何処で手に入れたんや？今の太守はそない甘い奴ぢやうやろ？」

聞かれた一刀は

「今の太守張魯は、五斗米道の教主であり太守でもある。しかし彼は優秀でも側近がいけない。

彼の側近の楊松は金や権力に弱く、その為なら平気で色々やる男でさ、

その割符も彼に金を送り、手に入れたのさ」

そう言つて、もう何枚かの割符を霞に見せて

「俺達はこの戦いの後、漢中から自領に帰る。君達も同じ道を通つてくれ。

それと漢中は、もう劉焉さんと手を切っているから安心していいよ」

それだけ言つと一刀は、自分の軍へと歩いて帰って行った。

話が終わり、一刀が帰ってから霞は手紙の通り、自分の軍を虎牢関に帰らせつつ、

呂布軍を率いている音々に伝令を放ち、自分で恋を迎えに行った。

曹操は驚いていた。呂布と彼女が率いる軍の強さに自分達の将と軍が押されていたのである。

呂布に挑んだ春蘭と秋蘭が二人掛かりでも、敵わない姿を見たのも初めてであったが  
軍勢の方も曹操自身が指揮しているのに追いつ返す処か、本陣近くまで押される時もあったのだ。

相手の軍師の陳宮は勢いのまま攻め込もうとせず、不利になると方陣を敷き守りを固め  
隙を見つけるとそこに攻撃を集中し、少しずつ攻め込むという事を繰り返して互角以上に戦っていた。

曹操も何度か攻め込むが、その際、隙を作る事となって被害が大きくなり無理に攻め込まず、  
膠着状態になっていた。

曹操は戦いながら敵である二人に畏敬の念を抱き、あわよくば自軍に引抜きたいとさえ思っていた。

呂布と戦っている春蘭・秋蘭の方はもっと驚いていた。自分達姉妹が二人掛かりで戦っているのに

相手の呂布は息も乱さず的確に攻撃を返し、秋蘭の矢も殆ど叩き落とされていた。

春蘭は呂布の一撃がとてつもなく重く速い事に苦戦して、

「くっ、ここまでとは……」

と、虚しく独り言を言い、大きく呼吸を乱しており

「大丈夫か姉者。それにしてもここそのままでは……まずいな」

普段は冷静な秋蘭も自分の姉を心配しつつ疲労していた。そんな攻防が続く暫くしていきなり呂布が

「……お前達弱い。でも頑張った。もう終わらせる」

そう言い、今までの攻撃の倍ほどの速さで、自身の方天画戟を春蘭に振り下ろし終わらせようとした。

「春蘭！！」 「姉者！！」 「春蘭様！！！！」

曹操や秋蘭、季衣や流琉、兵達が見ている中それは起こったのである。

攻撃は向けられた春蘭に当たる事は無く、手前で何者かによって止められていた。

「流石は飛將軍呂布ですな。手が痺れましたぞ」

そう言って攻撃に集中した呂布に向かって、連続突きを放ち防がせて、態勢を崩させ、

その隙に秋蘭達に近寄り

「わが主、北郷一刀の命によりこの趙子龍、加勢させて頂く」

そう言って呂布に構え直したが、この展開に啞然としている二人に向かい

「何を呆けているのだ。呂布の攻撃が来るぞ！！」

そう言い、すぐに来た呂布の攻撃を捌く事に集中した。

最初は戸惑っていた二人であったが秋蘭は

(ここで自分達が抜かれると華琳様が危うくなる。季衣や流琉も自

分達のこと一杯らしいな……)

そう考えて彼女は星に、

「協力感謝する。しかし見ての通り化け物だぞ呂布は。それでも宜しいか？」

そう聞かれた星は笑いながら

「主に言われたと言っておるうに。それに強者と戦えるのは武人の性と云う物。お気になさるな」

春蘭はまだ認めようとしなかったが、秋蘭に

「姉者は華琳様が危険に晒されても良いのか？自分達ではこれ以上は無理と解かっているだろう」

そう説得されて春蘭も渋々ではあるが

「秋蘭がそこまで言うなら認めてやろう。ただし足を引つ張るなよ」  
「姉者はああ言っているが趙雲殿、結構感謝しているのだよ」

それでも呂布は三人を相手に互角以上の戦いを繰り広げていたのだが、そこに更に

「平原の相、劉玄徳が一の家臣、関雲長、義により加勢する」  
「同じく張翼徳なのだ。鈴々の丈八蛇矛受けてみるのだ」

そう言って現れた愛紗と鈴々の二人が参戦した事で、形勢は逆転したが、



それでも反撃される事もあり、油断できない戦いが続いていたのであった。

しかしそこに霞が現れた事で、その戦いは終了する。霞は恋が戦っていた者達を見回して、

「恋、帰るでー。自分お腹空いたやろ。それにしても凄い面子やな」

そんな霞に向かって恋は少し考えて

「……少しだけ。でも…セキトにご飯…」

そう言つて、今まで戦っていた者達に背を向けて帰ろうとした所で、何かを思い出して言つた。

「……お前達と戦えてよかった。またやる」

その場にいる皆にそう言つて帰る呂布に、愛紗が戦いを挑むが呂布の前に立塞がった霞により、一合の内に武器を弾き落されてしまい

「自分等、よう恋相手に生き残つたな。その強さに免じて今回は引下がつたるわ。ほな帰るか恋」

そう言つて馬に乗つて行く二人を見送つた。

星が辺りを見渡すと呂布が去り気が抜けたのか、夏侯姉妹はその場に片膝を付き肩で息をしており

更にその先を見ると曹操軍と陳宮率いる呂布軍の間に炎の壁が立塞がり、戦闘を終わらせて両軍とも撤退を開始していた。

星達が帰ろうとした時曹操自身が現れ「二人を救ってくれて礼を言う」とだけ言い去って行った。

呂布軍を追撃出来るほどの戦力を、保持している者は前衛にはおらず、

特に袁紹、袁術や二人を助けに行った諸侯達は、兵を纏める事に集中せねばならない程

被害を被っており、曹操も自身が指揮したのに大勢の兵を失い、自軍の編成が急務となっていた。

董卓軍も同じで霞の部隊は一割に満たない被害で済んだが、恋の部隊は四割に近い被害を出し、そのほとんどが曹操軍により被った被害であった。

そんな事情もあり、その日の夜に行われた軍議で虎牢関への攻撃は三日後と決まり、

先陣は劉備・公孫賛・涼州軍の三部隊で当たる事に決まり、

中陣に一刀・紅蓮が、右翼左翼には諸侯達を分けて配置し、後陣に袁紹・袁術・曹操と決まった。

## 虎牢関の戦い（後書き）

まえがきにも書きましたが更新遅くなって申し訳ありません。

ここ3週間は本当に地獄でした。朝8時に出て帰るのは早くて夜の9時とか

もう無茶苦茶でした。昨日で仕事が一段落付きやっと小説を仕上げる事に

専念できました。

来週から少し落ち着いて仕事も出来そうなのでゆっくり小説の方も出せると

思います。

次回は虎牢関を落した後、一刀の仕掛けた毘と月の保護、撤退する一刀と

続いて行きます。

## 連合からの撤退（前書き）

更新遅くなりまして申し訳ありません。あとがきにて言い訳させて頂きます。

一刀達が連合を撤退し向かった先は？

反董卓連合の後に起こる事に対し着々と準備を進めて行きます。

誤字脱字及び文法が変かもしれません。

何かありましたらご連絡頂けましたら幸いです。

## 連合からの撤退

軍議から2日後の事である。

偵察に出ていた劉備軍の密偵が虎牢関の異変に気付き報告する。それから予め決めていた前陣と中陣で

虎牢関に押し寄せると敵兵はおらず虎牢関の建物の屋根は打ち壊されその残骸は洛陽側に

抜ける門の前に積まれていて袁紹はそれを見て怒りながら残骸の撤去を全軍に命じて自陣に戻って行った。

袁紹が自陣に戻ったのを確認し俺は袁紹を尋ね話をする。袁紹と向かい合っている俺の後ろには

何人かの諸侯も一緒だった。自分の軍師達が放った密偵により彼らの兵の士気、軍費などが

限界に近い事を知っていたので俺が声をかけると喜んで俺の後を付いて袁紹の陣までついて来た。

袁紹との話し合いは紛糾するが諸侯達を外に出し自分が持つ書簡を見せた。そこには条件面では

『褒章、褒美の全放棄』 『連合結成時に預けた食糧の譲渡』

と書いておりこれは着いてきた諸侯にも認めさせている。最後の項目に

『連合内部で起こった食糧盗難の秘匿』

『連合軍兵糧盗難事件報告書』

と書かれた書簡を出した。

虎牢関に到着した時、俺達の情報網に連合の食糧の備蓄が少ないと報告があり調査したところ

食糧泥棒の犯人は袁家の二人であった。詳しい調査報告書では袁家

の両人が裏で多めに配給を

受けているとの事も解かり証拠も集めてあつた。証拠を見せると彼女の顔色が

初めの赤から青に変わっていった。初めは認めようとしなない彼女だつたが

俺は稟や風に言われた通りに揺さ振りをかける。

「この事がばれたら大変でしょうね。名門袁家の者が盗人の真似をしたなんて

知られたら信用も何もあつたもんじゃない」

少し間置いて彼女を見ながら

「率直に言わせて頂きます。俺と何人かの者の帰還を認めて頂けませんか？認めて下さるなら」

そう言つて調査報告書と持ってきた書簡を出し

「この事は全て無かつた事にしましょう」

彼女は恨めしそくに俺を見て

「本当に黙っているのでしょうか？それなら認めましょう」

そう言つて彼女に書簡を書いて貰つた。内容は

「慈悲深い私こと袁本初が撤退を認めますことよ」

とだけ書いてあつた。袁紹に書いて貰つた書簡を持つて袁術の所に行き彼女と側近の張勳に見せて

袁紹と約束した事を言い袁術にも同じ様に撤退を認める書簡を書いて貰う。こちらにも似たような文面で

「この妾こと袁公路が直々に撤退を認めるぞよ」であつた。

この二本の書簡で自分の領地に帰ると云う大義名分が確保された。

自軍に戻ると撤退準備も完了しており門の前には稟と風が立っていて、その横には焰耶の姿も見える。

彼女達のそばに行き右手で親指を立て成功した事を伝え皆を集めて話をする。

「袁紹、袁術の方は終わつたよ。準備は大丈夫かい？」

先ず稟が

「問題ありません。すべて完了いたしました」  
続いて風も

「一緒に撤退される方々の陣に必要な最低限の糧食を渡しました」  
おそらくこれで皆、自領にまで戻れるものと思いますよー」

稟が最後に

「ここに用事はありませんので早速撤退したいのですが宜しいでしょうか」

焰耶もこれに頷き撤退を開始する。

連合の門前にて止められるが、総大将と副将の書簡を見せて門から堂々と出て行く。

一刀達以外の者はこれから向かう洛陽に董卓と重要書類が無い事を知らない。

それを知っているのは劉備、馬超、孫堅の三人だけである。彼女達に記した手紙には

「洛陽には何も無し。洛陽より先、深追い禁止」  
と書いて送ってある。

～その頃曹操軍陣地で～

「か、か、華琳様！！た、大変です」

息を切らして桂花が曹操の天幕にやってきて報告する。

「北郷軍と何人かの諸侯が撤退準備をしていると密偵から連絡です。北郷に到ってはもう撤退を始めております」

自分の趣味である兵法書の注釈を行っていた彼女は筆を止め問いた  
だす。

「どついう事なの。何かの間違いではなくて。詳しく説明なさい」  
猫耳軍師は畏まって

「袁紹、袁術の両名が北郷と何人かの諸侯の撤退を認めると自身で  
宣言しておりますので

間違いではないかと思われます。それと陣中の門前で止められた北郷が袁紹、袁術の直筆の

書簡を見せたと門兵が証言しております。」

それを聞いた曹操は眼を閉じ考え込む。それを見ていた桂花は

「それと我が軍の密偵が北郷と何人かの者が袁紹、袁術の天幕を尋ねたと目撃情報があります。その時に撤退が許可されたとみるべきかと」

そう言われ「そう」とだけ呟き自分の考えを纏めていた。

～北郷軍～

一刀達は素早く撤退準備を終え帰路についていた。

最近やつと馬に慣れてきた一刀の元に稟、風がやってきて言う。

「一刀様。そろそろ宜しいかと思ひますが」

続いて風も

「そうですね。万里ちゃんも向こうに着いた頃でしょうし頃合いかと」

準備してある自分用の荷物を持って横に居る華雄に声をかける。

「じゃあ華雄、行こうか」「ああ」

そう言つて俺達二人を見送る軍師に向けて

「じゃ後の事は二人に任せる。焰耶と華雄の兵の事を宜しくな」

「お任せ下さい」「了解なのですよ」

と二人はいつもながらの返事をしその場に外套を深くかぶった俺と華雄を残し

軍をそのまま率いて行った。

皆と別れたその場から洛陽市内の利準の屋敷へと移動する。華雄は自分の武器の戦斧を持ち

俺と話しながら歩いていった。俺は焰耶に敗れてウチの軍医に診察され目を覚ました時の華雄の事を思い出していた。当初は興奮し



「殺せ」「何も喋らん」「知らん」の言葉しか言わなかったが俺がこれから起きる事と

俺達が仕掛けた事を書いた書簡を渡した所

「・・・お前！！本当なのかこれは？」

と聞き返して来たので

「ああ。董卓さんに直接味方しても勝算は低いと思ってね。それなら裏から

董卓さんを助けようと思ったんだ」

書簡を読んでから少しではあるが口を開いてくれた。それでも完全に信じては貰えて無い様だったので

彼女と二人きりになり話し合った。（勿論全員に反対されたが）

そして彼女の配下の生命及び自由の保障、董卓の安全と董卓を保護する時に自分も連れて行くと

云う条件で協力してくれる事となった。その直後に彼女は自身の真名が無い事を教えてくれた。

俺にも真名は無いと言うと少し驚いていた様だったが……

彼女の部隊の全員には、軍に残りたい者と帰郷したい者を聞いており帰郷したい者は洛陽近郊で

纏めて長安に行ってもらう。そこで幾ばくかの金を渡し馬超達とともに帰ってもらう手筈を整えていた。

残りたい者はそのまま俺達の軍に編入させて稟に任せた。

洛陽近郊にて自身の兵と別れた後、俺が振り向くと彼女は

「今までの非礼をお許してください」

と言い跪いていた。俺は

「気にしないでいいよ。君にも手伝ってもらうからね。洛陽で董卓さんと俺の護衛は任せた」

そう言って彼女の肩に手を置いて

「さあ行こう。もう少して洛陽だよ」

そう言い先に歩きだした。そんな一刀の姿を見て今まで感じた事のない不思議な気持ちになり  
そんな自分にも戸惑う華雄であった。

↳ 連合軍では

袁紹、袁術を問い詰める曹操がいた。理由は勿論北郷の撤退の事であつたが問い詰めるは

曹操と何人かだけという構図が出来上がっている。

孫堅、劉備、馬超達はこれからの事を話そうと言っていた。曹操は袁家の二人を問い詰める。

「何故、北郷を帰還させたのか、それだけでもお聞きしたい」

後ろから彼女に賛成する諸侯達が

「そうだ。説明して頂きたい」

と野次馬の様に言っているが連合軍の極一部に満たなかつた。

殆どの者は「次こそは手柄を、もしくはそれに代わる物を」と考えており

「北郷一刀の事」など如何でも良かったのである。

そこにその他の者を代表し孫堅が

「曹操。もうよいではないのか？。ここに集まった者の殆どが次の洛陽の事を話し合いに

来ているんだと思つているが」

その言葉を聞き彼女は孫堅に何かを言おうとし止めた。自分に向かつて非難とは違つが

それに近い視線が集中していたのだ。曹操はここで孫堅と言ひ争うのは得策ではないと悟り

孫堅の方を見て少しだけ頭を下げたその場に座る。それを見て孫堅は袁紹に対し対洛陽戦の事を

話し合う事をすすめ袁紹は喜んで話を進める事となつた。

↳ 軍議が終わつてからの曹操の天幕

「おかえりなさいませ、華琳様。如何でしたか」

そう桂花が話しかけた。

「貴女の言った通りね。おそらく孫堅、劉備、馬超の3名は何かを知っていると思うわ。」

そうしないと腑に落ちないもの。それと次の洛陽は麗羽達が先陣にいくらしいわ。

次に私達と劉備、最後に孫堅、涼州軍、残りの者達ですって」

それを聞いた曹操軍猫耳軍師は

「やはりですか……。そうではないかと感じていたのですが」

そこまで言い一問開けて

「先程来た連絡ですが董卓は軍師の賈馱とともに消息は掴めないとの事。」

更に軍勢もないとの事として呂布、張遼、陳宮も同様で行方不明との事です」

そこまで報告し一度区切って

「後、北郷軍が捕虜を洛陽近郊にて解放したとの連絡とその時に二名の者が軍勢から別れ

洛陽市内に消えたとの報告もあります。それから洛陽を探らせた何名かの密偵と連絡がとれません」

報告を聞いていた曹操が食いつく。

「やはり、北郷が何かを仕掛けていたと考えるべきね。桂花」

桂花は頷き

「はい、おそらくは。それと洛陽、更には董卓が逃げたとされる長安にも何か仕掛けて

あるかもしれません。慎重に行きませんと大変な事になる恐れもあるかと」

その夜曹操の天幕では明りが消えなかったという。

一刃は洛陽に入っていた。門兵に手形を見せて入るとそこには都らしい大通りが走っており

素晴らしい街並みがあった。しかし通りには人の気配は殆ど無く静まり返っている。

何人かの人達に市場の場所を尋ねその場所に行くとそこには人は殆どおらず営業している店も

数える程しかない。そのうちの一つの屋台に行き料理を注文し腹ごしらえしお金を払い話しかける。

「お久しぶりですね。利祉さん」

頬被りをした男性にそう言うと

「やっぱりばれた？ここまでお疲れさん。利準の奴も待つてるぜ」

利祉は一刀にお釣りとともに紙を渡して食器を片づけ出す。一刀は

「ごちそうさん」とだけ言って

立ち上がり歩いて行く。立ち上がる時に一刀は横に居る華雄にそつと尋ねる。

「何人付いてきてるかわかるかい？」

華雄は自分の戦斧を持ち直す振りをして辺りを探り

「三人ですな。我らが洛陽に入ってから付いてきています。まさか

気付いていたとは驚きましたぞ」

華雄と二人肩を並べ歩きながら

「大した事ないよ。さあ行こう」

と言いお釣りとともに貰った紙を見て場所を確認し大通りを直進し少し、

裏道に入りある場所にたどり着く。そこは紛れもなくスラム（貧民街）だった。

華雄は「本当にここに月様が？」と俺に尋ねてくるがあえて無視し

そのまま紙に書いてあった

長家に行き戸を3回叩きその場にて待つと中より

「誰だい？」と聞こえ俺が「利準さんの知り合いです」と答える。

すると

「あんたが旦那様の友人の方か。入りなさい」

無精髭をはやした中年の男性が戸を開けて俺達を中に入れる。

俺達が入るとすぐに戸を閉めて棒で戸が開かないようにし

「これから旦那様のもとへ案内します」

と言って部屋の壁の側に行くとうこうから壁が開き

隣の部屋に移り更にもう一部屋同じように移動した。するとそこには万里がおり横には星もいた。

「お疲れさまでした。ここまでくれば大丈夫でしょう」

と後ろから利準も現れる。その場で少し話していると後ろより俺の密偵が現れて

「ここまで付いてきた者達の排除を完了いたしました」

とだけ言つてまた街に消えて行く。それを聞き俺たちは利準の屋敷に向かう事にした。

連合軍は虎牢関を出て洛陽に向かおうとしていた。先鋒に袁紹、

袁術が兵を配置しており

虎牢関では大敗したがそれでも連合で率いている兵士数では今だに1・2位を誇っている。

兵士の数だけではあるが……

放った密偵達によると洛陽は少し荒れているという事だったので孫堅、劉備、涼州軍で洛陽を

警備及び復興支援を担当する。袁紹は糧食の事で反対していたが孫堅達三人が

自分達の糧食を出す事を提案し承認された。孫堅達が出すと言ったその糧食は

予め利準、利祉達が用意してあつた物で洛陽の何か所に分散して置いてありそれを一刀が

孫堅や劉備達に教えていたのである。

袁紹・袁術の両名が軍を率いて洛陽に向かうのを確認し後方に位置する、孫堅こと紅蓮は

自分の後ろに居る二人に

「さて、洛陽に行って街をパツパツと復興させて帰るか。雪蓮、冥琳」

と話しかけられた二人は

「そうね、お母様。しかし一刀も最後に手柄をくれるなんて流石ね」

「ふむ、しかし雪蓮よ、あまり喜んでばかりもおれんぞ。

何せ今回一番得をしたのは誰かという事を考えてみる」

冥琳がそこまで言うと紅蓮は

「一刀達も大きな収穫があったようだな。

だが俺達もかなり良い成果があったんだし気にすることは無い」

そう言い紅蓮が歩きだすと雪蓮も冥琳も着いていくのだった。

冥琳は紅蓮に着いていきつつ考えていた。

（北郷の軍が撤退したという事は洛陽での用事が終わったという事。おそらく粗方の重要な物は

あるまいな。更に我等も迂闊に行動すれば危ない……それにしても最後の

「井戸を調べよ」が解からん。解からんが絶対行かねばならん気がする）

そう結論とこれから起こる事に対し考える冥琳であった。

劉備軍では劉備こと桃香と孔明こと朱里の二人別々に手紙が来ていた。

桃香の手紙には今回世話になった事に対してのお礼などが書いてある。

本命は朱里に出した手紙で先ず最初に「雛里と一緒に見るように」と万里直筆の文から始まり

洛陽にある糧食や天幕の隠し場所とともに「余ったら持って帰って良いよ」とも書いてあった。

同封した物の中には『袁・劉・曹』と書かれた紙があり万里の忠告通り鳳統こと雛里と一緒に

読んでいた朱里は

「雛理ちゃん。これ忠告かな？」

朱里に尋ねられた雛里は

「うん、たぶん袁家のどちらかと曹操さんだと思う」

朱里は雛里と対応策を考えて最後の手紙を読みそれを雛理にも見せる。

そこには『もしもの事』が書いてあった。

その後、出陣まで二人は手紙の内容と自分達の今後を話しあった。

馬超こと翠は自身に届けられた書簡を読むと隣に居た馬岱こと蒲公英に渡した。

蒲公英が読み終わるのを待ちこう言った。

「お前はどう思う蒲公英。あたしは洛陽で復興支援する事は賛成だ。しかし書いてある、この場所に来いってのは何だろうな」

尋ねられた蒲公英は

「多分、洛陽で私達に何かをしたいのじゃないかな」

翠は混乱しつつあった頭を更に混乱させて

「何かって何だよ」

翠が混乱しつつあるのを見てとり

「姉様や私が考えても仕方ないよ。行ってみれば解かるんだしその時まで考えるのは止めようよ」

そう言った蒲公英に丸め込まれ考えるのを止めた翠であった。

洛陽に居る一刀は衝撃的な対面をしていた。

「初めまして。私が董卓、字を仲頼と申します。御遣い様。この度は色々……」

彼女を見た瞬間全てが真っ白になり彼女が言った言葉も右から左に流れて行く始末である。

一刀は意識を彼女との会談に戻し彼女を見る。

彼女の第一印象は脆くも美しいガラス細工の人形の様に見える

手荒く扱う事を躊躇う雰囲気をもとっていた。

一刀は彼女につき従う眼鏡を掛けた少女にも自己紹介をし彼女と目を合わす。

すると眼鏡を掛けた少女は

「私が賈馱。字は文和よ。御遣い様。それでだけど……」

「二人とも、一刀で良いよ」

と二人に言う。そして万里の方を見て二人にこれからの事の説明を頼んだ。

万里が二人に説明をしている間、星と利準に話しかける。

「星、万里の護衛をありがとう。自分の準備は大丈夫かい？」

聞かれた星は事も無げに

「大したことではござらん。私の方は利準殿にお願いした物をこの目で拝む事が出来て幸せですぞ。勿論準備も万端ですぞ」

目をキラキラさせ、高揚した星を不思議に思い利準に尋ねる。

「星殿のこと？。ああ、彼女は幻と言われたメンマが手に入りそれを渡した途端あの調子なのですよ」

溜息をつき俺は利準に話しかけようとした所で扉が開き

「おお、まだ居たか。そろそろ準備しとけよ」

そう利準がさつき会った格好で戻ってきて言った。

利準、利準と話し終わってからすぐに万里が董卓、賈ク、華雄の三人を連れてきて言った。

「一刀様。御三方からお話があるそうですが」

先ず董卓さんが

「私はお父様やお母様に会う事は出来ません。

私の為に命を落とした兵士さん達の為に償いをしなければ……」  
そこまで言うつと沈黙した。「月（様）」と二人の声が重なる。

少しして彼女は

「ですから私は一刀様のご厚意を無にするようですが私は一緒に行けません。

ですが私の代わりにここに居る詠ちゃん和华雄さんをお願いしたい



のですが」

董卓さんの言葉を聞き付き添う二人が

「月、何言ってるの!!!」「月様。それは・・・」

と二人が問うが董卓さんは黙ったまま。しかしそれを聞いていた星が董卓さんに問う。

「董卓殿。失礼を承知で申し上げます。貴殿は償いと申されるがそれは如何様にして償うおつもりか？」

尋ねられた彼女は「……」と沈黙を貫こうとする。

そこまで黙って聞いていた俺は彼女の考えが解かり彼女に問う。

「もしかして、自分の命を差し出そうとか思つて無いよね？」

俺に言われた董卓さんは平静さを装うとするも隠せないでいる。それを見て華雄が

「月様、お願いです。そんな事なさるのはお辞め下さい」

更に賈馱も

「月!!!。貴女に何かあつたら僕……」

二人は董卓さんにしがみつき考えを改めてくれるよう説得する。

その光景を見ながら俺が

「君の事をこれだけ心配している人達がいるんだよ。それなのに君だけ逃げるのかい？」

董卓は自身の命と引き換えに責任を取るつもりだった。だが自分の腕にしがみつき泣きながら

訴える友人と配下を見て如何したら良いか解らなくなってしまった。

そんな董卓の様子を見て一刀は続ける。

「君が悩むのは仕方ないと思う。だからその償いの何分の一かを俺にも背負わせてくれないか？」

一刀の言葉を聞いて董卓は尋ね返す。

「何故私の贖罪を貴方が償おうとされるのですか？」

一刀は事も無げに

「唯、女の子が泣いているのが嫌いなだけだよ。更にそれが謂れの無い皆の欲望の餌食に

されようとするのが許せなかった。しかし俺達も今回の戦いを利用したのも事実だ。

だから俺にも責任があるんだよ」

そこで一旦区切って

「君と一緒に償いの片棒を担がせて欲しい」

一刀の言葉を聞き董卓はその場で泣き崩れる。それを賈馱と華雄は「……月（様）」と呟く事しか出来ない。

一刀はそんな泣き崩れた彼女を優しく抱しめて頭を撫でていた。

彼女は落ち着きを取り戻すと自分の真名を一刀に授け一刀についていくと約束してくれた。

「月（様）が行くなら」と賈馱も真名を預けてくれて両名ともついてきてくれると約束した。

董卓こと月や軍師である賈馱こと詠を保護し洛陽郊外の利準の屋敷に移り連合軍の様子を伺う。

翌日連合軍は袁紹、袁術を先陣に洛陽に進軍して来た。

連合軍の到着と入洛を確認し月達を連れて利準のお抱え商人に変装し荷物を持って洛陽を発つ。

少しして後方に砂塵があると報告を受け注意していると「お〜い」と声がして近いて来るとともに

翠と蒲公英だとわかり彼女達を迎える。

翠達と月達は顔なじみであった様で四人は会うと直ぐに話し合っていた。

それが済むと俺の方にやってきて言った。

「一刀、ありがとう。お陰で月達に会う事が出来た。それで此処に呼んだ理由は何だ」

翠が用件を尋ねるので俺は懐から二通の手紙を出し彼女に渡して

「これを馬騰さんに渡して欲しい」

翠が馬騰宛の手紙を受けとりししまうと俺は言った。

「君に二つ頼みがある。一つ目は長安に居る月の軍の事さ。君が領地に帰る時に一緒に

連れて帰ってやって欲しい。糧食や兵隊に支払うお金は前に渡した手紙に書いた通り

向こうに用意してあるからさ」

翠は間を置かず了承してくれた。安心して続ける。

「二つ目だけどこれを君に預ける。もし困った事が有ったら遠慮せず頼って欲しい」

一刀は翠に割符を預ける。その割符にはこう書かれてあった。

『この割符の保持者及び従者の、領内の通行を許可する』

それを見た翠は「これは何だ」と一刀に尋ねるが

『保険だよ』と言うともう一枚を蒲公英に渡す。

受け取った蒲公英も困っていたが何も言わずに受け取ってくれた。

彼女達に洛陽内の事を任せて俺達は漢中へ向かう事にした。

## 連合からの撤退（後書き）

更新が遅れた理由として以下の理由がありまして・・・

- 1、気管支炎及びそれに伴う発熱によりやる気を削がれ
  - 2、HDDの故障とPCの不調により・・・以下同文
  - 3、PSPやDSに夢中になり・・・以下同文
- と主にこの3つ（8割くらい3が占めますが）により遅れてしまいました。

特にDSで悪魔召喚にハマり抜け出せなくなって2週間どっぷり浸かってました。

申し訳ありません。これしか出てきません。

今回は撤退中の話と連合解体の話に行けたらと考えております。  
ここまでお読みいただきありがとうございます。

## 連合崩壊と孫堅台頭、（前書き）

先ず最初にいつの間にかお気に入り登録が160人を超えてました。読んで下さった方々に厚く御礼申し上げます。

これからも拙い文章は変わらないでしょうがよろしくお願いいたします。

今回も長くなってしまいました・・・すみません。

今回は連合崩壊と孫堅の勢力拡大が大筋です。

\*今回も自分で文を見回しましたが誤字脱字・食違い等  
有りましたら御連絡ください。

## 連合崩壊と孫堅台頭、

一刀が翠達と話をしていた時、洛陽に入った者達は色々な事に驚愕するのだった。

まず董卓は勿論の事、董卓兵も一人も居らず

そして諸国の地図及び台帳もその全てが消えておりその他の諸々の書類も消えていた。

洛陽は治安を維持していた董卓軍が完全に居なくなつて

匪賊や黄巾の残党くずれの連中が街中に入るほど治安は悪化していた。

連合軍はその夜軍議を開くがそれぞれが独自の意見を言うだけで纏まらなかつた。

袁紹・袁術は長安に逃亡したとされる董卓軍の追撃を主張するが曹操はここ洛陽に留まり情報を集めるべきだと主張した。

一刀からの手紙で知っている孫堅は長安に行くつもりは無く劉備・馬超も同様であつた。

その他の諸侯達の意見も割れ、

袁紹・袁術に賛同する陶謙、韓馥、孔融等と

曹操に賛同する鮑信、張？に分かれ残りは様子見の者となつた。

結局は袁紹達が賛成した者達だけで行くと言う事に決まり

出陣は明後日とし孫堅等を除く全軍で行く事となつたが結局、最後まで先鋒は決められなかつた。

理由は単純で次の相手が虎牢関で痛い目にあつた呂布、張遼と予想され

先鋒など引受けて今回も同じ目に遭わされては堪らないと皆が思つていたのであつた。

先鋒が決まらない事に業を煮やし最後は袁紹自身が先鋒になると言

い出し袁術も一緒に行くと言い  
誰も止めようするも聞きいれず決まってしまう。  
他の事は後で決める事となりその場は休憩となった。  
曹操は結局、袁紹達に何かあつては自分に不利になるのではと思  
付いていく事にした。

（軍議後の曹操軍陣地）

曹操は自身の配下を集めて軍議の結果を話していた。先ず口を開い  
たのは桂花であつた。

「私が思いますに今の連合では呂布や張遼達と一戦交えるのは得策  
ではないと判断いたします。」

ですのでここ洛陽に留まり様子を見る事を進言いたします」  
それを聞き春蘭が反論する。

「何故だ。ここで呂布や張遼を我々で倒せば全て華琳様の手柄になり  
後の事に色々有利ではないか。そして私は華琳様に閨に呼ばれて……」  
色々危険な妄想を始めた春蘭に辛口な反論を桂花が始めた。

「あなたの頭の中に詰まっているのは肉味噌でも無く本当に筋肉み  
たいね。本当にこの脳筋女が」

「何ー！！私の頭の中身がすかすかのへちまみたいだと！！」

「誰もそこまで言つてないわよ！！」

と二人が言い争いを始めた為、頭を抱えながら曹操は

「二人ともいい加減にしなさい！！」

自身の主に叱責され両名とも

「申し訳ありません華琳様！！」

と声をハモらせて謝る。

2人が黙つたのを見て曹操は続ける。

「桂花。貴女の心配は今の連合内部の事と麗羽に付いて行かなけれ  
ばならない私の状況の事ね」

曹操は言つと目を閉じて桂花に続きを任せた。

「はい」とはつきり言い目の前にある机に駒を出して説明する。

「今、この連合で最大戦力は袁紹、袁術の二人です。この二人だけで現有戦力の約4割を占めます。」

これに支持する諸侯達の戦力を加えますと5割にまで膨らみます」  
そう説明しながら桂花は「袁紹」「袁術」と書かれた駒を振り分ける。

「対し反対する私達は約1割です」

更に「曹操」と書かれた駒も同じく振り分け

「残りには孫堅、劉備、馬超の洛陽居残り組と日和見組です。ここには公孫賛も含まれます」

残りの駒を振り分けて行く。そして

「この状態が更にややこしくなります。先ず袁紹・袁術は目的の為に団結しているのであって

目的が無くなるとお互いに反発しあうのは目に見えております。」

最近軍議以外の処で二人の配下が暗躍しております。恐らくこの後の事に関しての事でしょうが……

目的も果たしてないのに今の状態では亀裂が入るのも時間の問題かと思われまます。」

そうなると今は二人に付いてる諸侯も割れます」

そう言い「袁紹」と「袁術」の駒を分けてそれに伴い「韓馥」や「陶謙」の駒も分けていく。そして

「これを見ても解かるとおり今の連合が一枚岩とは程遠い状態である事は明白です。」

初めから一枚岩だったかと言われれば疑問符が着きますが

それでも「打倒董卓」の目標があった事により一応の結束はありました」

そう言っ出て出した駒を戻しながら話を再開する。

「その仮にでも纏まった状態で呂布と張遼に当たった結果は華琳様や皆の知っているとおりです」

一息区切って続ける。

「先鋒は粉碎され総大将・副将も逃げ出す始末。我が軍も最強の二



人が呂布と戦い突破こそ

されなかつたものの北郷軍の趙雲や劉備軍の二人が来るのが遅ければ大変な事態に陥っていたかも知れません」

そして曹操の方を向き

「更に今、我が軍の兵達の士気はかなり落ち込んでおります。

その状態で呂布や張遼に当たるのは自殺行為としか言えません。

また華琳様が自ら指揮されたにも関わらず互角に渡り合った陳宮の存在も見過ごせません」

曹操は桂花が言った事を自分の中で考えていた。桂花は更に続ける。

「本当ならすぐ袁紹達を捨てて領地に帰るのが上策ですが、今の華琳様の立場ではお勧め出来ません」

桂花の話聞いていた春蘭は隣に居る秋蘭に小声で訊ねる。

「なあ秋蘭。お前今の話、解ったか？」

姉の困っている顔を見るのが大好きな妹は姉の困り顔を堪能しこちらでも小声で説明する。

「姉者。華琳様が連合の軍師ということは知っているな？」

「その位、私でも解る」

と言い、怒るような顔をした姉を愛しく思いながらも続ける。

「その連合の軍師が総大将の袁紹や副将の袁術を捨てて帰ると軍師である華琳様の名前に傷が付かかねないと言っているんだよ」

解ったのが疑わしい春蘭を見て微笑し曹操は桂花に次を促した。

桂花が話そうとした時、密偵が報告をしにやって来た。彼女は密偵の報告を聞き曹操に報告した。

「申し上げます。北郷一刀を洛陽より離れた街道で発見しました。

何名かの者と行動中の事です」

それを聞き曹操は

「そう。じゃあ少し挨拶に行きましょうか。聞きたい事もあるしね。

春蘭、秋蘭の二人は私が帰ってくるまで待機。桂花は次の軍議に私の代理として出なさい。

麗羽には私から言っておくわ。護衛には季衣を連れて行く事にしま

す

そう言つて自分の愛馬を用意するように言いその場を後にした。

（劉備軍の陣地）

劉備軍の陣地に紅蓮、雪蓮、冥琳の三人が訪れていた。

今、桃香の天幕に居るのは孫家の3人と桃香、愛紗、鈴々、朱里の4人がいた。

紅蓮たちの目的は桃香の人となりや幕僚を見る為と一刀の手紙により彼女達が

協力者という事を知っておりその為の挨拶をしにきたということ云う側面もある。

紅蓮は少しの雑談をして劉備の陣を後にした。

自陣に戻る途中で紅蓮は連れて来た2人と先ほどの劉備達の事を話していた。

「俺から見た劉備の印象は御人好しで武も智も感じないが何故だか油断出来ない人物だな。お前はと思う。雪蓮」

「私は劉備自身はそこまで注意する人物ではないけど側近達の方が問題じゃないかしら」

そう言い自身の考えを述べていく。

「関羽、張飛は私やお母様より強いつて解つたし孔明、鳳統の二人は切れ者つて感じだったわね」

横で聞いていた冥琳は

「私は密偵からの報告で聞いていたより智将・猛将が揃っている事に驚いた。

関羽や張飛は紅蓮様や雪蓮が言うのだから強いのだろう。孔明や鳳統は私が見るに

この連合に集まった智者の中で最上位に位置してもおかしくない位の者達だ」

そこまで言つと冥琳は眼鏡を触りながら続ける。

「しかし、まだ私達より小勢力だし、まだ恐れる事は無い。しかし将来は解らん。」

もし劉備が大きな領地を持ち力を蓄えて彼女に対して状況が有利になれば

何処まで大きくなるか想像もつかん」

冥琳の言葉を聴き紅蓮は微笑し

「ふふふ、一刀、劉備、曹操、袁紹と戦乱を彩る役者が揃って来た感じがするな。面白くなってきやがった」

そう言い笑う紅蓮の後ろでやれやれといった感じの2人がいた。

劉備達は紅蓮が帰った後話し合いをしていた。

「あれが江東の虎の孫堅か。武はかなりのものだな」

愛紗が一言目を発した。続いて鈴々も

「あのおばちゃんも強そうだけど後ろにいたお姉ちゃんも中々強そうだったのだー」

愛紗はそれを聞き

「孫策と言ったか。ああ、私も感じた。それにもう一人軍師の周瑜も曲者だな。」

そこは同じ軍師からどう見る、朱里、雛里」

尋ねられた二人はお互いを見つめ朱里が

「私達も愛紗さんと同じです。孫堅、孫策さんの事は解りませんが周瑜さんに関しては」

この連合に集まった智者達の中でも五指に入るかと思えます」

そこまで言つと雛里が代わって

「孫堅さんの軍は袁紹さんや袁術さんに比べ練度や士気も高いですがそれでも数も少なく成長途中と言った感じです。」

彼女達がもし今より大きな勢力を持ち軍を整えれば脅威です」

愛紗は最後に主である桃香に訊く。

「今までの話の中で何か質問がありますか。桃香様？」

そこには頭より今にも煙を出しそうな桃香がいて

「皆の話が難しすぎて解んないけど皆、仲良くって事だね!!」  
その笑顔を見ると今まで話した事は何だったのかとため息を吐く鈴  
々を除く三人だった。

連合を撤退し月達を保護して帰途に着いていた一刀の元に  
曹操が護衛として季衣と数名の親衛隊を引き連れ追いついたのは夕  
暮れも近くなつた時であった。

周辺を探っていた者より何名かの者がこちらに向かつて来ると報  
告がありその場にて  
利準や利社から預かつた荷物や馬車を守る様に待構えているとそこ  
に現れたのは曹操であった。

彼女は話があると言つて馬を降り俺と横に居る星の方を向き  
「虎牢関での大切な部下の危機に対しての助太刀、感謝するわ」  
と言つた後、いきなり頭を下げた。そして俺の方を見て

「今回の戦で私の考えた予想の遙か上を行き何名かの者を除き私を  
含めて殆どの者に

打撃を与えつつ、この後に起こる事を正確に見抜き自分の目的を成  
し遂げた貴方を認めましょう。  
だから2つだけ正直に答えて」

一息つき彼女は言つた。  
「貴方はこの戦で何を思い、何を掴んだの？麗羽に聞いたのだけど  
貴方、褒章を放棄したそうね。  
これが一つ。もう一つは貴方はこれから訪れる戦乱の世に何を望む  
？」

そう問われて俺は即答する。  
「先ず一つだけ。目的の為の道筋を考えたのは俺じゃない。俺の誇  
る軍師達だよ。」

そこを勘違いしてはいけない。俺はそれに従つただけだよ」  
そう言つて曹操の問いに対し考えながら話す。

「俺はこの戦で戦の愚かさを悟った。しかし戦は愚かだけどその戦を俺は否定しない。」

力を否定しない。戦を鎮めるにしても話し合いだけでは解決できない。

まず力を見せ付けないと解らない者もいる。そうだろう、曹操」

曹操は俺を睨む様に見ていた。俺は更に続ける。

「手に入れたものは…いや、守れたと言った方が良いかな？自身を楯にし主を守ろうとする者や

主も己を犠牲にしてまでも他の者を守ろうとする絆と生涯背負っていかなければならない償いさ」

そう言い馬車の幌ほろから覗いていた月や詠を見て微笑む。

「そして最後にこの後すぐに来る戦乱の世に対し俺は…」

そこまで言って自身に着いて来た者達を見つめて

「これ以上戦乱で泣く人を増やさない為に、俺は俺を信じて着いて来てくれる者と共に戦乱を鎮める」

言い終わると同時に横に居た星や万里の他、護衛として就いて来ていた一刀の親衛隊の者達が胸に手を当て敬礼をしていた。

その光景を見て曹操は俺に聞いて来た。

「その覚悟の中に武力で叩き潰すと言うのもあるの？」

俺が彼女を見たまま無言で頷くと

「貴方をまだ見誤っていたみたいね。それに貴方の配下の者も。そこまで力を使う覚悟が

出来ているなら何も言わないわ。次に会うときは戦場でしょうからね」

そう言って馬に飛び乗り帰ろうとする曹操に

「もう帰るのかい？曹操」

「華琳よ」

「えっ、でもそれは君の真名じゃあ……」

「貴方を見誤った私からの謝罪とでも思いなさい」

「解ったよ。ありがたく君の真名を受け取らせて貰うよ。華琳。

俺は真名が無いから一刀と読んでくれれば嬉しい」

自身の真名を呼ばれ、更に一刀の笑みを見て少し高揚気味に

「いつ、言っただでしょう。謝罪だと」

そう言い、心を落ち着かせつつ続ける。

「私が連合で言った事を忘れないでね。私は欲しい物はどんな手を使ってでも必ず手に入れると」

最後に「ニヤツ」と笑い

「今、一番欲しいものは貴方よ。一刀。じゃあお邪魔したわ」

と言っただけで帰っていった。華琳が帰って後、その話で星や華雄に

「主は人気者ですな」やら「まさか真名まで貰うとは」

と弄られる一刀だった。しかし最後に星が

「主も大変な者に目を着けられましたな。しかし私や焰耶、稟、風、

万里や皆が居る限り、

主には指一本触れさせはしませんから御安心を」

と言ってくれたのが嬉しかった。

連合軍は袁術、袁紹を先頭に長安に向かっていたが途中何度か奇襲に会うが全て追い返し

数日掛けて長安まで後一步の所まで来たのだがそこでの休憩中に呂布に襲われて大混乱し袁紹も袁術も命辛々逃げ出すのであった。

袁紹軍の2枚看板の顔良・文醜と袁術軍の紀靈・李豊・梁剛・陳紀は協力し呂布に当たるが

李豊・梁剛・陳紀は討たれことごとく蹴散らされてしまう。

先鋒が呂布に襲われたとの報を聞き曹操は駆けつけようとするが

後方より現れた張遼率いる部隊に後方を衝かれこちらでも混乱する。曹操軍を後方より襲っていた張遼軍の全員が

「うらあああ！！張遼見参やー」

「遼来々！！遼来々！！」

と叫んでいた。戦後、ある兵士が言葉の意味を尋ねると彼女は笑って「ある奴が教えてくれたんや。ウチにはこの言葉が一番つてな」

と言ったと言う。勿論ある奴とは一刀の事である。張遼隊の攻撃が本陣まで達しようとした時、

呂布軍後方より銅鑼が鳴り響きそれを合図に呂布と張遼は撤退していった。

後方に待機していた陳宮から合図があり陳宮と合流した2人はそのまま軍を引き返して行った。

残された亡骸の多くは連合軍のものであった。

連合軍はこの日の夜、軍議を開き余りにも損失を出した袁家の2人が諦めたのであっさりと

洛陽に引き返す事を決め翌日撤退した。

洛陽に戻ると今度は袁家の2人が今後の事を巡り言争いになる。対立は連合を真つ二つに分け袁紹派と袁術派に分かれ後の勢力争いに影響を与えていくのである。

連合は洛陽に戻って2日後に糧食の不足や連合内の不和が重なり解散となった。

大した成果も上がらず撤退していく諸侯を余所に孫堅・劉備・馬超の3勢力は洛陽を分割して自分達が受け持つ場所を明確にし精力的に復興していった。

復興作業を始め何日後の事である。孫堅軍の情報収集のスペシャリストの周泰こと明命は街中での

情報収集中にとある噂を聞いた。それは主婦達の噂話の一つで

「とある井戸が夜な夜な光る」

というものでその光が龍に見える者もいるという。噂の真実が本当か確かに雪蓮や冥琳を伴って行き  
光る井戸の底にあった物は豪華に装飾された袋に入った

玉で出来た印鑑………玉璽であつた。

それを発見した雪蓮は驚き、冥琳は眼鏡を直しつつ何かを考え  
明命は「あわわ、どっ、どうしましょうか？」とかなり慌てていた。  
冥琳はその時、頭の中では目まぐるしく考えては破棄を繰り返して  
最良の方法を考えていた。

（ここで玉璽を拾つたと言えば袁術が奪い去って行く事も…しかし  
これは我等の名を上げる好機。

紅蓮様には知らぬ存ぜぬを賣いて買えば良い。しかし北郷一刀。奴  
は何者だ？

この事を知っていたなら自分で探せば良いものを…何故だ？  
もしかしてそうせねばならん訳でもあると云う事か…)

そこまで考え明命に紅蓮を呼んで来る様に言い耳元で何かを告げて  
行かせた。

その後、雪蓮とその場で紅蓮が来るのをしばらく待つていた。

紅蓮がやってくると彼女は自分の考えを話し始めた。

「明命にはこの事を洛陽中に噂として流す事を命令してあります。

紅蓮様にこれから何人かの諸侯が

噂の真意を探りに来るでしょう。そこで紅蓮様には「知らぬ存ぜぬ」  
を通していただきます。

噂が広がれば我等にも味方、もしくは協力者も出て来るでしょう。  
そこで玉璽を持つに相応しい態度を取って頂きます。そこで認めら  
れれば更に噂は広がります。

さすれば益々、協力者は現れ力を貸してくれる筈です。

それを繰り返す内に力を蓄えれば袁術を追い落とす事も可能かと「  
冥琳の言葉を聴いて紅蓮は



「猫を被れという事か。それなら俺の得意技だな。冥琳、お前は誰が確かめに来ると思う？」

紅蓮の問いに少し考え

「袁紹・袁術は絶対に来ますね。今回、全く良い所が無かったですからね。後は曹操かと。」

他はそんなに気にする必要は無いと思われませう

そう話は纏まり紅蓮達は実行に移すのだった。

袁紹・袁術は噂を聞き早速使者を立てて来たが、紅蓮は

「知りませんな」「私が玉璽を？滅相も無い」

と切り返し煙に巻いて行くのだった。袁紹達の使者と入れ替わりに曹操自身が現れ紅蓮に

2人きりでの面会を申し込むのだった。紅蓮は面会を了承した。

「この度はどの様な御用でしょうか。曹猛徳殿？」

「ふっ、解っているでしょうに。噂の事よ」

「さて、何の事やら？さっぱり見当も付きませんな」

「貴女がそう言うなら何も言わないわ。」

私は誰が玉璽を持つと使おうと興味無いもの。最後に質問しても良いかしら？」

紅蓮が質問の内容を聞こうとする前に

「貴女はこの後、何を望むの？」

曹操の表情が真剣になった事に気づき、少し間を空けて

「この後とは洛陽を復興させた後の事か？」

曹操は無言で頷く。それを見て

「勿論、孫家の名の下に天下を狙うが、その前に少し煩い揚州の子猿と

小賢しい荊州の女狐を駆除してからだな」

そして最後、曹操に対し

「最後はお前と一刀だが一筋縄で行きそうに無いからな…それはその時に考えるぞ。」

もういいか？こっちは忙しいんだ」  
そう言ってその場を後にした。

残された曹操は紅蓮が話し終わる直前からずっと何か得体の知れない感覚に襲われていた。

虚無、脱力の全てが合わさったような感覚であった。一刀と話している時も同じ様な感覚に

襲われたのだが今回と決定的に違うのは一刀の時は歓喜の様な感覚であった。

彼女にとってその感覚が何であるかが解るのは今しばらく時を必要とした。

袁紹や袁術達が紅蓮に答えを煙に巻かれている間に噂が噂を呼び紅蓮の元へ訪れ

協力を申し入れる者は大勢に及び、その一人一人に丁寧な挨拶とお礼を言って廻り

その光景を見た者は更に紅蓮にとって都合の良い解釈をして噂は広がっていき更に

協力者が訪れるという好循環を生んだ。そして当初はもう少し掛かるであろうと思われた洛陽復興を

短期間で成し遂げる事となる。

そして洛陽復興が終了し後の事を洛陽に作った治安維持組織にまかせ領地に帰ろうとした時、

城門を出るまで大勢の民衆に見送られていた。人々が紅蓮の姿をもう一度見ようと集まったのである。

その時彼女が連合に参加した時より違っていた事がある。それは名声および武力である。

巴水関攻略、洛陽復興、玉璽の入手等の行為によって名を上げそれに伴い

資金協力者や入隊者が増えるにつれて彼女の軍勢は連合参加当初の

倍以上になっていた。

その力を使い彼女は群雄の中でも優位に立とうとしていた。

霞や恋は連合軍に痛撃を与えて長安に戻り長安近郊のとある村で彼女達の兵の内、

帰郷希望者を集めその者達と先に到着していた華雄軍の兵士を村に預ける。

彼等はこの後、西涼に帰還する翠達と共に行く事になっている。部下との別れを済ませた後、

自分に付いてくる部下を何十人単位に分けてそこに用意してある荷物を持たせ

五丈原を通り斜谷関を抜け漢中の南鄭を目指していた。その中に霞や恋・音々もいた。

その途中の街道で霞は自分が思っていた事を音々に尋ねてみた。

「なあ音々。ウチな聞きたい事があんな。今、ええか」

「聞きたい事とは何なのですか。霞殿？」

「あんな。アンタや詠は頭がええ。そのアンタは今回の北郷一刀の事をどない思うん」

霞の質問の意図が良く解らない音々は尋ね直す。

「霞殿の言っている意味がよく解らないのですぞ」

音々に訊かれ自分自身の考えが纏まってない事に気づき

「その話はやっぱええわ。それより最近寝不足やねん。夜中に変な夢を見てまうねんな」

音々はその話何か引つ掛かり

「霞殿。その夢というのは・・・」

霞は音々が興味を引かれていると察し話そうとすると先程まで興味無さそうで

赤兎馬に乗り器用に寝ていた恋が2人の側にいつの間にか来ていて

「…霞。…聞きたい」

「恋が食い物の話以外で話に入ってくるなんて珍しいな。で、何を

聞きたいんや？」

「……夢の話。恋も最近同じ夢見る」

「何やて！！その夢、どんな夢や？」

恋は霞に言われ話し出す。

「……恋は歩いてた。向こうが明るくなって行くと誰かがお日様を持ち上げてた」

霞は恋が話す内容と一緒に夢を自身が見ていた事に驚きながら

「ちょ、ちよつと待ちや、恋。もしかして自分、その後で何人かと戦ってへんか？」

「……………（コクツ）」

恋が黙って頷くのを見て自身の夢の話をする。

「ウチも恋と夢の内容は殆ど一緒や。ウチは何や光ったと思ったさかい行つてん。そしたら何や

お日さん持つとる奴等が襲われそうになったさかい襲った奴等を倒しとつてん。

気づくといつも他にも何人か戦つてたさかいな。最後にお日さんが空に上がった所で目が覚めるねん」

霞の話聞きながら横で恋が「…（コクツコクツ）」と頷いていた。音々は霞や恋の話聞き不思議に思った事が有ったので尋ねた。

「恋殿、霞殿に聞きたいのですが。その夢を見出し始めたのは何時でしょうか？」

音々の問いに霞は「うーん」と考えて

「そうや！！見初めたんは虎牢関で連合に特攻した後からや」  
横で恋も同じだと頷いていた。

「うーん。恋殿と霞殿が夢を見始めた時期が同じとなるとその時期に何かあったかも知れませんか」

そこで区切つて音々は徐々に見えてきた漢中の最大の都市南鄭の門が見えてきた事に気づきその話は終わりとなった。

連合崩壊と孫堅台頭、（後書き）

いつもいつも思うのですが、皆さんどうしてそんなに早く更新できるのでしょうか？

何個か考えましたが最たる理由の一つとして

自分はブラインドタッチが出来ません（涙）

これが大きなウエイトを占めていると思われれます。

今、訓練中です。何時出来る様になるのか見当も付きません。

さて次回の話に戻します。

今回は南鄭にての拠点らしきものをやりたいと思います。

今回もここまでお読み下さいますと有難う御座いました。

漢中、南鄭にて（前書き）

初めに大勢の方に読んで頂き身が引き締まる思いでいっぱいです。これからも皆さんに楽しんで頂けるように頑張っていきたいと思えます。

今回は霞達が南鄭に着いた後の話と南鄭での一日を書いてみました。自分の作品は月と恋の一刀の呼び方を変えています。

月 御主人様 一刀様 恋 御主人様 一刀

フ陵 諷陵

と変更してあります。

初めての拠点フェーズみたいなので見苦しいかと思えます。また誤字脱字があれば報告して頂ければ幸いです。

## 漢中、南鄭にて

霞達は南鄭の門を潜り街に入っていた。洛陽に比べると少し華やかさに欠けるが

それでもこの御時世にしては栄えていると言って良いと思う。

その大通りの真ん中で霞に向い、少年が近寄って来て言った。

「これを白い光る服を着た兄ちゃんに渡してって言われたんだ」

少年の手には手紙が握られておりそこには「霞へ」とだけ書かれていた。

霞は手紙を持っている少年を見回して怪しい様子がない事を確認し受け取った。

そして少年に対し「おおきにな、坊主」と言うと少年は笑って向こうで待っていた仲間たちと走って行った。

手紙を読む為、近くにあつた茶屋に寄りお茶とお菓子を注文し店員が去ると

手紙の封を開けて中身を読んでいく。すると手紙を読んでいた霞が恋に向かい

「恋、アンタの家族もこつちに来とる様やで。それに音々、アンタもこの手紙見とき」

多量のお菓子を注文したが足りないと思った恋は、

ここに来る途中で買っていた肉まんを頬張って霞の話聞いていたが、

霞にそう言われ安堵しもう一個口に運ぼうとしていた。

恋のいつもと変わらぬ姿を見て「相変わらずやなー」と思いつつ

先程名前を呼んだ音々に手紙を渡すと注文したお茶とお菓子を持って店員が来ていた。

注文した物を受取って音々は先ず霞から渡された手紙の表を見ると「霞へ」とだけしか書いておらず、裏面には差出人の名前すら無い。

何も書いてない封の部分を開いて中身を読み始めた。

音々が手紙を読み始めて暫くして霞は音々に

「アンタは北郷一刀って奴の事、何処まで知ってんのや？」

「うーん、北郷一刀ですか？音々が知っているのは

「天の御遣い」「諷陵太守」という事しか…」

と言いつつ手紙に集中する。その様子をみて霞は続ける。

「音々が今読んどる手紙な、その北郷からの手紙なんよ」

「ふーん、そうなのですか………って、ええっ！なんですと！！」

と手紙に集中していた彼女は素っ頓狂な声を上げて驚く。

音々が驚くのも無理はなく手紙の内容はこれから行く場所しか書いておらず

差出人が解らない様になっていた。

そしてまだ驚きの覚めぬまま彼女はもつと驚く事となった。

「それと今回な、ウチ等が洛陽・長安と早く逃げだせたんもその北郷のおかげや。

なんや北郷自身はホンマ大した事無い様な奴に見えるんやけどな」

そう言つて自分が頼んだお茶を飲み出した。

まだ驚きから解放されない音々は読んでいた手紙を持ちつつ固まっていた。

暫くし驚きから覚めて思考を巡らせ霞に先程からの疑問を訪ねる事とした。

「霞殿に聞きたいのですが、此度の事は月殿はご存知なのですか？」

「此度の事って全ての事ちゆう事か？其れなら勿論知つとるよ」

自分が知らされてない事に不快感を覚えつつも更に聞いてみる。

「では、北郷に会った事があるのは霞殿だけで？」

「いいや。洛陽を出る時に一刀が会いに行つとる筈やで。華雄を連れてな」

「えっ！？あの猪殿、生きて居られたのですか？」

巴水関で北郷の武将にやられたと聞いたのですぞ」



「ええとな、それらの事が書いてあった書簡がこちら辺に……」  
と言つて霞は持つていた袋の中を探し出した。そして

「あつたこれや！」と袋の中から書簡を出しそれを音々に渡す。  
霞から手紙を受け取り読み始めるとそこには巳水関、虎牢関の事  
月や詠の洛陽からの脱出、恋達の長安よりの行程等が事細かに書か  
れてあつた。

読み終わると音々は霞にこう言つた。

「恋殿と音々だけが仲間外れにされた様で気に入りませんが、  
それよりもこの北郷一刀は何故に我らを救おうとするのでしょうか？  
連合にて月殿を倒せば褒章は思いのままでしょうに。  
それをせずに我らを助けた理由が不明なのです」

音々の問いに答えるように霞は自身が虎牢関で一刀に会つた時の事  
を話す。

霞の話聞き音々は信じられないといった顔をしたが

『月と同じ目をした男』と言われ何と無くではあるが納得してしま  
つた。

月は董卓軍に入るとき異民族出身である恋を唯一

他の者と同じ様に扱つてくれた人であるため

恋と音々にとつては彼女を絶対的な君主と位置付けられている。し  
かし霞の話聞き

その『月と同じ目をしている』という北郷一刀に少し興味が出てき  
たのである。

それから恋のおやつが済むまでの間、音々は霞に一刀の事を聞い  
ていた。

恋のおやつが済むと代金を払い手紙に書いてあつた場所へ移動する。

霞達に指定された場所は南鄭の目抜き通りの一等地にあつた。

一刀の手紙に書かれていた蘇双（利祉）の店であつた。

霞は目的地である店を見つげ安堵し、付いて来ている恋や音々に

「あつた、やつと見つけたで。恋も音々も早よう来いやー」

店の前に立つとその大きさが鮮明になった。店の正面には大きな看板が建っており

『揺り籠から墓場までお世話させていただきます。蘇双商会南鄭支店』

とそこには書かれてあった。

3人と同行していた十名ほどで中に入りすぐに近付いて来た店の者に

責任者を呼んで貰いその場で待つ事にした。しばらくして店の支店長がやってきて

「この度はよくお越し下さいました。私が支店長の李恢と申します。店員が何か粗相でも致しましたでしょうか？」

と言って霞に尋ねる。

霞と音々は支店長と名乗ったこの女性が只者では無い事を瞬時に悟る。

背はそれ程高くなく髪は腰くらいまでであり、それを途中で束ねていた。

身のこなし方とかは文官かと思わせるのだが知的な顔立ちをしてこちらの全てを覗かれてしまわれそうな眼が三人を見ていた。

霞は一刀からの手紙を袋から出して

「アンタにこれを見せろって言われて来たんやけど」と言って李恢に渡した。

受け取った李恢は先ず手紙の表裏を確認し中身を読み始めた。

読み始めて暫くして彼女は3人を見回して

「そうですか、貴女達が…あの方の言っておられた」

そう言い手紙を元通りにし手を叩いて店の者を呼び

「御三方とお連れの方々を大広間へお連れしなさい。」

それとあの方達に御待ちの方がお見えになったと連絡を「

と言って店員を奥に走らせた後、霞達の方を見て

「御三方にこれから大広間の方で会って頂きたい方がおられます。」

私も後で向いますので、こちらの店員と一緒に店の奥にどうぞ」と言い呼んでいた少年の店員が

「どうぞこちらに」

と言って店の奥に歩いて行く。

少年に付いて店の奥に行き廊下の突当りに差掛った時に少年が

「少しお待ち頂けますか。今、向こうから開けて頂きます」

と言って突当りの壁を叩いて言った。

「御待ちの方がいらっしやいました」

すると壁の向こうから「ガキツガチャン」と音がして壁が横に動いて

人一人が通れる扉が出来たのだった。

驚いている霞達を余所に少年は彼女達を出来た扉の中に入る様に

言い

「私はここに居ますので何か有りましたらお呼びください」

と言って扉の外に出て行った。

霞達が入るとそこには……

様々な動物達に囲まれ身動きが取れなくなって寝ている一刀と月とその月の手を持ち寝ている詠と反対側の一刀の方に万里。お互いの主君を見守るように座っている星と華雄がいた。

霞達の気配に最初に気付いたのは扉を開けた華雄であり

霞達が入ってくるのと動物達は自分たちの飼主の匂いや気配を感じ一刀と月の周りから一斉に移動し恋や音々の周りに集まった。

動物達の物音に気づき起きた一刀は霞に気づき

横で寝ている月達を起さぬようにその場を離れ、霞達の側にやって来て

「ここまでお疲れさん、霞。後ろで動物達に懐かれているのが

呂布さんと陳宮さんでいいかな？」

一刀がそう言うと恋も音々も動物達との再会を一時中断し挨拶する。

「（コクリ）……恋は呂布」

と少しの間一刀を観察し名前を言う。

恋が頷いたのを見て音々も

「恋殿が挨拶するなら。私は陳宮なのです。よく覚えとくですよ」

と無い胸を張って音々は挨拶した。

一刀は二人に向ってにこやかに

「俺は北郷一刀。姓が北郷で、名が一刀。字や真名は無いんだ。

一刀って呼んでくれれば良いよ」

一刀が自己紹介している間、恋はずっと視線を外さずに見ていた。

その時、恋の足下に居た一匹のウエルシュ・コーギーが

一刀に飛び掛りその顔面を舐め回した。

それが合図だったかの様に恋の周りにいた動物達も一斉に一刀の側に集まる。

一刀が未だに自分の顔面を舐め回しているウエルシュ・コーギーに

「こっ、こらもういい加減にしるよ。セキト」

と言ってセキトと呼んだウエルシュ・コーギーを地面に下ろすと

恋と音々は信じられないという顔をして

「……………どうして……………セキトの名前」と恋が訪ねてきたので

「セキトの名前を何故知っているのかって？月や詠が教えてくれたんだよ」

目の前に来た張々という大きな犬を撫でながら言った。

気持ちよさそうに撫でられている張々を見て音々が

「お前が北郷ですか……………お前に聞きたい事があるので。先ずセキトや張々

他の恋殿の家族に何をしたのですか？皆がこんなに懐くなんて初めて見るのですぞ」

音々は一刀に色々と聞きたいことがあったのだが一刀の周りに集まった恋の家族が

殆ど初対面の人間にこんなにも懐く姿を見たことがないので気にな

つて尋ねてみた。

「俺、何でか知らないけど子供や動物に好かれる事が多くてさ街に行つた時はいつも囲まれて相手してるんだよ。

まあ俺も笑っている子供や動物は好きだからさ

いつも相手にしている内に子守りや動物の世話が上手くなったんだよ」

一刀が言う間も音々は一刀の目を見ていた。

そして霞が言った「月と同じ目をした男」を音々は理解した。

月や配下である自分達を助けると考えた者は連合軍でも殆ど居ないと思う。

月を倒し手柄にして配下だけは欲しいと思つた者は多いだろうが……だが目の前に居るこの男はそれを遣つて退けた。

月や詠、恋や霞、自分や華雄、拳句は従つていた兵までも

少なからず犠牲はあつたがそれ以上に大勢救つて見せた。

そんな御伽話や伝記物に出てくる様な「御人好し」が自分の目の前に居た。

恋は音々やセキト達を見て胸が温かくなる様な感じが起つていた。そんな恋を見て一刀が尋ねる。

「呂布さん、どうかしたの？何だか……」

「……恋」

「それ君の真名だよね？いいの？」

俺の問いに彼女は

「……一刀は月と詠……恋の家族を助けてくれた……だから良い」

横で聞いていた音々は恋が真名を許したのを聞き

「恋殿が真名を許すなら、私も許すのです。音々音と言つのです。

言い難いならば音々と呼べばいいのです」

「うん。有難う二人とも。さっきも言つたけど俺の事は一刀と呼んで欲しい」

と言い手を差し出して握手を求めた。すると

「……………手？……………何？」

「握手だよ。お互いの無事やこれから宜しくって時にする挨拶みたいなものさ」

俺がそう言つと彼女はゆっくりと手を出して握手した。

俺が恋と音々に握手して居るとセキトが俺の足元に遣つて来たのでセキトの喉元を撫でると喜びお腹を向けもつと撫でると催促するよ  
うに吠えた。

その様子を見て恋は

「……………セキト、喜んでる」

更に一刀の周りに集まる他の動物を見て

「……………一刀、良い人……………皆喜んでる」

そう微笑みながら一刀を見ていると向こうから起きた詠がやって来て  
「久しぶりね3人も。元気そうで良かったわ」

と霞達を気遣う様に言つと3人は

「おー詠ちゃんか。そつちも元気そうで何よりや」

「（コクリ）……………詠も良かった」

「詠殿もお元気そうで何よりですぞ」

そう三人が挨拶すると詠は一刀の側まで来て話を続ける。

「此処に着いたばかりで悪いのだけど貴女達に聴いて置きたい事があるの」

そう言つて横に居る一刀を叩き

「月と僕、それと親衛隊の皆はコイツに付いて行く事にしたの。

で、貴女達はどうか聞きたいの。霞から良いかしら？」

と訊ねられた霞は

「ウチは月や詠が一刀に付いて行くならウチも付いて行くだけや。

一刀には二人や華雄、隊の皆を助けてもろた礼もせなアカンさかい  
な」

「そう」と表情では窺えなかったが、口調は少し嬉しそうに詠は呟いて

「恋、貴女はどうするの？」

そう訊ねられた恋は

「……一刀、月や詠、恋の家族守ってくれた。次は恋が守る」

「そう」と霞の時と同じ様に言い音々に訊ねようとした。しかし

「音々は恋殿が行くならどこまでも一緒ですぞー」

と聞く前に音々に関しては決まっていたのであった。

詠は三人とともに来た兵達にも尋ねると

「月様や詠様。將軍の皆様が行くのに我等だけ行かない訳には

行きますまい。我等は皆様が行く所に付いて行きます」

と一緒に来た者達を代表し一人の者がそう言った。

皆の意見を聞き詠は一刀に向かつて

「皆の意見は今、聞いて貰った通りよ。それでアンタはこの3人をどうするつもり？」

一刀は詠にそう聞かれるがすでに考えていたので

「如何するつもりも無いよ。俺に力を貸してくれるだから嬉しいし力を貸さないと行って追い出すつもりもないよ。月を保護した時言っただろう。」

彼女の償いを一緒に背負うと。これは完全に俺のエゴ……いや自己中心的な考えだよ」

そう一刀が言つて詠が喋ろうとした時、目を覚ました月がやって来て皆に詠と同じ様に挨拶して一刀もその場に加わって話をしていた。

そして万里が起きてやって来て連合軍に残してきた最後の罫の説明と

これからの事の説明を彼女に頼んだ。

南鄭を出たのは3日後のことであった。

拠点フェイズ？ 南鄭にて

一刀は今、南鄭の市場に居た。横の右隣に詠と万里、左隣りには星と霞。

後方には恋と月が歩いてた。

華雄は焰耶から受けた傷が全快ではなく、音々は恋の家族の世話をしている。

市場に出ると結構な賑わいで色々な屋台や店が軒を連ねていた。

右隣に居る詠と万里はこの賑わいをみて

「統治状態としては及第点を与えてもいいんじゃない」

「しかし町の区画に今一步工夫があれば……」

「でもこの乱世で此処まで栄えさせていれば……」

などと軍師同士通じるものがあるのだろう。街に出てからずっとそんな話をしてた。

更に左隣りを見れば星と霞が

「へえー。そない酒があるとは知らんかったわ……」

「ええ。主がそんな事を言っておられたので……」

「その酒、あんた等の領地に行ったら飲めるん？」

「今、少して良ければありますが……」

「ウチに少しだけ飲ましてーな。頼むわー」

とこっちでは酒の話が続いている。

俺達の後方には先程から両手一杯に袋を抱えモグモグと口を動かして肉まんやら桃まんを頬張っている恋がいた。

先程、利社の店を出る前に食事をしたというのに……

彼女が持っている袋は俺が買ってやった（買わされた？）物だった。初め一個だけ買ってやろうとしたのだが、恋の訴える目に負けてしまった。



更に彼女の食べる姿に心打たれ（癒され）てしまったのだ。

その姿は冬ごもりに備えるリスやネズミのようであり

恋の横を通って行く者は最初、両手一杯の袋を見て何事かと思いつきに恋の表情や仕草を見て癒されるという事が何十回も繰り返されていた。

そんな皆の姿を見て月はずっと微笑んでいた。理由を尋ねると

『詠ちゃん、恋さん、霞さん、今ここには居ないけど華雄さん、音々さん

皆が居る事が幸せに感じるんです』とのことだった。

俺はいつの間にか月の頭に手を乗せ撫でていた。

「へう……………」

それを見た詠が万里との話を切り上げ俺に突っ掛かってきた。

「アンタ、何どさくさに紛れて僕の月に手を出してんのよ!!」

「別に手を出してないだろう。ただ月の頭を撫でただけだろ」

俺と詠の言い合いを見て星と霞が火にガソリンを注ぐ。

「ほう、主が遂に月に出したのですか？」

「にはははー、終いには詠にも手を出してそんな気がするんやけどな」

それを聞いて詠が更に過剰反応をし

「アンタ、僕の月に飽き足らず僕にまで手を出そうと考えてんの？」

「誰もそんな事を言っただけだろう。星と霞。後で覚えてるよ!!」

俺達がそんな話をしているのを見て、月とその隣に居る万里と恋は

「一刀様って不思議な方ですよ。霞さんは解らないでも無いけど詠ちゃんがあんなに気兼ねなく話している男の人って始めてみました」

そう月が言ったので万里は

「一刀様にとつて官位や民族などそこら辺の石ころと同じです。

領民の総てを本当に分け隔てなく接せられます。それが皆には解るのでしょうか。」

街に出れば老若男女、皆があの方の周りに集まって賑やかになりません。

それをあの方自身も大変喜ばれます。

子供と一緒に遊ばれたり、お年寄りとお茶を飲みながら話したり夜に遅いので探しに行くと言と皆と一緒に酒を飲んでおられた事もあります。

そんな太守がどこに居ましょう。我らが何度諫めましても笑って『皆の心配も解るけどさ。でもさやっぱ俺は領民の皆と一緒に笑ったり』

泣いたりしてともに成長していきたくんだよ』

と仰られては何も言えませんでした。私達も解っているのです。

そんな一刀様をお慕いしていると……」

そう言つて万里は月の方に直り

「ですから月殿にお願ひ申し上げます。どうか一刀様に御協力を頂けませんでしょうか？」

戦場に出て下さいとは申しませんが。ですが貴女なら政務の経験が有られる筈です。

一刀様の政務補佐官として御力をお貸し下さい」

月はその申し出に少し考えながら返答した。

「……はい。私で良ければ精一杯、一刀様のお手伝いをさせて頂きませう」

その様子を見ていた恋が

「……月も一刀も一緒……優しい……恋も一刀の為頑張る」

そう言つて手に持っていた桃まん2つを月と万里に差し出して

「……一緒に食べる」

と言つて3人で桃まんを食べたのだった。

その日はそのまま街をぶらぶらして過ごした。

それから3日後に南鄭を出発したのであった。

漢中、南鄭にて（後書き）

今回は少し早く投稿できました。憂鬱です。  
今年中にもう一話書きたいのですが微妙です。  
来年になると少し急がしくなり書きあげる時間があまりなさそうです。

免許や資格などの日程が目白押しです。

ひと月に一本ペースって事もありそうです。

なんとか頑張ってはみますが……期待薄かも……

今回出てきた李恢ですが後々活躍して頂こうと思ってます。

三国志を見た方は何となくおわかりでしょうが……

次回ですが一刀達が連合に参加していた時の領内の事と

連合に来た諸侯の領地に残した最後の罫の事を書こうと思います。

此処までお読み頂きありがとうございました。

## 夷陵及び嘉陵江での戦い（前書き）

新年明けましておめでとございます。本年度もよろしく願います。

最初に謝っておきます。

今回、自分の恋姫主要メンバーは桔梗、紫苑以外は名前しか出て来ません。

次回は出ますので御許し下さい。

後、今回出て来る者達は12話のサブキャラばかりです。

解らないようであれば一度12話のサブキャラ紹介を読む事をお勧めします。

また、途中で出てくる徹里吉・越吉は今後もう少し出てくるかも知れません。

## 夷陵及び嘉陵江での戦い

時は少し戻って白帝城で法正（明実）が会議室を彷徨っていた。

原因は自国を挟んでの隣国同士の劉焉が劉表と手を組み

自分達を挟み討ちにしようとしていた為である。横で見えていた？芝

（真佳）が尋ねる。

「多分、皆が出て行った隙を狙ってたんだね。どうしよう？明実ちゃん。」

「刀ちゃんに連絡しなくて大丈夫かな？」

「たかが劉表・劉焉の為に一刀を呼び返せって。冗談きついよ真佳」

「でも、相手は私達の倍以上だよ。西から劉焉さんが4万。東から劉表さんの4万。」

私達が敵顔さんの兵も足しても4万にいくかどうか……」

「西の劉焉は敵顔だけで殲滅出来るから任せても構わない。その為の策は打った。」

俺達は東の劉表だけを相手にすればいい。しかし水軍と陸軍の連携が厄介なんだよな」

そう言って再び室内をウロウロし出した。そこに董允（信思）が現れて

「明実。お前が言った通り奴等の目標はここ白帝城だ。脇目も振らずここを目指して来てる。」

率いる將軍は水軍の蔡瑁と陸軍の王威、軍師に王粲。もう少しで国境に来る」

それを聞くと明実はその周りに居る2人と伝令に矢継ぎ早に指示を出していった。

伝令に巴郡の嚴顔と自分の所から行っている費緯（彩加）と李嚴（還樹）に

手紙を書き劉焉軍を殲滅させた後の事を記し渡す。

そして信思と真佳に「作戦通りで」と告げると彼女達も納得して準備を始めた。

更には内政担当の蒋エン（昇華）に何かを尋ねて彼女から了承を貰い会議室を出ていった。

そして軍団長を別室に集めてこういった。

「夷陵で劉表軍を殲滅させる。全員これから言う事をよく聞け。用意して貰う物が有る」

と言い軍団長達に指示し、必要な物を集めさせて出陣した。

一方、桔梗達の所には劉焉の部隊が嘉陵江の対岸まであと少しの処まで迫っていた。

数日前に来た明実から来た書簡を見ると

「嘉陵江の対岸に劉焉軍が来る前に城を出て対陣せよ」

と書かれており桔梗は初め目を疑った。

しかし書簡を読んでいく内に段々と策の内容が解るにつれて感心する程準備され

練られた策が書いてあった。

書簡を見てこの城に居る兵約2万の内1万5千を出陣させて支持通りに陣を張り物資を溜めこみ、翌日に現れた劉焉軍の到着前に準備を終わらす事が出来た。

桔梗は北郷軍の2人を前に軍議をしていた。

「敵の大將は呉懿、副將に呉蘭、雷銅、冷苞、総数は約4万。まったくもって嫌になるのう。

とうとう劉焉も本気になったか。だが此処で奴等を叩ければこちらが有利になる

ここが正念場じゃな。準備は良いか2人とも」

そう言うと李厳は笑顔を浮かべて

「あたいも部隊の連中も問題なしですよ、桔梗の姉貴。しかし明実の策が決まった時の

奴等の顔が見ものだなー。どんな顔になるのか楽しみで、楽しみで」

費緯はお気楽そつな李厳をみて

「還樹はいいよねーお気楽そつで。桔梗様、我が隊も特に問題ありません。

明実の書簡通りに仕掛けは準備終了しました。後は彼女達を待つだけです」

2人の報告を聞くと桔梗は横でワイワイ言いながら話している2人を見て考えていた。

自分達のすぐ近くにこんなにも優秀な者達がいたのかと。

桔梗も何度が諷陵や白帝城にも行ったことが有り何週間か駐屯した事もある。

その時に何名か優秀な者を見つけ巴郡に誘った事はあるが、この者達や白帝城に居る者達に比べると雲泥の差であった。

この者達は自分達で考えて堂々と対処している。主や重臣が居ないのだ。

それだけでも驚愕に値する。これが自分の所だったらと思うとゾツとした。

桔梗がない時は焰耶が軍の指揮をとる事になる。

焰耶の性格からしてこの様な時は撃つて出て活路を見出そうとするだろう。

そこから導き出される結果は敗北する確率が高い。

しかし彼女等は一刀が主力の將軍や部隊、軍師達を連れて行って首脳陣が

不在時でも自分達の考えや行動に対する意思統一が出来ており基本方針さえ守れば何をしても良いと言われているという。

だからその考えに沿って自分達のやる事を行なっていた。

しかし、その考えに盲信する事なく、自分の考えと照し合せてから行動する徹底ぶりだった。

書簡の策も他国の情報を相当詳しく知って無いと無理な程に詰められており桔梗を驚かせた。

桔梗がこのような事を考えていると城の方から伝令がやって来て言った。

「桔梗様にもうしあげます。只今、門の方に黄漢升と仰られる方が面会を求めて居られますがいかが致しましょう?」

それを聞いた彼女は立ち上がり自分が迎えると言って門の方に走って行った。

門が見える所まで行くと見覚えのある顔が二つ見えてきた。そして

「久しぶりだな、紫苑。璃々も元気か?」

と桔梗が言つと元気な声が返ってきた。



「うん！！璃々は元気だよ。桔梗さん！！」

と愛娘が親友にちゃんと挨拶出来た事に微笑みながら落ち着きのあ  
る声で

「桔梗の方こそ大丈夫なの？噂では州牧劉焉殿と争っていると聞い  
ただけど？」

すると桔梗の方は璃々の頭を撫で少し笑い二人を居城に向かい入れ  
つつ

「初めはどうなる事かと思っただが御館様の方が数倍も上手だったわ。  
自分達が居ない時を狙って劉焉や劉表が来る事が見抜いておられた。  
その為の準備も疾うの昔に終わっていたと見える。ワシは殆どする  
事がないわ」

そう言っつて両手を広げおどけて見せた。それを見て

「そう、流石は「天の御遣い。北郷一刀」といったところかしら。

まあ貴女が自ら配下になったという、それだけで私にとっては名君  
だと

信じるに足る証拠なのだけどもね」

そう言う紫苑を李嚴と費緯のいる軍議場に連れて行って紹介した。

その日の翌日のこと夷陵付近で少数の軍勢で劉表軍と戦う？芝の  
姿が有った。

彼女は陣に籠り劉表軍が攻撃してきて有る程度の時間が経つと呑気  
な声で

「うん、もう良いかな？じゃあ皆、明実ちゃんの作戦通り、ゆっくり慌てず撤退しようか」

と言つて後方に作つて有る陣に逃げ込む事を繰返し陸上の軍勢を徐々に川辺より離して行つた。

当初余りに手応えが無い為に策を疑つていた王威であつたが、相手が撤退を繰り返すばかりの戦が何度も続き、彼も周りの将兵も或る噂を信じるに至る。

その噂とは、北郷領に放つた斥候の諜報網に引つ掛つたもので、

「北郷軍は主力の帰りを待つ為にわざと撤退を繰り返し疑心暗鬼を誘い時間稼ぎをしている。そうやって時間を稼ぎ主力が戻れば一気に劉表・劉焉を叩くつもりだ」

というもので今の状況にぴたりと当て嵌まつた。

彼らは奪つた陣に罾や伏兵が居ないかを気にし陣を奪う度に搜索し深追いを避けていた。

陣には多いとは言えない位の糧食しかなく籠つて戦つとは思えず、それらの事を考え、王威は自分の前に居る部下達に軍議で一気に攻めると発言する。

しかし軍師の王粲は反対し今まで通り水軍と連携を密にし慎重に進軍する事を提言するが

王威はそれを却下するのであつた。

王粲は軍議の後一人その場に残り空を眺め溜息をつくのだった。

王威が罾とは知らずに進軍し水軍より引離された頃  
夷陵近辺に停泊してあつた劉表軍の軍船が謎の衝撃音とともに次々と燃えていた。

「何だ！！何が起こっている、誰か報告しろ！！」

と水軍大将の蔡瑁が大声で喚き散らすその横でまた軍船が燃え始めた。

周りでは兵達が反狂乱状態で

「北郷軍の夜襲だー」

「早く逃げろー」

「こつちにも火が着いたぞー」

と逃げ惑い大きな声を出していた。

本来なら蔡瑁は彼ら大声を出す者や逃げる者を斬つてでも大人しくさせないといけない。

そうしないと何時まで経つても混乱は収まらず余計に被害を拡大してしまう。

しかし彼はそれをやらす結局、彼らは無事な船を燃えない様に後方に下げる事しか出来ず

朝を迎える。そこにあつた光景は悪夢としか言えなかった。

昨日までこの長江を雄大に登つて来た船の3分の1を失つてしまつていたのである。

明実が立てた策は結論から言えば大成功と言つて良かった。

彼女の作戦は、まず初めに？芝に劉表軍の陸上部隊に攻撃を仕掛けてわざと負けさせ

設営した陣地を明け渡す事までして自領の奥深くまで敵軍を引き摺り込ませる事で

陸上部隊を夷陵に誘導し水軍との連携を難しくする事で、まず水軍から叩く作戦だった。

水軍に火を放ったのは長江流域を埒わくに水運業者の護衛を生業とし水上の戦いに慣れている「錦帆賊」と呼ばれる者達に協力を求めた。彼らは初め北郷軍より劉表軍に味方しようと考えていた。

しかし劉表の配下である黄祖が彼らを賊としてこの際、北郷軍と一緒に滅ぼそうと

劉表に進言する。この話を聞き彼ら「錦帆賊」は怒り狂い北郷軍に味方する。

彼らはまず陸軍が水軍との連携が取れなくなつたのを確認し夜陰に乗り近づき

火を放つて行つた。そして予め潜入させておいた者に大きな声を出させ

劉表軍の混乱に拍車をかけさせて被害を大きくさせた。

水軍が被害を受けていると聞き軍師の王粲は大将の王威に後退する様に進言するが

此処まで進軍し大した被害も無く敵陣を幾つも奪い油断しきつていた王威は

進言に聞く耳を持たずこのまま進軍すると言つてその場を後にする。王粲は自らの配下に撤退準備をさせ一番初めに奪つた陣地に戻るとだけ告げたという。

その事を聞いた王威は「構わん、好きにさせて置け」とだけ言い王粲はそのまま江陵方面に撤退していった。

その日の夜密偵から劉表軍の大将と軍師が仲違いをし軍規も乱れており油断していると

報告が有り法正と？芝それに董允は今夜が勝負という事で準備にかかっていた。

今彼女達が居るのは王威達が奪つた陣を見降ろす事が出来る場所である。

王威は敵が来るなら白帝城方向からだと言われその方向には警備を厳重にしていたが自分達が奪った陣にはわずかな兵しか残さず警備は緩かった。

そこで水軍が後退したことにより警備が薄くなった地点を通って彼女達は後方の陣より一気に攻め込み王威の籠る陣に烈火の如く迫って行く。

王威は後方の陣に異変ありと報告を受け何個かの小隊を向かわせ様子を見に行かせたが帰って来る小隊は無かった。

見に行かせた小隊が返ってこないと言われ報告を受け王威は慌てて戦闘態勢を指示するが時すでに遅く指示を受けた部下が体制を整えようとして外に出た時には北郷軍がすでに門前に迫っており門を破壊しようとしていた。

外が騒がしい事を不審に思い外に出た王威は北郷軍の来襲に気付く周りに居た者達を静めようとするが来る者は僅かで他の者は討たれるか逃げるか

投降するかのどちらかであった。

王威は周りに来た者達を纏め一点突破を掛けようと陣形を整え突撃し後方に逃げていく。

彼が周りを見渡すと側に居る者は千名にも満たず、このままでは何も出来ないと考え

そのまま後方の陣に逃げ込むしかなかった。

後方の陣に着き朝を迎えてから戻って来た者を含めても8千に届か無いほど減っている事を

報告を受けて江陵まで撤退する事を決め迎えに来た王粲に合流した。水軍が陸軍が大敗したと聞いたのは翌日であり彼らもそのまま江陵に撤退するのだった。

一方の明実達は追撃は無用と全軍に徹底し作った陣や戦後の後始末をして白帝城に帰還するが損害や戦利品の分配などの報告書作成という激務が三人を待っていた。

夷陵にて劉表軍が敗れたのとはほぼ同時期の事、敵顔達と対陣していた劉焉軍の後方に

近づく部隊があった。青羌部隊である。大将の呉懿は

「青羌部隊が援軍に来ると誰か劉焉様に聞いていたか？」

と隣に居た副将の呉蘭に尋ねるが、彼も「知りません」と答えるだけで残りの雷銅も冷苞も

尋ねられるが答えは同じであつた為に呉懿は冷苞の様子を見に行くよう命令した。

命令を受けた冷苞は自分の部隊の何名かを連れこちらに向かつて来る青羌部隊の行軍を

遮ろうと正面に立ち行軍を停止させ彼らの隊長の下へ案内するように大声で叫ぶ。

行軍が停止し軍が二つに割れ、開いた間から二人の者がこちらにやって来ていた。

その姿は二人とも鎧を着ず毛皮を着て毛皮の隙間から見える胸には胸当てが見え

頭には毛皮を貼った帽子を被り、靴も毛皮を貼ったブーツを履いている女性がやって来る。

冷苞の目の前に自分より背の高い二人の女性が来て挨拶をし彼女達の一人が話を始めた。

「久しぶりですね、冷苞殿。どうして私達の進軍を邪魔なさるのか聞きましょう？」

自分より背の高い女性にそう言われながらも冷苞は

「それはこちらが聞こう。何故お前達が此処に居るのだ。徹里吉・越吉」

徹里吉と呼ばれた女性は目の前に居る冷苞を見下ろしながら

「私達が此処に来たのは貴方達の君主様から命令されたから以外無いでしょう？」

それ以外に私達が此処に来る用事なんて無いですもの」

そう言うと彼女は横に居る越吉に目配せする。越吉は手に持っていた竹簡を無言で冷苞に渡す。

越吉から竹簡を乱暴に受け取った冷苞はそれを読み始めた。そしてしばらくし

「劉焉様から言われたというのは本当みたいだな、少し待っている、呉懿殿に報告してくる」

そう言い本陣に去っていく冷苞を見て徹里吉・越吉の二人はお互いを見合って微笑した。

前回、彼女達は大将の劉璋に奇襲が有るから注意しろと何度も進言したが、

劉璋はそれを無視し無謀にも総攻撃に移ろうとした所を背後から突かれ敗北した。

しかも事も有るうに劉璋はその敗北の理由を彼女達が積極的に動かなかった為と報告し

彼女達は劉焉から叱責されていた。彼女達は最後まで戦場に残り敵

を食い止めていたのだ。

徹里吉はそれを我慢し、叱責の後に劉焉にその時の戦の報奨金を要求した。

彼女達「青羌部隊」は劉焉の正規兵ではなく一傭兵部隊に過ぎない。その為、戦一回に幾らと交渉する。前回の戦の時もそうやって交渉し参加したのだ。

しかし劉焉はそれを拒否し拳句の果てには彼女達に約1週間の謹慎処分を言い渡した。

謹慎処分に怒り如何しようかと考えて3日程した時に北郷を名乗る者が接触してきた。

徹里吉に使者を送ったのは法正である。

彼女は劉焉軍の動向を逐一調べ何処かに付入る隙を探していたのである。

法正は密偵から徹里吉等の状況報告を聞くと直ぐに風に相談し策を実行する。

まず彼女等に接近しこちらに付く積りが有るかを配下に聞きに行かせた。

これが北郷軍の策略である事は解ったので慎重に対処する事にしその場での返答は避け

使者が帰った後、部下達を集め話し合った。

皆は劉焉に対し反感を持ってはいたが表だって反抗するのは得策ではないし

第一、北郷軍を本当に信じて良いのか疑問があるとの意見が出され話は纏らず最後に徹里吉に決断は委ねられた。彼女はその場で皆に  
対し

「北郷が信じられるか幾つか条件を出して試そうと思うのだが」



そう言つて彼女が出した条件が以下の3つであつた。

- 1 まず味方になるにあつて、戦の協力資金を用意する事
- 2 成功の暁には依然もらつていたより更に報酬に上乘せする事
- 3 寝返つた時の自分達の安全の保障

翌日、彼女からの条件を使者が持ち帰りそれから5日程した時、彼女の下に新たな使者が来た。

その使者はその場で金塊と誓約書を差し出してこう言つ。

「まず面会させて頂けた事を感謝いたします。私は全権を委任されました費緯と申します。

早速ですが、我らが主は貴女達の条件を全て飲まれ、まず準備金としてこの金塊をとの事です」

そう言い金塊を彼女の方に差し出して続ける。

「そして、この誓約書は条件等の事を記してあるとの事です」

そう言つて徹里吉がその誓約書を読むと、自分達が提案した物より増額された金額が書かれ、

そして一番驚いたのは彼女達との関係を傭兵として雇うではなく一軍団として同盟を結びたいと

書かれていた事であつた。まるで国家間で結ばれる約定のようである。

徹里吉以外の者は目の前に置かれた金塊や誓約書を見て読み驚き徹里吉自身も此処までの条件を出してくると思つてもいなくたらしく多少呆然としていた。

少して自分を取り戻した彼女は費緯に尋ねる。

「貴方達はこれが劉焉と我らが組んで仕掛けた罠だとは疑わなかったのかしら？」

今ここで貴女を捉え劉焉に突き出せば私たちの利益になると考えない？」

彼女が言うと同時に右手を上げると費緯の周囲に兵が集まり拘束しようとする。

しかし拘束されようとしている張本人はその瞬間大笑いし出し

「はっはっはははっ、自分を拘束し劉焉に突き出し埋まる位の亀裂なら

ウチの軍師達はこんな事させませんよ。

それに貴方達が自分を突き出しても信用はされないと貴方達も御分かりでしょう？」

今回は約束を破られ、その上責任を押し付けられて叱責され、その前は汚れ仕事をさせられ」

費緯はそこまで言うと言つと皆を見まわし

「故郷に送るためとはいえ良くそこまで我慢したものです。ですが考えてみて下さい。

貴方達をそこまで扱き使い、約束を破る。一方的に悪いのはどちらかということ。

それでも劉焉に付くと言つなら仕方ありません。自分を劉焉の下に連れて行って下さい」

そう言うと費緯は黙ってその場に正座で座り込み目を瞑って彼女の判断を待った。

費緯に言いたい放題に言われて頭に來た徹里吉であったが翌々考えているうちに

彼女への怒りが段々と劉焉に向かっていく事に気づく。

確かに彼女を劉焉の下に連れて行っても彼らはそれを当然の如く振舞うのは目に見えているし  
彼女が言った通り一方的に約束を破り、汚れ仕事を押し付けたのは劉焉だった。

徹里吉が自分に向けられる視線に気づき視線を向けると、  
何人もの者が目に涙を溜め視線を合わし、しゃくり上げている者もいて、  
そしてそれは自分の横に居る越吉も一緒だった。  
それを見て彼女は目を閉じ暫く考えてから決断する。

「費緯と言いましたか？もし私達を貴女の主が裏切るうものなら私は貴女とその主を許しません。何が有ろうとも必ず命を頂きます。その代わり我等を信じてくれるなら我等もそれに応え奮迅の働きをして見せましょう」

費緯にそう言っていると自分の配下には

「我等は此処まで劉焉に騙され、脅され、彼に従ってきました。それも終わりにしましょう。」

私達は次の戦より北郷軍に味方します。これに異議のある者はいますか？」

そう言い配下の者を見渡すと誰もが皆、声を揃えていった。

「「「「「異議なし！！」「」「」「」

その場で北郷・青羌同盟が締結され、費緯は法正から預かった策を説明し次回の戦に対し  
どう動いてもらいたい等の要望が費緯から出され徹里吉達は驚かさ

れることとなる。

そんな事が有り此処まで彼女達は来ていた。ちなみに先程冷苞に見せた竹簡は

筆跡を真似た偽物であり、それも法正が用意させていたのである。

彼女達は呉懿や他の將軍達を欺き劉焉軍の退路に当たる街道沿いに布陣するのであった。

そんな事とは知らない呉懿達はどうやって敵顔達を叩こうか思案していた。

雷銅や冷苞は策など弄せず対岸に正面からの攻撃を加える事を主張したが

呉懿や呉蘭は慎重に行くべきだとし平行線を辿る。

そしてその夜も議論が平行線を辿り軍議も御開きになって解散し皆が寝静まった頃、

敵顔軍の陣地より火の手が上がり、呉懿ら諸将は当直の兵に起こされて早速、

小隊に様子を見に行かせた。

すると敵顔軍の陣地の至る所より火の手が上がり大混乱していると事で有った。

その報告を聞き雷銅と冷苞は呉懿らが策略だという制止も聞かずに自分の連れて来た軍、約1万5千を率い攻め込みに行ってしまう。

その場に残された呉懿らは策略だと解つてはいたが二人を失うわけには行かないので此処の本陣に3千程を残し、

青羌部隊に伝令をだし本陣を守らせてから残りの兵2万2千を率い二人の後を追った。

冷苞等は嘉陵江を渡り敵顔軍の陣に雪崩れ込んだが、そこには誰

も居無かった。

旗や武具兵糧等はそのまま放置しておりその量は彼らの目を釘付するのに十分な量であった。

敵顔軍は何処にも居ないとの報告を受けて、最初に呉懿達の前に報告に来た者を呼ぶように言い

少し待つが探しに行った者が何処にも居ないと報告してきたのでそのまま帰ろうとしたが、

雷銅達はその物資をそのままにするのは勿体無いと思い命令を出す。

「これだけの物資を置いて行くのも勿体無いし、我等が陣へと運びこめ」

そして何部隊かの者に周りを見張らせる様に命令し、彼等も戦利品を物色に行った。

陣を物色している劉焉軍を少し離れて見ている者達が居た。桔梗達である。

自陣にある物資を運び出している彼等を見て、作戦の成功を確信し別働隊として別れた

費緯と李敵に合図を送る様に指示し自分達も準備に掛かる。

そして火矢を上げ二人に合図すると横にいた黄忠こと紫苑に目配せし

「では奴等を殲滅しに行こうかのう、紫苑」

「ええ、では桔梗。私も久しぶりに軍を率いらせてもらおうわ」

そう言って戦闘は開始された。

火矢が上がりそれを合図に桔梗率いる部隊が姿を現した為、それ

を報告に來た者連れ

外に出て雷銅と冷苞は周りで物資漁りをしている者達に命令するが兵達はそんな事より

物資漁りに夢中で彼等の命令に従う者は僅かしかなく攻め込んで来た桔梗達に気付いた時には

時既に遅く彼等は桔梗や紫苑率いる弓隊によって次々と倒されていくのだった。

雷銅達は周りに集まった部隊を率い撤退を開始したが、彼等も手一杯に戦利品を抱えており

行動も遅く、士気も先程の奇襲により大幅に落ち込んでいた。

そこに「ジャーン、ジャーン」と銅鑼の音とともに彼等の側面から李敵の部隊が現れて

「うっしやあ、流石はあたい！！狙うは敵将のみ。全軍突撃」

奇襲を受けた事により見る間に兵は倒れていく。

二人が此処までかと思った時、後方より河を渡って来た呉懿達の部隊が李敵の部隊に当たり

その際に雷銅達は呉懿達と合流しそのまま本陣に撤退しようとして行く。

呉懿達が部隊を河に進めようとした時だった。対岸の自陣が燃えている事に気づく。

対岸の渡河地点には自分達を迎える様に武装した青羌部隊と費緯の部隊が待ち構えていた。

彼女達は呉懿らが渡河した後、既に渡河し隠れていた費緯の部隊を迎え入れて素早く

本陣に残っていた将を討ち取り、その事を兵達に大声で伝え戦意を喪失させ制圧し  
兵達を一か所に集めて拘束し憂いを無くしてから呉懿達が戻って来るのを待ち構えていた。  
こつちにやっつて来ようとする呉懿達をみて

「うふふ、さあ皆の者に命じます。今まで我等を扱き使ってくれた彼等に御礼なさい」

「皆に命じます。こちらに渡って来る者を一人残らず殲滅します。用意、打てー」

彼女等の言葉が発せられると同時に呉懿達に向かって弓矢の嵐が襲う。

更に桔梗達も対岸に現れて矢を放ち徐々に河に追い詰められて行く。  
盾を並べて防戦しているが兩岸から放たれた矢が上空からも襲いかかり  
飛んできては劉焉軍の命を奪っていき更に大混乱に陥った。

5分程して弓矢での攻撃が止み呉懿が周りを見渡すと3万以上いた兵が半分ほどまで減らされた兵も何処かに傷を負い士気も低く、戦える状態ではない事が一目に解ってしまう。  
対岸から見ていた桔梗もそれが解った為、投降するように使者を出した。

桔梗の使者から投降せよとの文が届き、呉懿と呉蘭、雷銅は如何し様も無いと諦め投降した。  
ちなみに冷苞は先程の攻撃にて矢が何か所も当たり治療を受けていた。

桔梗はまず劉焉軍の負傷者を手当てする様に全軍に伝え呉懿らにもそれを伝える。

更に対岸に居る費緯や徹里吉に伝令をだして呉懿らは投降したと伝え、そちらも

負傷者等の救助を優先する様に伝えた。

負傷者の手当てが粗方済むと呉懿、呉蘭、雷銅、冷苞を呼び北郷軍に仕える積りが有るかを

尋ねるが4人とも北郷には従わないと言った。李嚴や徹里吉は討つべきだと主張したが

桔梗や費緯は一刀の裁定を待つべきだと言って彼等を諷陵に護送することを決める。

更はその場で法正より来ていた指示に従い李嚴、費緯、徹里吉等は周辺の劉焉に味方する

諸侯を牽制する為に彼女等の兵を各地に派遣し、此処での戦闘を大々的に噂として流した。

その効果もあつてか、何日後には続々と北郷軍に寝返りたいと記した書簡が白帝城に届けられる。

彼女達は一刀が戻って来るまでそれらの作業に追われることとなった。

本拠地に戻った袁紹が見た物は虎牢関で大敗した事、その後の董卓軍の長安追撃戦での敗戦が

大きな噂として民に広まっており、それを鎮静化する為に走り回っている文官達からの報告書と



今まで武力で抑えていた諸侯達の一部が反乱の兆しを見せているとの報告であった。

当然それに関し袁紹自身が何らかの手を打たなければいけないのだが、彼女は側近や片腕の顔良にそれを押付けてしまふ。結局全てを片付けるのに結構な時間を費やしてしまう。

またその時の時間のロスが袁紹の運命を左右するとは思っても見ないのだった。

しかしそれは袁紹だけに有らず袁術、韓馥、孔融等の広まった噂に対し何も対処しなかった

者達の領地では尽く袁紹と同じ様に何かしらの噂や一時期収まっていた黄巾の残党が幅を利かせ領地を荒らすなどの被害をもたらしていた。

反対に広がった噂に対処をした曹操や孫堅、劉備達の領地では噂は広がっていたもののそれ以上広がる気配を抑える事に成功し、大きな被害を出す事も無く短期の内に次の行動に移ることができるようになった。

これから後、曹操と劉備に勅使が訪れて州刺史に任じられた事が始まりであったかのように群雄割拠の時代が動き出すのだった。

## 夷陵及び嘉陵江での戦い（後書き）

此処まで御読み頂きまして有難うございます。憂鬱です。

今回もきつかったです。体中に今（1月6日現在）带状疱疹が出来て痛いです。

真面目に睡眠中、2〜3時間置きに目が覚めて困っております。でも読んでくれる方が居る限り頑張ります。

今回出て来た徹里吉や越吉は三国演義の方に出てくる五胡の内の一  
つ羌の

君主及び武将です。詳しく知りたいなら検索すれば出て来ます。

また今回出て来たオリサブキャラ達は今後偶に名前だけでも出せればと

考えております。

次回は或る方の目線で少し話を進めたいと思います。

それと出来れば一刀達が帰って来た後の拠点等もやればと考えて  
おります

今回も御読み下さいまして有難うございました。

**とある猫耳軍師の大陸分析及び北郷軍全体拠点フェイズ（前書き）**

何時もこんな駄文を読んで下さり有難うございます。憂鬱です。

今回の話の前半は大陸の話で

後半は全体の拠点をに入れてみました。読んでみて漢中と変わらんじやないかと

思われても仕方ありませんが御勘弁を……

次回からは群雄割拠編としての話になるかと思えます。

今回はタイトル通り半分は某猫耳軍師様の視点です。

## とある猫耳軍師の大陸分析及び北郷軍全体拠点フェイズ

彼女は自分の宛がわれた部屋で黙々と時に独り言を言いながら書簡に最近起った事を書いて居た。

その書簡は後に彼女の主である曹操に清書として出す前に纏めてい  
る所である。

彼女の名は姓を荀、名を？、字を文若、真名を桂花という。

今、私は我が主君の華琳様に見せる書簡を作成中だ。

その書簡とは各地に放った密偵の報告を私が纏め月に一回華琳様に見せる事になっている。

この報告書の出来によつてはその夜の華琳様の寵愛を受けられるか如何かが決まるのだ。

今回は連合内で各地の諸侯の事を纏め御褒め頂き閨にも呼んで頂いた。

今回も御褒め頂ける様に頑張つて纏めようと思う。

まず手元にあつた書簡を開き読んでいく。最初の報告は劉備の所  
だった。

今、彼女は平原の相から徐州の刺史に任命されていた。

劉備が平原に帰還して2週間程したある日、煌びやかな衣装を纏つた朝廷の使者が訪れて

『徐州刺史に任ず。証とし印綬を授ける』

との証書と印を置いて帰つて行つたとの事である。

これは我が華琳様に対しても一緒の対応でいきなり現れて証書と印綬を置いて帰つた。

徐州は元々陶謙が治めていたのだが彼は連合の解散後、領内に帰還して直ぐに体調を崩し

帰らぬ人となつていた。それを良い事に彼の部下が好き勝手に領内

を荒らしているとの事だった。

そこで徐州で良識派の陳珪・陳登親子や糜竺・糜芳兄弟は劉備達が徐州に入ると同時に劉備に協力し徐州を荒らしていた者達を排除し徐州を安定させているとの事だが

下邳城以南は袁術が領地を狙っているとの情報もあり予断を許さない状況にあるとの事だった。

でもやっぱりあの女は油断ならない。

ついこの間まで義勇軍の大將だったのに何時の間にか華琳様と同じ刺史にまで登って来ている。

劉備の下に天地人の全てが揃いつつある。刺史にまで登った天の時と運を備え、

5州に通じ産物も多い徐州の地を得て、人材も関羽・張飛・孔明・鳳統等の傑物を集め

人心も安定しているという。これで徐州を完全に治める事が出来たなら大変な勢力になるが

彼女自身が例え徐州を完全に支配したとしても、勢力拡大の為他国へ攻め入る様な事が出来ない

甘い考えの持ち主なのでこちらに勢力を伸ばすことは殆ど無いと思うが……

軍師の孔明や鳳統は油断できない為、劉備軍の行動には逐一報告するように通達しておく。

次は袁紹の所の事。

連合で一番被害を被ったのが袁紹で次が従妹の袁術であった。

袁紹軍は連合参加時より兵を減らし更に追い打ちを掛けるように糧食不足が深刻になっていた。

そこで同盟相手だった冀州の韓馥を策略にて追い出して完全に冀州

を我が物とした。

更に青州・并州にも勢力を伸ばし幽州をも狙っている。

しかし従妹の袁術がこれ以上袁紹の勢力が大きくなるのを嫌い并州の張燕や幽州の公孫贇、

青州の孔融と同盟し包囲網を完成させ袁紹の動きを封じ込めてしまった。

張燕などは度々袁紹領に侵略しているという。

それらに対抗する為に我らが華琳様や荊州の劉表と同盟して袁術を牽制して動きを封じ込めておき

公孫贇の後方に居る烏丸や張燕の後方に居る鮮卑ら異民族に使者を出して手を結ぼうとし

逆に彼等の動きを封じ込めようと画策しているらしい。

袁紹自身は大した事無いのだが配下は捨て置けない。

二枚看板の顔良・文醜や高覽・張合、軍師の田豊・沮授・審配や逢紀など数えれば切りがない。

今は勢力拡大の為団結している様に見えるが一門の袁譚、袁尚が袁紹軍の次席の座をめぐつて争い

それが他の者達を巻き込んで泥沼化しているとの報告があったのでいずれ何らかの策を用いて袁紹の將軍達の仲をズタズタに引き裂いてやろうと思う。

次の書簡を手に取ると董卓及び軍師賈馱の搜索状況とあった。

董卓も賈馱も依然見つからないという事である為、私は董卓の本拠地やその周辺を探させた。

（華琳様は董卓の事など如何でも良いと仰り笑っておられたが何か知っておられるのだろうか？）

それでも見つからないのは変だと思い諸侯達を一人ずつ探る事にした。

すると馬騰が董卓の両親を保護していたことが解る。私はその時軍

師の感として

「馬騰は董卓と裏で繋がって居たのでは？」

との仮説を立てそれに基つき密偵に綿密に調べさせた。

連合が結成される以前は頻繁に会っていたようだが結成されてからは馬騰は勿論の事

董卓にもその様な形跡はなかった。

「では連合に参加している諸侯の中では？」

とも考え調べてみたが連合に参加した諸侯の中にも馬騰と接触した者は居なかった。

ただ娘の馬超が北郷と会って居たのは付きとめたが何を話していたかは不明である。

最新の報告では北郷に董卓の配下であった呂布や張遼や華雄が居るという事なので北郷の下も

探させてはいるが見つかったとの報告は受けていない。

この件に関しては未だ調査中である為、華琳様にもこの事は触れずに置こうと思う。

次の報告書は長沙の孫堅と襄陽の劉表の工作戦の事である。

孫文台は今現在、大陸に居る諸侯の中で華琳様の最大の敵であると私は確信している。

しかし華琳様は北郷の方が気になるらしい。だが私は華琳様をこの大陸主とするには

必ず孫堅と劉備は立塞がると見ているので今の内から情報収集に力をいれている。

調べていると最近孫堅の動きが活発になっている。やはり洛陽で手に入れた名声は大きい。

領地に帰るとまず劉表の息が掛った長沙周辺の武陵、零陵、桂陽の太守に対し工作を施し

彼等を自陣営に引き込む事に成功している。

劉表は黙って見ていた訳では無かったのだが北郷に夷陵で敗れた話

が伝わりそれを聞いた  
各太守達の動揺を孫堅の軍師、周公瑾が見逃さず上手く浸け込まれ  
てしまった。

これらの事によって今の孫堅軍には6万を超える兵と有望な将を多  
く抱えており

更に加わった周辺の軍も入れれば8万を超えられると思われ、  
それを持って劉表に戦を仕掛けるのも時間の問題かと思われる。

劉表も黙ってやられる訳では無く反撃を開始する。まず孫堅を自  
陣営に取り込んでいる袁術に  
策略を仕掛けて袁術と孫堅の仲を裂こうとして成功している。

更に北郷とも争わせようと、朝廷に対し北郷一刀に零陵太守を与え  
るように画策していたが

これは盧植が朝廷に残っていた事もありこちらは失敗に終わってい  
る。

その後、劉表は袁術に対し我が曹操軍と同盟し袁術を牽制し迂闊に  
動けないようにし

後顧の憂いを絶ってから孫堅と雌雄を決する為、軍を増強している  
との事だ。

最新の報告では徴兵を繰り返し5万以上の軍を集めたと報告が有っ  
た。

結論から言えば両軍がぶつかるとは時間の問題かと思われる。

この戦いの後で残ったのが孫堅であれば次の目標は北郷か袁術かと  
思われるが、

北郷と孫堅は良好な関係を築いているとの事なので恐らくは先に袁  
術を滅そうとすると考える。

そうなれば袁術では孫堅を止める事は出来る筈も無く我等とも国境  
を接する事になり脅威となる。

しかし劉表であれば荊州全土を手に入れる事となるが、劉表の優  
柔不断と陣営内の纏りの



無さが災いし今後の方針で、専守防衛になるか北郷もしくは袁術に戦を仕掛けるかで

時間がかかる事は目に見えている。

我等としては劉表に勝って貰いたいものだが……今後もこの地域は要注意である。

最後に残ったのは先程から度々名の出ている北郷である。

華琳様や孫堅から注目される存在だが、私は周りの軍師の方が注目に値する存在だと思う。

郭奉考、程仲徳、徐元直の三人は我が軍にも欲しい位の逸材であり敵に居るのは恐ろしい。

我が軍も最近有能な者達が育って来てはいるが（董昭・鍾？・華？・王朗・満寵・劉曄など）

皆、経験不足で経験を積んだ軍師は少ない為この3人は喉から手が出るほど欲しいのだ。

連合で会った時に何度か誘いを掛けてみたが、本人達はその気が全くないらしい。

軍師や官僚、武将と北郷に続々と人が集まりつつあり（あんな男の何処が良いのか解らないが）

勢力の方も来た報告書では劉焉・劉表らを主力軍なしで破り、劉焉に至っては虎の子の

青羌部隊まで北郷に味方してしまい、大幅な戦力低下を露見してしまった。

それを機に今まで大人しく劉焉に従っていた漢中の張魯が独立を宣言してしまう始末。

また、敵顔に敗れた事や張魯の独立により従っている太守達が動揺を見せていると報告もある。

逆に北郷は好機と捉えその太守達の取り込みを図っているらしい。もう北郷達も領地に帰還している筈であり主力が戻った彼らが劉表、

劉焉のどちらを叩くかの

情報は今の段階では入ってきてない。だからこれから書くのは予測である。

もし劉焉の方に行くようなら難攻不落の綿竹関や劍閣等の要塞も控えている為に

鎧袖一周とはいかないだろうし、張魯もそれを快く思わないだろう。何せ自国の隣に益州全土を制圧した勢力が出来るのだから何かの手は打ってくると思われる。

恐らくは劉焉・劉表との同盟等の手を打って何とか北郷を止めようとするだろう。

そして漁夫の利を狙うと思われる。しかし今の劉焉では北郷を止められるか疑問が残る。

北郷にとっては益州全域を物にすれば恐らく現在、大陸最大の勢力と兵力を手に来るのだ。

私が北郷の軍師なら迷わずこちらを進める。

次に劉表領に攻めるなら孫堅との対立、もしくは関係悪化は避けられないと考えられる。

しかし前にも述べたとおり現在、孫堅と北郷の関係は良好なのでこの可能性は殆ど無いと思う。

別の可能性としてあげれば北郷が孫堅の援軍に来るという事は考えられない訳ではない。

そうなれば劉表は大変苦しくなる。これにもし袁術まで加われば恐らく滅亡しかあり得ないが、

袁術は孫堅との関係悪化の事や我ら曹操軍を気にして動けないと予想する為、話から除く事にする。

もし北郷が援軍に来るとなると劉表は江陵、襄陽、江夏、夏口の各城に籠城して時間を稼ぎ

相手の兵糧切れを待つか、もしくは自分に有利な地での決戦しか手は無いと思われる。

此処に書いた孫堅に北郷が援軍に来る事は私の想像の為に華琳様に言う事が出来ないが

北郷に関しては不気味としか言えない。何度も密偵を送り続けているのだが情報が断片しか拾えず

最悪密偵が音信不通になる事が未だに続いている。未だ解決の糸口は見つかっていない。

なのでその断片的な情報から推測するしかない。

将については古参の趙雲、郭嘉、程立、徐庶に加え、虎牢関で猛将ぶりを見せつけた呂布、張遼  
巴水関で敗れたとはいえ武は確か華雄、嚴顔や華雄を破った魏延など人材も揃っている。

兵も諷陵に入った時は3万程だったのが東州兵に青羌部隊、嚴顔配下に加え

この度、董卓軍の兵も吸収し6万以上に膨れ上がっていると思われる。

領土も自領の諷陵に加え、巴郡。江陽などの蜀地方の東半分以上と荊州の夷陵までの

領土を獲得しその地域で色々施策を施しているらしい。

その為商業も盛んになり税収も大幅に伸び、その金で至るところから兵糧を買っているらしく

糧食不足に陥っているとの報告も無い。

只、不安要素も無いわけではなく多くの違う地域の者が集まるのだから諍いも多くなり

それが元で治安の悪化が起きているとの事だった。

しかしこれらは時間が経てば収まって行くものであるし、

これらの問題をあの3人が放置しておく訳もなく、いずれこれらの問題も解決すると思われる。

そうなれば脅威である為にこれからも多くの者を派遣し情報を手に入れなければならない。

此処まで色々見て来たがやはり私の予想では孫堅か劉備、もしくは北郷が華琳様の敵に

なりそうで今後も注意が必要だと思っし、前の3人には及ばないが袁紹、袁術も侮り難く

他にも西涼の馬騰や漢中の張魯など地方の軍閥も動きを活発にして中央の事を様子見している。

これらの事を踏まえこれからも華琳様に天下を捧げる為の策を考えねばならない。

先ずは軍と領民を増やす為に周辺に散らばっている黄巾党を併合し……

そして軍属の者達に畑を開墾させて……

そう言って彼女は自分の考えの中に入っ  
て行った。

これから乱世の世が始まり、最後に残るのは誰か？それは天にか解らない……

【これから先は一刀が帰って来てからの話  
です。】

『北郷一刀の休日』

一刀が自領に帰って来てから6日程経っており、その間休みなく職務を遂行していた。

一刀が帰って来てから先ず驚いたのは自身の机に置かれた一刀のいない時に起きた事の報告書

および決済を迫る文官達の書簡であった。彼はそれを2日半掛けて全て終わらせた。

(途中に蒋苑や法正、月や詠に手伝ってもらったが)

次に自分に会いに来た黄忠に会う為に謁見の間に行き彼女と対面した。

俺が謁見の間に行くところには妙齡の女性がこちらを穴が開きそうな位見ていた。

まず一刀が黄忠さんの前まで行きそのまま

「黄忠さんですね。この度は我らに味方して頂き有難うございます。俺が此処の太守をさせて頂いてます、北郷一刀です」

そう言つて彼女に頭を下げて挨拶をし、そのまま話を続ける。

「黄忠さんの事は桔梗の手紙で色々聞いてます。力を貸して下さいとか。心より礼を言います」

そういうと黄忠さんが初めに

「北郷様の事も桔梗から色々聞いておりますわ。そして失礼ながら昨日、一昨日の二日間、

この城に来る時に街の様子を見させて頂き桔梗が言っていた事も納得しました。

街に人と物資、それと笑顔があふれて皆が貴方様の事をまるで家族の様に話しておりました」

そう言つて微笑みながら言い

「しかも此処の街には烏丸族の者も居れば山越の者も居て更に驚かされましたわ。

しかもそれらの者と一緒に他の漢人の者も生活しているのに、それでいて不満はなさそうなのは

貴方様の統治が上手く行っているという事でしょうから感嘆に値しますわ。

更に驚いたのはその異民族の者からも貴方に対する賛辞の言葉しか聞けないという事でした」

一刀がそれを聞き照れくさそうにしているのを見て、黄忠は姿勢を正し話を続ける。

「私はそれを見て確信いたしました。貴方様こそが私の弓を捧げるに値する御方だと。」

どうか私にも戦乱を鎮める御手伝いをさせて頂けますでしょうか？」  
そう言つて頭を下げた。その姿を見て俺は

「頭を上げて下さい黄忠さん。それはこちらからお願いします。未  
熟な俺に力を御貸し下さい」

俺もそう言つて頭を下げると彼女は

「私の名は姓を黄、名を忠、字を漢升、真名を紫苑と申します」

「俺には真名が無いので北郷または一刀、どっちでも好きなように  
呼んでくれて構いません」

そう一刀が言つと彼女は

「では、御主人様と呼ばせて頂きますわ。先程ここまで案内して頂  
いた方がそう呼んでましたので。

構いませんか？御主人様」

多分彼女を連れて来たのは風だなど思いつつ彼女を見ると何が有つ  
てもそう呼びそうなので諦めて

「もうそれでいいよ、これから宜しく。紫苑」

そう言つて一刀はその話を締めくくつた。

紫苑には桔梗の補佐兼、巴郡周辺の治安責任者を任せた。

本当はもっと大事な役職を頼もうとしたのだが、彼女には娘が居る  
とのことであり

子供の世話をしなくてはいけないとの事なので諦めて今回の役職と  
なつたのである。

その夜、彼女や董卓軍のメンバーを交えて歓迎の宴を開いて大いに  
賑わつたのだった。

次の日には軍師勢や武将達を集め会議を行つた。自分に協力して  
くれるという

恋、霞、華雄、詠、音々らの今後の役職を決める為である。

一番最初に決まつたのは霞で彼女には騎馬軍を任せる事にした。

俺の軍では星や軍師である稟が騎馬隊の指揮を執っていたが、正式  
な將軍と言つわけでは無く

臨時に率いて貰っていたに過ぎない。だから今回神速の張遼が味方になってくれた事により初めて騎馬隊に正式な将軍が決まった事になる。騎馬隊に関しては彼女に一任することにした。

次に華雄で、彼女にも騎馬を率いて貰うとの話が出たが結局、星と歩兵を任せる事に決まる。

たまに星が兵達の訓練をサボっている為、彼女に訓練を頼もうという事になった。

そしてその補佐として詠に訓練計画を作ってもらう事をこの場で決めた。

更に月と詠には俺の補佐と詠には緊急時には軍の指揮権を行使できる様にして

普段は偽名を使って生活してもらう事にし詠の名を黄権、月を董旻と呼ぶ事にした。

最初は戸惑っていた彼女達も最近では偽名を呼ばれても普通に返事をしている。

最後に恋と音々だが彼女達に関しては稟が考えた親衛隊将軍と軍師と言う形で決まった。

恋は「家族が養えるなら」と言い快諾して、音々も「恋殿がそう言うなら」と言ってくれた。

その日の内に色々決め翌日は休みを貰えた。起きて身支度を整えると朝食の為先ず食堂に向かう。

近くまで来るとワイワイと聞こえて来たので覗くと

そこには華雄と星、霞、恋の4人が話し合いをしていた。ゆっくり食堂内に入っていくと

「なんや一刀、今日は休み聞いたって。こない早い時間にどないしたん？」

と霞が俺に気づき話しかけて来た。その横で饅頭を食べていた恋も

「…………おはよう…食べる？」

と手に持っていた饅頭を半分に分けて割り小さい方を差し出してきた。おはようと挨拶しそれをもらつと

「主よ、少し熱めですがどうぞ」

といつて湯気の出ている御茶を入れてくれた星に御礼を言い御茶をすすする。すすると

「一刀、お前の軍の事で今3人と話していたのだが、騎馬に関しては霞に任せるとして

歩兵に関して言わせて貰えば今、星と話してもう一度編成しなおうと話していたのだ」

と華雄がそう言ってきた。俺が「何か有ったのか？」と星の方を見ると

「使える部隊と使えない部隊が混同されて居りまして、隊としての連携が阻害されています」

と俺に向かつて言ってきた。たしか明日の会議で編成に付いて話が有ると伝えると

「それなら良い。その会議に自分も参加させてもらう」

と言って彼女は御茶をすすりだした。俺は横にいた霞に騎馬隊の方を聞いてみると

「烏丸の連中や最初に居た奴等は問題あらへん。問題なのは最近入った奴らや。」

馬の扱い方がなつてへんし騎射に移る時に時間が掛り過ぎるんや。今どないしようか考えてんねん」

そう言っていたのでそれも明日の会議に行つてみると言つと笑つて「おおきに」と言っていた。

最後に恋に尋ねると最後の饅頭を頬張り終えてから

「……………恋が本気出すと皆が怯える」

とだけ言っていた。それはそうである。彼女はこの大陸でも最強の武将、呂布なのである。

なので戦の時の闘気等はそこらの将では比較にならない。

その彼女の闘気を浴びて兵が怯えるというのだ。仕方ない様な気も



しないが

その様な状態で戦場にいけないのでこれも稟や万里に良い方法を尋ねてみる事にして

彼女達と一時話していた。その時に霞が

「アンタの所は不思議やな、ウチみたいなの降将に軍を預けるなんて普通はもつと時間をおいて

裏切らんか様子を見て使うで。何の前触れもなしに軍を預けられた時は流石に自分の耳を疑ったで」

「それは俺が稟や風、万里に打診したんだよ。華雄や霞を遊ばせておくのは勿体無いってね。

最初は稟も風も首を振ってくれなかったけど、最後には諦めてくれたよ」

すると横で聞いていた華雄が

「一刀。お前は少し人を疑う事を覚えたほうが良い。我らが裏切らないという確証はないのだぞ？」

すると話を聞いていた恋が

「……華雄、駄目。一刀良い人。裏切る駄目」

そう言われた華雄は大慌てで恋に対し

「だつ、だ、誰が裏切ると言った、恋。もしもの話だ！！私が月様を助けてくれた一刀を裏切るなんか

万に一つも有るものか！！」

そう大声で言う華雄を見て星と霞が意地悪な笑いを浮かべ、霞に至つては尻尾と猫耳を生やして

「ふん、もしかして華雄っちは一刀の事が……」

「ほほう、華雄殿は我らが主の事がお気に召された様子で……」

と二人して華雄を弄り出して楽しんでいた。弄られた華雄の方は必死になつて反論しているが

口でこの二人に勝てるわけも無くプルプル震えていた。そして

「ええいゝ貴様等許さんぞ。星に霞。そこに直れ！！その性根今直ぐ叩きなおしてくれる」

そう言つて自分の横に置いてあつた戦斧を持つて星と霞を追いかけまわした。  
俺と恋はそれを見て笑つて、3人に切りの良い処で止めるように言つてその場を後にした。

食堂を出て何処に行こうか考えていると向こうから下士官達がやつて来て俺に挨拶して

「御使い様。郭嘉様がまた向こうで血の池を作つておられましたか……」

「その横で程立様が介抱されましたが、また何事か郭嘉様が言われてまた倒れられました」  
それを聞いて溜息を吐いて俺は、下士官達に礼を良いそちらに行つてみた。

すると何本かの書簡が散ばつておりその中心では風が稟を介抱しているのだつた。俺が書簡を纏め

「今回の原因は何なの？また艶本？それとも妄想？」

と訊ねると風はあっさりと「両方なのですよ」と答え稟の鼻血を止めようとしていた。

「はい稟ちゃん。トントントンしますよ。トントントントントント」

「うつつ、すみません風。この鼻血が憎い。この妄想体質が憎い」  
そう言う二人を見つつ「ウチの軍勢には変わった奴が多いな」と考えていると

「その筆頭はご主人様なのですよ。自覚が無いとはいわせませんよ」

「人の心を読むのは勘弁してくれ風。俺の何処が変だつて言うんだ？」

そう風に返すと風に介抱され復活した稟が

「ほつう自分の所業を棚に上げられて、自覚が無いと言われますか。一刀様は？」

まず極度の御人好しで、且つ我らに心配させる事ばかりなされる御方が変では無いと?」

そして止めを刺すように風が

「ええと、それに自分では隠しておられるのでしようけど、私たちは知っているのですよ」

西の区画にある孤児院に月一で通って寄付や遊び相手をしている事もですね」

そう言われ両手を上げて降参し

「風、それを何処で聞いたんだ? 皆には内緒にしてくれって言って置いたのに」

すると風の頭の上の宝慧が

「星は何でも知っている。空は皆を見ている。兄ちゃんのやって居る事なんて筒抜けよ」

「これこれ宝慧。ご主人様はバレて無いつて思っていたのですよ。あれで」

そう言う風をよそに稟が眼鏡を直しながら

「それに副業も沢山お持ちの様で。服の意匠に、食品開発。探せば幾らでも出て来そうですね」

そういわれ彼女達にはこれからも隠し事は出来ないと思つ。すると

「ふっふっふ。そうですよ。私たちに隠し事をしようとは甘いですね」。

外に出るなどは言わないですけどもつと注意した方が良いと思ひますよ」

「また読む……了解もつしないよ。それで話は戻るけど今回の稟の鼻血の原因は何だ?」

両方って事はこの間の艶本と同じか? でもあの艶本は俺が没収したろう? 稟には刺激が強いつて」

すると稟は紙で鼻を押えつつ、今回の原因と言つべき物を俺に差し出した。そこには

『八百一・特別編』俺が愛した最後の女達』とあり裏を見ると作者の欄に『宝慧』とあった。

少し読んだだけでも内容・質は明らかに裏にはアウトでありこれはそのまま没収とし、

原因を作った『宝慧』とやらの飼い主をその場で捕まえてそのまま万里の下に連れて行き

印税やらその他を新たに作る孤児院の建設費用に立てる事にした。

その際、俺の副業もばれる事になりそれも孤児院の費用に充てることとなってしまふ。

その後2人で万里に約二時間の間こつてり絞られてようやく解放されたのである。

万里に絞られた後、風は仕事があると自分の執務室に行くと言って別れて俺は街に出る事にした。

市場に行く夕方方の買い物物の時間であった為、今晚のおかずを買い求める主婦の行列ができていた。

俺が行くと皆がこちらを向き挨拶をしこちらへやって来て

「今度、何処の家で子供が産れる」だの「ウチの亭主が酒飲みで今度注意して下さい」やら

「今日の城のおかずは何？」とかの他愛もない話をしてきてくれる。それが終わると子供が集まって遊ぼうとやって来る。子供に教えた鬼ごっこや達磨さんが転んだ等の

遊びはここら近所の空き地で十分遊べる為に子供達の間で爆発的に広がっていた。

ある程度遊び彼等を区画ごとに纏めて集団で家に帰す。人数が少ない所は俺が送っていく。

子供達を送り城に帰ろうとすると前に月と詠を見つけた。俺が話しかけると

「アンタ此処で何してんの？あつ、もしかして僕の月に出そうとして……」

そんな事を言う詠を月が嗜めようとする。

「一刀様こんにちは。詠ちゃん、一刀様にそんな事言っちゃあ駄目だよ。」

そう言う月に向かって詠は俺の時とは全く違う口調で

「月。男は信じちゃあいけないってあれだけ言ってるのに……コイツも一皮むけば狼になるのよ。」

「でも、一刀様は良い人だって詠ちゃんだって解って居るでしょう？」

「月は優しい子だから、こう言っているけど僕は騙されないからね！！」

そう言う詠をわざと無視する様に月に向かって

「月、今日は俺と一緒に休みの筈だろ？街に買い物か？」  
と言うと少し困ったような顔をしていた月が笑顔で

「はい。久しぶりにゆっくり出来そうだったので詠ちゃんと一緒に過ぐそうと思って。」

俺と月が楽しく話していると詠が横に来て俺の腿のあたりを蹴って

「へへえ、僕を無視するなんていい度胸してるわね。しかも僕目の前で堂々と月と口説くなんて。」

蹴られた腿を擦りながら俺が

「痛いな！！今の話をどう聞いたら口説いてる様に見えるんだ詠？それに普通人の足を蹴るか。」

「アンタだから蹴ったのよ！！アンタなんかそこの犬でも口説いていけば良いのよ！！」

その一刀と言い争いをしている親友である詠を微笑みながら見つめている月が居た。

漢中で万里には言ったが詠がここまで自分を飾らず男性と話しているのを月は見ることが無い。

詠が自分を飾らずに話す相手と云えば自分や仕えてくれていた恋、霞、華雄、音々くらいだ。

それ以外の者は軍師の時の詠しか知らない。

しかしここに来てからの詠は自分を隠す事を忘れてしまっているかの様だった。

月は詠がそうだったのは恐らく一刀の影響だと思っている。

一刀の周りにいる者は皆、自分を飾らずにいる。それは主君である一刀もそうだし、

軍師の稟や風、將軍の星、焰耶達、そして市民達までも一刀を家族の様に接している。

その一刀の影響は自分や自分に付いて来てくれた者達に良い影響を与えてくれていた。

恋や霞、華雄や詠は一刀の事を昔からの友人の様に呼び捨てにし、霞や詠に至っては一刀を

叩く事もある。しかし一刀はそれに対し何も咎めず、一刀も親しい友人の様に接する。

また一刀の配下の者達も気さくで有るのも幸いしているようだ。

付いて来てくれた兵の中には馴染めてない者もいるが大多数の者はそんな北郷の雰囲気に安心し皆はあっさり北郷の一員となっていた。

それは自分の目の前で言い争いをしている詠も同じ様で洛陽に居た時より生き生きして見える。

詠が自分を飾らずにいる事が自分の事に嬉しい月は言い争いを続ける二人に向かって

「一刀様、そろそろ城に帰りませんか？詠ちゃんもね？」

その笑顔を見た瞬間、今まで言い争いをしていた二人が黙ってしまった程の笑顔がそこにあった。

三人はその後ワイワイと話しながら城へと帰って行った。

こうして一刀の休日は賑やかに且つ穏やかに過ぎて行った。

## とある猫耳軍師の大陸分析及び北郷軍全体拠点フェイズ（後書き）

今回もここまで御読み下さって有難うございます。

体に带状疱疹が出来て早3週間大変でした。

痒みと疼く痛みが交互に襲ってくるなんて反則です。

作者は病弱な為、結構色んな病気になっておりますが今回の様に眠れないというのは初めてでして二度とこの病気にはなりたくありません。

今回も何度も校正作業をしておりますが、何か文法の誤り・誤字脱字など

有りましたらお教え下さい。

今回は群雄割拠編、第一弾として紅蓮達の事や桃香達の事などを書こうかと

思っております。

群雄達の萌動へほうどう (前書き)

お久しぶりです。憂鬱です。1か月振りに投稿いたします。

今回は大陸に君臨する主だった諸侯達が動いたり、準備に取り掛か  
ります。

勿論、我等が一刀も動く準備を始めます。

皆さんに楽しんで頂ければ幸いです。



## 群雄達の萌動へぼつとく

連合が解散する少し前より多くの諸侯達がこの後に来る、戦乱の世の為に動き回っていた。

自身の勢力が生き残る為に大きな勢力に擦り寄る者や、隣国の者と同盟する者など沢山いたが

劉備軍も色々と動き回っていた諸侯の一つである。正確に言えば軍師達であるが……

ただ彼等の勢力は連合でも下位に属する為、慎重に接する者を選んでいた。

そして連合での功績が認められ徐州が与えられてから2ヶ月後から話は始まる。

ここは徐州の中心都市彭城にある諸葛孔明こと朱里に与えられた自室兼執務室である。

そこで劉備軍のもう一人の軍師鳳統士元こと雛里と二人、真剣な顔をして話していた。

今、彼女達は周辺地域の勢力の状況を確認し合っている。自分達に攻め込んで来る可能性の有無や

その国はどんな状態かを密偵からの報告を元に確認の最中だった。

「北海の孔融さんは大丈夫だと思う。今、こちらに構っていられる状況じゃないと思うから……」

「うん、私も雛里ちゃんと同じ。相手は袁紹さんだもん。兵力差が有り過ぎるからね。」

私達に構ってる暇なんか無いしね。それに黄巾党の残党もいるし……」

そう言つて朱里は目の前にある徐州周辺の地図上に書いてある『孔融』と書かれた所を塗り潰す。

「じゃ次はその孔融さんの領地を狙っている袁紹さんだけど……」  
すると雛里は少し考えて

「私は今はまだ大丈夫かなって思つてるのだけど。朱里ちゃんは？」

「うん、私は白蓮さんと張燕さん次第かなって思つてるんだけど」

そう言つと朱里は密偵からの報告書と現状の袁紹領の様子を纏めた書簡を雛里に見せる。

雛里はそれを受け取り暫く集中し、報告書と書簡を読み終えてから朱里に話しかけた。

「袁紹さんの所は噂の対応に対し後手に回っているね。この報告書通りなら恐らくだけでももう少し掛かりそうだけど……でもそんな状態で青州や并州に勢力を伸ばしているのは流石だと思つよ」

そこで一旦区切つてから

「でも袁術さんが仕掛けた包囲網は厄介だよね。孔融さん、白蓮さん、張燕さん達に

三方包囲されてるからね。袁紹さんも反抗しているけど今の所目立つた成果は上がつてないし……」

張燕さん、白蓮さんは兵隊さんを多く持っているから、その方面に兵を裂かなくては行けないし」

雛里がそう言うと朱里は袁紹軍の現状を考えてから

「じゃあ袁紹さんの所は保留だね。でもどちらに転んでも良い様にだけはしておく事にしようか」

そう言って地図上の『袁紹』の所に『要注意』と書き込んでいく。そして朱里は続ける。

「次は袁術さんか…下丕以南への工作は最近落ち着いているよ……でもまだ諦めて無いみたいだしね」

朱里は立ち上がり自分の机から一本の書簡を持ってきて雛里に差し出した。

雛里はそれを受け取って読み始めた。その間に朱里はお茶を煎れ雛里の方に差し出す。少しの間、朱里がお茶を飲む音だけになって暫くし、書簡を読んだ雛里が沈黙を破る。

「うん、でも荊州で決着が着かない限り動けないよ。それに曹操さんにも睨まれてる訳だし…」

「でも曹操さんはいずれ近い内に動くと思うの。これを好機と捉えてさ。すると自分を牽制する者の居なくなった袁術さんも動くよ絶対に。曹操さんは青州に、袁術さんは私達の徐州に。」

その時までには私達がどれだけ戦力を整えられるかが問題だと思うの」

朱里がこの先そう遠くない事を、そう話すと雛里は自軍の徴兵、訓練状況を考えてから

「徴兵の方は大体終わったのだけど……調練の方はもう少し掛かると思う。愛紗さんや鈴々ちゃんが頑張ってくれて居るけど練度の方がもうちょっと……でも袁術軍よりは精兵だよ。だって……」

雛里が続けようとした時、扉を開けて朱里の放っていた密偵が入って来て

「朱里様、緊急事態です！袁紹の要請を受け、青州黄巾党の残党征伐に曹操軍が乗り出しました。

その数約2万。青州刺史孔融は状況を掴めずに対応が後手に回っております。

このままでは青州は袁紹と曹操に押えられるのは時間の問題かと思われます」

そう言つて朱里に頭を下げた。横で聞いていた雛里が少し困った顔をして

「曹操さんが先に動くななんて思いもしなかったね。孫堅さんが先だと思つていただけのこと……」

袁紹さんだけならもう少し余裕もあったのだけど。予定より早いけど行動に移そうか？」

そう訊ねて来たが朱里は応えずに暫く考えて

「袁紹さんへの噂は雛里ちゃんにお願いして良い？私の密偵さんは曹操さんと領土問題で

睨みあつてる宛の張繡さんに噂を流すから。上手く行けばその後は決めた通りに……」

そう言つて二人は足早に部屋を出て行き自分の密偵達に指示を出していった。

朱里達が噂を流すように指示して8日後のことである。袁紹からの要請で青州に入った曹操軍は快進撃を続けていた。袁紹は順調に青州を我が物にしていたが刺史の孔融と黄巾党が邪魔をし、更に并州の張燕や幽州の公孫贛が自領を覗うかがつてしていると連絡が入り袁紹は青州を同盟中の華琳に任せ、兵をそれぞれ張燕と公孫贛に向けるのだった。

曹操軍が青州に入った目的は、袁紹からの要請もあるのだが最大の目的は現在の華琳に足りない物を取りにきたのである……それは兵と糧食、そして労働力（人）であつた。将は夏侯姉妹を筆頭に許緒や典韋、楽進や李典や于禁ら猛将、勇将を揃えるが兵はそれ程多くなく、また領地も人口が少なく、兵や民を確保する事が最優先課題であつた。

そこで軍師の桂花は青州や近辺の黄巾党を兵として、もしくは労働力として取り込む事を考えまた糧食の備蓄も多くはない為、黄巾党を退治して彼等の持つている糧食を自軍に加えるという一石二鳥の策を提案・実行しそれは殆ど成功していた。華琳はここで多くの兵とその家族及び糧食を手に入れ後は袁紹の要請通り刺史の孔融を倒す事だけだった。

だが陳留からの使者によって華琳は驚く。領土で揉めていた宛の張繡や長安・洛陽を占拠している李確や郭？が華琳の留守を狙い本拠地の陳留に向かっていると報告

があつたのだつた。

張？は元々董卓軍に居たが、長安を脱出する時に張？の伯父の張濟や自分の配下とともに

宛に入りそこで軍閥として力をつけていた。またその時長安を占拠していた董卓軍の同僚の

李確や郭？とも同盟し更に力を増していた。彼等は曹操や袁紹、孫堅に北郷といった諸侯が勢力を

増しているのを知り曹操・袁紹と対立していた袁術に同盟を持ちかけ袁紹や曹操の包囲網に加わった。

その後、彼等は朱里が流した噂を聞きつけると直ぐに連れて行けるだけの兵を用意し出陣した。

華琳はすぐに自分の部下を集め今の状況を整理していると、袁紹の所も張燕が并州に作つた拠点を

攻撃しているとの報告があつた事が判明した。華琳は不思議に思い桂花に尋ねる。

「桂花。何だか出来過ぎな様な気がしない？私達と麗羽の所が同時になんて」

華琳に言われ少し考えを纏めて桂花は言った。

「そう言われればおかしい気もしますが、先ずは張？達を何とかしませんと。

自領に置いて来た兵は多くはありません。報告で敵は一直線に許昌に向かつているとの事です。

それに呼応するように、我等と友好関係に合つた張？が突如陳留に攻撃を開始したとの事」

「そう、張？が……」

華琳はそう言うのと暫くの間、目を閉じ考えていた。張？とは華琳が旗揚げ後に知り合い意気投合し連合でも華琳を支持する程に関係は良好であった。

だが華琳が？州の州牧になってから張？は少しずつ華琳から距離を置く様になっていく。

華琳が自領の黄巾党の残党を糾合し勢力を拡大し出すと張？は増々離れていった。

最近では張？も勢力拡大路線を取り始めるが、それが袁紹の耳に入り難癖を付けて攻めようとしたがそれを庇い袁紹を抑えたのも華琳である。

張？は初め華琳に天下を治めて貰いたいと思っていた。だが何時の頃からか張？は華琳の執る方策や

強引に進める勢力拡大に疑問を抱き始める。しかしそれでも張？は華琳に賛同し連合に参加するが

張？の部隊は虎牢関で打撃を受け、長安に向かう途中で更に大きな打撃を受ける。

その後、張？の心の中で何かが変わり遂には華琳を恐れ始めた。華琳が袁紹を説得している間も

二人で自分を滅ぼすのではないかと張？は更に疑心暗鬼に陥り、遂に李確や郭？達と手を結び反旗を翻し陳留に攻撃を開始する。

しかし張？の家臣達は陳留攻撃には反対であり何名かの者は張？に対し

止める様に提案するが全く耳を貸さず強引に攻め上がってしまうのだった。

華琳は暫くしてから目を開き自分の側にいる者達に向かい

「我が軍はこれより陳留へ戻り張？を討った後、許昌を落そうとしている張？等と雌雄を決する」

そう言うとはその場で礼を取り準備に取り掛かった。皆が去った後、一人残った桂花に

「桂花、貴女には少し調べて貰いたい事が有るの。張？や李確達がいきなり動き出したのは何か切っ掛けが有る筈よ。それを調べなさい」

「はっ、了解しました！！」

そう言うて桂花もその場を去って行った。残った華琳はその場で席に着き何か考え事をしていた。

……場所は変わって長沙にある孫堅こと紅蓮の居城……

今、玉座の間では紅蓮を始めとして孫堅軍の軍議が行われ様とされていた。

席順としては主君である紅蓮が上座に座り、彼女に一番近い席の先頭に雪蓮が座っていて

更に雪蓮の対面には冥琳が座り、冥琳の隣には次席軍師の穩が座っている。

雪蓮の隣には彼女と同じ髪色を持つ妹、孫権が座っていた。

最初に軍師である周喻こと冥琳が席より立ち上がり最近の近況を説明し始める。

「まず悪い情報、劉表の策略に嵌った袁術の動きが不確定になっ



てしまい如何動くか解らん。

これから事を起こすに辺り、袁術の兵と物資も使おうと策を考えていたが全て無駄になってしまった」

そう言っただけで掛けている眼鏡の位置を直しながら続ける。

「だが、その事以外は全て順調に進んだ。長沙周辺の零陵、武陵、桂陽の太守達を味方に付け、

周辺の憂いは無くなったし、彼等の軍も合わせれば我等は現在この大陸の諸侯の中で最大となった。

糧食の方も我らに協力的な富豪達の御蔭で当分心配はいらない。調練の方はどうだ穩？」

そう言われた次席軍師の穩こと陸遜は大きな胸を揺らしながら立ち上がり

「はいはい。え〜とですね、私達の軍の方は8割方終了してまますよ〜」

唯ですねー今回加わった兵隊さんの練度が我が軍の動きに付いてこられるかが微妙な所です……」

そこで区切り紅蓮に向かつて

「もし彼等を連れて行かれるのなら後方支援か、拠点防衛の様な場所です。使った方がいいかと思えます〜」

そう言っただけで穩は席に座った。次にまた冥琳が立ちあがり

「ふむ、兵の方は後で私も考えよう。次に周辺の状況だが先程話した通り荊州南部は我らが陣営に

入ったと見て良いだろう。後ろを気にせず敵に集中出来るのは策を

立てる方にとつてもありがたい。

次に劉表の方だがこれは明命に命じて探らせていたのが纏ったのでここで報告する。

劉表も我等と同じく徴兵と訓練を行ってるらしい。その数約6万だそうだ。率いるは蔡瑁と黄祖。

黄祖は平地にての決戦を望み、蔡瑁は江陵、江夏、夏口、襄陽での籠城戦にて防ごうとしている。

我等としては黄祖の方が余計な被害を出さずに済むので有り難いが……」

と言つてその場にいる皆の方を向き直し、眼鏡の縁に手を当てて

「ここまでが我等の現在の状況だが、何か質問の有る者は？」

そう言うとは名かの者が手を上げて発言するが、冥琳はそれを事も無げに應えて行った。

すると対面に居る雪蓮が何やら嬉しそうに手を上げているのに気づく。

だが敢えて無視してその隣に居る孫堅こと蓮華も手を上げていたの  
で先にそちらを指す事にした。

指された蓮華は驚き、横にいる雪蓮は口を膨らませて「ぶー、ぶー」と抗議していたが

雪蓮が折れて先に蓮華が発言する。

「これは母様、姉様、冥琳にも聞きたいのだけど、我等の横に居る北郷は如何なさる御積りです？」

我等とほぼ同等、もしくはそれ以上の戦力を誇り、それを率いる将も我らと互角。そんな危険な勢力が

有るのに母様も、姉様も、冥琳も触れようとしなのが、私には不思議でならないの。

それと今回の出兵の目的の詳細と期限も明らかにされてない事も聞きたいわ」

その蓮華の発言に他の諸将から驚きとも、賛同とも取れる声がある。

それを聞き、今まで黙っていた紅蓮が如何にも面倒臭いと云う態度で立ち上がり話し出す。

「ふうやれやれ、俺は今回の軍議では全て冥琳に任せようと思っていたのにねえ。

蓮華や他の者達も何か聴きたそうだから言っとくよ。一度しか言わないからよく聴きな。

今回の戦の目的は劉表の女狐を叩いて荊州を完全に手に入れる事。これが一つ目の目的」

そう言い、その場に居る者達を見回してから

「劉表を叩いたらその余勢を駆って袁術に宣戦布告をし柴桑・廬江までを占拠し寿春に圧力を掛ける。

この後、休養も兼ねて少し休んで一気に袁術の子猿も倒す。つてのが今回の作戦の概要さ」

そこまで言ってもう一度皆を見回すと驚く顔をした者達ばかりだったが、何人かの者は

予想出来ていたのか笑っている者や頷いている者も居て紅蓮を喜ばせるのだった。

その者達はこの後、紅蓮に呼ばれ出世していく事になる。

只、他の者が驚くのは無理も無い。この事を知って居たのは紅蓮と雪蓮、冥琳、穩の4人だけで

他の者達は今、初めて知らされたのである。その反応も様々であり、喜ぶ者、何やら考え込む者、  
沢山居たが紅蓮はその者達の動揺を鎮めて続ける。

「そこで蓮華。あんたの質問に出て来た一刀の事だがね……あいつは後回しだね。今の一刀相手に割く兵なんてないし将も居ない。それに一刀は恐らく何もして来ないよ」  
そう言うと冥琳も紅蓮の後に続き蓮華に向かって答えた。

「私も紅蓮様と同じ意見です。蓮華様。北郷殿は恐らく動きません」  
それを聞き蓮華は冥琳の方を向いて

「冥琳がそう言うのだから私は信じます。でも、その貴女が信じる根拠が何か、教えて欲しいの」

冥琳は自身の懐から一枚の手紙を取り出しそれを蓮華に差し出す。  
手紙を受け取った蓮華は  
それを読み始めた。手紙は劉焉の領内に放った明命の手の者からの手紙であり、手紙の概要は

『劉焉の健康状態が芳しく無く明日をも知れぬ状態になっていて、本来ならその様な事態に政務を執行せねばならぬ劉璋が政務を蔑ろにし成都の機能が混乱しているとの事や、  
それを更なる好機と捉えて調略を重ねている一刀達の事が書いてあり、此処に来て大幅に造反者を出し  
成都まで立塞がる障壁は綿竹関のみと云う状況になっている』

と報告書は記して有った。

その場が静寂に包まれてから暫くして、手紙を読み終えた蓮華が口を開く。

「冥琳の言う事は解ったわ。でもこれが本当なら北郷をそのままに置いて良いのかしら？」

このままでは益州全土を制圧してしまうわ。そうなった時、私達に牙を向けて来ないか心配よ」

蓮華の不安を拭う為、冥琳が喋ろうとした時に横から雪蓮が立ち上がって

「蓮華の心配に関係する事なのだけど、稟と風が黙って居るかが心配ね。あの二人は冥琳の言う通り

一刀の為なら平気で私達に牙をむけそうだから。その辺りはどうするの？」

冥琳は雪蓮に向かって

「ふつ、私を誰だと思っている、雪蓮。彼女達の動きは把握済みだよ。それに北郷軍の動きもな。

先程、蓮華様に見せた手紙の通り北郷軍は劉焉に止めを刺す為に容易にこちらに動けまい。

また、動かせたとしても一万が良い所だ。例えその中に呂布や張遼が加わっても対応出来る様に

準備してあるし、雪蓮、お前も解っているだろう。北郷殿がそんな事出来る人ではないと。

そしてその北郷殿が悲しむ事を彼女等がすると思うか？答えは否だ。お前への答えはこれで良いか？」

それを聞いていた紅蓮が

「さて、そろそろ一刀の方の話題も良いだろう？ さっさと決めなければいけない議題があるんだ。

さっさと決めて一杯やろうじゃないか。冥琳、雪蓮、蓮華」

それだけ言うとまた椅子に座り込んだ。冥琳は「ふう」と一息吐きながら残りの報告と議題を説明

していく。軍議はその日の夜遅くまで続き、劉表への宣戦布告と進軍の日程は1週間後と決まる。

その後も出陣の日が来るまで殆ど毎日の間、軍議を繰り返す不安要素を潰していった。

（場所は変わり白帝城）

ここ白帝城では主要な武将、軍師が集まり会議が行われていた。

居るのは星、稟、風、万里、桔梗、

焰耶、紫苑、明実（法正）、昇華（蒋苑）、彩加（費緯）、還樹（

李蔽）、真佳（？芝）、信思（董允）、

恋、霞、華雄、月、詠、徹里吉、越吉である。

これだけの将が集まるのだから当然会議室では収まりきれず玉座で行われる事になった。

先ず最初に稟が一刀の方を向き目を合わせてから少し頷いて皆に向かって語り始める。

「皆様、忙しい中集まって頂き有難う御座います。これから始まる御前会議は我等の進路を決める為に

大切な会議でも有ります。これからの我等が軍、我等が領土をもつと繁栄させる為に皆の意見も

聞きたく一刀様にお願ひして皆様を集めて頂いた次第です」

そう言つて皆を見て自分の前に置いてあつた書簡を皆に二枚ずつ配り始める。そしてそれが終わると

「今、私が配つたのは我が領土を取り巻く状況と我が国内の国力を数値化してみた物です。

国力に關しましては生産力の予想も入れていきますので多少の増減があります、大体の数値ですので

問題は無いと思われます。国力の方は風の方から、周辺領土の事は万里に説明して貰います。

軍事に關しては前もつて担当する將軍達には言つてありましたので、御自身が把握しているだけの報告を後にして頂きます」

そう言つと稟は椅子に座り横に居る風が立ち上がりいつもの間延びした口調で話し始める。

「ええとですね、先ず国力ですけど。私達が赴任してから少なくとも見繕つても約3倍程の成長が

期待出来ると思ひますよ。私達が行つた施策の中で効果の大きかつた街の治安の改善と街道への

警備兵の巡回は特に旅商人や旅人達に好評ですね。私達の領内で風が把握している盗賊や山賊の

被害も大幅に減つてますし、盗賊団等の悪さをする人達の集まりも殆ど壊滅させたのですよ。

それに伴い最近では私達の領地内でお店を開く商人さんや移民希望の方達の数も上々なのですよ。」

風はそこまで言つと椅子に座り万里が宝物の本を手元に置いて立ち上がり

「次に大まかな周辺領土の状況を説明いたします。先ず我等が同盟中の孫堅殿の動きが活発化し、それに伴い劉表殿も夏口、襄陽、江陵、江夏の各城で兵糧、武器等を運び込み防戦準備を始めました。

どうやら孫堅軍に対し蔡瑁殿の籠城策を適用する様です。賢明な判断かと存じます。

自軍より大軍に勝機も無く当たる黄祖殿の策を取っていたなら、孫堅殿が大勝するかと思いましたが…

これで劉表軍に少しながら勝機が見えてまいりました」

そう万里が言うと何人かが解らないという顔をしていた。（何人とは華雄、焰耶、である）

その人物達に解る様に万里は説明を始める。

「では華雄殿にお聞きしますが。孫堅軍の有力な武将・軍師を上げて下さいますか？」

問われた華雄は「何故私が」とブツブツ言いながらも指を居りながら答える。

「先ず総大将の孫堅だろう。娘の孫策、孫権。宿将の黄蓋、韓当、程普、祖茂、周泰、呂蒙と

軍師でいえば周瑜、陸遜、諸葛瑾と主な者はこれだけかと思うが」

万里は華雄が言い終えると彼女に向かって

「その孫堅軍に比べて劉表軍の武将の数は半分ほどで、しかも兵数でも負けております。将兵の数と

士気、訓練度その全てにおいても孫堅軍は劉表軍を圧倒しています。しかし劉表軍には有効に使えば

切り札と成り得る物が二つあります。それは地の利とそれに伴う糧



食の多さです。それが今回の戦で

劉表軍が孫堅軍に対し使えるたった二つの武器です」

そこで万里は焰耶に向かって

「では焰耶殿？今まで私が言った中で今回、劉表軍が取るべき策が籠城だというのは何故ですか？」

すると焰耶は言葉を選びながらではあるが説明を始める。

「えっと、劉表軍が何故籠城策を取るかと言えば……孫堅軍は劉表軍より食料が少ない…からか？」

と焰耶が疑問形で答えると

「それでは1000点中、40点くらいですね。その答えでは、何故少ないのかを言わないとですね」

と横より風が焰耶に駄目出しする。そして風は華雄にも同じ質問をし始めた。

「では、次は華雄さんですよ。何故劉表軍は籠城策を取ったのでしょうか？」

焰耶の答えを考えつつ、華雄も言葉に詰まりつつ、答え始める。

「うっ、うっん、孫堅達は食料が何故劉表より少ないのかだろう…  
…うっん、うっん」

と考えてる華雄を見ていた風がいきなり俺の方を向き薄い笑いを浮

かべながら

「では、ここはご主人様に「ビシッ」と答えて頂きましょう。焰耶ちゃんも華雄さんもご主人様が

答えて下さるのでちゃんと聴いて置くのですよ。ではどうぞ」

とハードルを高めを設定してくれて俺に答えるという風。その姿が悪魔に見える。

そして周りを見回すと焰耶や華雄は俺が答えるのを黙って見ているし、

星や霞は風と同じ笑みを浮かべ俺を見て、稟や詠、明実等は「早く答える」とばかりに睨み、

紫苑と桔梗は「おやおや」と言いながら笑い合い、恋はあくびをしていた。

そんな状況の中で俺は即答する。

「紅蓮に対し劉表軍が籠城策を取った理由は、紅蓮の軍の事情を知っているからと思うのだけど？」

俺はそう言い辺りを見回して皆が聞き入っているのを確認して続けた。

「紅蓮が治める領土は連合の前と変わらず長沙だけ。でも今では周辺の太守達の兵も取り込んで8万人以上に膨れ上がった。でも紅蓮は兵に数が増えただけであって領土は広がって無い。

それでも今、劉表軍に戦いを挑めるのは多くの富豪や豪族等の協力者が居て兵糧や軍資金の援助をしているからだ。その協力者達は紅蓮に付いている事で「利」があるので付いているのであって

紅蓮に心底感銘し協力している者は少ないと思う。劉表軍はその

所に気づいているから籠城策を取ったのだと思うのだけど……」

俺がそう言っていると稟が眼鏡を布で拭き、それを掛けてから俺に質問する。

「一刀様にお聞きしたいのですが、今の話は貴方が御自分でお考えになられた結果でしょうか？」

「流石に稟は騙せないね。今の話の半分以上は先程まで政務を手伝ってくれていた昇華と彩加の話を

聴いて言っただけだよ。次からは自分の考えを言うからさ。今回だけは勘弁な」

と両手を上げて降参した。そしてそれを見て稟は溜息を一つし万里に話を先に進める様に目で促す。

「では続けます。我等の東で孫堅軍と劉表軍が争い、北では袁紹軍が張燕軍、公孫贛軍に領土を

狙われております。その為、順調に進んでいた青州攻略を曹操軍に任せ、自軍を両軍に振り分けて対応

しております。曹操軍は青州に入り瞬く間に黄巾党を討伐・吸収し勢力を拡大させました。

しかし宛の張？と同盟を組んだ張？が不審な動きをしておりますので曹操殿も油断できないかと。

北西では馬騰軍が長安・洛陽を抑えた李確・郭？の軍と緊張が続いており、我が軍と同盟中の漢中の

張魯も何やらキナ臭い動きをしているとの事。劉備軍は表面上は穏かに過ごしておられますが、裏では

何やら派手に動いているとの事で、恐らく諸葛孔明と鳳土元、二人

の仕業かと思われませす。」

そこまで言うとは一度俺と視線を合わせてから

「今、話した通り大陸中で戦闘が行われ始めました。今、軍を大きく動員して動いてないのは我等と

劉備軍だけです。劉備軍は徐州に入って日も浅い為にそれほど大きな軍は動かせませんが、それでも

3万以上の軍を訓練し維持しています。我等も領地に帰って来て1カ月程経ち、

兵の休養も終わりそれなりの軍は動かせるまでになりました。私が把握して居るだけでも

歩兵は5万以上、騎兵は7千は動かせると思いますが……」

とそれぞれの軍を指揮している將に目を合わし報告を促す。初めに立ったのは華雄だった。

「え」と私と星が訓練中の部隊だが編成をし直し、稟や詠にも協力して貰い、後1万は行けそうだ。

日程は後1週間程掛かるがな。ただ二人が協力してくれたおかげで陣形や攻撃に移る時の速度は

確かに早くなつたので、練度の方も申分無いと思つぞ」

言い終わると席に座る。すると横に座っていた星が何やら話しかけていた。

（後で聞いた話によると、二人が訓練した軍の内、どちらの軍が優れているかを競い合い、負けた方は

この会議で発言すると云う事となり結局、星が勝つたらしい。その事を後に知つた稟が二人を監禁し

説教のフルコースを味あわせた事はここでは触れないで置く……)

次に発言したのは霞だった。

「次はウチか〜ウチが見た騎馬隊は殆ど訓練終わつとる。一刀が提案してくれたあぶみ鎧と鞍を

半分の部隊に配置して移動も騎射も早うなった。御蔭さんでウチはかなり楽出来たわ。それに

徹里吉、越吉が来てくれたんも大きいわ。そんでなウチ等から提案があるんやけど、ええか？」

そう言うと霞の隣に居た徹里吉が立ちあがって発言を始める。

「霞殿から話が有って私達の使っている戦車を何十台か作って運用してみたいとの事でしたので

練習用と実戦用に五十台程準備したいのですが。宜しいですか？」

と俺に尋ねて来る徹里吉と越吉に対し俺は稟と万里の方に視線を合わせて

「如何思う？稟。万里。俺は悪くないと思う。平地での戦や陣の前に置けば防壁になるし使えなければ  
輸送部隊に回せば良いと思うのだけど…稟は如何？」

すると稟は徹里吉の方に向き

「二つだけお聞きします。今の貴女達に配備してある車両数と一台幾らかを教えてくださいますか？」

と稟に問われると徹里吉は即答する。

「少しだけ待ってくれるか？この会議の後でその事に詳しい者に説明させよう」

稟は俺の方を見て「この事は我らでやっておきます。先に進みましよう」

と言って会議を進行させた。次に立ちあがったのは桔梗だった。

「ワシの軍ですが兵数は1万1千程。全体の訓練は終わっておる。御館の命令が有れば何時でも動かせるようにはしてあります」

と言うとさっさと座ってしまった。稟や万里は少し険しい顔をして俺の方を見ていたが、

俺はそれをみて桔梗らしいと思い、先に進める様に頷く。

最後に立ったのは徹里吉だった。

「何名かの方々は初見なので挨拶させて頂きます。私は先日の戦いより御味方させて頂いております、青羌部隊を纏める徹里吉と申します。横に控えるのは越吉と申します。以後宜しくお願いいたします」

そう言うと二人で頭を下げる。それを見て俺は初めて会った事を思い出す。

初めて会ったのは紫苑と会った翌日だった。その前に捕虜として送られていた呉懿や雷銅の処分を

決める為に明美や彩加、還樹、稟、風達と話をしていた。

まず呉懿達に俺達に下る意思が有るかを尋ね彼等は全員拒否した。なのでそれを踏まえ如何するかを

皆で話し、話は紛糾するが最後は結局、彼等を全員釈放する事に決めて決定書にサインをしていた。  
すると月が来て徹里吉等が挨拶をしに来たと言うので、玉座で会う事になり向かう事にした。

俺が玉座の間に行くと言った徹里吉等は中央にて椅子に座っていて、俺が玉座に座ると彼女から話し始めた。

「御挨拶が遅れて申し訳ありません。私が徹里吉、横に居るのが越吉と申します。今回此処に来たのは

この度の戦勝の御挨拶と今後の予定などを聞きに参りました」

と丁寧な挨拶をしてきたので俺は

「徹里吉さんに言つとくけど、俺に畏まったの挨拶とかは不要だよ。俺自身そんな挨拶が苦手だし、

何よりそんな挨拶をされると全身が痒くなってくるんだ。だから俺の所ではそんな回りくどい事は基本的にしない様にしてるんだよ。そりゃ朝廷の使者や大事な儀式の時はするけどね」

と俺が言うと彼女は少しの間を置いて口元に手を当てて笑い出す。

その笑いを見て横に居る越吉は信じられないという顔をして徹里吉の方を見ていた。一通り笑い終えると彼女は俺を見て

「フツ、久しぶりですよ、作り笑いでは無く本当に心から笑ったのは。本来なら貴方の話だけでは信じないのですが、私が貴方に挨拶をしていた時の顔を見たので信じますよ」

と彼女は言い終えると椅子の横に置いてあつた袋を開けて中から筆と簡をだして

「では、回りくどい事は止めて聴きましょう。我等の次の仕事を頂きに参りました。噂では劉焉に

従つていた者達が続々と貴方に付き、劉焉の居る成都の前に残るは綿竹関のみと聞きます。

そこでお聞きします。何時頃、綿竹、成都を攻められますか？」

と俺の言葉を聞き洩らさない様に構える。俺は一緒に付いて来ていた詠に目配せし、詠も頷いた為

「今から2、3カ月は動く気はないよ。俺達の軍は連合から帰つたばかりだし、残して行つた軍も

劉表、劉焉軍と戦闘をして疲れているだろうから軍を休めなきゃならない。全軍の休暇が終わるのが

約1ヶ月後だから、それから訓練して部隊が整うのが速くて1、2カ月だからね」

俺がそう言つと彼女は俺の方を見て

「そうですか。ではその間、私達は領内の警備でもしましょうか？」

と言つので俺は

「いや、君達にはやって貰いたい事が有る。1つ目は騎馬軍の訓練を見て欲しい。今、軍の騎馬隊の

訓練は霞…、張遼將軍が一人で見ているのだけど一人ではやっぱり大変そうだからさ。

君達なら馬の扱いはお手の物だろう。2つ目も軍に関してだけど…



……」

と俺が言い終わると話を聴いていた彼女から笑みが漏れ

「フフフツ、やっぱり貴方は面白い。解りました、その役目きつちり果たして御覧に入れましょう。

それにしてもその発案は誰も出来ないと思いますよ。貴方の軍以外はね」

その後も暫くの間、彼女達と話をして一緒に夕食を取っていた時の事だった。

俺は徹里吉と話していがと越吉が一言も喋らない事を不思議に思い尋ねてみると徹里吉が

「彼女は言葉を喋れません。昔、病気に掛かり命は留めましたが代わりに言葉を発せなくなりました」

との事だったが徹里吉は越吉に向かって笑いかけ

「しかし私は彼女が喋れまいと関係有りません。長年一緒に居た所為か彼女の言いたい事は

何となく解りますし、筆談という手段もありますから」

と話してくれ、越吉の方もその言葉に頷き笑っていた。

俺は彼女に謝り、そのまま夕食を取った。その夕食の途中、我が軍のお騒がせ軍団がやって来て

何時の間にか宴会になって居た事は、いずれまたの機会にしよう…

……

群雄達の萌動へぼつとんぐ（後書き）

1月20日に百万PVを突破いたしました。

また読んで下さった方々の数も十五万人を超えました。

これもこのような拙作を読んで下さった方々のおかげです。

この場を借りて御礼申し上げます。

これからも投稿速度・文章の拙さは変わりませんがそれでも

読んで下さる方々が居る限りゆっくりと投稿は続けさせて頂きます。

今回の話を書くまでは本当に大変でした。まず、带状疱疹に掛かり

1月頭から2月14日まで資格の講習や試験がほぼ週ごとにあり

小説を書く時間を削って勉強してました。

御蔭さまで14日の溶接試験を除き、全て受かる事が出来ました。

これから4月まで少し時間が有るのでゆっくりながらも

書いていきたいと思えます。

今回も此処まで御読み頂きありがとうございました。

群雄達の萌動へほうどうくく大会議く（前書き）

投稿が大幅に遅れ申し訳ありません。

今回は結構急ピッチに書きあげた為、誤字脱字も多いかもしれませ  
ん。

何かありましたらお教え下されば幸いです。

今回は一刀達の会議の続きと華琳の国の話、そしておまけです。

4 / 24 … 題名を続編よりく大会議くに変更しました。

## 群雄達の萌動へほうとうくく大会議く

く 前回の続きより く

徹里吉が発言し始めると皆は静かに彼女の言葉に耳を傾ける。睡魔と激しく熱い闘いを繰り広げる恋を除いてだが。

「私達は一刀殿の命により霞殿の訓練の手伝いとこの領土に居る異邦人達を集めて部隊を

作る事を任務として与えられたのでそれをさせて頂き、現在の所ですが順調に機能しております。

恐らくですが、後2く3週間もあれば形にはなると思います」

と言うと俺の方に目配せして頭を下げて座る。一通りの将が現在の状況を報告し、最後に残ったのは

先程から睡魔と熱い戦いを繰広げている恋の番だった。恋は稟に声を掛けられ渋々と目を開けるが

やはり眠いらしく目を開けたり、閉じたりして時間が過ぎて行く。暫くして横に居た音々が

「恋殿は眠いらしいので恋殿の軍師である音々が説明するのですぞ」と勢いよく立ちあがり説明を始める。

「まず編成は終了し訓練も最終段階に入っているのです。後1週間程で完了しますぞ。

そして課題であった、恋殿の闘気を浴びて脅える兵や馬も徐々に馴らしていき、最近は脅える者も

少なくなつたのです。恐らく我が軍で一番何事にも恐れぬ部隊が

出来上がったのですぞ」

と無い胸を張って誇らしげに言い座った。皆が言い終わると俺は立ち上がった

「皆に御礼を言わせて欲しい。皆のおかげで我が軍の陣容は更に増したと思う。最近続けて訓練を

見学させて貰って思った正直な感想だ。これだけの軍を備えているのは大陸でもそう無いと思う。

また、その訓練をする為に物資などを絶えず送り続けてくれた彩加や信思、昇華、真佳にもだ。

だから皆に礼を言わせて欲しい。ありがとう」

と頭を下げる。その姿を見て皆は笑う。そして一刀が頭を上げて席に座ると稟が立ちあがり

「では、これからは我等のこれからの進路を決めたいと思います。

当初は後2、3か月は動かない予定

でしたが、各諸侯達の動きが活発化しこのままの方策で良いのか判断が難しい状況になっています。

現在大陸で軍を動してない勢力は我等と劉備軍だけです。ですからこれから我等がどう動くべきかを

考えたいと思います。が、その前に我等の取れる方策を話して置きます。方策は3つです」

稟がそう言うとは皆は一斉に稟の言葉を一句も漏らさない様に耳を傾ける。

「先ず一つ目が益州を纏めるです。この件についての現在の詳しい状況を説明しておきます。

劉焉軍に調略を仕掛け剣閣の張翼殿がこちらに寝返りを確約しております。

また劉焉殿がこの間倒れ現在、息子の劉璋殿が代理として政治を仕切っておりますが機能しておらず

成都の機能はマヒしております。また、劉焉殿が倒れた事により日和見を決めていた者達が続々と

こちらに降って参りました。これによって我が軍の前に有る劉焉軍の要塞は綿竹関のみとなりました。

更にこの前釈放した呉懿らが劉璋に捕まった模様です。恐らく疑り深い劉璋が彼等を信じ切れずに

やった事と思われれます。この事により更に軍内でも混乱が広がっており、今の劉焉軍において貴重な

軍勢指揮官を4人も使えないという愚行をしておりますので攻めるなら今が好機かと」

と言つて一つ目を締め括った。

「二つ目は現状維持です。これは元々の方針でありますが少し方針を加え国内を安定・活性化させつつ  
軍も寡兵を重ね訓練し、何時如何なる事が有つても対応出来る様に情報を集め状況に応じ対応させます。

これには利点と欠点がありまして、利点は言うまでも無く現在より国力、軍事力を増す事が出来ます。

しかしこの策を取る事で劉焉軍やおかしな動きを見せている張魯殿に軍備増強や防備を固めさせる

時間を与える事になりかねません。勿論我等もそんな時間を与えない様に策略を巡らせますが

成功するかは微妙な所となります。なのでこの策を選ぶ時はその点に注意が必要です」

そう言い稟は二つ目を言い終え目の前にある、お茶をすすり続きを話し出す。

「三つ目は孫堅軍とともに劉表軍を叩きつつ、劉焉軍の綿竹関を攻撃する二正面作戦です。

この策は博打要素も強くどちらかに戦力を集中出来ない為に不安もありまして

私は軍師と云う立場から言わせて頂ければ、この策はなるべく使いたくは有りません。

しかしこの策の隠された目的は孫堅、劉表の両軍の戦力拡大の牽制と云う所に有り、

孫堅軍の手の回らない地域の制圧と劉表軍の勢力削除が目的です。出来れば江陵辺りを取ればと思っております」

稟は話を終え座り俺の方に視線を向けて話を促した。

「じゃあ、各々考えが有ると思うけども、今の3つの中で自分の考えに近い策に手を上げて欲しい」

と俺は言って皆を見回す。そこには目を瞑って真剣に考える焰耶や華雄がおり、対照的にいつも通り

何を考えているか解らない起きたばかりの恋とその恋に親鳥が餌を運ぶように、せつせと恋の前に

肉まんを置いていく音々の姿もある。またいつも頭の上に居る宝慧を外し二人(?)で何やら考えて

いた風が居る。それ以外の者もこれから自分の考えに基づき決断しなければならぬ為に真剣に

悩んでいる様で、これから決断する事がどれだけ重く重要な事だと皆の雰囲気再認識させられた。

今回皆が集まって会議をしているのには訳がある。本来他の国ではその国を纏める者が皆の意見を

聞きそれを吟味し決断するのが君主の役目であり華琳や紅蓮、桃香もそれを行っている。しかし一刀は

「この国はもう俺達だけの家じゃないから、皆で決めないか？それにこの機会に皆の考えやこれからの事も皆で考えて置きたいんだ。だから皆で集まって一度方針とかを再確認したいしついでに会議もして方針転換しなければいけない所と現状のまままで良い所も話し合おうと思うのだけど」

と言いだしたのである。勿論、初めは皆が反対した。稟などは

「そんな事をするとう君主が一人で決断できないと罵る者も出て来て、次第に国の崩壊に繋がります」

と声を荒げて反論するが一刀はそれを踏まえた上で

「勿論、最後に決断するのは俺だよ。だけどこれからもっと国を栄えさせて行く上で俺達だけの

考えではいけない気がするんだよ。もっと多くの人の意見を聞き、それこそ異民族の人達の意見も聞いて

いかなければならないと思うんだ。じゃないと山越、羌族、烏丸族の者が少なからず居る俺達の所では

いずれ何かしらの障害が必ず起きてくる。そうだった時には遅いんだ。だから特に障害が無い今の内から

そうならない様に意見を聞いて行く必要があると思うんだ」



との一刀の反論に風は

「ではでは、一度将だけで会議を開いてみるのは如何でしょうか？今の私達には西羌の者が居たり

涼州出身の方々が居たりしてその辺りに関しては問題ないと思いますし、山越、烏丸の方々に關しては

ご主人様が直々に行く方が話は早いと思うのですけど」

と提案を出してきた。だが稟はそれでも難色を示していたが最後には

「では認める条件として、必ず最後は一刀様御自身の考えを述べて頂く事とします」

と言って折れてくれた。横で傍観していた万里と星は二人揃って

「素直じゃないですね」

「やれやれ、相も変わらず素直ではないな」

と笑っていた。それからしばらくして風と万里が將軍達の時間調整をして今日に至ったのである。

暫く皆が考えるのを待ってから俺は一つずつ言っていき挙手にて賛成を取る事にした。

「じゃ先ずだけど、益州を纏める事に賛成の人は手を挙げて欲しい」

と言うとチラホラと手が拳がる。手を挙げたのは稟、詠、真佳（？芝）、還樹（李蔽）、信思（董允）  
徹里吉、越吉である。俺は人数と名前を書き留めて次の言葉を発した。

「じゃ次は現状維持だね。これに賛成の人は手を挙げて欲しい」

するとゆっくりとでは有るが手が拳がる。そこに挙げたのは風、月、桔梗、紫苑、昇華（蒋宛）、  
明実（法正）、彩加（費緯）であった。俺は数を数えながら名前を書き留めて次に移る。

「最後は二正面作戦だね。これに賛成な人はと……万里、星、音々、焰耶、華雄、恋、霞だね」

と言い人数と名前を書き留めて驚く。見事に我が軍の武将・軍師達が3等分されている事に……

そこで俺は何人かにその策を自分が推した理由を尋ねる事にした。

「じゃあ益州を纏める事に賛成した真佳と還樹、それと詠にその策に決めた理由を聞きたい」

と一刀から言われた3人は「何故？」と表情に現しながら真佳こと？芝が席を立ち説明を始める。

「ええと〜私は劉焉軍を今叩いて置かないと、後々大変な事になると思ったからなの。一刀ちゃんにも

報告があったと思うけど敵対中の劉焉軍と張魯軍が接触したと連絡が有ったし、もしそれが本当なら

私達は挟み撃ちになり兼ねないからね〜」

と言って席に座り還樹こと李巖が立ちあがって

「アタイは劉焉軍は今、劉焉が倒れて混乱しているし、更に追い打ちを掛ける様にドラ息子劉璋がその混乱を悪化させている。だから攻めるなら今しかないと思ったんだ。一刀」

そう言うとそのあとすぐに詠が面倒臭そうに立って

「僕が言いたい事は前の2人が言ってくれたので殆ど無いわ。だから一つだけ。さつき真佳が言った挟み撃ちの件だけど、それに関しては剣閣に兵をこちらから出す事で張魯を牽制する事が出来るから

そんなに気にしないでいいと思うわ。だから私達は大半の軍を綿竹関に集中し関の外で兵による威嚇と

関の内から噂を流して揺さぶってやれば楽に攻略出来ると思うの」

と言い席に座り横に居る月と視線を合わせて笑っていた。

「皆、流石だね。俺はもつと単純に考えていたし、皆みたいにそんなに深く読めないよ。じゃあ次は現状維持に賛成した月と明実、そして昇華に聞こうと思う」

と俺が言うと先ず、昇華が立ちあがり皆に一礼して

「私から言わせて頂ければ、劉焉軍は既に棺に片足を入れている病人と同じです。しかし我等も国力は

回復したと言っても財政にそれ程余裕が有るわけではありません。また軍の方は連戦で疲労しており、

今の休息は兵達にとって大事なものと考えます。

ですから兵の休息と訓練が終わる時期を見計らって動くと言う当初の指針に沿って、それからもう一度皆で考えてもよろしいのでは無いのでしょうか？」

と締めくくり、俺の方に目礼をして席に着く。次に立ったのは月であつた。

「私も今は休むべきだと思つのです。兵の皆さんは疲労していますし、昇華さんも仰つた様に財政も再建

したばかりで国庫に有るお金はそれほど多く無く、残っているお金も使い道が決まっているお金なので

それを差し引いた残金は微々たるものであり、資金に息詰まるのは目に見えています。

なので今は資金を貯める時期だと思つのです」

と普段の月からは想像も出来ない物言いと態度であつた。が、発言し終えるといつもの月に戻り

横に居る詠に抱きつき「ふうええん〜詠ちゃん。緊張したよ〜」と呟いていた。

そして最後は明実の番だが一向に立つ気配が無く、何時もの様に肘を付き気怠そうに俺の方を見て

「かつたりー。なあ一刀、立つのが面倒だからさ俺はこのまんまで話していいか？」

が第一声だつた。一刀はそれを許可せず明美に立つように言い、彼女も渋々と立ちあがり、そして

「へえへえ、それならさっさと説明して座りますか。俺も今は動く

べきじゃないと思う。

理由は単純。至る所で皆が潰し合いをして自分だけが精一杯な状況を上手く使うべきだと思う。

例えば今の内に大陸中の至る所に工作員を放って、後々俺等が有利になる様に情報を集めたり

こつちに付く味方を作ったりすべきだし、それと並行して金や食料を溜める事も同時に行う。

態々この蜀の片田舎から無理して動くよりはかなり価値が有ると思うぞ

そう言うと明実も席に座り先程と寸分変わらず、肘を付きながら人の話を聞く態勢に戻る。

明実が言い終わると少しだけ場がざわつく。何人かが隣の者と話していたが俺はそれを止め様とせず

話し終えるまで待つてから

「それじゃ最後の二正面作戦は音々、焰耶、霞に聞くよ。まず音々から」

俺が言うと同時に音々は立ちあがり

「仕方ないのです。このへっぽこ主人にも解る様に丁寧に説明してやるのですぞ」

「ああ頼むよ。音々」

と俺が下手に出て音々に頼む。音々はそれで更に機嫌を良くして話し始める。

「劉焉に関してはもう殆ど余力を残しておるとは思えず、更に自分で首を絞めている状況に有り、

後少して止めをさせる事は誰が見ても明らかなのですぞ。もし劉焉が勢力を回復したとしてもそれまで劉焉に味方していた太守の大半は我等に付き、当初の勢いを取り戻すのは不可能に近くそこに張魯が味方しても先程詠殿が言った様に剣閣で防ぐ事が出来るので恐るるに足らずなのですぞ」

そう言うと音々は少し間を開ける様に言葉を止めて、目の前に有ったお茶を飲んで続ける。

「しかし現在荊州にて争っている二人、孫堅、劉表は要注意なのです。特に孫堅ですな。

孫堅はこのへつぽこ主人と仲良くやってるらしいですが、それでもあの率いている軍勢と

軍師の周公瑾は脅威なのです。

劉表も兵は多く、またその渾名「女狐」からも解る通り油断できない奴なのですが、奴自身が優柔不断であり配下も孫堅に比べれば可愛いものなので油断さえしなければ問題は無いと思うのですぞ」

一刀は自分が知るこの後の歴史と考えながら音々が言う言葉を聞いていた。

もう既に始まっている戦乱の世。弱者は強者に頭を下げ吸収されるか、滅びるのみしか道はなく

勝った強者も、更に強い強者に飲み込まれていく。それを繰り返して終息に向かうまで永遠と続く。

一刀自身もその道にもう足を踏み入れており、それを終わらすには勝ち続けるしかない事は解っている。

しかしその為に犠牲になるのは一般の市民とその家族。南陽で旗揚げした時に覚悟したつもりでも

自身が命令する重庄は更に重さを増して一刀に押し掛かっていた。

音々が話し終えて席に座り、一刀が何か言うと思っていた者達は一刀が何も言わず黙って何かを

考えている事に気づき一斉に一刀に視線を向ける。そんな事とは気付かぬ一刀は話していた音々の声が

聞こえなくなっている事に気づき顔を上げると、皆が一斉にこちらを見ており月や昇華などは瞬きを

忘れるほど注視していた。それに気づいた一刀が言葉を言おうとすると稟がいきなり、

「近頃、良く夢をみるのです。それは前に話した『太陽を持ち上げる夢』です」

稟がそう言うと恋、霞、華雄、音々がお互い顔を見合わせてから稟の言葉を聞く。

また月と詠も同じく二人で見合ってから稟に視線を戻す。

しかし恋や霞達の表情の変化を稟は逃さず見ていた。恐らく自分や風や星と同じと確信し話し始める。

「おそらくこの太陽は一刀様と私は確信いたしております。しかし我等に進むべき道を照らす貴方様が

そんなに悲しい御顔をされていると、我ら一同が道を失い迷ってしまいます。

一刀様が悩むのは仕方ありません。否、悩んで頂かなくてはなりません。今の内に最悪な事を想像され

いざと云う時に動ける様になって頂かねばなりません。悩まない君主に君主たる資格は御座いません」

と言って稟はこちらを見て頭を下げ席に座る。

稟の言いたい事が分かった俺は、少し気持ちの整理を付けて

「今度から悟られない様に頑張るよ、稟。それで霞と恋と音々、それに月と詠は何を驚いていたんだ？」

もしかして君達も『太陽』を見たのか？」

一刀にそう言われ声を掛けられた5人は、驚きながらもお互いを見合って霞が

「その通りや。一番初めはウチと恋やけどな。そこでこっちに来てから暫くして月と詠、華雄で

そんで一昨日に音々が見て全員や」

霞がそう言つと横で恋がコクコクと頭を振っており、月は目をウルウルさせこっちを見ているし

詠と音々は黙ってこちらを見ていた。華雄は横に居る星に話しかけていた。

その5人がこっちに視線を戻すまで待つてから俺は

「太陽の話は皆が見ているから後で話して貰っていいかい？」

そう言つとその場に居た皆が頷くのを見て俺は少し姿勢を正して、これからの国の方針を話す。

「さっきは皆に伝えて貰ったので、俺も自分の考えを話そうと思う。俺の考えは」

「場所が変わって？州」



曹操軍は方針を決めると弓より放たれた矢の様に青州より取って返し張？軍に攻撃を加えていた。

その攻撃は苛烈を極め、あつと言う間に張？を陳留より追い出し、更に張？の家族と一族が逃げ込んだ

雍丘よんきゅうを落さんと進軍中である。その途中に陳留にて陣を張って一休みしていた時

軍師の荀？（桂花）がやって来て報告した。

「華琳様に仰せつかりました、噂とそのほかの情報を御報告に参りました」

「桂花ね。解つたわ、入りなさい」

自身の主から了解を得て彼女は天幕に入って行った。そして主の前に行き挨拶をし報告を始める。

「先ず、華琳様より御命令の噂の報告ですが……」

軍師である桂花の様子を見て華琳は状況を悟り

「余り良い報告ではなさそうね。でもとりあえず報告してみなさい、桂花」

と桂花に報告を促す。主にそう言われ渋々ながら彼女は報告を始める。

「華琳様の御察しの通り、噂の発生時期は我等が袁紹に請われ青州に出陣したすぐ後と判明しましたが

しかし、首謀者や噂を触れ回っていたと云う商人の発見には到りませんでした。また袁紹の方でも

調査が行われていた様ですが、向こうもやはり犯人の特定には到って居ないとの事です」

そう報告し自分の持っていた書簡をめくり、次の報告を行った。

「次にここまでの我等の状況が纏りましたので報告いたします。先ず、軍の状況を報告いたします。

現在此処に駐屯している我が軍の総勢は9万5千となっております。これに本拠を守らせている兵を合わせますと12万を少し超える勢力になります。

しかし昨夜秋蘭とも話しましたが青州で加えた青州兵の半分が我が軍の半分ほどの練度しか

有しておらず、また土気も低く軍規も守らぬ者も多く、このまま軍に加えて置きますといずれ

華琳様の名を汚す事となるやもしれません。

ですから、秋蘭と話し合った結果、それらの者は此処に留め置きつつ凧（楽進）や真桜（李典）

沙和（于禁）に訓練兵として預けて訓練をしつつ、我が軍の軍規を叩きこむ方が良いかと」

華琳は報告を聞きながら軍の状態と最善策を考えた桂花の献策に頷き

「やっぱりそう簡単に尻尾を掴ませてはくれないみたいね。まあ仕方ないわね。私も直ぐに見つかると思っ

ていなかったしね。その件は長期に渡ると考えておきましょう。軍の方は貴女と秋蘭の考えで良いわ。凧達には我等の精鋭を作るつもりでと言っておきなさい」

華琳が言うと桂花は「御意」と言って次の報告に移る。

「次に兵糧ですが、吸収した黄巾の残党より押収した物が予想より多かつた事もあり現状のままでも3か月は持つ量を確保出来ました。」

また兵の他に家族や非戦闘員達も我等の領土内に連れてきて、現在領民として振り分ける作業をしております。これが済み、彼等が畑を耕し作物を作ったり、商売を始めますと新たな財源も生まれ我等にとつても大いなる益となります。

そこで華琳様に申し上げます。連れて来た彼等の今年の税を半額にしていかががかと思いますが如何でしょうか？」

桂花が言い終わると同時に華琳は決断を始める。

「連れて来た民に関しては桂花の良い様にやりなさい。ただし、振り分けに関しては細心の注意を

払って、元々の住民との軋轢が生じ無い様に気をつけてやりなさい。また税の事は、不満の解消と土地に定着し易くするのは解るのだがど半額にした分の不足した財源は

何処から補い、もしくは節約して捻出するのかを報告なさい。それが理に適っているなら認めるわ」

「はっ、では後ほど詳細な報告書をお持ちいたします」

この後桂花の出した報告書によって連れて来た者達の税額は半分となった。

その内容は付近の黄巾の残党から押収した財産や軍事費の節約、付近の富豪の援助や袁紹に青州への遠征費用の請求などを組み合わせて補うと云うもので、最後の遠征

費用の請求は困難を極めたものの最終的に袁紹が華琳の口車に乗せられ支払う事で決着し、曹操軍はこれにより不足分の補填を終える。

華琳はこれらの施策により国を富ませ、中原の覇者としての一步を踏み出す事となった。

～その翌日～

「桂花。我等の領地に来ている愚かな者共の討伐を再開すると皆に伝えなさい。

春蘭と秋蘭は李確達を。私は季依と琉流を連れて張？を叩きに行くわ。

また凧、真桜、沙和はこの守備と訓練を。桂花、貴女は全軍の後方支援を任せます。

出陣は明日。今日は準備とそれが済めば、お酒を飲む事も許しましょう。後は桂花に任せるわ」

「御意！！」

曹操軍は前日に準備を終え、翌日各々が軍団を率いて戦場に向かって行った。

凧、風、月拠点？

今、一刀の部屋には3人の女性が居た。一人は頭に太陽の塔らしきオブジェを乗せた風であり

もう一人は、眼鏡を掛けた知的な顔立ちをした女性、凧であった。

二人は報告書を持ってきたついでに秘書官として側にいた董旻こ

と月が煎れたお茶を飲んで  
休憩を取っていた。稟は休憩をするつもり等なかったのだが、風が  
稟を強引に休憩させたのだった。

「うん、月が煎れてくれたお茶は相変わらず美味しいね。稟や風も  
そう思うだろう?」

「ええ、私が煎れてもこのように上手く出来ません」

「とつか。稟ちゃんが煎れると赤く鉄の味しかしないお茶が出て  
来そうで恐いですね」

「ふっ、風! !なら貴女は煎れられるのですか?」

「風は月ちゃんに煎れて貰いますから、自分で煎れるなんてお茶葉  
の勿体無い事はしませんよ」

稟と風がいつもの様に漫才の様なやりとりを始める。それを見なが  
ら俺と月は笑いあう。

いつもの光景がそこに有った。それを見て月は俺に聞こえる様に

「洛陽に居た時はこんなに楽しい時間が有るなんて思いもしません  
でした。

洛陽では政務と睡眠、食事の繰り返しでしたから……それに恋さん  
や霞さん

華雄さんや音々ちゃんの無事を祈るだけで、何も出来ない自分を嫌  
ってもいました」

少し影を含み、自嘲的な笑みを浮かべながら言う月は話を続ける。

「でも、洛陽で私は皆さんに救われ、そして董卓軍と一緒に居られる事を嬉しく思います」

先程の影は消え、その笑顔は一刀や稟、風に強く印象に残るほど爽やかなものであった。

その笑顔を見て稟は

「月殿、貴女は一度洛陽で死んだのです。そして今、ここに居る月殿は一度死を迎え

新たに転生したと考えてはいかがです。

過去を振り返るなどは言いませんがしかしそれに囚われてばかりでは前に進む事は出来ません」

続いて風も

「そうですね、風もそう考えた方が良いでしょう。」

まあこの国に居たらそんな事考えている暇も有りませんが。

稟ちゃんを筆頭に騒がし過ぎて」

「風！！貴女は途中まで良い事を言うかと思っていたら……大体私が筆頭とはどういう事です。」

星や霞殿。音々殿と詠殿に一刀様。騒がしい方は私の他に幾らでも居るでしょう！！」

「お、い、本人の目の前で騒がしいとか言わないでくれるか、稟？」

と風が脱線させた話を戻そうとせず、更に加速させる様に話を持っていく稟。

そして目の前で堂々と騒がしいと言われた俺。

そんなやりとりを見て月は自分が此処に来て本当に良かったと思えるのだった。

群雄達の萌動へほうどうくく大会議く（後書き）

本当に何でしょうね、今年は？自分でもびっくりするくらい  
病気になってます。带状疱疹、気管支炎、そして今回の気管支炎より  
発展した謎の病状。余り考えても仕方ないので止めます。

次回よりそれぞれの国の話に戻そうと思います。

今回も何かあれば感想、メッセージなどでお教え下さい。



**劉備軍動く！！（前書き）**

今話は順調に進めました。憂鬱です。

今回サブタイトルに有る様に桃香が動きます。

また何個かの伏線を回収する事が出来ました。

そして十握剣さんのリクエストにお答えして（？）

稟だけの拠点を書いてみました。

ツンデレには程遠い稟ですが、喜んでいただければ幸いです。

今回も稚拙な表現など多々あると思いますが勘弁願います。

劉備軍動く！！

曹操軍が陳留を出発し張？・張？・李確・郭？を自領より追出そうと行動を開始した後、

数日置いて劉備軍が動こうとしていた。桃香は徐州を纏める為に出兵する事を決めようとしていた。

（徐州劉備領彭城では）

彭城にある玉座の間では劉備軍の主要人物が集まりこれから如何動くかを決めている最中であつた。

「現在大陸の諸侯の間で動いてないのは桃香様の軍と蜀地方の北郷さんの軍だけとなりました。

私達は此処に赴任したばかりであり、更にここ徐州を荒し回っていた張？・乍融等を討伐していた為

徐州を有る程度纏めるまで動けませんでした」

そこで持っていた書簡を皆に見せて

「私と雛里ちゃんの進めていた構想が完成しましたので皆さんに報告させて頂きます。先ず私達は

青州に攻め入った袁紹さん、曹操さんの御二人の領地に噂を流し撤退させる事に成功し、その後

孔融さん、白蓮さん、張燕さんに使者を送り同盟を結ぶ事に成功しました。

同盟条件は私達から張燕、白蓮さんに武具・兵糧の援助及び青州の復興援助で

張燕・白蓮さんは青州・幽州・并州のいずれかに袁紹軍が攻め込んだ場合、

後方攪乱を行う等の相互援助です。またいずれは経済的にも相互援助出来たらと考えております。

こちらから出す兵糧や資金は北郷さんが『洛陽復興の為に使ってくれ』と置いて行った物の

残りを供出する事になってます。それで充分足りると思います。

北郷さんから『残ったら持って帰っていいよ』との手紙を頂いておりますが、それでも一言

『使わせて貰いました』との使者を北郷さんに送って置きました。

兵糧は白蓮さんの所から并州の張燕さんに渡る様にしておきましたので問題は無いかと。

今回の同盟により袁紹さんは迂闊に青州や幽州、并州に攻め入る事が出来なくなりました。

はわわ〜最後で囁んじやった」

そこで次に雛里が説明を始める。

「私達は更に手を緩めず曹操さんを封じ込める為、郭?・張?さんに噂を流しました。

その噂が広がり李確さん・郭?さん・張?さんの三人はそのまま軍勢を率い?州に進行、

今現在、曹操さんと睨みあつてる状況です。李確・郭?さんの率いる部隊は母体が涼州騎兵の為

曹操さんも迂闊に攻撃すれば大きな被害が出る為、梃子摺る《てこず》と思いますので、

曹操さんは暫く動けません。あわわ、私も…」

と二人が説明すると聞いていて状況が飲み込めた愛紗(関羽)、陳登、麋竺の三人は息を吐き

(この二人が敵で無く、味方で良かったと常々思う)

と三者三様言葉は違うがそれぞれが思っていた。しかし主である桃香（劉備）と義姉妹の鈴々（張飛）は頭の上に「？」が見え、それを見て今度は違う溜息を吐くのだった。二人に朱里と雛里が話していた事を説明し何とか彼女等も朱里達が出た事が解り感心して

「朱里ちゃん、雛里ちゃんってやっぱり凄いね」

「朱里、雛里って凄いのだ！！」

「はわわ」

「あわわ」

と桃香と鈴々が褒め、朱里と雛里が褒められ変な声で照れているのを見て愛紗はそこでまた溜息を吐き

「桃香様、朱里。そこまでにして先に進みませんか？私達はその先が聞きたいのだが……」

と彼女等をどうにか落ち着かせ先に進む事になった。落ち着きを取り戻した朱里と雛里は次にやることの話始める。

「私達はこのまま徐州下丕以南を治める為、軍を動かす事を進言いたします。

下丕以南を治める事に成功すれば私達の勢力は更に大きくなれます。袁術軍と戦闘になると思いますが、数では向こうが上ですが、残る他の条件は全てこちらに有利です」

「朱里ちゃんと雛里ちゃんは袁術さんに勝つ事は可能だと思っ？向こうは数が多いし、将も多いよ？

それにまた兵隊さんが傷つくよね……」

と桃香が下不以南を治めたいが兵の事が気になっている事に気付いた朱里と雛里は

「袁術軍は先程申し上げた様に兵数は私達の3倍近くはいると思います。

しかし今現在その持っている兵力の全てをこちらに投入する事は出来ません。

何故なら袁術さんの隣国には曹操さんや劉表さん、そして最近この大陸の混乱に乗じ

勢力を伸ばした曲阿・秣陵（後の呉都建業）を治める劉？さんにも兵を裂かなくてはいけませんから

私達に全軍を持って当たる事は出来ません。

恐らく出兵出来る数は私達とほぼ同数が少し多い程度かと思います」

と雛里が袁術軍の周りの状況を掻い摘んで説明する。そして朱里が

「将は恐らく張勳、紀霊の2将と袁術さん本人が出てくるのではと考えます。

軍勢の采配で張勳さんが雛里ちゃんに勝てる訳無く、指揮、武力で紀霊さんは愛紗さんに及びません。

なので私達は九分九厘勝てると進言いたします」

そこで朱里は更に桃香を諭すように話を続ける。

「桃香様のお優しい考えは解りますが、桃香様の命令で兵達を死地に送る事に脅えてはいけません。

それは桃香様が皆を笑顔に出来る国を作ると誓った時からの使命です。

勿論私達も被害を減らす努力は致します。それでも負傷者は出て死

者も出るでしょう。

しかし此処に居る愛紗さんや鈴々ちゃん、私や雛里ちゃんや兵隊さんも桃香様の理念に賛同し戦場に向かう事を忘れないで下さい。

それで例え負傷する事になっても桃香様を恨もうとは思いません。ですから桃香様は御自分の理想を曲げないで下さい」

と朱里が言つと横より、その様子を見ていた皆が

「あわわ、がっ頑張りましゅ」

「そうだな、我が青竜刀は桃香様の理想の為に有る」

「鈴々も頑張るのだ!!!」

と桃香が見ると自分の信頼する姉妹や軍師達が自身の決断を待っている判断し、皆の顔を見て

「そうだね。ごめんね朱里ちゃん。こんなじゃ私に付いて来てくれた  
愛紗ちゃんや鈴々ちゃんに失礼だね。解った!!!皆と下丕に向かおう。

そして下丕以南の人達を安心させよう」

といつもの笑顔では有ったが、覚悟を決めた良い笑顔で命令を下した。

それに従いその場に居た者全てが一斉に

「「「御意!!!」」」

と相槌をして準備に取り掛かった。

それから一週間後に準備を終え、彭城を出陣していくのだった。

動く』

『劉備軍沈黙を破り、下丕南部に向け

これまで不気味なほど沈黙を保ってきた劉備軍のこの情報は劉備軍が動いたと同時に密偵により各地に向けて発信された。

最初に密偵からの情報が届いたのは意外にも袁紹の所であった。だが袁紹はこの情報を持ってきた田豊・沮授の話を玉座に座り耳を傾けようとしなかった。

彼女にとって現在一番厄介なのは国境を跨ぎ攻撃してくる公孫賛・張燕であって

劉備なんか一捻りで潰せると確信していた。なので敵対してない劉備の情報を集めるくらいなら

公孫賛・張燕のどちらかの情報を集めて来いと言って取り合おうとせず、そのまま退出してしまう。

その場に残された田豊と沮授の二人はどちらともなく溜息を吐きその場を後にした。

暫くして曹操（華琳）、孫堅（紅蓮）の所にも情報を持った密偵が帰って来て報告をする。

両名が報告を受けた時、両者は全く異なる反応を示す。華琳は苛立ち、紅蓮は不敵に笑っていた。

（華琳）

華琳は物資の補給に来た荀？（桂花）から報告を受けると親指の爪を噛んで

「これで噂の犯人は解ったわね。それにしても忌々しい。もう少し青州に居る時間が出れば更に兵が増えたのに。」

でも流石、伏龍・鳳雛と呼ばれるだけあるわ。我が軍の情報網を持ってしても犯人が解らない様にならざるにわざと証拠を残し、それを辿って行くといきなり痕跡が消える辺りは相当優秀な者が居るのでしょう。」

華琳は苛立ちつつも自分の密偵が陥った状況を振り返りながら、これからの事を桂花と話し合う。

「劉備が今まで動かなかったのは、今の状況を作る為だったと云う事かしら。」

それで連れて行った兵はどのくらいなの、桂花？」

「はい、華琳様。恐らくこれまで動かなかったのは兵の編成や訓練と並行して、

徐州の国力を高めつつ、その裏で自分達に有利な状況を作るべく奔走していたと考えます。」

兵力については詳細な事は解っておりませんが、彭城やその他の地域の守備兵を残し考えると恐らく約4万程かと思われれます。」

「では今、彭城は空き家同然と言えそうね。麗羽や袁術辺りが聞きつけたら喜んで攻め込みそうね。」

「ですが、公孫賛・張燕の両名が袁紹軍を翻弄し袁紹は徐々に力が勢力を削がれております。」

両名とも自軍が得意な場所で戦闘を行っていますので袁紹の兵力が



幾ら多くとも、

そう易々と勝たせて貰えず被害が拡大致しております。

袁術も同じく劉？、華琳様、劉表と三方を囲まれて兵を振り分けなければならず

大兵力で攻め込む事が出来ない為、精鋭揃いの劉備軍に何処まで対抗できるか微妙な所です」

桂花の報告を聞き華琳は現在自分の置かれている状況を頭の中で考える。

つい先程入った報告で孫堅が劉表に宣戦布告し夏口・江夏に向かっているらしく、

戦端が開かれるのも時間の問題だという。

袁紹は公孫贇・張燕・孔融に囲まれ少しずつ戦力を削られている。自分なら集中攻撃し先にどちらかを徹底的に攻撃し弱らせてから、もう一方に大兵力で当たるが

袁紹はその間に領土を切り取られるのが嫌らしく、田豊・沮授が出したこの方策を退けたらしい。

“全くもって愚かしい。と云うか麗羽らしいと言える。でもこれは私達にとっては好機”

華琳は声を出さずに頭の中で考えると自分の周りの状況を整理していく。

“これで麗羽はもう暫く動けない。劉備も袁術との戦闘でこちらも一時動けない。

劉表も孫堅と暫くやり合うだろう。なのでこちらも問題ない。

私達が郭？や張？を倒してしまえば宛から洛陽までが私の物になり、中央の殆どを抑えた事になる。そうなれば攻められる事も少なくなる。

気懸りは未だ動かない一刀だけど、私の領土と距離が有る為問題は少ない。

後は恐れるに足らない小物ばかり……”

考え終わると華琳は、何も言わず見守っていた桂花に

「桂花。貴方に我が領土の守備と政策に関する全てを任せるわ。

陳留には夙を。濮陽には真桜と沙和を配置し、それぞれに訓練する兵を振り分けて訓練させなさい。

そして連れて来た者の中で使える者が居たら、貴女に与えた権限で登用する事を許します」

「はっ。しかし兵の分散は……せめてもう少し連れて行ってはいかがかと思われませんが……」

「ふふ、私が率いる精鋭3万の前に張？軍3万など敵では無いわ。

一蹴し抑えてみせる。

郭？達の部隊は5万だけど、春蘭や秋蘭が率いる3万なら私達が張？を降し戻るまでは余裕で持つ。

桂花の心配も解らないでもないけど、私の軍の練度は袁紹や袁術の比では無いわ。

私はこれから張？の軍を叩いてくる。貴女は先程言った通りに」

桂花はそう言われ、それ以上強く言う事が出来ず頭を下げた。

そう言っつて自分の天幕を出て行く華琳の姿は正に霸王と呼ぶに相応しい姿であったが

彼女はその後、自身の考えが甘かった事を痛感する事となる。

く紅蓮く

紅蓮に情報が届いた時、既に劉表に宣戦布告し夏口・江夏に向かっていた。

紅蓮が劉備軍の情報を聴くと、側に居た雪蓮、冥琳、祭（黄蓋）が驚くほど大笑いしたと云う。

その様子を見て冥琳は

「紅蓮様。如何されたのです？突然笑い出して……」

「何、虫も殺せぬ顔してやる事がえぐいと思つてな。俺とお前達で会いに行った時、

正直に言えば、この乱世向きの人間ではないと思つていたが、中々如何してやりおるではないか」

と言うとまた大きな声で笑い出した。それを見ていた冥琳は

「この度の曹操・袁紹に対する策略は、恐らく諸葛孔明・鳳土元の二人の仕業かと思いますが……」

冥琳がそう言うのと紅蓮は笑いを止めて

「冥琳、そう言う事を言っているのではない。良く考えてみる？  
軍師の二人が幾らお膳立てしても君主が認め無ければ全て水の泡と化してしまうだろう」

紅蓮が言った事を理解し冥琳は

「そう言う事ですか。それにしても劉備に何が有ったのか、調べておく必要がありますね」

と冥琳が微笑しながら言うと横で聞いていた雪蓮と祭が

「ぶー、ぶー、何の事を言ってるの、お母様も冥琳も？」

「そうじゃ。堅殿も冥琳もワシらに解る様に説明せんか」

自分達だけが置いてけぼりにされている様な気がした二人はそう言  
って抗議し冥琳に説明を求めろ。

冥琳が「やれやれ」と言った感じで説明している姿を見て紅蓮は笑  
いながらそれを見て

「ふっ、増々面白くなってきやがった。動いた俺・劉備・曹操・袁  
紹、そして未だ動かぬ一刀。

この乱世まだまだ荒れそうで、如何なるのか想像もつかん。

このような時に生まれた事を神とやらが居るのなら感謝してやって  
もよいぞ」

そう言うところ人がワイワイとやって居るのを肴に酒をすするのであ  
った。

その日、一刀と稟は朝から書類を片付けては積み、積んでは片付けるを繰り返していた。

何時もなら秘書官として月や詠が居るのだが、今日は二人揃っての休みであり誰にも邪魔されず

朝から二人で街に行くと言っていた為に居ない。

他にも風と万里は地方への視察に行っており、昇華（蔣苑）と彩加（費緯）と董允（信思）も

書類整理の後、地方に行く事になっていて俺達を手伝っている暇もない。

そこで音々に応援を頼もつかと思い、侍女の者に探して貰ったのだがどこにも居らず

結局、二人で黙々と書類に目を通し捺印し間違っている所があれば訂正させる事を繰り返していた。

ここまで俺や軍師達・官僚の仕事が忙しくなった背景には秋の税収期を過ぎ、

それを何に使うかの等の予算計上を終え、それを執行するには俺の承認や軍師達の承認が必要であり

それが纏って俺や稟にやって来たのである。

また俺達に降って来た領土も増えそこに俺達の制度を普及させる為、

制度を理解し動ける者を派遣し文官も何名かずつ派遣したので、

本領である諷陵や白帝城に居る文官達も今の俺と同じ様に目の回る様な忙しさになっていた。

その日は朝から始め、昼食も簡単に饅頭と何品かをお腹に詰め込んで、結局終わったのは

夜遅くになっていた。

俺は終わると同時に背を伸ばし、稟は「ふう」と息を吐き眼鏡を拭いていた。

「やっと終わった。今日は一日中ありがとうな、稟。御蔭で仕事を明日に持ちこさないで済んだよ」

と俺が眼鏡を手入れしている稟に感謝の言葉を言つと稟は

「いえ、礼には及びません。これも臣下の務めです」

と拭き終わった眼鏡を掛け直し稟は答えた。

「それでも手伝つてくれた事には変わりないし、何より稟の分はとつくの昔に終わって

俺の分まで手伝つてくれたから、こんなに遅くなつたんじゃないか」

「それは……ですが、私はやはり貴方の臣下であり、荊州で貴方の為に我が心身を捧げると

誓いました。それに一刀様も公私共に支えてくれと仰つたではありませんか」

そう言われると何も言つ事が出来ず、俺はそのまま座り疲れた身体を伸ばし自分と稟が

夕飯を食べて無い事に気づき、

「そつだ、稟。おなか空いてないか？」

突然そう言われ、自身が昼より何も食べて無い事にやっと気付いた稟も

「そつですね。もう少ししたら寝よつと思いますが、それでも軽く食べて寝ませんといけませんね」

「じゃあ一緒に食堂にでも行ってみようか？何かあるかもしれないし」

そう言つて二人並び、他愛も無い話をして食堂に歩いて行く。

食堂に付くとそこは真つ暗であり、誰も居る気配も無くシーンとしていた。

そこで一刀は食堂の灯りを起こし何か残つて無いか探し始めた。稟は

「この様子では何も無いのでは、ありませんか？」

「うーん、何かお腹に溜まる物が欲しいのだけどな、綺麗に何もないや。」

あつたのはご飯の残りとお卵、そして日持ちする野菜くらいか……」

と一刀が持つて来た物を見て稟はこれでは何もできないと諦め、部屋に戻るうとした。しかし一刀は

「待ちなつて稟。これだけ有れば片手間だけで出来るよ」

一刀は言うと同時にかまどに火を入れ、その火を大きくしてから鍋に油を入れ温めてながら

野菜を刻み、先ず鍋に卵を入れて半熟になるまで炒め、冷えたご飯を入れ

手早くご飯を解ほくしてから刻んだ野菜を入れて程良く炒まつたら出来あがり。

出来上がった炒飯を二つ皿に移し盛り付けて稟の目の前に置いて

「はい、こつちが稟の分。量は少ないからお腹に負担にならないと思うけど。まあ食べてみてよ」

と一刀が笑顔で言うと、稟は炒飯をレンゲで口に運び、暫くして一刀に

「ええ、とても美味しいです。しかし本来なら私が作らないといけないのですが……」

稟がそう言うのを制して一刀は自分も口に運び

「うん、我ながら何の変哲も無い炒飯だと思うよ。けど空腹は料理を美味しくする調味料と

言うけど本当に美味しい。それと俺は気にしないから。誰にも得手不得手はあるからさ。

これは俺が得意であっただけで普段の執務は稟に手伝って貰っているだろう？

だからこれで普段の手伝いの帳消しって事で……にはならないか？」

そう、おどけて言うつと一刀は黙々と炒飯をレンゲで口に運び、あっと言う間に食べ終えて

食器を炊事場に置きかまどで沸かしていたお湯と茶碗を持って戻って来た。

そしてお茶を煎れると稟に差し出し自分もお茶をすする。

稟は食べながらこんな時にでも自分を気遣っておどけて見せる一刀を見る事が出来ず

彼女も黙々と食べ終え食器を炊事場に置き、席に座って一刀が煎れてくれたお茶を飲む。そして



「そうですね。しかしこれで帳消しとは随分お高い炒飯ですね。私  
はかなり手伝っておりますが……」

と少し笑いながら一刀に返答する。それを聞いた一刀も

「やっぱり、稟もそう思う？」

「ええ。後、何十回かは私の為に料理を作って頂かないと帳消しに  
は……」

「了解。また今度、仕事を手伝ってくれるなら考えるよ」

と言うと同時に二人して笑いあっていた。

その夜は暫く食堂で話し合ってから各々の部屋に戻って行った。

翌日、稟の機嫌が良い事に気付いた霞や星が理由を尋ねると「秘  
密です」としか言わない稟に  
不信に思い、星達が俺の所にやって来て、何か有ったのかを尋ねる  
ので俺も

「さあ？特に何も無かったと思うけど……」

と、惚けて置いた事は秘密である。

その後、稟が一刀を手伝った後に二人で食事をするのが定番に  
なっていたと云う。

**劉備軍動く！！（後書き）**

今回は自分にしては珍しくスムーズに話が出来あがりました。  
（でも、やっぱり気にいらず3回程書き直しましたが……）  
作者自体ツンデレを体験してない為、原作の稟より  
かけ離れてしまった感じが有ります。

今回稟の拠点をしたので次は、誰にしようか考え中であります。  
また次回の内容も殆ど出来あがってません。

恐らくは華琳・紅蓮の話と一刀の話が入ると思いますが……

今回も誤字・脱字、リクエストなど有りましたら感想にて  
お願いします。自分にできる事ならばやってみたいと思います。  
今回もこのような稚作を此処までお読み頂き感謝致します。  
ありがとうございました。

## 号令（前書き）

今回も自分にしては早かったかなと思います。

今回は少し時間を早送りし、前回より半月進んだ所より話は始まります。

桃香、紅蓮、華琳に関しては、次回か、次々回にもう少し詳しい話を予定しています。

最後の方に拠点として、風の話も書きましたが、過度な期待はせず見てやって下さい。

今回の話に際し、前々回の副題を大会議に変更させて頂きました。

今回は余り、見直しをしてませんので、誤字脱字が多いかもしれませんが、

何かありましたら感想、メッセージにてお教え下さい。

## 号令

桃香が下丕に動き半月ほどして、それまで沈黙していた諸侯が一斉に動き始めた。

袁術は桃香に目に物見せてやると意気込むが、自領の周りに敵が多く大兵力を集める事が

出来ぬまま戦い、大敗し下丕を失陥し寿春まで逃げ帰る。

また袁術が今以上の兵力を動かせないと悟ると、劉？は袁術の武将、陳蘭、雷薄に攻撃を始める。

また紅蓮（孫堅）も夏口、江夏に兵を分け猛然と攻撃を開始していた。

江夏、夏口の両城は長江に面して建てられており、劉表水軍の基地でもあり、陸軍も居た。

その両城を、紅蓮が無視して江陵を攻撃すると、江夏、夏口の城から水軍、陸軍がやって来て、

江陵を攻める紅蓮の側面、後方を襲われる恐れがある。

その為紅蓮は、江陵城に2万の兵を置き江陵城の守将である、王威、王粲を釘付けにし、

残りの全軍を持って江夏・夏口城を包囲し攻撃を開始する。

しかし江陵に残した兵は零陵、武陵、桂陽太守らが出した兵であり、訓練度、忠誠度の

どれを取っても孫堅軍の正規兵に及ばない雑兵であった。

後にこれが、紅蓮達にとって仇なす事になるが、それはまた別の話である。

華琳も自身の兵を半分に分け、半分を自身が率い、もう半分を春蘭・秋蘭に率いさせ、

自身は張繡軍を葬り去るべく進軍していた。途中、張？の籠る雍丘を攻め滅ぼし、兵達の士気も鰻登りに上がり、華琳もこの勢いを持ってすれば、張繡など一蹴出来ると意気込んだ。

春蘭達は相手が騎兵であり、無理をすればこちらが痛い目に合い兼ねないと判断し、

その場にて陣を張り、華琳が戻って来るのを待つ事に徹する。

陳留に戻った、曹操軍筆頭軍師の桂花（荀？）は、主である華琳が今回の戦で

何かを焦っている様に感じ、自分の配下の密偵を側に置き、逐次報告させつつ、

華琳が守将に任じた凧（楽進）を呼び何かを命じて、凧も領き部屋を後にした。

その後、桂花は部屋を出て星空を見上げ、何かを呟いて部屋に戻った。

一方、袁紹は兵力を過信し、悪戯に張燕・公孫賛（白蓮）に攻撃を仕掛けていた。

それでも兵力に勝る袁紹は、張燕を敗り、白蓮をも界橋の戦いで撃破し、

このまま袁紹が兵力に物言わせ攻め滅すかと思われたが、白蓮は堅城と知られる易京城に籠城する。

袁紹軍は易京城に猛攻を掛けるが、攻めきれず撤退を始めるが、その最後尾は隙だらけだった。

白蓮は密偵よりその報告を受け、撤退する袁紹軍の背後を襲い、散々に打ち破り反対に攻勢に転じ袁紹領に侵攻する構えを見せる。

袁紹は主力を白蓮に指し向けるも、白蓮は全面衝突を嫌い、袁紹の主力が来ると知るや、

素早く撤退し自分に有利な場所に布陣し、袁紹軍との睨み合いが続

いた。

そんな状況が大陸中で続く中、一刀達も別の意味でこの一カ月を戦っていたのである。

自分達に庇護を求めて傘下に入る者や降伏する者が多く、当初はそれらの対応に苦慮していたが

一刀や稟、風を中心として文官・武官を問わず、対応した事で問題は殆ど鎮静化していた。

そして白帝城の玉座の間で……

「じゃあ、殆どの問題は片付いたんだね？」

と一刀が自分の軍師である稟、風、万里、詠を玉座に座ったまま尋ねる。

「はい。軍の方は配置と準備を残すのみです。下準備はすべて完了致しました」

「国内の方は概ね落ち着いたのですよ。今回、降って来た人達や移住してきた人達の対応に関して、当初はもう少し時間が必要かと思ったのですがどね」

「諜報、工作全て完了しております。今、私達の諜報員が入って無い国は、

公孫贇さんの幽州、馬騰さんの涼州のみです。こちらの情報に関しては利準さんの情報網を通し、

逐次送られて来る手はずになっており、その他の国に関しては約5日過ぎに報告する様にしてあります」

「こつちは何時でもいいわよ。アンタの考えた戸籍、商人認定制度が功を奏して、  
税収は安定してるし、税金の量も確定されてるから、税の使い方も素早く決められたしね」

と4人は順次に説明をしていった。

「4人とも、それに月、ありがとう。じゃあ次は軍の方だけど……」

と星、霞、音々、華雄達、武官に報告する様に促す。

「歩兵、警備兵の合わせた8万の大方は、最終訓練、兵の再編成も完了しておりますぞ、主」

「騎兵も終わつとるよ、一刀。けどな、会議の時に言った戦車は間に合わんかったわ。

まだ、部隊連携や命中精度が上がらんねん。そやから今回は留守番させといた方がええわ」

「親衛隊も恋殿の訓練に慣れて、それはもう比類なき最強部隊が完成したのですぞ」

「新兵及び、私達に付いて来た、元董卓軍の者達を集めて作った新部隊も、訓練、編成は終了した。  
後は実戦あるのみだ」

と武官達も言い終わる。それを聴き終わり一刀は玉座より立ち上がって、皆に頭を下げながら

「本当は訓練兵を含めた、皆にありがとうと言いたいんだけどね。」

流石にそうはいかないからさ」

そう言つて姿勢を戻すと稟に訊ねた。

「稟。俺達が動く第一弾として、夷陵の件が最適だと思っただけど。如何思つ？」

「はい。私もそれで良いと思います。それに並行して、剣閣に先兵として5千程送り、

漢中の張魯殿を牽制しておいた方が宜しいかと。

その後、綿竹関に兵力を並べ威圧し、更に関に忍び込ませた工作員による関内部からの

揺さぶりによつて動揺を起こし、結束を崩壊させて後、攻める方が被害が少なくて良いかと」

稟は言うとしし間を置いて

「夷陵の方は下準備を全て終え、既に工兵を待機させています。後はこちらから持つていく材料を組み立てるだけとなっています。あれが出来上がった時の他国の反応が楽しみでなりません」

と最後は少し意地悪く笑いながら話を締めた。

稟が話し終わると、俺は万里と蒋苑（昇華）に顔を向け

「国内の事は万里と昇華に全て任せた。何かあつたら時の判断は全て君達の裁量に委ねる」

二人は「御意」と言い頭を下げる。

頭を上げた二人を見て、もう一回皆を見回し



「俺達は出陣したら引き返せないし、引き返すつもりも無い。ここまでの1か月の間、稟や詠、音々や風、万里、明美たちと万一の事まで考えて策を練って来た。」

だから諸将は安心して任務を遂行して欲しい」

そして玉座より立ち上がり

「北郷一刀が命ず。これより一週間の後、我等は劉表、劉焉に対し二正面作戦を展開する」

拠点、風 「街」

諷陵に赴任し一か月程経った頃、その日は珍しく昼前までに一刀の書類が無くなり

昼より休日の良いと稟に言われ何をしようかと食堂で考えていた。

食事が終わりとりあえず街に出ようと思いい財布を持ち、制服を着替え

市民が来ている物と同じ物に着替えてから街に遊びに出かけた。

一刀が諷陵に赴任して早一ヶ月が経っており、その間に悪徳官吏や商人を追放し、街を再整備し、警備兵を倍以上に増やすなどの対策をしてから街は活気を取り戻し、絶えずお祭り騒ぎの様である。

人口も大幅に増え且つ治安も景気も良いとなると、それを聞きつけ更に商人や地方より仕事を求め

また人口が増えると云う好循環も重なり、蜀地方でも有数な基幹都市に発展していた。

だがそれに伴い治安維持の方法が難しくなっていくのは必定であ  
つて、

現在の警備兵の人数もいずれ足りなくなるのは目に見えており、何  
か異常が無いか、

対応が遅れてないかを、一刀は時間を見つけては街に下りて様子を  
探っていた。

一刀が街に下りると今日も大勢の人が街に居て、本当に縁日が行  
われているのかと想像させる。

暫く街を歩き、一軒の茶店に立ち寄る。すると奥から年老いた店主  
が現れ、一刀に

「いつものかね、御遣い様。それとも別の奴にするかい？」

と領主である一刀を普通の客と同じく扱う。

一刀としては、その気取らない態度が気に入っているので、こちら  
もいつも通り

「うん、何時もので良いよ。それにしても人が増えたよな。俺が  
こっちに来た時も結構いたけどさ、

その時から比べても、3〜4割くらい増えたんじゃない？」

と一刀も親しい友人と話をするように語りかける。すると横から店  
主の奥さんが現れて、

「それも全て、アンタの御蔭だつて何時も言ってるじゃないか、御  
遣い様。

本当にアンタは自分が偉い人だつて解つて無いね。ほら、いつも  
のお茶と団子だよ」

一刀に家族の様に接する奥さんは、苦笑しながら一刀が注文した、団子とお茶を差し出す。そして

「本当に、アンタが来てから此処は変わったよ。昔は生活するのも、やっとだったのにさ。」

アンタが来て、ここらで有名だった荒くれ者達を追い出してくれて、その上、税金まで下げてくれたんだ。これで、良くならなきゃ、変だってもんだよ」

一刀が諷陵に来た当初、住民、特に子供らに元気が無いのが気になり、最小限の護衛のみ連れて城を抜け出して街を回り、立寄ったのがこの茶店だった。

そこで色々と話をして、稟達と対策をし、政策を矢継ぎ早に施行し、現在に至る。

それからも時間を見つけては、今の街の状況や噂を尋ねる傍ら、世間話をしに来ている。

暫く老夫婦と話していると、向こうから大勢の子供がやって来て、

「あゝ、御遣いの兄ちゃん発見!!」

「あゝ、御遣いの兄ちゃんだ」

「わゝ、兄ちゃん。遊ぼう」

「いゝや、御遣いの兄ちゃんは、私達と遊ぶんだよ」

と一瞬にして囲まれてしまう。

一刀は変装したつもりでも、何時も子供達にすぐにばれ、連れ回された。

この日もそうだった。お茶と団子の代金を払い老夫婦に御礼を言う

両手を子供らに引っ張られて、いつもの空き地に問答無用で連れて行かれる。

子供達と遊んでいると、何時の間にか子供達の数が30人以上に増えている事に気づく。

なので、此処に来て教えた“達磨さんが転んだ”をする事にし、俺が鬼になって始める事にした。

結構な数の子供が居て、それが一齐に動くので気づかなかつたが、こっちに近づいてくる子供の中に、見慣れた姿が有る事に今更ながら気づく。

其の姿は、口に棒付き飴を咥え、動きにくそうな衣装を着ているが、当の本人はかなり素早く動き

何より頭に、某万博のメインタワーを乗せ、しかもそれは喋る上に渋い。

そこで俺は同じ態勢で動かない子供達に向けて、

「皆、ちょっと待ってな……で、お前はいつの間にかこの中に居たんだ、風？」

そう言つて子供たちに混ぜつて、同じ態勢で動かない風に話しかける。

「今、さっき来たばかりですよ。それにしても、良くこんなに集まりましたね。」

「おう、兄ちゃん。俺と風が居たら、何か困る事でも有るのかい？」

「これこれ、宝慧。ご主人様はこの後、子供たちとお楽しみに……」

「はい、ストップ、風。それ以上は、子供たちに聞かせられないから」

と俺の問いに答えつつ、頭の宝慧で反撃するのも忘れない風と話す

も、  
溜息を一つ吐き元の位置に戻り続けることにした。そして子供らが  
帰るまで遊び倒すのだった。

子供達を区画ごとに纏め、集団で帰宅させ人数が少ない所は、俺  
が送って行った。

全員を送り届けた後、横に居る風に、

「風は先に帰っても良かったんだぞ？これは俺が勝手にやっている  
事なんだし……」

俺の言葉に風は、何時もの様に飴を持ったまま、こちらを見て

「いえいえ、風はご主人様と一緒に食事をしたと思います、勿  
論、ご主人様の奢りで……」

それに今日半日ですが、ご主人様がどれだけ民の事を、取り分け子  
供達の事を考えておられるかを  
見ただけでも、風はよかったですよ」

「そうか」

それを合図に二人して、いつもの遣り取りをしながら、街の中心部  
まで戻ってきて食事をした。

勿論、俺の奢りで……。

店を出て街を少し見渡してみた。そこには、昼間ほど多くは無いが、  
かなりの人が行きかう、

夜の街の姿が俺の目に映し出され、それを見て俺は風に問いかけて  
みた。

「風から見て、この街の姿は如何思う。正直に教えて欲しい」

すると風は街の様子を見ながら

「そうですね。昼間の人の多さは、経済がしっかりしている証拠ですねー。」

そして、夜にこんなに多くの人が居るのは、治安が良い証拠ですよ。それに……」

そう言っただけの方を向いて

「街の人の顔を見て下さい。皆が明るく、子連れの人までいますよねー。」

そして街に明かりが、祭りでもないのに煌々と灯っています。

こんな街は大陸中探しても何か所有するか。探す方が大変ですねー」

風は言うと同時に俺の側に寄って来て、袖を掴んで

「今日、ご主人様が子供達と遊んでいる姿と、この街を見て、改めて思ったのですよー。」

ご主人様に出会えて良かったと。

そして……風と稟ちゃんが見た太陽は、御主人様であると再確信しました。

これから何が起きようとも、風は御主人様に忠誠を誓います」

「ありがとう」

それだけ言っただけで、風の頭を照れ隠しに撫でてから、手を繋いで歩いて城に帰るのだった。

## 号令（後書き）

最近、朝晩の寒暖の差所か、日によって気温が10度近くも異なり  
体調管理が追いつかない憂鬱です。

今回、やっと一刀が出陣準備に入りました。

また、今話は少し急すぎたかもしれませんが、

次回はもう少し一刀達の事を書いてから、

他の諸侯達の話に入りますので

少し落ち着いてゆっくり書けると思っています。

次回ですが、私用にて少し更新が遅くなると思えます。

誠に申し訳ありませんが、ご了承ください。

今回も此処まで御読み頂きましてありがとうございます。

感想、コメントなどお待ちしております。

## 華琳の誤算（前書き）

お久しぶりです、憂鬱です。

一か月と二日ぶりに投稿させて頂きます。

今回、宛に華琳が攻め込みますが、しかし……

今回は話が少し解り難い所が多々あるかもしれませんが、何かありましたら、感想にてお知らせください。



## 華琳の誤算

一刀が号令を発し、諸将が揃って出て行った後に残ったのは、霞、華雄、稟、風、詠の

元董卓軍の將軍、軍師らと一刀の軍師の二人であった。

一刀は残った者達を見て、玉座より下り彼女達の側まで行って話し始めた。

「霞は俺について来てくれる？華雄も一緒に来てくれるかい？」

「ウチはアンタに言ったやろ？月を助けてくれた礼をすると。嫌、言うても付いていくで」

「お前が来いと言うなら、私は黙って付いて行くだけだ、一刀」

2人の言葉が嬉しく、頭を下げて御礼を言った。そして横に居た詠にも話しかける。

「詠には一つ頼みたい事が有る。聞いてくれるかい？」

一刀を黙って見ていた詠が、

「それで、僕に何をさせたいの？言っとくけど、月の為にならない事はしないからね！！」

と言うと、一刀は少し笑いながら、

「ああ、でもこれが成功するか、成功しないかによって、その後の展開が変わって来るんだ。

だから、詳しい事は稟と風に聞いてくれるかい？」

その後、詠は溜息を吐きつつ頷いて、凜と風と共に部屋の外に出て行った

暫くして、詠が帰って戻って来て詠が了承したので、今後の事を皆で何度も話し合い

徹底的に話を詰める事で、一刀の軍は更に綿密な行動計画を生み出す事に成功し他の軍に無い、指揮系統を新たに有する軍が誕生する事になるが、それが機能し始めるのはもう少し後の話である。

く宛にて華琳の誤算く

自分の目の前で大陸最強と信じていた、自分の軍が火に包まれ、兵達が逃げ惑っていた。

その逃げ惑う兵達に、容赦無く浴びせられる矢が、剣が、槍が兵達の命を容赦無く奪っていく。

その目の前の光景を、信じられないといった表情で見ている華琳が居た。

部隊長が混乱を鎮めようと命令するが、兵達はその言葉を聞く余裕も無く、右往左往するばかり。

また、自分達の周りの天幕や物資が燃え、火の手が迫っているのも混乱を増長していた。

「如何してこんな事に……くっ」

華琳は現在、絶体絶命の危機に陥っていた。

自分の周りには、僅かな数の親衛隊しかおらず、その親衛隊を率いる季衣・琉流は華琳を逃がすべく

奮闘していた。それでも敵兵はやって来て、自分の周りの親衛隊が対応している。

このような事態に陥った始まりは、張繡が野戦を挑んで来た、初日から始まっていた。

華琳は挑んできた、張繡の軍をこの野戦で殲滅する積りで戦に臨んだ。

しかし、この戦いが張繡軍の策であり、その目標が華琳の首だと言う事を誰も知らなかった。

策を弄もよした者以外は……

戦闘が始まると張繡は全軍を何個かに分け縦隊魚鱗の陣を敷き、

華琳はそれを迎え撃つ為、

同じく縦隊魚鱗の陣を敷く。

しかし、この布陣した時に張繡は、少数の精鋭部隊を本陣後方に下がるせる。

そして戦闘が始まると、この部隊を戦場から離脱させ城に後退する事を指示した。

戦闘は一進一退を繰り返していたが、曹操軍が前衛を破り、指揮していた者を討ち取る。

しかし、張繡は戦線を下げて編成し直し、粘り強く抵抗を重ねる。

だが、華琳はその度に打ち破る。

それを何度か繰り返し、夕方を過ぎた時、張繡軍が城に向け撤退を開始する。

華琳は撤退する張繡軍が整然と撤退するのを見て、まだ余力があると判断し張繡軍を無理に追撃せず

また、戦闘開始時に城の方向に撤退していった部隊の事も気になつて、周囲を偵察させながら、

城に近づきながら、その翌日に城を包囲した。

それから2日程、華琳は包囲を続け様子を見ていたが、攻撃しても城からの反応は薄く、

また、城の周囲にも伏兵などの存在も確認されておらず、密偵からも城内の士気は低く、兵の殆どが負傷しており、士気の低下も著しいとの報告を受け、翌日に総攻撃を行う事に決め、その日は見張り以外の全員に休養を命じ、夜を迎える。

#### 宛の城壁にて

張繡は、曹操軍の様子を城壁の上から眺めていた。城壁から見ると曹操軍の動きは丸解りであり、何をしているのかも良く見えた。張繡は横に居る、自分の背の半分も無い、フードを被った子供に尋ねる。

「お前の言う通りになったな、真理。曹操は明日にでも攻撃してきそうな雰囲気だな。それで、この後の手筈は如何なっている？」

張繡が尋ねた子供は口を開き、

「全て整ってますよ。今夜中にあれを全て、退けて見せますよ」

その子はフードを被ったまま、手だけを曹操軍の方に向け、

「見張り以外の全軍が緊張感も無く休んでいる、是即ち、全軍が油断していると云う事。

曹操軍程の軍規に厳しい部隊が、その状態の時は何かを画策していると考ええる。

それが罫で有れば、緊張感は保たれ、あのような無様な状態には陥らない。

さすれば、答えは一つ。何かを仕掛ける為に、今日は兵を休ませ

ているしか考えられない。

こちらは、それに乗じ攻め込む事は、兵法の基本と云う物。

しかし、曹猛徳はもう少しマシな人間かと思っていました、こんな事も考えないとは……

そんな者が兵を率いているなら死んだ方がマシです。その方が兵の為にもなります」

フードを被った子が話すのを黙って聞いていた張繡は、少女の、自分に対しての口調を気にせず、

「相も変わらず、きつい言葉を。だが、お前の言う通り、曹操は完全に何かを仕掛ける気だな。

では、俺は今夜の為に英気を養って来るとしよう。兵にも擬態を解き、今の内に休むように伝える」

張繡がそう言うと、側にいた兵が頭を下げ、伝令の為に城内に走って行く。

周りに居る守備兵達をよく見ると、殆どの兵に包帯が巻かれ、怪我をしている様に見えるが

実際に怪我をし治療を受けた者は、治療室にいて、此処に居るものは皆、無傷な者ばかりであった。

「真理、お前はまだここに居るつもりか？」

「ええ、もう少し見て行こうと思います」

「解った。風邪など引かぬようにな……」

張繡はそう言って、城内に戻って行くのだった。残されたフードを

被った子は、  
暫くの間、曹操軍を上から見下ろしていたが、

「曹操殿も勝ち過ぎて慢心したと見える。私達の軍が本当に疲弊しているかは自分の目で見れば

一目で解る物なのに、斥候の者の言葉を鵜呑みにしてしまうとは……曹操殿に従う兵は可哀想だが……此処で消えて貰おう。その方がこの世の為だ。

これで残るは、孫堅と袁紹、袁術、馬騰、張魯、公孫贊、劉備、そして北郷か……」

そう言うとフードを上げ、素顔を見せる。その顔は幼いながらも、意志の籠った強い眼が特徴の、知的な顔立ちをした少女であり、フードに纏めていた銀髪が、風に吹かれてなびき、風が止み腰に纏った髪が  
彼女を大人びて見せるのであった。

そして、夜を迎える

華琳の本陣は翌日の攻撃の為の全軍の編成を終え、見張りの兵以外を除き、殆どの者は寝ており、  
寝ずの番に当たった者も愚痴を言いながらではあるが警備をしていた。

そして、寝ずの番に当たった部隊の副隊長が警備に出る為、  
部隊長や部下達と他愛のない話をして、何人かの者と陣の見廻りに出かけた。

暫くして、陣の巡回を終えて戻ってきた副隊長が静かすぎると最初に異変に気付く。

そこには、先程、巡回に行くまで話していた部隊長とその部下達が居らず、辺りは静まり返っているが、血の匂いが充満していた。副部隊長は部下に辺りを探らせつつ、何人かの者に華琳の元に走らせ警戒態勢を取ろうとした……だが、遅かった。

何人もの人間が走ってくる音が聞こえ、辺りを探らせた者達が帰って来たと思ひ、

音の方に振り向くと、大勢の敵の部隊が周囲から現れ、大声で

「敵襲だ!!」

「敵の奇襲だ、起きろ!!」

「火が付いたぞ、逃げろ!!」

「敵だ、助けてくれ!!」

「ジャーン、ジャーン、ジャーン」

と叫び、銅鑼を鳴らしながら、自分達に襲い掛かってきた。

また、その者達とは別の者達が兵士の寝ている、天幕に次々と火を放っていった。

叫び声や銅鑼に気付いた兵達は慌てて起き、天幕の外に出て消火活動や迎撃を行うが

その後方より新たな部隊が、銅鑼の音と共に続々と現れ、逃げ遅れた兵達や消火していた者を

残らず倒していき、それが兵達を瞬く間に混乱の極みに陥いらせた。その光景は陣内の至る所で見られ、陣全体が瞬く間に、混乱と炎に包まれていく。

張繡軍は夜陰に紛れ本陣に侵入し、静かにその周辺为天幕に寝ていた者達を殺害しつつ、

別の天幕に移る事を繰り返して行った。そして、それを何箇所も繰

り返し、粗方片付くと、その天幕や周辺に有った物資に火を付けて、曹操軍の混乱を増大させていった

陣の一番奥深くに天幕を張り、執務を終え、寝ていた華琳は敵の奇襲を受けてから直ぐに、

只事では無い雰囲気と声によって目が覚め天幕の外に出た。

外に出た華琳が見た物は……寝る前までは勇壮を誇っていた兵士達が、火の勢いに為す術もなく逃げ惑い、また敵兵に討たれている姿だった。

暫く信じられないと云った様子で見えていたが、混乱の中より季衣と琉流が親衛隊を率いて現れ、琉流が天幕の前に居た華琳を見つけ言った。

「華琳様、ご無事でしたか!!」

琉流の言葉により、現実に戻され華琳は、

「敵襲みたいね、琉流、敵の数はどのくらい居そうかしら？」

琉流は華琳を見て、何時もの華琳では無いと思いつつ、

「数の方はかなりの数が陣内に入り込んでいるようです。それよりもっと悪い報告があります」

琉流はそう言うと、少し声を下げて

「兵の混乱がかなり深刻になっています。最早、私達の言葉も届か



なくなっております。

また、兵糧庫に火を着けられ、それを見た兵達が更に混乱を起こしてしまいました。

華琳様におきましては早急にこの場を離れて下さい。華琳様が逃げる時間は私と親衛隊が作ります」

琉流は、親衛隊を半分に分け、自分は半分を率いて、迫ってきた張繡軍に向かっていった。

その琉流の後ろ姿を見た華琳は自分を取り戻し、横に居た季衣に

「季衣、貴女はこの混乱の中にいる兵を一人でも多く集めなさい。

そして、その部隊の指揮権を琉流に預けなさい。私は此処で兵を纏めて琉流の援護をするわ」

華琳が何時もの調子に戻っているのを見て、季衣は

「解りました。何かあったらすぐ逃げて下さいね、華琳様。此処に

居る親衛隊は残していきますね」

そう言うと僅かな手勢を率いて、混乱している兵達の元に戻って行った。

季衣を見送り、華琳は自身の武器「絶」を何処からか出して振りかざし、

「これより私達は此処を守備し、琉流を援護する。我等の同朋を傷つけた敵を生きて帰すな！！」

華琳が鼓舞すると周りに居た兵達は、一気に士気を回復し、やってきた敵を押し返し始める。

だが季衣や琉流の奮闘も虚しく、指揮の行き届かない兵は、逃げ

るか、討たれるかして  
曹操軍の数は既に、宛に来た当初の半分まで減っていた。

その戦いを宛の城の上から見ていたフードを被った少女は、

「曹操殿も頑張られますね。しかし、幾ら頑張ろうとも多勢に無勢。もう少しで終わりですね。」

しかし、曹操軍の後方に配置した部隊から連絡が無いのが気になる  
……

援軍が来るには早すぎるし、曹操殿もこの部隊に関しては掴んでいないはず。  
それなのに来ないのは何故？」

ここまで順調に来ていて、止めを刺す部隊が現れないのを気になった少女は、  
後方に居る部隊に伝令を飛ばす様に命令し、戦場の様子に目を移した。

張繡軍は華琳の首を狙い、兵の殆どを出して曹操軍の殲滅に当てるが、その前に立塞がる  
琉流、季衣の部隊の方陣に殆どの部隊が跳ね返され、中々崩せないでいた。

だが、如何に琉流達が強くとも限界は訪れる。華琳の部隊の前に仁王立ちし奮戦する琉流の肩に  
矢が刺さり武器を落してしまう。季衣は琉流を守りながら戦うが、  
敵兵に囲まれてしまう。

また、琉流達の壁が無くなった事により、後方に居る華琳の元に敵兵がやって来て  
華琳の部隊も囲まれてしまう。

華琳の部隊の兵達はよく戦ったが、多勢に無勢であり、徐々にその数を減らしていく。

そして囲んでいた、敵部隊が遠巻きになり、弓矢を持った兵達が前衛に出てきて斉射を行おうと弓矢を引き絞った。

皆がこれまでかと思った瞬間だった。

「ドゴオオオオン！！！！」

戦場に爆発音が響き渡り、華琳の部隊を囲んでいた、敵兵の部隊の居た所に土煙が舞い上がる。

土煙が晴れると、そこに居た兵達はすべて吹っ飛ばされて、部隊は、ほぼ壊滅していた。

華琳が後ろを振り返ると、そこには……

「楽」

の旗を後方になびかせた、楽進こと凧が猛虎蹴撃を放ったままの姿で立っていた。そして、

「全軍に告ぐ。我等はこれより味方を助けつつ、敵軍を追い返す。総員掛かれ！！」

凧がそう言うと、連れて来た兵はそれまで優勢に戦いを進めていた、張繡軍を追い返し始めた。

軍に命令を伝えると凧は、華琳の元に駆け寄り、

「華琳様。御怪我はありませんか？遅れて申し訳ありません」

凧は辺りを見回して、曹操軍の兵ばかりの遺体を見て、

「くっ、もう少し早く到着していれば……こんな事には成らなかつたかもしれないのに……」

華琳は死を覚悟していたが、いきなり現れた凧に驚きながらも彼女に問いかける。

「凧、貴女は如何して此処に？それよりも先ず御礼を言っわ。貴女の御蔭で私達は助かったわ」

華琳は凧に礼を言つと戦場に目を移す。そして張繡軍が凧の攻撃と新たな部隊の登場に

浮足立っているのに気付き、「絶」をかざし

「敵兵は我等の新たな部隊に恐れをなしている。此処が好機だ。全軍を持って粉碎せよ」

凧の援軍と華琳の号令によって、曹操軍は勢いを取り戻し、張繡軍を撤退させ始める。

その光景を見て。華琳は横に居た凧に

「如何して貴女が此処に居るのか、後で聞っわ。貴女は負傷した琉

流に代わって前衛を指揮して。  
深追いは無用よ。或る程度追い返したら戻ってきなさい。それから、季衣と琉流をこちらに戻して」

華琳の命令に「はっ！！」とだけ答え、凧は前衛に向かって行った。  
そして、それから暫くして

負傷した琉流と季衣が後方にやって来た。

華琳は、季衣と負傷した琉流に対し労いの言葉を掛けつつ

「今日の戦の敗因は、私に全て非があるわ。敵を侮り、愚かにも下策をとってしまった。

今後は、このような無様な真似をしないと、季衣、琉流、そして、今回散った者達に誓うわ」

華琳は凧が敵を城に追い返し戻って来ると同時に、軍を編成し直し、撤退を開始する。

そして、華琳は戻ってきた凧に尋ねる。

「凧に聞きたいのだけど。何時から貴女は私達の後を付いて来ていたの？」

恐らくは桂花辺りの差し金なのでしょうけど……」

凧は少し驚きながらも、

「はい。華琳様が桂花殿から、報告を聴き終えて出発した後、私は桂花殿に呼び出されて

華琳様の後を気づかれぬように付いて行く様に言われました。理由を尋ねると

『華琳様の様子がいつもと違っていたし、何かを焦っている様に感

じたのよ』

と言う事でした。

予定なら、もう少し早く着けたのですが、華琳様達の後方に敵の軍が居ましたので、

排除してましたので遅くなってしまいました」

華琳は「そう」とだけ答えると、

「今回は、貴女にも桂花にも迷惑を掛けたわね。こんな私だけど、今後も支えてくれるかしら？」

との華琳に言葉に、凧は抱拳礼でこう返した。

「我が命尽きるまで、華琳様に忠誠を誓います」

その後、華琳は自分の領地に戻り、今回失った損害を見て、今後の更なる戒めとするのだった。

華琳が撤退を始めた時、宛の城壁にて

宛の城壁では、フードを被った少女が撤退する曹操軍の様子を見ていた。

先程まで曹操の首が取れると思っていたが、まさか、援軍がこんなにも早く訪れるとは思わず  
拳を握って悔しがっていた。そこに張繡が現れ、

「真理。お前の策は見事に当たったな。で、お前は何を悔しがっている？」

と、真理と呼んだ少女の異変に気づく。

だが、当の少女は深呼吸を数回すると、落ち着きを取り戻し

「いえ、何でもありません。それで張繡殿にお願いがあります。これから一筆書いて頂きたい」

真理と呼ばれた少女が、そう言うと張繡は少し考えて、

「何処に何と書いて出すのだ？」

少女は張繡の側に行き、声を下げて

「殿に曹操殿を攻めるようにと。そして、手紙にはこの戦況の事も書いて頂きたい。」

李確殿、郭？殿には既に此処での勝利の事を知らせる密偵を出してあります」

聞いた張繡は少女の顔を見て苦笑しながら、

「お前が味方で良かったよ、真理。それでは一筆書いてくる」

そう言つて城内に戻つていった。

張繡が去つて、一人になった少女は被っていたフードを上げて

「運命は曹操殿を見捨てていなかったのか……しかも曹操殿は良い部下を持っておられる。」

曹操殿の心理状態を客観的に分析し、保険を掛けていたとは、恐れ入る。

流石は王佐の才を持つと言われる筈文若殿。自分の主の様子に気づいておられたとは。

それにしても、今回、此処で曹操殿を討てなかったのは痛い。曹操殿は勢力を回復させれば  
またここにくる。今回とは比べ物に成らない程に強い力と心を持つて……

そうならない為に次の手は打った。ここで曹操殿の力をもう少し削いでおかねば私達が危ない」

少女はそういうと、黙って城壁の外を眺めていた。

華琳の軍は、勝利を積み重ね、敗北の経験が殆ど無く、唯一の苦戦が虎牢関での呂布戦であり

それも痛み分けに終わり、彼女にも、将兵にも心の隙間に慢心が有った。

将兵達には、華琳の不敗神話まで有るほど兵達には絶対者であり、その華琳が指揮する軍が

負ける訳無いと云う慢心があり、今回の兵力の分散と云う策の危険性を軍師の桂花以外は

誰も意見しようとはしなかった。

華琳自身も密偵からの情報・自軍の戦力・訓練度から総合的に見て、自軍が負けるとは思わず、

また優秀な軍師も居らず兵力も同数の張？軍であれば、攻城戦ならそのまま捨て置き、

春蘭達に合流し李確達を倒せば良いし、野戦を挑んでくるならば、粉碎すれば良いと考えていた。

しかし、それをしなかった彼女自身に大きな慢心が有った事は事実であり、

今回はその心の隙間を見事に読まれて敗北したのである。

だが、曹操軍の苦境はそこで終わりでは無かった……



## 華琳の誤算（後書き）

お久しぶりです。今月は本当に機械に追い回されてました。日1000個しか出来ないのに日1250つて殺す気かー御蔭で休日出勤したり、休みを削ったりして、泣いてました。

今回出て来た少女はまだ、謎のままにして置きます。

（もう解ってる方も居られるかもしれませんが……）

今回は曹操軍のことを少し書いて、紅蓮の話に移りたいと思います。今回もここまで御読み頂きありがとうございました。

## 拠点フェイズ 星、華雄（前書き）

本文を書いていたのですが……何故か拠点の方が先に出来ちゃった！！

と云う訳で拠点だけですが投稿いたします。

タイトルからも解る通り、星と華雄（月・詠）となっております。

何かありましたたら、感想でお願いします。

## 拠点フェイズ 星、華雄

～月夜の下で～

諷陵に赴任して暫くした、ある日の夜の事、中庭で一人盃を傾ける一刀がいた。

その雰囲気は普段の一刀からは想像も出来ない程、大人びており、時折無くなった盃に酒を注ぐ姿も

かなり様になっていて、月明かりに映し出される姿は立派な大人の雰囲気を醸し出している。

誰もが声を掛けるのを躊躇う、その光景を一人の女性が少し離れている場所より見ていた。

彼女はその人影を見つけると、暫く遠目より窺っていたが、気配を消しながら一刀の側に行き

「主、その様な所で一人酒とは……。如何なさいました？」

「星か、唯の一人酒だよ。少し考え事が有ったからさ。それに今日は綺麗な月も出ていたしね」

そう言うと、星に対し視線だけで「飲む？」と横に置いてあった盃を差し出す。

すると星は黙ってその盃を受け取った為、一刀はその盃に酒を注ぐ。そして、注がれた酒を一飲みで飲み干して星は、暫く一刀を観察する様に見て、

「如何なされました、主らしくも無い」

とたった一言だけ喋り、星も一刀の盃に酒を注いで、一刀の瞳を覗

き込んだ。

一刀もその酒を一飲みで飲み干し、

「そうか、俺らしくないか。なるべく何時もの自分らしく振舞ったつもりだったけどな」

「ええ、こうして二人きりになると、明らかに違いが解りますぞ」

星の言葉に応えず、一刀は沈黙し盃に目をやっていた。

そして、少しの時間を置き、吐き出すように呟く。

「星。俺は君や稟、風、万里達の良き君主としてやっているだろうか？」

それだけ言うと一刀はまた、盃に目を向けて黙りこむ。

星は暫く、一刀を観察し、

「何がございました？」

とそれだけ尋ねて、一刀の言葉を待った。すると

「いや、特に何も無いよ。執務室で書類を片付けていた時に、不意にそう思ったんだ」

一刀は唯、それだけ言うと

「星や稟、風、万里に俺は頼りきっているんじゃないか。もしくは甘えていないか？」

そう考えると切りがなくてさ。考えれば考えるほど、深みに嵌って行くというか……」

一刀の言葉を聴き終えると星は、

「主は良く我等の期待に、応えてくれていると思いませんぞ。私から少し言わせて頂くなら、もっと我等を頼っても宜しいと思いますが……」

これは私だけでなく、稟や風、万里も同じ考えでしょう。ですから胸を張って下さい」

一刀は「うん」と言うと、また盃に口をつける。

星は、一刀の雰囲気が変わらない事に溜息を吐き、持っていた盃を自分の横に置き、

そして、不意に一刀の顔を抑え視線を合わせて

「これでも信用できぬか？」

と言うと同時に、いきなり唇を奪う。

いきなり星に顔を抑えられ、キスされた一刀は、何が起こったのか理解出来ずにいた。

星が顔を離し、お互いが見つめあう事で何が起きたかを理解して呆然となった。

「すみませぬ。主に対する言葉使いでは有りませんな。しかし、これも主の為ですので。」

後、もう一つ保険を掛けて置きましょう。前に一度宣誓しましたが、あの時は稟達が居ましたのでもう一度。今度は私、趙雲子龍から主に……」

星はそう言うと膝き頭を下げて宣誓した。

「主の敵は、私の敵。その敵が誰であろうと私は、全てを叩き伏せ、龍は命ある限り、天と共に在ることを、そして、永遠の愛を此処に誓います」

その宣誓を聞いた一刀は、跪いている星を抱きしめ、

「……………星。……………ありがとう」

その光景を見て夜空に浮かぶ星が、お互いを抱きしめあっている、2人を祝福する様に輝いていた。

#### 新たなる主の下で

一刀は執務が長引き、夜遅くまで執務室に籠っていた。その執務がやっと終わり、

座りばなしの体を解そうと、執務室の外に出る事にし、扉を開けて深呼吸をし体を伸ばしていると訓練場の方から音が聞こえてきた。

その音は規則的に聞こえ、何かを降り下ろしているらしく、一定時間聞こえると暫く止み

また一定時間すると聞こえてくるを繰り返している。

(こんな時間に誰が?)

と気になった一刀は音の鳴る方へ歩いて行った。

そこに居たのは、自分の武器「金剛爆斧」を振り上げ、そのまま一定時間置いて降り下ろす事を

繰り返し、何か鬼気迫る雰囲気で鍛錬を繰り返す、華雄であった。

一刀は一心不乱に武器を振る華雄を、少しの間見続けていた。すると不意に華雄の手が止み、

「何時まで、人の事を見続けるつもりだ？」

「こんな時間まで如何したの、華雄。眠れないの？」

「いや、そう云う訳ではないが……」

そう言うと黙り込んだので、何時もの雰囲気と違う華雄を見て、一刀は少し気に掛かり、

「何か、悩み事でも有るの？俺で良かったら相談に乗るけど……」

と言ってみるが、華雄は何も答えようとせず、一刀をずっと見ていた。そして、

「お前は…焔耶の態度に激怒し、焔耶を変える要因を作ったと、星に聞いたが本当か？」

と華雄は、一刀の目を離さず見ながら尋ねて来た。一刀も視線を反らす事無く

「ああ、焔耶が変われたのは焔耶自身の力で有って、俺は後押ししただけに過ぎないよ。」

けど、前の焔耶に対し怒ったのは本当だよ」

「そうか……」

華雄は何かを思案し、そこで思い至ったのだろう、一刀に姿勢を正し、

「お前に、いや、貴方に聞いて頂きたい。

私は自分の武に誇りを持っていた。恋には敵わぬが、それでも他に名の有る者達には負けぬと。  
だが？水関で焰耶に負けた。それからだ、私は自身の武に疑問を持つようになってしまった」

華雄は困った顔をしながら続けた。

「先程も、武器を振りながらも、自身の頭の中では、

『こんな事をしていて強くなれるのか？、もっと他にやるべき事があるのではないか？』

と云う考えが頭から離れ無かった……最近は、恋や霞、星達と訓練をしていても考えてしまう」

一刀は華雄の話を聴きながら、星からも華雄の様子を見てくれと頼まれていた事を思いだす。

恐らく華雄は、焰耶に敗れたあの日からずっと悩んでいたのだろう。そう考えながら、何か良い案は無いかと思案して一刀は言った。

「華雄さ、もう少し肩の力を抜いて、落ち着いてから、もう一度考えてみたら？」

今の華雄は、自分では冷静に考えているつもりでも、俺から見れば、焦って、それが更に華雄を

追い詰めているようにしか見えないんだよ」



一刀は少し改まって、申し訳なさそうに更に続ける。

「ごめんな、華雄が真剣に悩んでいるのに、こんな抽象的な意見しか云えなくて。

もっと俺が大人だったら、もう少しマシな意見を言えるのだろうけど……」

一刀を見ていた華雄は、自分の事で真剣に悩んでくれる一刀に、不思議な感情が芽生えていた。

それは洛陽で一刀に感じた感情よりも深く、月に忠誠を誓った時に感じた感情に酷似している。

しかし、月の時と違うのは、心臓の音が外に聞こえそうな程に激しく波打っていた。

華雄は、一刀を見ながら、何時もの口調で

「お前と云う奴は……だが、お前に聞いて貰ったお陰で、何かをしなければならぬ事は解った」

華雄は、持っていた金剛爆斧を担ぎ自室に戻っていきこうとした。

だが何かを思い出したように、一刀の側に戻り、そして、

「お前の様な奴は初めてだ、一刀。皆とふざけていたり、かと思えば真剣に私の様な無骨な者の

悩みに応えてくれる。そんなお前に私の武を捧げたい。

だが、私の武は月様に捧げている。また、今の私の状態じゃ捧げるに値しない。だから……」

華雄は話を止めて、一息吐いて、

「もう暫く待ってってくれるか。気持ちの整理を付けてから、もう一度、

お前に会いに行く」

そう言うと華雄はその場を後にする。その翌日の夜、月の部屋に行く華雄の姿があった。

そして、それから一週間程した夕方の会議の時の事である。

一刃達はこの国を良くする為、連日連夜に渡って話合いを行っていた。

その会議も終わり、話していた者達が一人、また一人と席を後にし残ったのは月と詠だけになった。

一刃も自室に戻ろうと席を立ち、月に挨拶して部屋を出ようとした。すると

「一刃様にお願ひがあります。少しお話を聞いて頂きたいのですが……」

月がそう言うので一刃は、元居た席に座り話を聞くことにした。すると詠が部屋の外に出て誰かを部屋に招き入れた。部屋に入ってきた人物、それは華雄であった。

華雄は暫く黙っていたが、月と詠に促されて話を始めた。

「忙しい所を済まない。お前に聞いて貰いたい事があってな……」

そう言うと華雄は

「この間は私の話を聞いてくれて感謝している。御蔭で何をすべきかが見つかった」

華雄がそう言うので一刃は嬉しそうに、

「そうか、それは良かった。俺もその後、気になっていたんだよ。俺程度が華雄程の  
武人の相談なんか乗れたのかってさ。で、今日は如何したの？月や詠まで」

すると月が一刀に向かつて、

「一刀様に私達は助けて頂きました。そして今回は悩んでいた華雄さんまで助けて頂きました。  
私達には何も一刀様に差し上げる物は有りません。ですから何か無いかと考えていました。  
そこで、私と詠ちゃん、そして華雄さんを一刀様の正式な配下として頂きたいのです」

月の言葉を黙って聞いていた一刀は、

「皆、本当にいいのかい？俺は今のもまでも良いと考えているんだけど……そして、  
これが重要なんだけど、霞や恋、そして君を慕って付いて来た人達はこの事を知っているの？」

「はい、霞さん、恋さんには昨日、直接会って言いましたし、私に付いて来てくれた皆さんにも  
お話しました」

月はそう言つと黙って俺の方を見ていた。

「そうか……霞や恋も知ってるのか……」

一刀の言葉に詠が何時もの口調で

「アンタは月が此処まで言ってるのに断るって言うの?」

「そう言う訳じゃないんだけど…そう言う詠は良いのか?俺みたいなのが詠の主になっても?」

一刀が少し困った様に言うのに、

「仕方ないじゃない。月が決めたんだから。僕は月の為に生きるって決めたんだから。」

それに…ぼ、僕だって…」

詠はそう言ったきり黙ってしまふ。月は詠を見て微笑んだ後、こちらを見ながら、声量を下げて

「御迷惑でしょうか?もし御迷惑ならば…」

月の目が本気である事を証明し、それが一刀の気持ちを決めさせた。

「解ったよ。君達が良いのだったら文句は無い。でも、俺はこれまでと変わらずにいつもと

同じ様に接するよ?君達も俺に対しては、いつも通りで接する事。それが条件だけど良いかい?」

月は嬉しそうに「はい」と言うと三人は跪いて、

「私こと、董卓仲頼は北郷一刀様に永遠の忠誠と生涯の献身を捧げます」

「僕、賈馮文和は北郷一刀様に忠誠を誓うわ」

「私、華雄は北郷一刀様の為、敵を討ち掃う事を誓い、此処に我が武器『金剛爆斧』を捧げます」

三人の宣誓を聞き一刀は、

「俺は君達を歓迎する。何かと到らない俺だけど、これからも力を貸してくれるかい？」

「……はっ！！！！」

と三人の声が重なり、その瞬間から彼女等が一刀の配下へとなった瞬間である。

その後、華雄は前に増して訓練を欠かさず、その後、書を読むようになり、

時折、巴郡から出てくる焰耶と共に競いながら、猛将から智も携えた剛将へと変貌を遂げる事と成っていくが、それはまだ先の話であるが……

しかし、彼女達が正式に一刀の配下になった事は、一部の者を除き知らされず、何時も通りに生活し、一刀の配下になった事を知っていた者達が見ても、

それまでと変わらない態度で月達に一刀は接していた。

後に書かれた北郷軍の正式な公文書には董卓、賈馮の文字は見当たらず、あるのは

「董昱、黄権、華雄は忠臣であり一刀が信頼する仲間であった」とだけ書かれているのであった。

拠点フェイス 星、華雄（後書き）

リアルが真面目に忙しい……夢の世界に行きたい。

ネバーランド

最近、本当に夢の中で、フォークリフトに乗ったり、仕事で使うインパクトレンチを打っていたりして、

現実と夢の区別が解らなくなってきました。憂鬱です。

皆さんに言っておく！！今回は本編とは全く関係ございません！！  
（だって、書いてる内に出来てしまったんだもん！！）

次回はちゃんと華琳と紅蓮の話になると思いますが、リアルの方が追い込み命令が掛ってますので、仕事に集中せねばならず

投稿が遅れると思います。

なるべく早く、書き上げたいと思いますが、正直解りません。

今回も此処まで御読み頂き、ありがとうございました。

華琳の再出発、紅蓮の憂鬱（前書き）

おお！！仕事が凄い事になっているのに、投稿出来る所まで来れたなんて……

奇跡だ！！

と云う事で真恋姫無双〜新〜30話目をお送りします。

今回は華琳の話の残りと紅蓮の事です。

今回も何度か見回しましたが、何か不自然な事や、おかしな所が有れば感想にてお教え下さい。

## 華琳の再出発、紅蓮の憂鬱

春蘭と秋蘭は陳留の玉座の間で平伏していた。

二人とも返り血を浴びており、その後ろに控えていた彼女達の副将や武将も同様である。

また、春蘭に至っては左目に蝶の形をした眼帯をしていた。

「そう、貴女達もやられたのね。それにしても郭？達を過小評価していたわ。いや、張繡もね。」

この私の怒りと私の春蘭に傷を付けた事は絶対に忘れない！！必ず借りは返すわ」

華琳は自分が話していた間も、床に頭を付けて平伏していた春蘭に向かって

「夏侯元讓。貴女は誰の物が言ってみなさい！！」

「はっ、私の血肉及び髪の毛一本まで、全ては華琳様の物です！！」

「そう、貴女は私の物よ。だからもう顔を上げなさい。そして私に貴女の可愛い顔を見せなさい」

華琳の言葉を聞き、春蘭はその場にて号泣し始めた。華琳は春蘭の所まで行き抱きしめる。

その状態のまま暫くして春蘭は倒れてしまう。そのまま春蘭は自室で休ませることにした。

春蘭が運ばれて行き、華琳はその場に残った秋蘭より詳しい話を聞くことにした。



春蘭達は郭？達を翻弄しながら、徐々に追い詰めていた。

しかし、ある日より華琳の部隊が負けたとの噂が聞こえ始め、それから二日後に伝令がやって来て

華琳の敗北が本当であった事を知らされる。

報を聞き春蘭達は急ぎつつも、郭？達に悟られぬ様に撤退準備をし夜の闇に紛れて行動を開始した。

夜の間移動し続け、朝には領地が近づき兵達に安堵の色が見え始めた時、側面より奇襲を受ける。

奇襲してきた部隊の旗には「郭」「李」…そして「張」があった。側面からの奇襲により分断され、次々に為すすべなく討たれ、そして逃げ惑う兵達。

大きくなりつつある混乱を何とか抑えようと懸命に声を発し、兵達を纏めようとする部隊長達。

しかし、郭？達は混乱した兵達を余所に、部隊長達を優先的に討ち取っていった。

それにより、兵達に命令し、指揮し、抑えられる者が居なくなつた事で兵達の混乱は更に増し、

郭？達に応戦しているのは春蘭・秋蘭率いる本隊と自力で応戦している数部隊と数える程に成っていた。

春蘭は味方を逃がそうと、自分の部隊を率いて郭？達の前に立ちはだかり、猛攻を加え

秋蘭も自身の部隊で春蘭と戦っている敵部隊に斉射を加え、郭？達は少なくとも打撃を受けて、

その場で防戦を余儀なくされた。

春蘭・秋蘭の部隊の奮闘で戦況が変わり、敵が撤退を始め様とされているのを見て、

「もつひと押しだ」と兵達に声を掛け様とした、その時……

春蘭の左目に矢が刺さる。射たのは郭？に従っていた、曹性と云う将であった。

秋蘭は射た曹性を睨みながら、自身の弓を以って何かを叫ぼうとした曹性の眉間に  
矢を突き立て、慌てて春蘭に近寄りながら取り乱し叫ぶ。

「姉者！！姉者！！！」

射られた春蘭を見て、それまで奮闘していた兵達に動揺が走る。  
だが春蘭は、落ち着きのある声で

「大きな声を出すな秋蘭。今騒げば軍が崩壊し兼ねん」

そう言うと、近くに居る兵達に向け大声で、

「我らに従う兵達よ、良く見よ！！私の目は華琳様の覇業の為、供物として捧げる。

我が名は夏侯元讓。華琳様の、魏武の大剣なり！！

戦神よ！！我が目を供物に捧げる。代わりに華琳様の覇業を成功させたまえ！！！」

春蘭は叫びながら、自身の目を矢ごと引き抜き、それを食べてしま  
う。

それを見た、味方からは大音量の春蘭と華琳を讃える声が、  
敵からは夏侯元讓に対する恐怖が起こり、郭？達は慌てて撤退して  
行く。

逃げる郭？達を深追いはせず、部隊を編成し直すとそのまま撤退  
した。

秋蘭より詳細な話を聞き、華琳は

「そう。春蘭はそんな事を……」

華琳は暫く春蘭の事を考えつつ、今、自分がしなければいけない事を思い出し、

「しかし郭？達は動きが良過ぎるわね……張繡も動きが素早かったし……桂花……」

そう呼ぶと、自分の側に控えていた桂花が「はっ」と言う声と共に一歩前が出る。

「貴女は如何思う？今回の張繡達の動きを」

「私は張繡・郭？達のどちらかに、今回の戦いを導いた者が居ると考えます。」

現在確認中ですので、今しばらくお待ち下さい。必ず奴等の尻尾を捕まえて御覧に入れます」

桂花がそう言うと華琳は話を変え

「今回敗れたとはいえ、張繡・郭？達にも打撃を与えた。ただ、こちらにも被害が大きかったけど……」

そこで桂花、貴女の策を採用するわ。私達が傷を癒している間、敵に攻め込まれないようにしなさい」

「はっ、お任せ下さい。もう手筈は整っております。今回我が軍に勝って息巻いている奴等を

奈落の底に叩き落としてやります」

そう言つて桂花は一礼すると、足早にその場を後にした。

「秋蘭も休みなさい。貴女も私の物なのよ。そんなに疲れた顔をしては折角の綺麗な顔が台無しよ」

華琳の言葉に、秋蘭は一礼しその場を後にした。

その場に一人になった華琳は、拳を握りしめ

「私とした事が……だが、犠牲は大きかったが、御蔭で私も兵達もこれで更に強くなれる。

私を試した天よ、見ているがいい。私は何が有つても戦い抜く。そしてこの大陸を我が物に……」

例え天が私を嫌い、本物の天をこの世に遣わせたとしても……」

その言葉を最後に華琳も玉座を後にした。

華琳は今回の戦いで総兵の三割を失い（行方不明・脱走者を含む）、更に多くの軍需物資も失う。

だが、張繡や郭？達も少なくない被害を被っており、両者共に戦闘を継続できない状態に陥る。

その為、戦闘を再開するまでの間、華琳は色々な施策や桂花が提案した策を基本に、

亀の様に領土に閉じこもり勢力を回復する事に専念するのだった。

#### 荊州、夏口城

劉表は孫堅（紅蓮）に対し襄陽・江陵・夏口・江夏の4城で防衛戦を行いつつ、

孫堅軍の糧食が尽きるのを待つ作戦であった。紅蓮はそれを見越し

て先に江夏・夏口の両城を

策を持って攻めて、瞬く間にこの両城を占領する事に成功していた。

この両城を任されていた黄祖は、江夏城にて指揮をしていたが、  
穩（陸遜）が仕込んだ密偵達により

城内の至る所に火を付けられ、それと同時に攻めて来た孫堅軍に対  
応出来ず、

黄祖は側近と共に城を捨てて、襄陽に逃げ戻る。

また、夏口城も同じ様な状態が起こり、あっと言う間に占拠され  
てしまう。

江夏城の玉座にて紅蓮達は次の行動を決めるべく、主要な人物が  
集まっていた。

主である紅蓮は玉座に一番近い席に座り、会議を眺めている。

先の両城の戦いで抜群の功を上げた穩は、紅蓮に褒美として書を  
送られ、それを一晩中読み更けて

現在、その反動で使い物に成らないほど憔悴していた。（理由は推  
して知るべし）

なので、この会議を牽引しているのは正軍師の冥琳である。

「……と云う訳で、江夏、夏口の両城は我等の物になった。江夏に  
居た黄祖は襄陽に逃げ

敗戦の報を聞いた劉表は、襄陽城に籠城する事になった。せめて黄  
祖は討ち取りたかったがな……」

現在の自分達と劉表の状況を説明すると、他の状況を始めた。

「北方では曹操が張繡に敗北し、郭？達を攻めた夏侯惇達も敗れた。  
被害は両方とも甚大で、

勢力を回復させるには暫く掛かりそうで、亀が甲羅に籠る様に領地

に閉じこもり、  
軍の編成や失った兵糧を始め、軍需物資の備蓄をしていると云う」  
曹操が敗れたと聞き、幾人かの将は喜び、また幾人かの者は何かを  
考えていた。

「しかし曹操を破った張繡や郭？達の被害も大きかったらしく、こ  
ちらも編成やらをしているらしい。  
また曹操を破った張繡に、何やら見慣れぬ者が居たと云う情報があ  
るが、詳しい事は解って無い」

その情報に対しても、皆の反応は様々であった。  
皆の反応を確認しつつ、冥琳は他の情報を話し始める。

「袁紹は易京にて大敗し、戦力の再編成をする暇も無く公孫贇と睨  
みあっているし、

袁術も下丕にて紀靈が関羽に討たれ、兵も大幅に失い、命辛々寿春  
に逃げ込み守りを固めて居る」

紅蓮の横で聞いていた雪蓮が、

「では劉備は下丕を制圧した後、寿春に攻め込まなかったのね、冥  
琳？」

「ああ、恐らく劉備の性格もあるだろうが、孔明達も新たに加わる  
下丕の戦力の再編成を  
しなければならぬ為と彭城を長い事、空けておくには行かないと  
判断したのだろう」

そう言うと雪蓮も納得し、冥琳は話を先に進める。

「最後に、我等の隣の北郷の事だが……我等にとつても、劉表にとつても不可解な事が起つた」

そう言つと紅蓮を始め、雪蓮、穩や他の者も冥琳の話を聴き逃すまいと耳を傾ける。

「北郷は劉焉・劉表に対し宣戦布告をし夷陵に砦を築きつつ、降つた剣閣に兵を送り張魯を牽制し

綿竹関に向けて約7万の兵力を出兵させた。

主な将は大将に趙雲、副將に黄忠・嚴顔・魏延、軍師には郭嘉、程立だそうだ。

その宣戦布告後、北郷の出兵が明らかになつた後、劉焉が亡くなり息子の劉璋が後を継いだとの事」

紅蓮が冥琳の話を聞き、疑問に思つた事を尋ねた。

「冥琳。一刀は留守番か？それと、こつちにも一刀は兵を出して来ているのか？

俺はそんな話、聞いて無いぞ？」

冥琳は呆れながら、ずれた眼鏡を直しつつ

「それはそうでしょう。私が報告書を持って行つても、何時も居ない紅蓮様にお教え出来る筈も

ありませんからね。先程も会議の前に訪ねましたが、居ませんでしたからね。

後で何処に行つていたのか、詳しくお聞かせ願いますよ。雪蓮共々ね」

いきなり話を振られた雪蓮も、ビックリし冥琳の顔を見るが、冥琳は顔を合わせると

良い笑顔で「ニコツ」と笑い、話を続ける。

紅蓮と雪蓮はお互いを見て、「ハア」とため息をつき、この会議の後に訪れる説教の時間を思い、憂鬱になるのだった。

「先程の紅蓮様の質問の答えと、話の続きが同時になってしまっが、北郷は夷陵に向けて約3万の軍勢を派遣したとの事。

その旗には「十」の牙門旗を始め「深紅の呂旗」「漆黒の華旗」「紺碧の張旗」があつたとの報告だ」

冥琳は紅蓮に視線を向けて

「この報告から、北郷殿は董卓軍の掌握が兵士達も含めて終わったと言つ事が解ります。

また、軍師には法正・黄権の二人を連れてきているとの事。

更に明命からの報告によると、夷陵に建てられている砦の建設速度が木材で作られているにしても異様に早いとあります」

その場がザワザワと慌しくなっているのを手で制し、紅蓮は

「そうか。お前は一刀が此処に来た理由が何処にあると思つ？冥琳」

紅蓮の質問に少し考えながら

「此処に来た理由は幾つか考えられます。

1．我等を支援しに来ると同時に、劉表の先の侵攻に対し報復しに来た。



2・編成を終えた董卓軍の実戦と夷陵に荊州からの侵攻に対し防衛出来る砦を作る事。

3・荊州に居る勢力の偵察及び調査。

と言いましたが、これらは私が予測する我等にとって都合の良い予測です」

冥琳は紅蓮と視線を合わせたまま、

「最悪なのが、劉表と手を組まれる事ですが、北郷殿なので、それはないと確信いたします。

なので考えられるのは……私達や劉表の隙を突き、江陵辺りを奪取し自領に加える事が目的かと」

この時点の冥琳の予測は、稟が想定した物と寸分変わらず同じで、流石は周公瑾であると言える。

しかし、彼女は北郷一刀と云う人物を知らなかった。一刀の本当の目的が違う所に有り

稟が言った「江陵を奪取する」は一刀にとって「出来れば良いな」位にしか思っておらず、

今回の作戦を想定した稟達も一刀の本音を聞いた時、一時呆然としていたのである。

紅蓮は何か釈然としない気持ちを抱くが、それが何なのかが解らず、冥琳に説明を続ける様子を振って合図した。

冥琳は話を続け、後の方針を再確認し、その会議はお開きになった。

会議が行われていた場に紅蓮は一人残り、何やら考えながら手酌酒で飲んでいた。

「何をお考えで？紅蓮様」

声と共に冥琳が現れ、紅蓮は

「いやな、劉表を如何してくれようと思っただけ。そんな事を考えながら酒を」

「嘘ですね」

紅蓮の言葉を冥琳は遮る様に喋り続ける。

「北郷が荊州に来たのが理解できませんか？それに、それ以外の事も……」

紅蓮は冥琳を暫くの間見ていたが、

「お前だけは誤魔化せねえか。ああ、一刀が此処に来た理由に引っ掛ってな……」

何か、嫌な予感がしやがる。それも飛びつきり嫌な奴がな……」

紅蓮はそう言うと、冥琳に向かって

「最近、荊州の俺達に味方した兵が怪しい動きをしていると、さっきの会議に有ったけど、

そっちの方の内部に人は入れてるんだろ、お前の事だから」

「ええ、何人が明命の手の者を」

「良く見張ってな。あいつ等は俺の利に付いて来てんだ。俺に何かあつたら直ぐに掌を返すよ。」

それと、一刀の動きも気になる。そつちの方にも探りを入れときな」

「ええ、そこら辺に抜かりはありませんが、一つだけ。紅蓮様に何かある事は即ち、

この国が大変な事になる事を意味します。その様な言葉は自重して頂きたい」

冥琳の目が本気である事を悟り、

「ああ、何か弱気になっていたみたいだね。お前と話していたら忘れちまった。

済まないね、もう迂闊な事は言わないよ。また、お前に説教喰らうのは御免だからね。」

とりあえず、さっきの件は頼んだよ。恐らく一刀が何かを企んでいる事は、間違い無いからね」

「その根拠は何処から出てくるのか、教えて頂きたい物ですな」

冥琳がそう問うと紅蓮は、

「勘だよ。孫家の者が有する最高の武器さ」

と良い笑顔で答えられた冥琳は、頭を抱えながら頷くしかなかった。

外は今にも降りそうな位、どんよりとした雲が城を覆う様に広が

り  
始  
め  
て  
い  
た  
。

## 華琳の再出発、紅蓮の憂鬱（後書き）

前書きにも書きましたが、仕事が凄い事になってます。

今週なんか、昼に出て行つて夜中に帰つて来ると云う生活です。

家族とロクに話もしてません。（特に父と）

何か、上司の話によると来月より、更にパワーアップし

完全二交代制になるらしく、転職も考えようかと悩むこの頃……

今回は紅蓮の事を書きます。また話の中に一刀の話も入って来るかもしれません。

今回も、此処まで御読み頂きありがとうございます。

## 紅蓮の深悩、桂花の深謀（前書き）

久しぶり投稿します。本当はこの回で紅蓮の話を終えたかったのですが、

作者が迷ってしまい……次回に持ち越す事になってしまいました。

今回も何度か読み返しましたが、誤字脱字、文章不備などございましたら

感想などでお知らせ下さい。

## 紅蓮の深悩、桂花の深謀

孫堅軍は行われた会議にて、江陵を今まで通り牽制しつつ、襄陽を攻める事を決める。

江夏・夏口の両城にはそれぞれ3千ずつ残り、主な将と残りの兵を率い襄陽に向かって進軍した。

3日程の進軍の後、目の前に城壁が見えて来た。荊州で最強の堅城と知られる襄陽城である。

城壁は高く、堀には川の水を引き込み容易に攻め込まれない様にしてあった。

紅蓮は着いたその日に冥琳や穩を伴い、城の周囲を見て弱点が無いかを探した。

また、城内には明命の手の者が何名か忍び込んでおり、色々と暗躍している。

報告では城内には約3万5千程があり、江夏・夏口落城の報を聞いても士気は依然として高く、

例え倍の戦力を持つ紅蓮達でも苦戦は免れないと書かれていた。

「劉表を何とか外に誘き出せねえか、冥琳？そうすりゃあ一気に片付けられるんだが」

「そんなに簡単に出てくると思いますか、紅蓮様？」

「いいや。俺が劉表だったら、何が有っても城に閉じこもっているな」

紅蓮と冥琳が話すのを聞き、穩も何か無いかと考えていたが、結局思いつかず陣に戻る事にした。

翌日から3日続けて波状攻撃を繰り返したが、流石に荊州一の堅

城の名は伊達では無く、  
こちらの被害が増すだけであり、そのまま持久戦を覚悟するしか方  
法は考えられなかった。

その日、陣に戻って夕食の時間が過ぎた時、冥琳の天幕には、穩  
と明命の手の者が集まり

周辺の情報や、襄陽の内部の情報、夷陵に駐留し砦を作つて居る北  
郷の事、

江陵に配置した、最近不穩な動きをしている荊州の軍の事で報告を  
受けていた。

「そうか、周辺諸侯に何かしらの動きは無いか……嵐の前の静けさ  
と云う奴かもしれんな」

周辺諸侯の様子を探っている諜報部隊の報告を聞き、冥琳はそう言  
つて報告した者を下がらせた。

次に襄陽の城の内部の話になり、また渋い顔になって、

「……流石に本拠地なだけあつて守りは堅いか……。それで調略の方  
は如何だ、穩？」

冥琳は穩に任せてある、劉表軍の何名かの者をこちら側に引き込む  
為の調略や、

城の内部を混乱させる為の準備の進行具合を聞いた。

「あまり芳しく無いですね。流石に本拠地なだけあつて江夏や夏  
口の様にはいきませんね」

何時もの様に間延びした声ではあるが、穩は少し声を下げて言う。

冥琳は「仕方あるまい」とだけ言って、次の報告をさせる事にした。

次に立ち上がり報告したのは、夷陵の砦の状況と北郷軍の現状を



調査中の部隊であった。

「そうか、前以て切り込み等の準備をしていたのか。種が解れば何と云う事は無いが、それでもこの様な考えを思いつくとは、流石は北郷殿と云うしかないな。」

これなら、建設期間を大幅に短縮出来るからな」

冥琳は感心しつつも、更に軍の陣容についての報告を受ける。

「大盾、騎馬、歩兵に長柄か。大盾と長柄は以前、黄巾の時に見た奴だな。」

騎馬は連合の時に見た張遼の騎馬軍か。それにあの呂布の武が加わるのか。如何思う、穩？」

「そうですね、遠距離・近距離のどちらも戦え、個人の武を取つても、飛將軍・驍將・猛將と大陸中を探しても、対抗できるのが限られるほどの人材が勢揃いでですね。」

そう言った穩は、

「もし北郷さんと事を構える御積りなら、時期尚早と言っしかないですね。」

私達にも劉表さんにも北郷さんと戦う余裕は無いですからね。北郷さんにどんな目的があるのかは解りませんが、此処に来た以上、何らかの目的を達成する為と考えた方が宜しいかと」

そう言った穩は、最後にこう締めくくった。

「ですから、北郷さんに使者を送り、何の目的で此処に来たのかを直接聞いてみては如何ですか？」

穩の言葉を聞いても冥琳は迷っていた。一刀が夷陵に砦を建てる事は理解出来ても、砦を建てる事だけが目的でないのは明らかで、その理由が思いつかないのである。

穩の言う通り、一刀に直接聞いてみるのが一番だが、簡単に本当の事を話してくれるとは思えない。

冥琳が考えあぐねている時だった。天幕の外より自分の警備兵がやって来て

「周瑜様に申し上げます。北郷殿より使者が参り、孫堅様、孫策様、黄蓋様、そして周瑜様にお話が有ると申し、謁見を求めているとの事です」

冥琳は立ち上がり、穩を連れて紅蓮の居る天幕に向かった。

紅蓮の天幕に行くと既に呼ばれたのか黄蓋（祭）、雪蓮、紅蓮が待つており冥琳が最後であった。

冥琳が来た所で紅蓮が、使者に向かって

「お前さんが言った、皆はこれで揃ったぞ。これで話して貰えるんだろうな？」

紅蓮は少し睨みながら、使者に問いかけると、使者は皆を見回してから紅蓮の方を姿勢を正して向き

「そうですね。御一人多い気がします、まあ良いでしょう。」

孫堅様、本日はお忙しい中、お邪魔致しまして申し訳ありません。  
私は我が主、

北郷一刀に使者を任せました、費緯と申します。以後お見知りお  
きを……」

「これが我が主、北郷一刀からの書簡でございます。どうぞご確認  
を……」

そう頭を下げながら言うと費緯（彩加）は、一刀直筆の書簡を紅  
蓮付きの侍女に渡す。

その侍女から受け取った書簡を読み始める。

紅蓮が書簡を読んでいる間、彩加を除く、その場に居た者は紅蓮か  
ら目を離さず見守っていた。

暫くしてから紅蓮は、読み終えた書簡を丸め、使者である彩加に唐  
突に聞く。

「費緯と言ったな。お前さんはこの書簡の内容を知っているのか？」

彩加は紅蓮の質問の内容を吟味し、正直に答える。

「私は使者です。しかも我が主より全権を預けられています。

その内容を知らずして、如何して使者が務まりましたよう？」

それに、我が主君が何も使者に教えずに、送り出すなんて考えられ  
ませんよ」

紅蓮は堂々と自分に渡りあう彩加を見て、

「一刀の所には、どれだけ人材が居るんだ？稟や風、呂布に華雄、  
そしてお前さん。」

本当に嫌になつて来るよ。おつといけない、話を戻そうか。

お前さんがこの書簡の内容を知っているなら話は早い。早速、書簡の返答をするよ。

一刀には「断る」と伝えてくれ」

彩加は紅蓮の目を見ながら、臆せずに関問い掛けた。

「そうですか……そうすると、もう手を打たれているのでしょうか？」

紅蓮は迷わず言い放つ。

「ああ、奴等が俺達に隠れて、劉表と手を組もうとしているのなら、何の遠慮があるものか！！

即刻行つて成敗してやりたい位だよ。でも、それが出来ないから、根回しをしている最中さ」

彩加は紅蓮の言葉を聞き終えてから、一緒に呼んだ冥琳にも聞く。

「周瑜殿にもお聞きします。周瑜殿なら先程までの私と孫堅様の会話で、お解り頂けたと思いますが、  
どのような、彼等を扱うおつもりで？」

冥琳は少し考えながら、彩加を見ながら

「私も紅蓮様と同じだ。その件に関しては、こちらも同じ情報を持っているし、

既に手は打つてある。

只、盟約を結んだとはいえ、そちらが首を突っ込んでくる事自体、お門違いと言わせて貰おう」

冥琳がそう言うので、これ以上の話は望めないと感じ、彩加はその話を止めて別の話に移る。

「そうですか……。では、最後になりますが……。我が主、北郷一刀からの伝言を申し上げます。

その書簡にも、関連した内容が書かれてあったと思いますが」

彩加は咳払いして、一刀から頼まれた言葉を話し始めた。

「『襄陽城は無理に攻めるより、搦め手の方が効果が大きいと思うよ。時間は掛かるかも知れないけど。

そして、時には退く事も大事だよ。退けば機会は生まれる』との事です。確かにお伝えしました」

彩加は、一刀からの伝言を伝えると一礼し、その場を後に、一刀の居る所に戻っていった。

彩加が退出した後に、その場に居た雪蓮と祭が紅蓮の側に行き、先程の会話の意味を尋ねていた。

「と云う事は、江陵に置いて来た奴等は、劉表と手を結ぼうとしているのか、堅殿？」

「ああ、奴らにしたら、どっちが勝っても良い様にしときたいのだろっ」

祭の問いに、紅蓮は苦々しく答え、次に雪蓮が

「先程の話からすれば、もう何かしら手は打ってあるのよね、母様、冥琳？」

雪蓮の問いには冥琳が

「ああ、お前と祭殿には話しておこう。忍び込ませている者の話によれば、

奴等の中でも、積極的に劉表に近寄っているのは、桂陽太守、趙範が寄越した鮑隆と陳応。

零陵太守、劉度の息子劉賢だと云う事が解っている。また、武陵太守、金旋が寄越した鞏志は

沈黙を貫いている。しかしな、二人共。確たる証拠が見つからないのだ。奴等のな」

「それなら、その三人を暗殺なり、更迭するなりして、排除してしまえば良いのじゃない？」

「そうじゃ、そうじゃ。そっちの方が手っ取り早いではないか」

雪蓮の問いに祭は賛成する。しかし、冥琳は首を横に振って、

「事はそう簡単にはいかんのだよ、雪蓮も祭殿も。南荊州三郡の兵は紅蓮様直属の兵では無く、

三郡の太守の兵だ、それを率いる將軍もな。なので、我等に任命権は無い。

此処は解るな？祭殿も良いですか？」

雪蓮と祭に冥琳は尋ねた。

二人は黙ったまま、首を振って肯定した。

それを見て冥琳は続ける。

「その三郡とは同盟と云う形を取っており、その同盟に基づいて、

太守達は兵を出している。

その状態で、もしだ、我等と解らぬように暗殺したとしても、必ず我等を疑う者が出てくるし、

更に、決定的な証拠が無い状態で、強制的に更迭とかしてみろ。三郡は我等から離れるだけでなく、

下手をすれば、三郡の太守達が劉表と手を結び、長沙を襲われ兼ねん」

祭と雪蓮は「ふうむ、（ふーん）そう云う事が（ね）……」

と二人して納得し、そのまま黙ってしまふ。

三人のやり取りを見ていた紅蓮も、その事は解っているので、雪蓮達に敢えて話さず

冥琳に説明を任せ、自身は違う事を考えていた。

一刀の事である。

何を目的に荊州に来たのか、その目的が全く以って不明なのである。

しかし、自分達に対し敵対する様な感じではなく、どちらかと言えば見守っている感じに近く、

先程、彩加が持ってきた書簡も、最後の伝言も、一刀が自分に対し注意を促していた。

自身の勅も『一刀の忠告に従え』そう告げている。

だが、その勅に従い此処を退くと、江夏・夏口の両城にも兵を置かねばならず、

戦略上重要な地であり、豊かな地ではあるが、現在抱えている兵の全てを養えるとは云えず、

駐屯させ兵の給金、糧食の量も馬鹿にならない。

更に、現在支援してくれている富豪や協力者が、そのまま支援してくれるとは限らない。

もし支援者らに援助を打ち切られると、養える兵は現在の半分以下まで減り、

再度、侵攻するにしても援助者を探し、更に練兵を行わねばならず、大幅に時を消費する。

その間に劉表は襄陽、江陵の守備固めをし、江夏、夏口で失った兵力の再編を行い、  
落とすのが難しくなる。

そんな事を考えていると話が終わったのか、雪蓮が祭、冥琳と共に振り向き、

「で、母様は如何するつもり？それに一刀の書簡の内容も気になるわ、私。何て書いてあったの？」

雪蓮の質問に紅蓮は、一刀からの書簡を投げて渡し、

「一刀からはそこに書いてある通りだよ。どうやら一刀は、かなり優秀な密偵なり情報網を

持つてるみたいだね。俺達や劉表の内情が丸裸にされちゃってるよ」

雪蓮は一刀の書簡を読み始める。するとそこには……

「紅蓮へ、三太守達の部隊に関して、俺が引き受けようか？」

で始まり、その後の文には



「江陵に関しては自分が引き受ける。これは江陵に居る王威と王粲への報復だから  
勝手にやらせて貰うよ。君は襄陽に集中し、注意しながら攻めると  
良いよ。」

但し、油断と深追いは絶対に禁物だよ、紅蓮」

とだけ書かれてあつて、他には特に書かれてはいなかった。

雪蓮は書簡を祭に渡し、自分の母親を見て、

「母様これ……一刀は何かを知っているかのような書き方ね。母様は如何するの?」

「それを今、考えてるんだよ、雪蓮。進むか退くかをさ……」

そう言うと紅蓮は黙ってしまふ。その場に居る雪蓮達も、紅蓮が如何するかを静かに見守っていた。

暫くして、紅蓮は思い立った様に目の前に居る者達に向かって、

「暫くの間、此処で様子を見よう。何度か攻めてみるのも良いかもしれないし、

城に潜らせて或る、明命の配下から何か良い情報が来るかもしれないからな」

そう言った後、その場に居る四人に向けて、

「と言う事でいくよ、四人とも。冥琳と穩は後で良いから、兵糧と物資がどれだけ持つかを

計算して、その計画書を持ってきてくれるかい?」

冥琳と穩にそう指示を出すと、その横に居る雪蓮と祭に、

「雪蓮と祭には城に攻撃する為の兵力の再編を任せる。門を絞って攻撃するのも面白いかもな。そこら辺を踏まえた編成を頼むよ」

雪蓮は頷くと祭を連れて天幕を出て行く。それと同時に冥琳も穩を連れ、与えられた仕事を  
する為に出て行った。

残された紅蓮は、その場で空を仰ぎ見て、

「これが凶と出るか、吉と出るかは軍神に委ねよう。出来ればもう少しこの乱世とやらを、  
この身で堪能していたいかな……」

そう云うと彼女も天幕を後にした。

### 華琳の居城

華琳は桂花からの報告書を読みつつ、目の前で行われている者達の議論に耳を傾ける。が……

「だから、言ったじゃないの！！何を聞いてんの、この脳筋！！」  
「誰が、肉味噌脳筋だ！！」  
「誰も、そこまで言っていないわよ！！この、猪突しか能が無い猪筋」

と、議論にもなって無いので、秋蘭が止める。

「姉者も、桂花もいい加減にしないか。華琳様の御前だぞ」

秋蘭に言われ、春蘭も桂花も華琳の方を見て言い争いを止めて、桂花は話を元に戻す。

「それで、私達の状況だけど、あんまり良く無いわ。私達が張繡・郭?・李確に敗れた事を知り、おかしな動きをする者が増えている。何度かは未然に防ぎ、首謀者は討ち取ったけど、それでも、減る気配は見えない」

桂花は少し苛々しながら、

「それに、袁術がこちらに動こうとしているわ。何故、今なのか理解は出来ないけど、

袁術が結構な兵力を用意して、こちらを覗っている。

こっちは、兵力の建直し、軍需物資の備蓄でそれ所じゃないのに……」

桂花はそう言うと華琳に向かって

「また、その報告書にも書いてある通り、北方では袁紹が張燕を降し晋陽に撤退させた様です。

それにより、青州を半分、并州も同じく半分、手に入れ、これに自領、冀州を加えますとかなりの兵力になります」

桂花はそこで区切って、

「しかし、幽州の公孫贄、青州の半分を有する孔融を攻めきれず、張燕は敗れたとは言え意気盛ん。それに孔融や公孫贄は劉備から援助を受けているらしく、おいそれと倒せないと思います」

華琳は桂花の報告を聞き、

「それにしても、劉備よね。公孫贄は仕方ないとは言え、孔融にまで麗羽を梃子摺らせるなんて。

その間に自分は悠々と徐州での足固めをしているわ。今の劉備の兵力は厄介な物ね。

それにしても、劉備は何処からそんな資金を用意できたのかしら？」

桂花はその後を継ぎ、

「はい。それに関して、おかしな点が幾つもございます。反董卓連合の時、孫堅、劉備、馬超の

三勢力が洛陽で復興作業をした時を思い出して下さい。あの時、三勢力ともそれ程の物資を

持っていなかった筈です。しかし彼女等は何処からか調達し、それを復興に充てました。

その資金や物資は何処から出て来たのでしょうか？」

それを聞いていた秋蘭が

「それは寄付とかは考えられぬか？あの時の孫堅は噂の人物であり、物資が唸る様に

あったと聞くぞ。それを同じく復興させている劉備や馬超に配ったとは考えられないか？」

桂花は秋蘭の問いに対し、冷静に尋ね返す。

「それじゃあ、秋蘭に聞くけど。それだけで足りると思う？劉備や馬超は自身の兵にも物資を  
与えなければいけないし、孫堅自身も兵が増え、かなりの勢力にな  
っていたのよ。」

幾ら、寄付が多かったとはいえ、劉備達に回す余裕は無い筈よ」

そのやりとりを聞いていた華琳が、

「そうね。それじゃあ、貴女はその三人に援助した黒幕は、誰だと  
睨んでいるのかしら、桂花？」

確信を持って桂花は言う。

「北郷一刀。あの者しか考えられません。あの連合の時、恐らく北  
郷と繋がっていたのは

孫堅、劉備、馬超の三人と思われ、その証拠に彼女等だけ被害を避  
け手柄を上げております。」

また、北郷が通常の荷駄隊の倍近い数を率いていたのを確認してお  
ります」

桂花は更に続ける。

「孫堅は？水関、劉備と馬超は虎牢関をそれぞれ一番乗りを果たし、  
関を落しております。」

その後、彼女等は長安への追撃に参加せず、洛陽を復興させており  
ました。

また、その前に北郷自身は何名かの諸侯と共に連合を撤退しており  
ます。

これらから解る様に、北郷と孫堅、劉備、馬超らは連合内で絶えず連携を取りながら、動いていたものと想定されます。その際に北郷が何処かで調達した物資や資金を、孫堅らに渡すか、隠し場所を教えていたと考えます。こう考えると全て辻褄が合うのです」

桂花の話聞き、華琳は

「そう、全ては一刀なのね。私も予想はしていたのよ。何かしらの予感が働いてね。」

それでは桂花。劉備は復興時に余った資金なり、物資を使っていると考えていいのね？」

「はい。そうとしか考えられません。平原ではそれ程の資金は作れなかったでしょうし、

徐州に、それだけの蓄えが有ったとも思えません」

「それだけ分かれば良いわ。それにしても一刀は、それだけの資金を何処から用意したのかしら？」

諷陵に入ったのは、連合が起きる数ヶ月前。それから領地整備や匪賊討伐など行っていた筈。

幾ら官吏達が溜めこんでいたとしても、それ程にある物かしら？」

華琳は呟きながら、桂花に問う。

それに対し桂花は、申し訳なさそうに、

「申し訳ありません。その辺りの確証は、まだ掴めて居りません。しかし、必ずや尻尾を

掴んで見せますので、暫くの御猶予を頂けますか？」

華琳は桂花に向かつて「いいわ。ゆっくりやりなさい」とだけ言って話を変えた。

そして報告書を読みながら、

「それにしても一刀が兵を分けたのね……私は荊州に行くとは予想もしていなかったわ。

益州を統べてからか、漢中を統べてからかと思っていたのよ。それを二正面作戦とは……」

華琳が、報告書を読みながら言った事の続きを桂花は話す。

「しかもです、連れて行ったのが古参の趙雲や郭嘉では無く、元董卓軍の者と法正、黄権と云った

新規に登用した者ばかりと言う所や、連れて行った兵力が3万と云う所も引つ掛かります」

「それに関しては、私は自信を持って言えるわ」

華琳は桂花の質問に自信を持って答える。

「呂布に張遼、華雄に陳宮。彼女等を使いこなせる、否、信頼出来るからこそ連れて行ったのよ。

軍師にしても黄権、法正が他所の軍師に負けないとの自信が有るのから、

郭嘉や程立を連れてこなかったのでしょうか」

華琳の話聞き、秋蘭が、

「本当にそうでしょうか？」

「どういふこと、秋蘭？」

「良くお考えください。虎牢関や長安追撃戦で、我等をあれだけ苦しめた者達なのですよ？」

如何に北郷が「天の御遣い」とは言え、そう簡単に使いこなせる者達でしょうか？

何かしらの弱みを掴まれているとかなら解りますが、そうでなくては納得いきません」

華琳はその問いを聞き終えると、少し笑いながら、その様子は嬉しそうに

「秋蘭程の者でも解らない…か。そうね、これは霸王、曹孟徳としての答えだけど……。」

一刀は霸王項羽の素質を持ちながら、霸王の性質（残虐性・暴虐性等）を抑える事が出来、

それだけでなく、漢の太祖劉邦の様に全てを包む徳を併せ持つ者。言うなれば、

古の三皇五帝いにしへの者達の器を持つ、皇帝の性質を持つ者よ。私はそう考えているわ」

華琳はそう答えると最後に、

「その一刀からしたら、人心を掌握するのなんて容易い事よ。例えそれが、飛將軍と恐れられる

呂布であろうとね。ましてや、一刀には劉邦に匹敵する程の器の大きさと、徳がある。

しかも一刀は、それを自覚せずに引き出している様に見えたわ。元々、備わった物なのでしょうね」



秋蘭は華琳の答えを聞くが納得できずにいた。

しかし、華琳が滅多に見せない、嬉し笑いを見せている事に気づき、「華琳様がそう仰るのなら、私としては何もございません。私程度では、及びもつかない世界と言う事でしょうから……」

そして、その後は滞りなく会議は終了し、残ったのは華琳と秋蘭だけになっていた。

秋蘭は先程の会議で引っ掛かっていた事を華琳に訪ねる。

「華琳様、先程の会議の時、仰られた事で気になる事が有るのですが……」

「何かしら、秋蘭？」

姿勢を正し、秋蘭は訪ねた。

「霸王の性質の事です。華琳様が霸王を目指しておられるのは、重々承知しておりますが、霸王は狂王、暴君と紙一重と申します。あれほど権勢を誇った頂羽も、最後は霸王の性質の為に身を滅ぼしました。私は」

華琳は秋蘭の言葉を遮り、

「秋蘭の言いたい事は解った。でも心配いらないわ。私は必ずこの霸王を御してこの乱世を終わらせてみせる。」

乱世を終わらせる為には、霸王しか駄目なのよ。力にて屈服させる、この霸王しかね」

そう言う華琳の横顔を見ながら、頼もしくも、心配な秋蘭であったが

「華琳様がそう仰るなら何も言いません。私は華琳様の覇業の為、敵を葬るだけです」

そう言った秋蘭の顔は、何が有っても華琳に付き添おうとする覚悟が現れていた。

## 紅蓮の深悩、桂花の深謀（後書き）

やってしまった……前書きにも書いたとおり、今回で紅蓮の話は終わる予定だったのに……作者の優柔不断さが、こんな所にも現れました。

今回の「項羽と劉邦」の話と三皇五帝の話もWIKIに詳しく載っています。

興味が有れば調べてみて下さい。

また、霸王を性質と表したのは、生まれ持った物や成長過程で形成される

資質を表したかった為です。

華琳が初めから霸王を目指していたとは思えず、それを表現したいと思

このような形にしました。

話はさて置き、先程も書いた通り、本当に迷ってしまいました。もう暫く考えてから結論を出したいと思います。

なので、今しばらく猶予を下さい。申し訳ありません。

今回も此処まで御読み頂きありがとうございます。

感想、指摘などお待ちしています。

孫堅軍の落日

前編

(前書き)

真恋姫無双〜新〜第32話を投稿します。

今話は本当に悩みました。消して、書いてをくりかえしました。

本当は一話に纏めようと思いましたが、この後の話も迷ってますので分けて投稿します。

何か有れば、感想にてお願いします。

紅蓮（孫堅）の所から戻った彩加（費緯）は一刀に報告していた。また、その場に居る明美（法正）、詠（賈馮）は黙ってその報告を聞いている。

「紅蓮は俺の提案に乗ってこなかったか……」

「自分の力が足らず、申し訳ありません、主人」

「彩加の所為じゃないよ。君に頼んだのは俺なんだし、こうなる事も或る程度予想してたしね……」

一刀の横で聞いていた詠は、

「それでどうすんの？孫堅が断つたとなると、僕達から動くのは得策とは言えないわよ？」

詠の話を否定する様に、詠の対面に居る明実は、

「しかし、俺等が動けば、江陵に居る奴等は動けねえんじゃねえか？それで此処に来た一つの目的は達成出来るぞ？そっからは時間との勝負だけだな」

詠と明実の話を聞きながら一刀は、

「ああ、明実の言う通り、一つ目は達成できるな。でも、詠の言う事も解る。

紅蓮との余計な誤解は避けたいし、江陵に居る軍勢に、俺達だけで戦うのは馬鹿らしいしね」

一刀の言葉に肯定的な返事をしながら明実は、

「そうだよな、ああ、かつたるい。面倒臭い事、此の上ねえな……  
こうなりや、いつその事、江陵の連中を仲間割れさせっか？そうす  
りや、楽で済むぞ？」

明実の言葉に興味を持った一刀は、

「江陵の連中を仲間割れって、如何するんだい？」

と訊ねると、明実は何時も通り気怠そうに、

「ああ？そんなの簡単じゃねえか。俺等に媚びて、孫堅にも、劉表  
にも媚びてる奴等が居るだろう？」

そいつらを混乱させながら導いてやるのさ。お互いを信頼出来ない  
ようにさ」

明実の策の内容を理解した詠は、

「ふーん、そう言う事ね……それなら、その策に少し手を加えて良  
いかしら？」

詠は良い笑顔でそう言うと、その場に居る俺と明実に話し始めた。

「彼等の思惑を逆手に取るのか……。うん、面白いね……！！詠、明  
実その案で行こう。」

詠と明実は分担して、実行に移してくれ。その準備の書簡は書いと  
くからさ。

彩加、君も二人を手伝ってくれ」

「了解したわ」

「へいへい」

「ああ、解った」

各々なりの返事で一刀の元を後にした。

残った一刀は、彼女等に全てを任せる事にし、自分も準備に取り掛かるのだった。

### 紅蓮

襄陽城を攻めると決めて、準備に2日程経っていた。冥琳、穩が出した最大滞在期限は

「3週間」であり、それを過ぎれば長沙に戻る途中で兵糧が尽きると云う。

紅蓮が報告を受け、冥琳と考え、雪蓮と祭、他の諸將に命じたのは、「正面の門に集中攻撃を加えな。それを何日間か繰り返して、敵兵をそこに集中させる。」

それから機を見て、別働隊にて裏門に攻撃を加え、襄陽を落すよ」であり、それを聞いた雪蓮や祭は、紅蓮の許可を取り、すぐに攻撃を加えた。

何度も城壁に打ち寄せせる孫堅軍の赤い波に恐怖を抱きながらも、その堅城ぶりを誇る襄陽は、何度も敵兵の侵入を許すが、それを全て撃退に成功する。

その日の戦闘は夕暮れと同時に終わり、孫堅側の死傷者はかなりの数に登り、

また劉表側の死傷者も、これまで被った事無い程の数に登り、両者痛み分けに終わる。

そんな攻防が何度か続き、一週間経った日の事、紅蓮に明命の部下がやって来て、

「北郷軍が江陵に向け進軍しました。その数、約二万五千。それに呼応するかの様に、

武陵軍を指揮する鞏志が北郷に接近。何やら会談を行ったとの事」

そこまでを、矢継ぎ早に言った部下は更に続ける。

「また最近、両陣営に噂が流れておりまして、それを聞いた桂陽軍を指揮する鮑隆と陳応、

零陵軍を指揮する劉賢がお互いを信じ切れず、疑心暗鬼に陥っております。

その際、劉賢が江陵の劉表軍に宛てた手紙を入手しました」

紅蓮はようやく証拠を掴んだ事により、暗躍する南部の軍を如何にか出来る事を喜んだが、

武陵の鞏志が前以て、一刀と繋がっている可能性を考え、それを調べる様に命令した。

#### 北郷軍の進軍途中

進軍したのは、一刀と恋、霞、華雄、詠の部隊であり、音々と明美に夷陵を守らせ、

一路、江陵を目指した。

（音々は自分も行くと言っていたが、恋が家族の世話を頼んだ事もあり、渋々ながら残ってくれた）

進軍途中、明美と詠が仕込んだ策が発動しており、江陵の劉表軍、零陵軍、桂陽軍の陣内では



「桂陽軍が北郷軍に味方する」

「零陵軍は撤退を検討している」

「武陵軍は北郷軍に通じている」

「江陵の劉表軍は隙を窺っており、隙有らば桂陽軍や零陵軍を滅ぼそうとしている」

などと噂が日が経つごとに広がっていた。

江陵に居る王威、王粲は自分達が嘗て、夷陵で経験した北郷軍の策だと見抜き、

騙されはしなかったが、兵達にそれを信じる者が現れ、その対処に追われる事になる。

反対に桂陽、零陵の将兵は元々劉表軍を信じておらず、その為、噂は瞬く間に広がっていき、

将である鮑隆と陳応、劉賢はその噂を無視出来ず疑心暗鬼に陥り、互いを信じれずになっていた。

それから暫くして、江陵に現れた北郷軍を迎え撃つのか、それとも孫堅軍や劉表軍にした様に

使者を送り、とりあえずその場では平伏し、戦況が定まってから参戦するのかを話合う為、

鮑隆と陳応、劉賢の三人は鞏志の元を訪れていた。

話し合いは冷静な鞏志を除く三人が噂を信じ、疑心暗鬼に陥っている事で意見は纏らず、

互いを牽制する意味を込めて、このまま此処に滞陣し様子を見る事になる。

話し合いが終わり、劉賢達が帰ると同時に鞏志は側にいた者に、

「おい、北郷殿に伝令を送れ。内容は『貴方の作戦通りに行きまし

た』と伝える」

命令を受けた者はそのまま陣幕を走り去っていった。

### 紅蓮

城を包囲し早一週間が経っていた。その間何度か城を攻めて見た  
が大きな戦果は挙げられず、  
被害ばかりが大きくなって行くのだった。

城に潜入している明命の部下からの報告も芳しく無く、半ば手詰  
まり状態に陥りかけている。  
将はまだ諦めずに頑張っているが、兵の中には一部ではあるが紅蓮  
を非難する者もでていた。

攻めて来る孫堅軍を城壁の上から見ていた、劉表の軍師、？越が  
孫堅軍の異変に気づく。

孫堅軍の勢いが日増しに落ちているのだ。

？越は「周公瑾の罠か」と思い数日の間、様子を見る事にした。

それから数回の戦闘の間見ていたが、孫堅軍の武将らしき者が声  
を荒げ指揮をしていたが

兵達には勢いが無くダラダラと動く者や隣の兵と話す者が見られた。

そこで？越は劉表に進言し、

「景升様（劉表の字）孫堅軍に攻め疲れの兆候が見られます。これ  
を逆手にとり孫堅に策を陥れて

見たく思いますが、宜しいでしょうか？」

？越から報告を受けた劉表は少し迷い、

「……………それが周公瑾の罠と言う事は？」

劉表の問いに？越は

「ええ、私も気になりここ数日の間監視をしていましたが、今の孫堅軍にはその様子もありませんでした。恐らくは兵糧か物資の方が心許なくなつて来たのではと考えます。

孫堅軍は恐らく、正門に攻撃を集中させ裏門の守備を引き付けようとする偽撃転殺の計を仕掛けています。ですから、こちらは虚誘掩殺の計で対抗します」

？越は策の内容を劉表に話し始め、劉表は暫く考えてから許可を出した。

その翌日、孫堅軍の夜警担当の者が怪しい者を見つけ、その者を討ち取り冥琳に報告した。

冥琳が命じ、その者の服装や持ち物を調べさせると襟の中より密書を見つかる。内容は

「3日後に孫堅軍を城に誘い入れ一気に殲滅する。その際に貴殿は孫堅軍の後背を襲つて欲しい」

と江陵の王粲宛てに書かれていた物であった。

冥琳は早速、明命の配下を呼び指示をして、その夜は何事も無く過ぎて朝を迎えた。

翌朝、冥琳が起きると机の上に一通の手紙が置いてあり、

「劉表軍に動きあり。裏門の守備兵が大幅に削られ正門に配置され

た由」

冥琳はそれを読みながら何かを考え、その夜、雪蓮と祭を呼び話をし、二人に何かを託した。

そして、明命の部下にも何かの指示をし、その部下は颯爽と城内に伝令に行くのだった。

そして運命の日を迎える

その日、朝から大きな動きが起こっていた。

孫堅軍が正門を攻めていたが少し時間が経って、少しずつ兵を分けながら裏門に展開していた。

その兵の指揮を取るのは雪蓮と祭であり、昨夜に冥琳から指示を受け準備を完了している。

裏門に近づき敵兵が少ないのを見て、手に持つ、母孫堅より授けられた古錠刀を前方に示し、

「これより我が軍はこの裏門より襄陽城を攻略する。途中、何か有るやもしれぬが

恐れる事は無い。我等が旗を掲げ堂々と進め、突撃せよ!!」

雪蓮の掛け声を合図に裏門に殺到し、梯子を掛け一斉に登っていく兵士達。

劉表軍の兵達も応戦はするが多勢に無勢で、後方援護する祭や祭の部隊の斉射により、

次々と兵の数を減らしていく。

その場を任された部隊長は堪らず撤退の合図を出し、守備兵は徐々に裏門を離れていく。

そして……門が開き裏門を制圧する。

その場で兵士達が歓声を上げ裏門に立ててあった、劉表軍の旗を降ろし孫堅軍の孫旗を立てる。

雪蓮は皆に見える様に城壁に登り、

「これで裏門は制圧した。これより我が隊は裏門を抜け市街地を通り、内城に侵攻する」

雪蓮が再度合図をすると、兵達は徐々侵攻する準備を整えていく。

その様子を少し離れた場所で見ていた？越は、雪蓮達が市街地に入る時を待っていた。

市街地に住む者達は退去させ、その住民の代わりに兵を忍ばせており、

雪蓮達が市街地に足を踏み込み暫くしてから同時に、一斉に弓矢を放ち雪蓮達を討ち取り、

反対に孫堅軍の後背を突き孫堅をも討ち取ろうと云う策である。

暫くの間、雪蓮達が市街地に入って来るのを待っていた？越は、雪蓮達が通り過ぎたのを確認し、手を挙げ、忍ばせている兵に攻撃合図をした時だった。

？越が兵を忍ばせている家や、その周囲の建物から一斉に火の手が上がり、

瞬く間にその火は燃え広がって行き、その燃え上がった家からは焼け出された兵が飛び出て

雪蓮達に討ち取られており、更に雪蓮達はその火力を挙げる為、火を付けて回る。

？越が謀られたと感じた時には既に遅く、雪蓮達は潜んでいた兵の殆どを討ち取っており、  
？越は命辛々に内城に逃げ込み事無きを得たが、兵は殆どが討たれていた。

冥琳はこの虚誘掩殺の計を密書を見た瞬間より疑い、それを明命の部下に確認させ、  
？越が裏門の兵を移動させた事で見破り、それを逆手に取ろうと考えた。

まず、雪蓮、祭を呼び策の内容を伝え、明命の部下には火の準備をさせて、後は？越の策に嵌った様に見せて、？越の策を無効化させ、反対に城内を混乱させる。

また正門からは、いきなり裏門より火の手が上がった事による指揮系統の混乱を狙い、火を大きくする様に命じてもあつた。

その策が功を奏し、正門を守る黄祖の部隊は？越より「火の手が上がる」と聞いてはいたが、その火の手が大きくなり、火災の様に見えるのを不安がる者が続出し、指揮系統が一時混乱する。

その混乱を黙って見逃す紅蓮や冥琳では無く、斉射を敢行し城壁に居る多くの兵を射て、城壁に梯子を掛け登っていく兵達を援護する。瞬く間に城壁の上に居る黄祖の兵を追い散らし、正門が開き紅蓮の兵が雪崩れ込んでいく。それを見て、

「それじゃあ、俺達も行こうじゃないか、冥琳。蓮華は俺達の後を付いておいで」

その掛け声に名を呼ばれた二人は「御意」「解りました、母様」と返事し付いて行く。

その大きな後ろ姿を見ながら冥琳は考える。

あと一息で正門を占拠し、襄陽城を攻略し、産物豊かな荊州を自領とすれば、

この乱世の諸侯の中で優位を得れる。

その優位を活かし楊州に攻め入り袁術を追い出し、江南を占め、兵を休ませつつ

力を蓄えてから江北に攻め上る。

この後の事までが、冥琳が頭の中で思い巡り、前に居た紅蓮の方に振り向いた時

一本の矢が、冥琳の頭の中に有る策の全てを掻き消す……………

「ドスッ」との音と共に、紅蓮の胸に一本の矢が突き刺さり、紅蓮がその場に倒れ込んだ。



前書きでも書きましたが、紅蓮を如何するかを悩んで、久しぶりの連休の半分を使ってしまいました。

皆さんも感想にて「生かした方が良い」と言う意見や

「紅蓮から雪蓮にバトンタッチさせた方が良い」と言う意見まであり、

作者としても迷いました。

この場にて、感想を下さった方々には御礼申し上げます。ありがとうございます。

紅蓮に付きましては、次話にて如何なるかが明らかになります。先程まで書いていたのですが、少し肉付けを迷ってしまいました。少し休んでから、また書こうと思います。

今話の続きは連休中に書きあげたいと思いますので今しばらくお待ち下さい。

何度か読み返しましたが、何かおかしな所などあれば、感想にてお知らせください。

今話も此処まで御読み頂きありがとうございました。

孫堅軍の落日

後編

(前書き)

孫堅軍の落日

後編

をお送りします。

言いたい事はあとがきで言う事にします。

横に居た冥琳は、その光景が信じられず、声を出しているつもりでも声が出ておらず、

その後方にて、母の雄姿を目に焼き付けていた孫権は、慌てて母の下に駆け寄る。

周りに居た諸将達も慌てて駆け寄り、その場は紅蓮を中心に輪が出来ていた。

「何をしている、直ぐに軍医を呼べ！！」

冥琳は何とか声を出し、そう叫ぶと直ぐに紅蓮の側に近寄った。

紅蓮の側では、蓮華（孫権）が叫んでいたが、それを止めさせ、側にいた兵達に直ぐに陣まで

紅蓮を運ぶように指示を出し、また、雪蓮達に直ぐこちらに来る様に伝令を出す様に命じた。

更に側にいた宿将韓当、祖茂に小声で、

「義公殿（韓当の字）、祖茂殿には兵を率いて、黄祖を内城まで追撃して欲しいのですが、宜しいでしょうか？」

祖茂は冥琳に無言で頷き、手勢を率いて黄祖を追撃を開始したが、韓当は紅蓮が心配なのか

暫く考えていたが、祖茂が追撃を開始すると、自分も手勢を集めて祖茂に続いた。

そこまで指示を出すと、周りに居た兵が紅蓮を陣に運び始めたので、紅蓮を程普に任せ、

自身はその場に留まり、兵達の動揺を抑える事に徹した。

暫くの時間を要したが、何とか兵の動揺を抑え、韓当達も黄祖を内城まで追い込む事に成功し、皆が戻ってきた時、雪蓮と祭が陣に戻ってきた。

雪蓮は冥琳に話を聞き、急ぎ紅蓮の天幕に入っていく。それを見て冥琳も続こうとすると、中より現れた軍医に呼び留められる。

軍医は冥琳を呼び、近くに居た祭、程普、韓当、祖茂も呼び、皆が集まった所で話出した。

「誠に言いにくいのですが……」

軍医はそう話を始めると、次の言葉を慎重に選びながら話始めた。

「孫堅様の受けた矢は……急所を撃ちぬいており、手は尽くしましたが……」

我らではこれ以上、如何し様も有りません。後は祈るより他は……」

軍医の話を聞き、その場に居た皆がそれぞれの反応を示していた。冥琳は掌を眼に宛て、何かを耐えている様であったし、祭は、その場で崩れ去り呆然としていた。

程普や韓当、祖茂も皆と逆を向き、その場にて何かを耐えていた。

冥琳達が軍医からの話を聞いて絶望しかけた時、天幕の中より兵がやって来て、

「申し上げます。孫堅様が皆様方をお呼びしております。急ぎ孫堅様の下にお越し下さい」

紅蓮に呼ばれた五人は急ぎ天幕に向かった。

### 内城の劉表軍

襄陽にいた劉表軍は、孫堅軍に追いやられ全軍が内城に撤退していた。

玉座では劉表が？越を激しく叱責しており、その周囲に居る者達は一名を除き、

皆が「触らぬ神に祟りなし」とばかりに、その光景を直視できずにいた。

「だから言ったではないの！！周公瑾の策にまんまと乗せられて！！拳句の果てに外城を奪われ、内城に攻められる始末！！この責はどうやって償う積りかしら？」

劉表の叱責に皆が我関せずと、だんまりを決め込んでいる、その渦中に飛び込んでいく者が居た。

「まあ、お叱りは御尤もですが、それぐらいで宜しいのでは無いでしょうか？」

勝敗は兵家の常と申しますし、今後の事も話さねばならない故に、それぐらいで」

そう話しかけたのは文聘という将で、劉表軍の将の中で1、2を争う武勇の持ち主であり、

劉表もその武勇に目を掛けており、その文聘が言うからと、その場での叱責は止めとなった。

「と、仲業（文聘の字）が言うから此処で止めますけど、この後は

如何するつもりかしら……」

劉表がそう問うと、？良が

「ここは内城に籠るしかありません。孫堅は何故か我等を内城に押し込めた後、

外城まで退きました。これは我等にとって好機です。今の内に守備を固め何とかしませんと……」

劉表は？良の話を聞きながら、？越の方を見て問う。

「子柔（？良の字）はああ言ってるけど、異度（？越の字）、貴方は如何思うの？」

「私も外に放った密偵が帰って来るまでは、大人しく籠城している方が良いかと……」

自分の軍師二人がそう言うので劉表は大人しく従う事にした。

紅蓮の天幕では

天幕に入ると紅蓮の周りで、雪蓮と蓮華が紅蓮の話に耳を傾け話を聞いていた。

寝かされている紅蓮が、入ってきた五人に気づくと重症人とは思えぬ声で、

「やっと来たかい。お前達も俺の話を聞きな。俺とした事が矢に当たるなんてよ……。」

で、俺はあんまり長く無いだろう。そこでお前らに言っておく事が有る。

雪蓮、蓮華。俺を起こしな」

雪蓮と蓮華は「傷に障るから」と言うのだが、紅蓮は「起こせ」と言ってきかない。

結局、自分で起き様とする姿を見て、二人が折れる事となり紅蓮を起さず。

起きた紅蓮は側に置いてあつた、南海霸王を雪蓮に渡し、

「これからはお前が、此処に居る連中を率いて行くんだよ、雪蓮。

蓮華は、この馬鹿が暴走しない様に眼を光らせておくんだよ、小蓮の事も頼むよ。

そして、冥琳と祭は、この馬鹿娘達の事を頼むよ。徳謀、義公、祖茂の三人も良いかい」

そう言いながら、一人ずつを見て行き、最後に雪蓮を見て、頭を撫でながら、

「雪蓮、お前には教える事が沢山有つたのにねえ。けど、それらは此処に居る連中や、

妹達が教えてくれる。だからお前は、お前に付いてくる連中を、どうやったら豊かに、安心させられるかだけを考えな。それがお前を王として導く道となる……」

そう言うと、紅蓮は乱れていた息を整え、

「たったこれだけ喋っただけで、息が切れやがる。だから最後に皆に言っとくよ。

冥琳は解っているだろうが聞いときな……」

紅蓮は息を整えながら、

「俺が倒れた事を知ったら、俺に付いて来た連中は掌を返すだろう。更に今、支援してくれている奴等の殆どが手を引くだろうさ。長沙に帰ったらで、俺が力で抑えつけてた周りの連中が動き出してくるだろう。」

その後の事は皆が考える通り、長沙を中心として争いが起きるだろう……」

そこまで言うと紅蓮は、皆を見回し、

「皆、済まないけどさ、この馬鹿娘と冥琳と三人にしてくれるかい？」

紅蓮の事が心配では有ったが、本人がそう言うので、一人、また一人と天幕から出て行く。

そして最後に蓮華が出て行くと紅蓮は、

「お前は優しい娘だから、これから悩み苦しむだろう。だからと言って逃げてはいけないよ。」

お前が逃げれば、蓮華や小蓮が苦しむと思いな。残酷な言い方だけど、

お前が妹達を守る為に、手を血で汚さないといけない。けど、血に酔ってはいけないよ。」

俺達、孫家の血が一番強く出てるのはお前だからね……」

そう言うと紅蓮は、不安がる雪蓮の頭を撫でながら、

「大丈夫、お前なら出来る。お前は霸王孫文台の娘だぞ。俺に出来て、お前に出来ない訳無い。」

孫家の血を無理に抑え込もうとせずに、解放する時は解放し、抑え



る時は抑える。  
たったそれだけのことさ……」

そう力無く笑う紅蓮を見て、それまで黙って聞いていた雪蓮は、

「解ったわ、母様。私がお母様の意志を継ぎ、皆を導いて見せる」

言葉に覚悟を添え語る、愛しい娘の顔を見て、紅蓮は、

「そう、それでこそ俺の娘さ。お前なら、曹操や一刀に肩を並べる者になれる。」

孫家の脈々と流れる霸王の血を開花させるのは、お前だよ、雪蓮」

そう言うと横に居る冥琳に顔を向け、

「冥琳、お前には迷惑掛けっ放しだけど、運命だと諦めて、この馬鹿娘の事を頼むよ。」

恐らく孫家の血を上手く制御出来ずに暴走するだろう、この馬鹿娘は。  
だから、お前が上手く導いてやっつくれ」

冥琳は声を詰まらせながら、

「……………御…意」

その言葉を聞き、紅蓮は冥琳の頭を撫で、再び雪蓮の頭を、撫でようとした時、

紅蓮の手は、雪蓮に届く事無く空を切り、そのまま前に倒れ込んだ。

「母様!!!しっかり!!!」

「紅蓮様!!」

雪蓮達の只事では無い声に、天幕の外に出ていた者達が一斉に入つて来て、

雪蓮が地面に倒れる紅蓮を抱える光景を見るや、

「「紅蓮様!!」「堅殿!!」「母様!!」

と叫びながら周囲に集まる。

冥琳は外に居る軍医を呼ぼつとするが、その声は雪蓮に抱かれる紅蓮に遮られる。

「冥琳…最後くらい、ゆっくり逝かせとくれ…お前には…最後まで迷惑かけるね…」

笑いながら言う紅蓮は、

「最後の最後で…ドジ踏んじまったけどさ…俺の人生37年…中々に面白かったねえ。

叶うなら…曹操や一刀と…一度恨みつこ無しで、本気で勝負してみたかったねえ…」

只、それだけが残念だよ…」

そう言った後、焦点の合つて無い目で雪蓮を見ながら、手で雪蓮の頬を触り、

「全ての事は…雪蓮に任したよ…冥琳…蓮華…祭…雪蓮の…事…頼んだよ…」

そう最後に、笑いながら逝った。

孫文台、享年37歳。江東の虎と呼ばれた紅蓮の早過ぎる死であった。、  
繰り広げられる乱世の大陸で、先頭集団を走っていた紅蓮が脱落した事により、  
戦乱真っ只中の大陸での争いは、激化の一途を辿って行く事となる。

最初に感想にて紅蓮を生かした方が良いと書いてくれた方々に御礼申し上げます、

謝罪いたします。

折角考えて頂きましたが、紅蓮を生かした場合の立ち位置がはっきりせず、

雪蓮や蓮華の成長を促す場面が作り辛く(これは作者の文才の問題ですが)

生かした後のプロットの変更で、後半に予定してる場面での変更が容易では無い等の理由で、当初の予定通り紅蓮には退場してもらいました。

実際に悩んだのは雪蓮の墓参りの所です、そこでの変更に行き詰まり

諦める事になりました。(これの他にも何か所か有りますが……)

これからは雪蓮が紅蓮の後を継ぎ、孫家を再興させていきますので、

そちらも楽しみにして頂ければ幸いです。

次回は撤退する雪蓮の事と、一刀の事をメインに書きたいと思いません。

今回も此処まで御読み頂きありがとうございました。

長板坡の戦い

前編

(前書き)

やっと投稿出来ました。少し難産ながら書いた今話。一人でも楽しんで頂けたら幸いです。

一刀が紅蓮の死を知ったのは、それから二日後の事であり、江陵に滞陣している時に、

その情報は密偵よりもたらされた。密偵より詳しく話を聞き終えると、悲しそうな声で

「そうか……」とだけ呟いて、

「皆……済まないけど、暫くの間一人にしてくれないか？」

と言って、その場にいた皆を下がらせ、一人で天幕に居たという。

暫くの間、外で待たされ、一刀に呼ばれた時、彼の眼は赤くなっており皆を下がらせた後、

その場で一刀に何が起こっていたかが、容易に解ったと言う。

その時の様子を詠はこう語る。

「あの時程、アイツの悲しそうな顔を見た事無いわ……普段は締まりのない顔をしてるけどね」

と語り、側にいた恋、霞、華雄も

「一刀……哀しんだ。恋も哀しくなった……」

「一刀のあんな顔、初めてみたわ……。ウチは笑った顔しか見た事、無いからな……」

「一刀の顔を見た時、何と言うか……私は絶対に一刀の笑顔を守ろうと思ったんだ」

と皆は語っている。

一刀が皆を呼び、天幕に入ってきた者達に向け「済まなかった」

とだけ言って、  
その後の事を話す様に密偵に告げた。

「その後、孫堅殿の後を継いだ孫策殿は、孫堅殿の死を伏せながら、襄陽から撤退を開始し、本拠地、長沙に向かつております。現在は長板坡周辺に差し掛かっていると推測されます」

ですが、孫堅殿の死は徐々に噂として広がり、それを知った者達の士気は大きく落ち込み、撤退中の部隊から昼夜を問わず結構な数の脱落者、逃亡者が出ております」

そこまでを一気に報告し、一息ついてから、

「恐らく長沙に着くまでに、かなりの数の将兵が脱走、脱落すると思われる、このままでは、劉表軍が追撃に踏み切った場合、壊滅するやもしれません。それほどに危険な状態です。」

更に負傷者達に合わせた行軍の為に行軍速度は上がらず、このままでは劉表軍に追付かれる可能性も高いかと思われまます」

そう言うと密偵は、深く頭を下げ指示を待つ。一刀は、

「御苦労だったね。ゆっくりり休んでくれ」

と言い密偵を下がらせ、横にいる詠に訪ねた。

「で、今の報告を受けてただけど……詠、こっちの状況は？」

詠は一刀に向かい、

「そうね、アンタに報告した通り、劉表の命令を受け、ここら周辺の豪族たちが動き始めたわ。

恐らくは、孫策達の足止めを狙ってるんでしょう？

彼女達を助けたいと思うなら、そいつらを排除しないといけないわね」

詠はそう言つと、

「江陵の軍は霞と華雄、明実任せ、アンタと恋とボクは周辺豪族が集結してる場所を強襲。

その後、孫策達に合流し彼女達を長沙まで逃がす。策としてはこんなもんよ。

それと新たな報告だけど、袁術が動いたわ。でもね、変な事に荊州の他に

曹操の居る？州にも喧嘩を売ったみたいよ」

詠が言い終えると一刀は不思議がり呟く様に、

「袁術が華琳に戦いを挑むだつて？勝てるかと踏んだ上での事なのか……？詠は如何思う？」

「恐らくは……ボク達以外に袁術を釣った奴がいるわね」

詠の言っている意味が解らない為、一刀は詳しく説明を求めた。すると、

「何処の、誰なのか解らないけど、ボク達以外で袁術に甘い言葉を囁いてなやま



自分の思い通りになる駒にした奴が居るって事よ」

今度は意味が理解出来た一刀は、

「誰だか、今の時点で判断できるか？」

詠は一刀に向け、黙ったまま首を横に振り、

「情報が少な過ぎる。密偵を放って集めてるけど、もう少し掛かりそうね」

詠がそう言うので「その件は任せる」とだけ言って、

「霞と華雄は此処で、江陵の王威達と桂陽、零陵軍を睨んでいて欲しい。

もし、彼等が動いたら後で来る、明実に従ってくれ。

後、俺達に接触してきた、鞏志さんだけは見逃してやりなよ、二人とも」

そう言っつて、霞と華雄の方を見ると、

「ああ、そんな奴も居ったなあ、任せとき、一刀」

「任せておけ、一刀」

と、頼もしい反応をする武将達。その二人を信じ、次の話を続ける。

「詠に聞くけど、劉表軍は追撃すると思う？」

一刀に訊ねられた詠は、

「アンタは如何思ってるの？」

と詠に問い返された一刀は、

「動かないんじゃないかと思ってる。俺達を睨んで置かないと駄目だし、

これが一番の理由なんだけど、紅蓮との戦いで兵を減らしてるだろ  
う？

だから編成もし直さないといけないからさ、自分達は籠城に徹し勢力の回復を図り、

逃げる雪蓮達には豪族達を向かわせると俺は考えるけど……」

一刀がそう答えると、詠は

「アンタ、まだまだ甘いわね。人の心理を見抜いてないわ」

と言い、自分の考えを述べ始める。

「今の劉表は孫堅を破ったという自信があるわ。それに孫策や周瑜が如何に頑張ろうと

敗軍から脱走者、脱落者が出るのは当たり前前的事。大幅に兵が減っているわ。

その報告はもう受けている筈。その好機を逃すほど武将達は愚かでは無いわよ」

そう言つと今度は反対の事を言い出す。

「でも、それとは反対にアンタが言った様に軍師達は籠城策を進言すると思つ。」

失った兵力の再編の為ね。

それにアンタは劉表にとって孫堅が居ない今、この荊州で目障りな存在以外あり得ない。

アンタに対抗するには、今の劉表軍の状態は危険過ぎる。

そして、更に追い打ちを掛ける様に袁術の江夏、夏口進行。それにも対処しなければいけない」

詠は眼鏡を直しつつ、

「その相反する意見を有する、部下からの進言に、優柔不断な劉表に即決出来る様な、

決断力が有れば良いわね……。

今頃、恐らく悩んでいるわね。ああでも無い、こうでも無いってね」

と詠は良い笑顔でこう答え、そして、

「でも時間は掛かるけど、最後には追撃を選ぶとボクは思うわ」

「その理由は？」

「劉表の性格よ。優柔不断、猜疑心の塊、狭量、最悪ね。アンタの方が幾分かマシね」

と劉表に対し辛辣な言葉を吐く。すると霞が横槍を入れ、それを一刀が窺める。

「詠が一刀を褒めるやなんて……明日、雨とちやうか、それとも雪かいな？」

「霞……お前言い過ぎ。まあ、俺的には嬉しいけどさ」

詠は顔を真っ赤にしながら

「アンタ達、うっさいわよ！！ふ、ふん、さっさと話を続けるわよ」と言っ  
て、詠は途切れた話を続ける。

「そんな性格の奴が、自分が倒した者の子供をそのままにしておく  
と思う。」

そんな奴はこう考えるのよ。

『いずれ、力を盛り返せば、親の仇として自分を討ちに来るかも知  
れない。ならば、  
力を失っている今の内に亡き者にしてしまえ……』とね

詠の言う事に納得し、一刀は更に問う。

「でも、俺達の事をそのままにして置くのは危険と感じないのかな  
？」

その一刀の問いに、詠は相手を軽蔑するかのように、

「アンタに対しては江陵の兵と、南荊州の者たちで抑えられると思  
ったんじゃない？  
舐められたもんよね。こっちは飛將軍、驍將、猛將が揃っている  
のにね」

一刀は詠の答えを聞いて納得し、次の質問を投げかける。

「じゃあ劉表軍が追撃すると仮定して、雪蓮達が長沙に無事に着け  
る確率は？」

一刀の問いに詠は、

「追撃する武将次第ね。韓高なら大丈夫だと思うけど、文聘・蔡瑁だと危ないかもね。」

ボクが考えるに、恐らく追撃を任すのは、その武勇を信頼する文聘でしょうね。

確実に止めを刺す為に……ね」

詠の話聞き一刀は、

「じゃあ、俺達も動こう。江陵の事は明実に任せる。その事を明実に伝えてくれ」

その日の夜の闇に紛れて、一刀達は作戦を開始した。

### 撤退中の雪蓮

襄陽から素早く撤退準備を完了した雪蓮は、母孫堅の死を伏せて撤退する。

しかし、その撤退中に“人の口に戸は立てられない”と云う諺がある様に、

孫堅の死は將兵に噂として軍全体に広まっていく。

その噂が広まるにつれ、除隊を願う者、逃亡を図る者が相次ぎ、撤退を開始し3日後の事、

長板坡まで後少しと云う処まで来た時、兵の数は襄陽を攻めた時の約半分にまで減っていた。

しかも行軍速度は負傷者に合わせている為、普段の半分ほどの距離しか稼げず、

何時、劉表軍に追付かれるかとビクビクしながら移動すると云う有

様であつた。

日々減つていく將兵を見て、雪蓮は冥琳にだけは「私では母様の代わりは無理なの……」  
と弱音を吐いていたが、普段はその様な素振りなど見せずに気丈に振舞っている。

冥琳や宿將達は雪蓮が無理をし、母孫堅の後継を必死に努めようとしているのを察して、  
それとなく「力を抜く様」に進言したが、雪蓮はそれを否定し増々力を抜けなくなっていた。

そして遂に、襄陽に放つてある密偵から、劉表が追撃部隊を差し向けたとの報告が入る。  
追撃部隊の將は文聘、張允の兵、約一万五千であり、更に劉表に味方する、  
襄陽周辺の豪族達の兵を吸収し、更に兵を増やしながら迫っているとの報告を受けた。

江陵方面からも紅蓮に屈服させられた豪族達が紅蓮の死を知り反旗を翻したとの報告を受け  
雪蓮達はそのままでは挟撃される事を兵達に悟られぬ為、その場で食事休息を取る事とし、  
四方に密偵を放ち状況を探らせた。

雪蓮はそれから暫くして、自身の天幕で、更に驚くべき報告を受ける。

「申し上げます！！袁術軍が江夏、夏口を我物とする為、兵を動かしました、およそ3万。」

軍を率いるは劉勲將軍、既に廬江を起ち、長江を遡つて来ておりま  
す」

報告をした兵士は雪蓮に促され、天幕より下がっていった。それを  
見届けてから、

「如何思ふ冥琳？袁術ちゃんには、動きが速すぎる気がしない  
？」

横にいた冥琳は

「ああ、報告を聞きながら私もそう思った。恐らく、誰かが袁術に  
入れ知恵をしたのだろう」

そう言つて、冥琳は話を変える。

「それにしても雪蓮、今の状況は不味いぞ。襄陽、江陵方面からの  
挟撃に、今現在の我が軍の  
兵士達が耐えきれると思えない。それに加え、袁術の荊州侵攻の報  
だ。」

また、江陵方面にいる北郷軍の行動も気になる……」

冥琳がそう呟くのを聞いて、雪蓮は、

「その一刀だけど如何動くと思う、冥琳？報告によると、私達に1  
万、

江陵に一万五千と兵を分けた様だけど……。

私達に味方すると思う？、仇為すと思う？」

雪蓮の問いに冥琳は、天幕内を右に左に動きながら、自分の考えを

呟く様に話し始める。

「北郷軍とは、紅蓮様と不戦の盟約を結んだ訳であり、我等と結んだ訳ではない……。」

しかし、紅蓮様は最後まで北郷殿を信じておられた。恐らくは何らかの確信が有ったのだらう。

私はそれを信じ、このまま長沙に撤退を続ける方が良いと思うが……雪蓮はどうだ？」

「そうね、母様と一刀を信じましようか。それに、私の勘もこのまま進む方が良いと言ってるのよ。」

後、袁術ちゃんの荊州進行も、一刀の所が関わってそうな予感がするのよね……。」

そう言うと、冥琳は外にいた伝令を呼び、

「皆にこのまま長沙に向かうと伝え、しんがり殿には祭殿と祖茂殿にお任せすると伝えなさい」

そう伝えると、伝令は各陣営に走って行った。

冥琳は伝令を見送ると自分の世界へと入って行く。

（今の状況はかなり不味い。負傷兵が多い為、遅々として進まない進軍速度。紅蓮様の死。

劉表軍と地元豪族達の追撃。江陵にて分かれた北郷軍。

最悪の場合、せめて雪蓮と蓮華様は長沙まで逃がさねば……その準備はしておかねばなるまい）

暫くして、殿を任せた祭と祖茂の部隊以外は長沙に向けて出発した。その少なくなつた軍勢を見送る宿将の二人は、



「何とか策殿に冥琳、蓮華様、三人だけでも逃がす様に頑張らねばならんな、祖茂よ」

「はい、それには此処にて我等が踏ん張らねばなりません、この命に変えましても。」

せめて本隊がこの先に有る長板坡に逃げ込める時間は稼がねばなりませんまい……」

二人はそう言いながら、お互いに離れていく本隊を見つめていたが、本隊が見えなくなると、襲い来る劉表軍を迎え撃つ為に、その場の方円陣を敷き待ち受けた。

## 宛城

フードを被った少女が張繡と夜空を見上げ、独り言を言う様に咳く。

「巨星が一つ墜ちた……か。墜ちた星の方角から恐らくは此処より南。長沙の孫堅殿……」

これで乱世が更に加速しますね」

「何？、誠か真里？孫堅が……。あれ程の者でもこの乱世を乗り越えられぬとは……」

彼女の星占術の的中率の高さを知っている張繡でも、まだ信じられない様子であった。

少女は、張繡の驚きを気にせず、そのまま夜空を眺め続け、

「更に南西。星の方角より推測すると北郷軍が勢いを増している。恐らくはその混乱に乗じ、

荊州辺りで何かを狙っていますね……劉表殿は勢い無く、孫堅殿の娘、孫策殿は産れたばかりと云う様子ですね」

そう言うと横にいる張繡に視線は空を向けたまま、

「我等の思惑通り、袁術殿を曹操殿に当てる事に成功しました。それに合わせ 殿にも書簡を送り、友誼を結ぶ事に成功しました。しかし、軍師の殿が難色を示しており、優柔不断なあの方の事です。恐らくはこのままどっち付かずの状態を維持するでしょう」

そう言うと、少し厳しい声で、

「後は最後の仕上げとして、北方の 殿が動いてくれれば曹操軍包囲網の完成です。

本当は西の馬騰殿にも参加して戴きたかったのですが……星を見る限り、余り寿命は残されてませんね。しかし気に成る事が……」

張繡が「何だ？」と訊ねると、

「袁術殿の事です。これは私の推測ですが、我等の他に袁術殿を釣った方がおられますね。

袁術軍が夏口、江夏に向けて進軍しました。これは私の計画に無い事です。

恐らくは今、荊州で暗躍している誰かの仕業かと思われませんが……」

そう言うと黙ってしまふ。

横にいる張繡は、彼女の話をして聞き終えてから、

「そうか。これで我等に時間が出来たな。しかし、曹操はそれでもこちらに来ると思うか？」

そう問う張繡に少女は、

「私はかなりの確実で来ると思います。霸王としての面目も有るでしょうが、

我等に敗れつ放しと云うのは曹操殿の性格が許さないでしょう。

前の戦いで大敗したのなら警戒するでしょうが、我等にも多くの損害を与えました。

この包囲網の一部分でも崩せば、兵力を再編して直ぐにでも向かって来ますよ」

その後、暫く二人して話しをし、張繡は自室に戻って行った。

残ったフードを被った少女は、

「曹操殿は必ずやって来る。相応の意気込みと覚悟を持って。しかし、それがまた、

我等にとつては浸け込む隙に成る。それに、その時には我等だけでは無く、

他者も相手にしなければ成らない。その時曹操殿が如何動くかが、鍵と成る……」

その後は黙って夜空を眺めていた。

## 長板坡の戦い

### 前編

(後書き)

この話をお読みの皆様の中でハーマイ〇ニー様か、青い猫耳ロボ  
ツト様は

いらつしやいませんか？

いらつしやいましたら、作者の時間を増やすなり、巻き戻すなり  
して下さい。

お願いします…… (結構本気)

と本気に暑さで脳が死んでます、憂鬱です。

エコカー減税とやらの御蔭で仕事が凄いなってます。

毎日残業2時間は辛いな、通勤するのに往復2時間……

考えれば考えるほど深みにはまりそうな予感がするので止めます。

今話は、長板坡 前編 と云う事でお送りしました。

長板坡の戦いは正史、演義共に出て来ますが、結構話は違います。

両方読んでみると面白いですよ。

今回は今話の続きと稟達の事まで書きたいとおもいます。

今話も此処まで御読み頂きありがとうございますとございました。

長板坡の戦い

中編

(前書き)

投稿が大変遅れ申し訳ありません。

祭と祖茂は決死の覚悟で迎え撃ったが、如何に堅固な方円陣を敷き守勢に徹しようとも、

自軍は三千、敵である劉表軍自体は一万五千と周辺豪族を吸収した約二万五千。

なので寡兵は否めず徐々に押され始めていた。祭が一人、また一人とその自慢の弓で射ようと、

敵兵は湧いてくる様に現れ、祭が指揮する弓隊が一斉射にて前線で戦う祖茂の部隊を援護しても、

同じ様に後方より新たな部隊が現れ、戦闘に参加して行く。

祖茂の部隊は、孫堅軍で屈指の強さを誇る重装歩兵を中心とした部隊であり、

攻撃力、守備力には定評があるが、こちらも祭の部隊の援護を受け踏み止まっているものの、

二千人以上いた兵は既に千人以下にまで減らされていた。

戦闘が始まり2時間、二人とも必死に戦い、少しでも時間を稼ごうとしたが、

それも限界であった。

対する劉表軍は自分達の軍を温存し、此処に来るまでに吸収した豪族達の兵を前衛に立て、戦闘の指揮を後方にて行っていた。

文聘はその様な真似はしたくなく、自身の部隊を使い正々堂々と戦いたかったのだが、その様に命令したのは劉表であり、流石に主君の命令を無視する事も出来ないし、

また、荊州に北郷軍が残っている上、夏口、江夏に袁術軍が侵攻し

て来た等、領土を守る為、  
これ以上兵を失う訳にもいかない事も解っていた。  
なので渋々ではあるが、部隊を後方に下げ戦鬪を見守っていた。

離れた所より見る、文聘の目にも明らかな様に、前衛で戦う祖茂の部隊の被害は  
限界に達していたが、しかし祭の部隊の援護もあるだろうが、よく踏み留まりながら戦い、  
文聘の予想に反し、このままではこちらの本隊まで戦わなければいけない程の被害が出る見事な戦いぶりであった。

そこで文聘は張允に許可を得て、自身の騎馬隊二千と歩兵三千を動かし、この戦場を無視し、  
後方に居る孫策達を攻撃しようとする。また踏み留まっている祖茂の部隊に動揺を与える目的も、この作戦には含まれていた。

それを見た祖茂は、援護に来た祭に対し困惑した顔で、  
「祭殿、不味いですね。敵の後方の部隊が動こうとしています」  
「うむ、もしかすると、ここを抜けて策殿達を攻撃しようとしているのではないか？」

その祭の答えと同じ予想をした祖茂は、  
「祭殿、此処は私の部隊が引き受けましょう。何とか敵より先に本陣に向かい  
迎撃の準備をさせて下さい」

祖茂の部隊を見て祭は、如何しようか迷っていたが、

「大丈夫ですよ、祭殿。もう少しの時間位稼いで見せます」

その祖茂の言葉を、何より眼を見て、

「祖茂……………先に行つて堅殿と酒盛りでもしておれ。遅かれ早かれワシも逝く。

その時は盛大にやろうぞ」

そう言つと祭は素早く自身の部隊を纏め後退をして行く。祭の部隊を見送りながら、

「祭殿らしい別れ方ですね……………祭殿、雪蓮様を、蓮華様を、冥琳殿を宜しくお願いします」

そう言つて祖茂自身は少なくなった自兵を纏め、襲い来る敵兵の人の波に向かつて行つた……………

#### 荊州長板坡、雪蓮本隊

雪蓮率いる本隊は長板坡を渡ろうとしていた。先に負傷者とそれを護衛する者達を渡らせ

その指揮を程普に任せる。数は1万程居るが殆どが負傷者である。

次に蓮華と彼女を支える者達を行かせ最後に自分と冥琳が残っていた。

蓮華は自身も残ると言つて聞かなかったが、姉の言葉には逆らえず最後には諦める。

雪蓮は冥琳も蓮華と一緒にいかそうと説得したが、



「私が行けば残った者達の指揮は誰が執るのだ？それに紅蓮様よりお前を見張つてると

言われているからな……蓮華様には穩を付けたから大丈夫だろう」

そう言われ雪蓮は渋々ながら冥琳の説得を諦め、その場にて陣を組み、

後退する者達の時間を稼ぐ為に最後まで敵兵を通さないと云う意志を固める。

陣を組み暫くして自分達が後退して来た方角から、千人強の部隊が現れる。旗印は「黄」

黄蓋こと祭の部隊であるが、横にもう一つ有らなければならない祖茂の旗が無く、

代わりにその祭の部隊の少し後方を、かなりの数の騎馬隊が猛追していた。

冥琳は直ぐに事態を察し、その場にて待機している槍兵、弓兵に戦闘態勢を取らせるとともに、

「雪蓮、貴女はこのまま待機。後方を守って！！」

横で「私が行くわ、冥琳！！！！」と反論する主君を無視し、

冥琳は前方の祭の部隊を援護する為に部隊を動かし指揮を始めた。

その頃、益州では

綿竹関　そこは天然の要害として知られ、周囲は山に囲まれ、攻めるには

一本しかない道を攻めるしかなく、更にその道は狭く細く、大軍と

しての利点を生かせない  
様になっており、正に難攻不落であった。

しかし、それは何の策も無く正面から攻める場合のみであり、関の内部に多数の間者及び

協力者のいる今の状態では、この要害の攻略は時間の問題であった。

星を総大将とする北郷軍は関の前で罵声を浴びせ、敵将を引き摺り出そうとするが、

此処を抜けられれば残るは州都成都しかなく、それは実質敗北に近い。

なので絶対に出てこない事は解っているが、敢えてそれを繰り返した。

「ふっ、やはり出てこんな。こちらの読み通りだな、稟、風」

星に尋ねられ稟は

「ええ、この関の将である劉循は劉璋の親族で戦闘が強く、兵法に通じていると云う噂ですが、

その実、仲間内での評価であって実際の戦闘経験は数えるほどしかありません」

稟が答えると横で寝息を立てている風に向かって星は、

「風、起きろ。横で怖いお前の保護者が青筋立てて怒り始めているぞ」

風はそう言われ

「……くう……おお！！それは恐い。稟ちゃん、落ち着いてくださいな。  
で、その他の將軍ですが、似たり寄ったり、大同小異と云うところ  
でしょうかね。  
我等と戦った呉懿さん、呉蘭さん、雷銅さんの三人は成都にて謹慎  
していると云いますし」

「誰の所為ですか！！」と云う稟の叫びを無視し、風の報告を聞き  
終え星は、  
戦に同行している桔梗、紫苑、焰耶の三人にも意見を求める。

「そうじゃな、呉懿らが居ないのは我等にとっては良い事じゃな。  
あ奴らは中々の将だし、  
残る劉璋軍であ奴等を超える者は他に考えられん」

と桔梗が言つと紫苑が、

「でも、そう言つて油断は禁物よ、桔梗。戦は最後の最後まで解ら  
ないのよ」

と桔梗を窘める紫苑。その横で、

「ええ、これからは相手が有利な防衛戦ばかり。如何に、こちらの  
兵力が  
相手を上回っていても油断は出来ませんよ桔梗様」

自分の配下であつた焰耶にまでそう言われ、

「フン、解つておるわい」

少し口調をひかえながら言い、そのまま思考する。

（しかし、あの焰耶がワシにそんな事を云うとはのう……。連合に行く前と今では、別人かと思うほどの成長を遂げおった。やはり御館にお願いして正解だったわ）

そんなやり取りの後、星が、

「そろそろ準備に取り掛かろうとしよう。皆も良いか？」

星は皆を見回し、皆が頷くのを確認した後、

「では、我等は作戦通りに動く事にしよう。関の内部で異変が起き次第、桔梗と焰耶、それと紫苑の部隊で攻めてくれ。私と稟、風はそのまま待機しながら、臨機応変に動く事にしよう」

皆が解散し、残った星、稟、風の三人はその場で話合っていた。

「しかし、主も無茶な事を仰せに成る事で……。私に総大将を任せるとは。

私は前線に居るのが一番好きなのだが……。だが、主に期待されているのだから、

逃げ出す事も出来ん」

星は大会議の後、一刀に『他の誰かを総大将に』と話していた。しかし、

「星なら大丈夫だよ、稟や風も居るんだし。それに俺の代わりが出るのは星、君だけだよ。」

それに稟、風の二人も何か考えが有るって言ってた」

そう微笑みながら一刀に言われ、止むなく引き受けたのだった。

星の愚痴に近い話の後、風が、

「しかし、口では嫌々言いながら、従う星ちゃんなのでした」

風の方を向き、少し頬を紅く染めたまま星は真剣に、

「誰がそう仕向けたのだ、風うゝ、それに稟も。お主達、私に何をさせたいのだ？」

星に問われ二人は、見合つて稟が、

「一刀様は貴女に色々な事を経験して欲しいとの仰せでした。それに私達も賛同したのです。」

貴女は今回の様な大軍を率いて戦闘し、我が軍の筆頭將軍として他の者を率いて頂きます」

続いて風が、

「単純な武力なら恋ちゃんが上ですが、部隊運用や戦場での指揮は星ちゃんの方が上です。」

あと霞ちゃんも今後、色々な重要な場面で戦つて貰う予定ですよ。これからの戦闘は、指揮やそれ以外の能力も重要になってきます。そこで、我が軍からは星ちゃんと霞ちゃんに白羽の矢が立ったのですよ」

星は二人に意見しようとするが、2人の視線はそれを許さない程、真剣に星を見つめており、星は黙つてそれを受け入れる事にした。

#### 荊州、長板坡

冥琳は弓兵と槍兵を率い、祭の援護を行う。その甲斐も有り祭の部隊を追っていた騎馬隊は

足止めを受け、その場にて待機。それと入れ替わる様に歩兵が先陣に加わり威嚇し、

敵の疲労を誘い、士気の低下と混乱を狙った行動に移る。

反対に冥琳と祭は後退を命じ、密集隊形をとり徐々に下がりながら敵の攻撃を流しつつ、

士気を鼓舞し長板坡に向け撤退をしていた。

冥琳と対峙している文聘は、如何した物かと考えていた。彼の取るべき道は2つあり、

1つ目はこのまま敵を威嚇しつつ前進し、張允率いる本隊が来るのを待つ事。

2つ目は自分の兵だけで攻撃を仕掛ける事。

張允が総大将の為、撤退と云う選択肢を彼には持たされておらず、この二つに絞られる。

一つ目の張允率いる本隊を待つ場合、周瑜や黄蓋を逃がしてしまう恐れが有り、

二つめの自分の兵だけで攻める場合は逃げられる心配はないが、被害は覚悟しなければならず、

その場合劉表からの命令を破ってしまう事になり、後々面倒臭い事に成り兼ねなかった。

思案している文聘の下に一騎の伝令がやってきた。

「申し上げます！！敵軍後方に軍影あり。その数およそ一万」

冥琳

警戒し後退をしている冥琳の下にも一騎の伝令が現れ、

「申し上げます。我等の後方より軍勢が現れました！！その数およそ一万！！」

それを聞いた冥琳は始め、雪蓮が来たのかと思っていたが考えを改めた。

後方には一万と云う数を残しておらず、また雪蓮が来るなら全てを副官に任せ、

一人かそれに近い数で来る、そう考えたからである。

冥琳がそう考え思案していると、更に別の伝令が現れ、

「申し上げます！！後方に現れた部隊より先行し、約三千の騎馬隊がこちらに向かって来ます。」

旗印は

文聘

文聘の所にも新たな伝令が現れ、

「孫堅軍残党の後方に現れたのは北郷軍です！！その数およそ一万！！」

しかも、旗印は北郷十文字と深紅の呂旗、北郷一刀自身と飛將軍呂布です！！」

その報告を聞いた文聘は小さく舌打ちをし考える。

（北郷が此処に来るとは聞いて無い……来るのは江陵方面の豪族達と聞いていたが……。

その事より導き出されるのは、豪族達は倒され、北郷が孫堅の残党を助けに来たと云うことか）

文聘はそう答えを導き出すと直ぐに周辺にいた者達に対し、

「全軍撤退準備！！張允殿率いる本隊に合流する！！」

そう言うつと直ぐに兵を纏め後退して行った。

冥琳は、赤い髪の少女を先頭に、その直ぐ後ろで数人の者に守られつつやって来る

一本の棒切れを片手にやって来る少年と自分の主を見つめ安堵の息を吐くが、

やって来る雪蓮の様子が少し変なのに気付き、それを横に居る祭に訊ね様とした時、

祭の視線は、その紅い髪の少女に釘付けになっており、冥琳から見ると

緊張している様にも見え、時折額を拭う汗粒の大きさが、彼女の緊張の度合いを表していた。

時は少し遡る



先頭集団を任された程普は、前方に放っていた偵察部隊よりの報告に焦っていた。

（前方に一万の部隊……しかもそれがあの北郷軍だとは困りましたね……）

そう悩んでいる程普の下へ、

「申し上げます。前方の北郷軍より何名かがこちらにやってきました！！」

そんな報告を受け程普は、

「私と何名かで行くので、そなた等は此処にて待機してなさい」  
威厳を込めた声で言うと、自身の精鋭のみで前から来る者に会いに行った。

彼女が騎馬に乗ったまま近づくとそれを拒むように一人の者の威圧感が増し足を止める。

しかしそれを制す様に横に居た男が手を出すと、彼女等に向けられていた圧力は随分と減り、  
近付けるようになり段々と、彼等の顔が見えて来た。

すると向こうから若い男の声で、

「そこに居られるのは、旗印から孫堅軍が宿将程普殿と御見受けしますが、

自分の名は北郷一刀。貴女達に危害は加えないから、そこを通して

頂きたい」

程普は遠目からではあるが、紅蓮の付き添いで何度か見た事が有り、その男性が北郷一刀だと解っていたので、

「私は貴方の言う通り、姓名を程普、字を徳謀と言います。以後お見知りおきを……。」

で、時間が有りませんので単刀直入に聞きます。こちらを抜けてどちらに行かれる御積りで？」

すると一刀から帰って来た言葉は

「雪蓮に会いに行きます。それと同時に彼女の覚悟を確かめに。今後の同盟を結ぶに相応しいか如何かも確かめに……。」

と一刀は程普の視線を外さず、包み隠さず言う。

程普は暫く一刀を見て、嘘偽りが無い事を確認し、

「貴方の事は紅蓮様が何時も言っておられました。

『あいつが一刀がウチの子だったらねえ……俺は喜んで雪蓮じゃ無く、一刀に後を託すよ』」

と。雪蓮様に手を出さない事を、その紅蓮様の名に誓えますか？」

間髪いれず一刀は、少し声を洩らしながら、

「誓う」

そう言うと程普は馬を下り、一刀に頭を下げ、

「一国の君主に対しての非礼、お許し下さい……どうぞ、雪蓮様を

宜しく願います」

そう言うと後方の軍に道を空ける様に伝令を放ち、更に後続の部隊にも同じ様に伝令を出す。

一刀はそのまま後方に居る自分の軍勢に合図を送ると、程普の横を会釈して通り抜け、そのまま雪蓮達の居る後方に向かって行った。

程普は一刀達の軍を一目見て、戦闘後だと云う事に気づき、一刀達がやってきた方角を偵察させた。するとそこには、自分達を攻撃する為、向かっていた江陵近辺の豪族等との戦闘跡が発見された。それを聞いた程普は、

「紅蓮様、貴女の言っていた事が漸く解りましたよ……彼は更に大きく成るでしょう。」

義に厚く、情に深く、それ以上に強い。雪蓮様には良い手本と成りましょう」

そう独り言を呟くと、軍を纏め肅々と撤退を再開し始める。

## 第二陣、蓮華達

「何ですって！！徳謀（程普の字）は一体何を考えているの？」

孫権こと蓮華は前方よりやって来る軍勢に驚き混乱していた。更にその混乱を大きくさせたのが程普からの伝令であった。

「程普様からの伝令です！！」前方から来る北郷軍は敵では無い為、

進路を妨害しない様に』

との事です。この事を徹底する様にと仰せ遣っております」

それを聞き、横に居る穩こと陸遜が

「でも程普様が認めたんですから、我等も従いませんと……」

更に穩の横に居る、最近蓮華の親衛隊として配属された甘興霸こと思春が

「しかし……宿将の程普殿の命を、如何な蓮華様とて無下にして良い訳ありません」

二人にそう言われ、少し落ち着きを取り戻した蓮華は思案し、

「……解ったわ。但し、母様や姉様が話す、北郷一刀と話したいのだけど駄目かしら……？」

穩と思春は考え、視線を合わせて頷くと思春が、

「長時間は無理ですが、短時間であれば可能かと。しかし蓮華様、これだけは御覚え下さいませ。向こうから来る部隊から途轍もない程の闘気が発せられています。」

恐らく私や祭殿が二人掛かりで戦っても敵わない程の者がいます。旗印より呂布かと思われませんが……」

それを聞き蓮華は息を飲む。祭や思春の強さは良く知っている。

何せ自分に武を教えてくれているのだから。しかし、その二人が敵わない程の者と来れば、

世の中に数えるほどしか考えられず、その様な者を従える北郷に興

味を覚えた。

蓮華が無言で考えていると、程普の時と同じ様に何名かがこちらに向かつて来る。

蓮華はそこで初めて、思春が言っていた事を実感する。いきなり前方の者の一人より大きな威圧を感じ蓮華は、身体を抑え込まれた様に動けなくなってしまう。

しかし、横に居る男が手を出すと威圧は薄くなり、蓮華は動けるようになる。

横に居る穩を見ると未だにガタガタと震えているし、思春は何とかその場に踏み止まりながら、向こうから来る者を睨んでいる。少しして、

「俺の名は北郷一刀。そこに居るのは旗印から、孫権殿と陸遜殿で合ってるかな？」

それと甘寧。久しぶりだね。元気だったかい？」

一刀の穩かな挨拶の後、蓮華は一刀が思春の名を呼んだ事を咎めようとすが、

その腕は思春に掴まれ、そして小さな声で、

「この件に関しては後にお話しします。ですから落ち着いて北郷と御話し下さい」

思春の言葉を信じ、蓮華は息を一つ吐き一刀と視線を合わし、

「挨拶が遅れたな。そなたの言う通り、私が孫仲謀だ。それと横に居るのが陸遜に

思春、甘寧の事は知っているようだな」

彼女がそう言つと横にいた陸遜は会釈を、思春は黙つてこちらを見ていた。

孫権の横に居る二人を見てから、一刀は黙つて孫権を見て考える。

(気の強そうな娘だな。しかしこの時期にもう陸遜がいるなんてな

……

武将の登場時期に関しては無茶苦茶だな。この世界……)

と考えていると、蓮華が一刀に対し、

「北郷。お前の事は姉様や母様から聞いている。だからひとつだけ答えてくれるか。

お前が此処に来た理由を答えて貰おう!!」

そう彼女が言うので、先ず俺は、

「君は礼儀と云う物をもう少し学んだ方が良いよ。俺が言うのも何だけどさ……」。

初対面の者にその態度と言葉遣い。俺は気にしないけど、他の者が聞いたら如何思つかな？」

そう言つて、

「それで此処に来た理由は、紅蓮の後を継いだ雪蓮と話がしたい。只それだけだよ。

後はおまけみたいな物だよ」

そう言つた一刀の言葉を考えて、その意味を理解した穩は顔を挙げ

それを見た一刀は蓮華を無視して、横に居る穩に話しかける。

「今ので解ったみたいだね、陸遜さんは。だから君に聞こう。通っても良いかな？」

一刀が話しかけると、また少し考えて、

「では、ひとつだけお聞きしても宜しいですか？」

穩が何時もの口調で、しかし顔は真剣そのもので訊ねる。一刀は無言で頷き了承すると、

「雪蓮様がもし貴方の眼に適わなければ如何なさる御積りです？」

いつもの口調では無く真剣に訊ねられた一刀は穩を見ながら、

「如何もしないさ。只、何もしないで俺は帰る」

その一刀の発した言葉の意味をも理解した穩は、少しだけ肩を落とす。しかし穩に一刀は、

「でも君みたいに敏い<sup>さと</sup>人が雪蓮に付いてくれるなら、今後の雪蓮も俺も安心できる」

そう言つと、

「これで通らせてくれるかい？」

と訊ねる。穩は後ろにいる伝令を呼び、

「北郷さんを通らせて下さい。絶対に邪魔をしてはいけませんよ」と言って伝令を走らせる。

それを蓮華は咎めようとするが穩は蓮華の目前で頭を下げて言う。

「蓮華様、お願いです。ここは私に御任せ下さいませんか？」

穩の真剣な顔に気圧された蓮華は少し考えて、

「お前も、思春も……後で説明して貰うぞ」

「はい、では北郷さん、どうぞ。それと雪蓮様、冥琳様を宜しくお願ひします」

穩は頭を下げて、そう言った。

一刀は「解った」とだけ言うと、そのまま後方に控えていた軍に合図をし、

やはり、彼女達の横を通り雪蓮の下に向かった。

一刀達が通って行った後、蓮華は撤退を開始しながら横に居る二人に説明を求める。

始めに穩が、蓮華の問いに答え始めた。

「で、北郷を通した理由は姉様の事だろうか？」

「はい。雪蓮様や冥琳様が帰還される可能性を少しでも上げておきたかったのです」

穩はそう答え、



「流石の雪蓮様、冥琳様でも相手の率いる数が違い過ぎます。防戦しても持ち堪えるのが やつと云う所が精一杯だと思います。そして何れは突破を許すかと思われませぬ。」

そうならない為に北郷さんを通したのです」

「その件は解った。だが、その前の北郷が言った、姉様と話したいとは如何云う事だ？」

「あれは、そのままですよ。北郷さんは雪蓮様が紅蓮様の後を継ぐのに相応しいか、また、北郷さんと同盟を組む相手として如何かを確かめたい、その為にここまで

出張って来たんだと思いますよ。そうでなければ此処まで来る必要が説明できません」

そう言つて穩は最後に

「それに今の雪蓮様に話を出来るのは、紅蓮様が仰つておられた北郷さんと、

時間は掛かりますが冥琳様しか居ないかと。

それ程に今の雪蓮様は御自分の殻に閉籠つておいでです。

今の雪蓮様をお救い出来るのはお一方だけかと」

穩の説明に「家族として、妹として悔しいが今の姉様ではな……」と納得した蓮華は思春の方に顔を向け話を振る。

「次は思春、お前も答えて貰うぞ？」

「御意。私は諷陵を根城とする江賊・錦帆賊の頭領をしております

だが、私達は盗賊や匪賊の様な悪事は一切行わず、長江を渡る者の護衛や物資の運搬を主な生業として暮らしておりました。北郷と出会ったのは、北郷が諷陵太守として赴任して何週間か経った頃です」

そこで思春は一つ溜息を吐き続ける。

「北郷自身が何名かの者と我等の根城に現れ、こう言いました。『自分に仕えないか』と。我等は今まで誰の下にも付かずやってきました。ですから、『これからも誰に仕える気はない』と言うと本当に残念そうに『そうか……』と言って去り、それから特に士官の話は無く、幾度か仕事を依頼してきたので請け負った位です」

思春はそう言って話を終え「それだけです」と言って蓮華に視線を向ける。

蓮華は思春が話をしているのを見ていたが、特に不自然な所も無く淡々と話すので、思春の話信じる事にし、穏と共に撤退の準備を再開した。

#### 長板坡

雪蓮は程普や穩こと陸遜から、伝令がやって来て、受けた報告の内容に、彼女達が無事進んでいる事を喜び、また、一刀が遣ってきた事に驚く。

そして彼女は一刀が来る方向を見て、穩から受けた報告で一刀の来た目的を知り、これからは自分の戦いだと言う事を悟り、一刀が来るのを待ち受けた。

それから暫くして、蓮華や程普を見送った方角より土煙が上がり一刀達の到着を報せる。

そして、程普や蓮華達と同じ様に何名かの者に守られて一刀が現れる。そして、

「雪蓮、久しぶり。虎牢関で別れて以来だね」

と久しぶりに会う友人の様に話しかける。

そんな一刀の挨拶に雪蓮は、

「そうね、一刀。久しぶりね」

（貴方が来るからってこっちは緊張して待ってたんだけどね。やっぱり一刀は一刀か……）

と思った事を言葉に出さずに笑顔で一応の挨拶を交わす。そして雪蓮は直ぐに真顔に戻り、

「此処に来た理由は穩、陸遜に報告で受けたわ。私に何を聞きたいの？」

と一刀に訊ねる。

一刀は少し表情を強張らせながらも、何時もの声で、

「そうだね、じゃあ一つだけ答えてくれるかい？」

そう言うと挨拶していた時から考えられぬ程の真剣な表情で、

「君は紅蓮の覇道を継ぐのか？それとも自分の道を進むのか？それだけを聞きたい」

雪蓮は一刀の質問に即答する。

「私は私の覇道を進むわ。私は母様みたいに機転が利かないし、母様程の器は無いわ。

でも、私は私を信じてくれる友や仲間達、それに妹達を民を守らなければならぬ。

だから、私は自分の手を血に染めてでも、それらを守るつもりよ」

そんな雪蓮の覇気に何かを感じたのだろう。横にいた恋が、一刀に向かい、

「……あいつ、危険……無理してる。……無理は駄目。一人は駄目」

それを引き継ぐように、

「ああ恋、言う通りだね。雪蓮、君のその道は険しく危険で少しでも誤れば皆を不幸にする。

それなのに何故、紅蓮の様に皆を頼らない？何を一人で抱え込んでいるんだ？」

一刀の言葉に雪蓮は身体を震わせ、

「……………一刀、貴方に何が解るの？皆を導くのがどれほど孤独かが不幸にする？道を誤る？母様の様に？私の事を何も知らず、良く言えたことね！！！！」

怒気を孕んだ声で一刀にそう叫ぶ。

恋が自分の前に出ようとしますが、それを止めそのまま彼女の声を聞く事にした。

「皆も一緒よ！！私を頼れ？我等も一緒に？母様なら如何した？

私がどれほど頑張ろうと、母様を引き合いにする。私は私。母様じゃないのよ！！」

そう叫ぶと思おもよらぬ方向から声が発せられる。

「それが如何したのよ？貴女、もしかして自分が認められて無いからって拗ねてんの？」

それは後方から来た詠が言った言葉であった。詠は更に続ける。

「貴女、コイツに言ったわね？『私の事を知らない癖に』って。そんなの解る訳無いじゃない。

自分自身が自分の事を解って無いのに。反対にコイツは貴女より余程自分の事を弁えてるわよ。

自分に無理な事は人を頼る。但し自分でやれる事はやった上でね。人を頼り過ぎるのが悪い癖だけだね」

そう言つて一刀をコイツ呼ばわりしながら、雪蓮に対し、

「貴女は自分の事を認めて欲しいだけ。しかし認められないから、それを人に転嫁する。

それは我儘な幼児と一緒よ。自分は母親の様になれない？自分には器が無い？

誰が決めたのそんな事？それは貴女が自分で自分の限界を決め付け

ているだけ」

両手を握りしめながら聞いていた雪蓮は、

「貴女に何が解るの？それに貴女は誰？」

その威圧の入った雪蓮の問いを詠は涼しげに聞きながら、

「僕の名は黄権、字は公衡。今はコイツの軍師をやっているわ」

一刀を指さし、更に続ける。

「僕はもつと厳しい状況下でも、皆を思いやり笑顔を絶やさずに希望を捨てなかった

望まず王となった娘を知っているわ。その娘に比べれば貴女なんて恵まれてるわ」

一刀にはそれが月こと董卓の事だと解る。

その月の側を絶えず離れずに居た彼女だからこそその言葉であり、その言葉は重く感じられた。

雪蓮は黄権こと詠を見て、

(この娘は嘘を付いていない……)

そう考えていると一刀が、

「二人とも話してる所、悪いんだけど……雪蓮。紅蓮が君に言ったのかい、皆を導けって？」

それとも自分で考えてそう決断したのかい？」

「母様は率いると言ったのは認めるけど、覚悟を決めたのは私よ。母様の最後は」

雪蓮はそう言っていると覚悟を決めた時、紅蓮の最後の時の事を話す。

暫くの間、紅蓮の最後の話を、一刀は俯きながら最後まで聞いていた。

そして雪蓮が話終わるのを待って、一刀は顔を上げ雪蓮に向けて言う。

「今の話を聞くと、俺には紅蓮が君にその道を歩けと言っている様にしか聞こえないけど、

雪蓮、本当にそうか？俺には、

『護るべき者を害する者が有れば、君の手で排除し皆と一緒に民を安寧に導け』

としか聞こえないよ。紅蓮は今の君の様に、

『一人で考え、一人で闇雲に皆を導け』なんて一言も言っていないよ」

一息吐いて、

「君自身も言ってたじゃないか、『私は私って』君が紅蓮になれる訳無いじゃないか。

雪蓮は雪蓮なんだから。だから君だけの道を歩けばいいよ。迷ったら君の側にいる人が支えてくれる。冥琳や陸遜さん、程普さんに妹の孫権さん。

これだけの人が君を見守ってくれてるし、支えてくれる」

最後に、

「彼女等と一緒に民を安寧に導け。それが紅蓮の最後の言葉だったんだろう?」

一刀の言葉の後、雪蓮は支えを失った様にその場に崩れる。

暫くの間、その状態が続き黙っていると前方で戦っている冥琳と祭の部隊が後退しているのが見える。

「詠、あの戦闘如何見る?」

すると詠は一目して、

「周喩の思惑に劉表の軍が乗せられてるわね。文聘は士気を下げた様に戦ってる積りでも、

そこを看破した周喩が密集隊形を保ちながら、敵の攻撃を受け流しつつ撤退してるわ。

密集すれば将の声が届き易くなり、兵士は命令や鼓舞を受け易いわ」

詠の的確な報告に一刀は、

「そうか……流石は冥琳だね。雪蓮?それだけで俺達は冥琳を迎えに行ってくるけど、君は如何する、来るかい?」

そこで漸く我に返った雪蓮が無言で頷き、その場にいる兵を副官に任せる指示を出すのだった。



此処一か月半土曜日の休み無し、平日残業2時間って言う日が続きました。

精神的にも、肉体的にも追いやられました……

今、考えると良く生きてたなと切に思います。

やっと落ち着いたので投稿する事が出来ました。

次回に関しては今回の続きと他の事を少し書きたいと思いますが、

投稿は約一カ月前後には出したいと思えますが、

製造課の仕事が入れば遅れるかもしれません……

投稿する時は活動報告などお知らせいたします。

今回も此処まで御読み頂きありがとうございました。

長板坡の戦い

後編

(前書き)

長板坡の最終章です。

「やあ、冥琳。無事で何よりだ」

一刀は親しき友人に話す様に挨拶をし、横に居る祭に向かっても礼儀正しく自己紹介をする。

「そちらに居られるのは宿将の黄蓋殿ですね？自分は北郷一刀と言います。」

真名や字はありませんので好きに呼んで頂いて結構です」

一刀の二つ二つの動作を注視する様に見ていた祭は、

「ほう、お主が北郷か……僕は黄蓋、字は公覆と云う。うむ、堅殿が言っていた通りじゃな」

一刀が祭の言葉に聞き返そうとすると、横に居た雪蓮が冥琳と祭に、

「冥琳、祭！！無事で良かった！！」

抱きついて叫び、両名を包み込むように抱きつく。

二人は雪蓮の先日までからの変わり様に驚き、為すがままに任せるしかなく立ち尽くしていた。

暫くの間が過ぎ、雪蓮が落ち着きを取り戻してから、彼女達に俺は聞く。

「さて、雪蓮が落ち着いた所で……三人ともに聞きたい事があるけど良いかな？」

俺の言葉に三人はこちらを向くと

「雪蓮には訊ねただけど、これからの事だよ。本当は冥琳と一緒に聞きたかったのだけど……」

そう言うと一瞬、雪蓮に視線をやって

「紅蓮の後を継ぐに際し、色々考える事もあるだろう？それに君達の中でも話合いたい事もあるだろう？だからこの話は後で……」

更に話そうとするのを遮る様に、

「報告！劉表軍が進軍を再開しました。本隊である張允軍に合流した文聘軍を後方に下がらせ  
周辺豪族達を中陣に配し、張允自身が先陣です。総数およそ2万1千」

「来たか……じゃあその事を軍師にも伝えてくれるかい？」

一刀が伝えると伝令役の兵士は

「黄権様には自分の同僚が伝えにっておりますので、もう暫くすればお越しになられるかと」

との事だったので「解った、ゆっくり休んで」とだけ言い下がらせ、そして三人に告げた。

「さて、聞いたとおり張允がやってくるみたいだから、雪蓮達は後方に下がってくれるかい？」

彼女達は最後まで「自分達も加わる」と主張したが、一刀が最後に言った、

「今の君達の兵士を庇って戦えるほど俺達の兵は多くない。それに君達の兵士にはまだ役割が残っているだろう？長沙を守ると云う大きな役割が…それに俺達には策が有るから心配ないよ」

その言葉に何の返答も出来ずに居たが冥琳だけは、

「その策とやらをお聞きしても宜しいか？それを聞かないと安心して撤退も出来ないが…」

俺が話すか迷っていると、後方より「黄」の旗をはためかせて現れる。

それを好機とみた俺は冥琳に、

「俺の軍師が良いと言ったらね？俺からは上手く話せそうにないからさ……」

と言いつつ口を閉じた。冥琳は何か聴きたそうだったが、俺が何も話そうにないのを悟り、

「そうか、では軍師殿に直接聞く事にしよう」

そう言つて雪蓮達と共に後方から来た詠の下に向かって行く。

しかし、冥琳には解っていた。軍師に聞いても教えてくれそうにない事を。

そして、その予想は現実の物となり、詠こと黄権に訪ねても良い返事は聞けず

彼女等はそのまま長沙に向け撤退する様に言われるだけであった。

#### 江陵、北郷軍別働隊

一刀達が別働隊を率い雪蓮の下へ行つた後、残つた霞と華雄、そして後からやってきた明実は、

江陵に居る王威、王粲に悟られぬ様に一通の書を夷陵に送る。そのまま何日かが流れてから、

長江を下つて江陵に何十隻もの軍船が現れ上陸を開始し始めた。

現れた部隊の旗印は「徹」「越」。徹里吉、越吉の二人である。

二人は現れると軍船より騎馬隊3千騎を発進させ南荊州軍を襲つた。これにより

零陵軍、桂陽軍は混乱し、更に追い打ちを掛ける様に霞や華雄らも攻撃を開始し、

あつと言つ間に戦線を維持できなくなり撤退を開始する。

その戦闘時、敢えて他の軍より離れていた武陵軍は零陵、桂陽軍に使者を送り、

自分達が「殿」《しんがり》を務めるから撤退する様にと伝え、霞や華雄らにも使者を送り、

自分達もこのまま撤退すると伝えて、そのまま武陵に帰って行つた。それを見送りながらやってきた明実に霞が訊ねる。

「なあ、あいつ等はそのままでいいんか？」

「鞆志の事か？面倒臭いから放置で……」

何時もの通り気怠そうに答えると、霞は少し呆れながら明実の顔を見つつ、

「面倒くさいから放置って……ふーん、まだ何か有りそうやな？なあ？もしかして、この後に何かあるんか？」

何かが引っ掛かった霞が訊ねると明実は、

「面倒臭いから却下。それよりも早く軍を纏めて江陵に圧力を掛けてくれ」

そんなやり取りをしていると徹里吉が越吉を引き連れ、

「貴女の御要望通りにしましたが如何でした？それで今回の報酬はどの程度頂けるのでしょうか？」

と訊ねる。しかし、明実は面倒臭そうに、

「ああ？そんな面倒臭い事は一刀に聞いてくれるか？それよりも江陵の包囲、

お前らも手伝って貰うぞ？その結果次第では、一刀に金額を上げる様に言ってもいいぞ」

と徹里吉の返事を待たずに言うと、まだ来てない華雄に気づき、後ろに居た伝令に

「華雄にも包囲に加わる様にと伝える。華雄は南、霞は西、徹里吉は東を任せた」

と霞達に聞こえる様に言うと、横に居た霞が、

「華雄と言えば……アイツらしゅうない戦い方をしottaな。何時もやったら敵が見えたら突っ込んで行くんに、じっくりと引きつけて攻撃しottaやないか？」

「ふん、詳しい事は本人に聞け」

明実は興味なさそうに答えると、最後に面倒臭そうな顔をして、

「あゝあ、まだ働かないといけねえのかよ……憂鬱になってくんない……」

そう呟くと更に気怠そうな声で指揮を続けるのだった。

劉表軍、文聘、張允

文聘は戻って来てから張允に向かって声を荒げて進言していた。

「このまま進軍しますと北郷とも闘う事になりますし、強いて言えばそれは劉表様からの

『兵の被害を抑えつつ帰還せよ』と言う命令を無視する事に成り兼ねませんぞ、張允殿!!!

しかも北郷には“あの”飛將軍呂布まで居るとの報告ですぞ!!!」

しかし、聞いた張允から帰って来た言葉は或る意味、予想出来た言葉でもあった。



「それではお前はそのまま撤退せよと？そして襄陽で俺は軍師連中に笑われよと言うのか？あれだけの兵を率いて、たった一部隊を討ち取っただけで帰還したとな？」

しかもその一部隊にあれだけの損害を与えられた無能者としてか？」

張允は拳を握りしめて言葉を紡いだ。その言葉の通り、先陣の豪族等は

祖茂の迎撃と最後の突撃により大きな損害を受け、後方に下がらせざるを得ない事態に陥り、その結果として自身の部隊と劉表より借り受けた部隊を前に出さなければいけなくなっていた。

その事から張允は正常な思考が出来なくなるほど焦っていた。そこで、ふと張允は考える。

(ここで被害を出してでも北郷を討ち取るなり、追い返す事が出来れば、大きな武勲になるな。目の前に居る文聘を動かしたいが、しかしこの様子では応じまいな……となれば我が部隊しか)

そう考えると張允は文聘に撤退するので退路を抑えるのを命じ、豪族達は脅して指揮権を奪い、中陣にひかえさせ、自分の部隊を先陣に置き迎撃を開始した。

#### 長板坡、北郷軍本陣

前方よりやってきた張允軍を、後方の軍勢と合流し1万弱となつた一刀達は、

長板波挟み、睨み合っていた。

しかし、この時の一刀の軍師詠の頭の中は、この戦の勝敗は既に決まっております、その為の布石も打ち終わっていた。更にはその後の事までの準備も殆ど終わっている。

それもその筈で、諷陵にいた時より稟、風、万里を始め、明実、音々、彩加、昇華、信思達、北郷軍の内政、軍政の要となる者達とともに今後の事も協議し、全ての選択を幾筋にも想定し話合っていたのである。勿論、一刀も一緒に参加して。

戦闘は先ず張允が長板坡を渡る所より始まる。騎兵を前に出し一斉に渡るうとするが

一刀に指揮を預けられた詠は、長柄を並べ、更に大盾を並べて威嚇し騎兵を足止めして、射程外より弓兵を以って斉射し騎兵を追い返す。張允はそれを見て騎兵を下がらせ、盾を持たせた歩兵を前面に押し出し突破を図った。詠はそこで、

「恋！！アンタの出番よ！！」

詠に呼ばれるまで一刀の横で赤兎に乗りながら寝ていた恋は、横に居た一刀を見て、

「…………詠が…………呼んで…………」

「気を付けて行つといで、恋。帰ってきたら一緒に食事にしよう」

その様なやり取りをし、やって来る敵軍兵に向かって行った。

張允

誰かが単騎でこちらにやって来るのを見た張允は、弓兵の隊長に射殺すよう命じる。

命令を受けた隊長は配下の者たちに命じて矢を番えさせて待機させた。

そして射程距離に入った時、隊長は命じた。「撃て!!」と。

盾を構えた歩兵の後方から、弓兵によって放たれた矢は一斉に恋を目掛け飛んで行き、

容易く恋の命を刈る筈だった。

しかし恋は方天画戟を一振りするだけで、自分に向かい来る矢を難なく捌き前に進む。

それを見た隊長は驚き、慌てて第二射を撃つように命じる。先程の倍の人数に。

射た弓兵もその光景を見た為、慌てて矢筒より矢を取り出し弓に番えて命令を待つ。

隊長は兵を見回し準備が整ったのを確認し、第二射の発射を命じる、「撃て!!!」と。

放たれた矢は先程の倍。今度こそはと隊長も自信を持って見ている。

が、放たれた矢は恋を指し飛んで行くが、恋はそれを慌てる様子も無く

先程と同じく方天画戟の一振りで振り払う。

そして恋は方天画戟を持ってない左手で赤兎の首を撫でて話す。

「……赤兎…行く…」

すると赤兎は闊歩していた状態から、直ぐに最高速に達し敵軍に走

り出す。

その光景を見た隊長は向かって来る者が只者では無い事に気づき、全弓兵に命令を出す、一斉射撃である。弓兵達も隊長の慌てぶりに驚きながらも、

2度の光景を見てしまった為、一斉に矢を番え様とした時だった。

恋が2度目の矢を振り払い敵に向かって行った後、恋に続けとばかりに一斉に対岸に居た

北郷の騎兵達が全速力でこちらに向かって来るのが確認される。

しかし、今の弓兵隊長には恋を如何にかする事が先なのか、やって来る騎兵に対応する方が先かを判断する時間は無かった。

何故なら……彼らには、先程までまだ相当向こうに居た、赤い馬に乗った紅い髪の死神が、真上に上げた方天画戟を振り下ろそうとしていたのである。

そして……その戟を振り下ろした場所に居た前衛の歩兵は盾ごと粉碎され命を絶たれ、その斬撃により地面は抉られ、その破片がその周囲の者を、更に後方の弓兵を襲う。

更に間髪入れずに横薙ぎにて半径に居た者達を掃うと、恋と云う突如現れた台風は、張允軍の中で猛威を奮い、兵を、隊長を巻き込みながら更に突き進んで行く。

「一刀の邪魔をする奴は……死ね」

言葉と共に攻撃の勢いは更に加速、あつと言つ間に部隊に穴をあけ段々と彼女を包囲する輪が

広がって行き、彼女の周辺は軀と化した兵で一杯になる。

しかし兵達は上官からの命令で恋を取り囲む。しかし兵達を驚愕させる事が起こった。

それは後続の部隊から一本の旗が上げられたことに起因する。それを見た将兵が大声を上げ、

「深…紅の…呂…旗。あつ、そいつは呂布だ。呂奉先だー！！」

その声が周りに居た兵士に伝わり、更にその周辺の將に伝わる。それと同時にその武勇伝が皆の頭の中に思い出されていく。

「一人で3万の黄巾軍を倒したってきいたぞ」

「虎牢関で將5人と一騎打ちをして互角だったって話だ」

「いやいや、俺が聞いた話では……」

などと戦闘を行って無い後方兵を中心に恋の話は広まって行き、段々と声も大きくなっていく。そして張允の下に話ぐる。

「あ、あ、あれが呂布か。ええい！！それよりも弓隊を援護せんといかん！！」

後方の槍隊、中陣の豪族等にも伝令をだし呂布を抑え込めと伝えい！！」

張允は伝令を放つが、呂布と聞いて混乱した部隊は直ぐに実行される事は無く、

又、命令を受け駆けつけた部隊も前衛部隊の混乱を治めようとするが、恋によって大きく

撃ち減らされた部隊を見る事により自部隊の士気低下が起こってしまふ。

そうこうしている内に北郷軍騎馬隊が先に張允軍に突入し、恋の開いた傷口を更に大きくしていく。

張允も何とかしようと思えこれと指示を飛ばすが、恋が突っ込み前衛が混乱し、

更に騎馬隊が敵軍に突っ込んだのを対岸の部隊から見ている詠は、

「ヨシ！！後はそれぞれの部隊長に任せるわ。そう皆に伝えなさい」と伝令に伝え、最早この戦いは終わったと認識し頭の中を次の行動の事に切り替えて行った。

張允の下には部隊からの悲壮な報告が入っていたが、更にそれを上回る報告が江陵より入る。

「南荊州軍が敗北後撤退し、程無く北郷軍が江陵を包囲し猛攻を加えております。

このままでは江陵は北郷の物になって我等が領土を狙う橋頭保とされてしまいます。

至急支援をお願いします！！」

と江陵の王威、王粲からの伝令であった。

張允はそれを聞き悔しがりながらも撤退を始める。

苦戦を聞きつけた文聘も駆けつけて、二人はそのまま撤退を開始。

恋とその部隊は或る程度までは追いかけたが、深追いは避けて長板波まで下がり戦闘は停止した。

雪蓮、冥琳、祭

詠に下がる様言われた三人であったが、北郷軍の様子を見る為に部隊の撤退準備を、他の指揮官に指揮を任せ、自分達は北郷の戦いを見る為に少し離れた場所から観戦していた。

戦いが終わった後、三人は自分達の隊に合流すべく馬を走らせていたが三人とも無言であり、気付いた時には部隊に追い付いた。部隊は野営の準備の最中であつた。

その夜、誰が言い出したでも無く雪蓮の天幕に冥琳、祭の2人がやって来る。

しかし集まつたは良いが、誰も話そうとせず少しの時間がたつた頃、「策殿は、昼間の戦闘に付いて如何思われた？」

と祭が切り出した事で話は始まる。それに続いて冥琳も、

「うむ、私はそれと北郷殿が言っておられた『今後の事』も聞いて置きたい。

先日までのお前なら危ういが、今のお前なら正常な判断が出来るだろう？」

冥琳は言つと雪蓮に向かつて視線を向ける。雪蓮は、

「先ず祭からね。私は呂布に尽きると言いたいけど、それよりも何よりも一刀ね。

今回荊州に来た呂布、黄權、張遼、華雄、法正、陳宮。

この内の全員が後に名將、智將と呼ばれそうなのにそれを集め、そ

れに奢る事無く今に至る。

そこらの辺りが一刀の強さで有り、力であり、能力なのかな？つて  
思うわ」

「今回の戦闘でもそうよ。確かに呂布は凄まじかったわ。鬼神と呼ばれるのも解ったわ。

でも指揮して戦場を支配したのは黄権でしょう？普通、これだけの者が居たら安心して

自分は後陣にでも下がってお茶でも飲んでると思うの。でも一刀は後陣に下がらず前線に近い

中陣の先頭に居た。それは呂布を信じ、黄権を信じているからこそ  
だと思っの」

そこで冥琳が、

「うむ、私もそう思う。ウチの軍勢では君主自身が先頭に立ちたがるからな。

しかも！！それを抑えるべき宿将までもが加担してしまう始末だからな……」

そう言っつて側に居る2人に向かって視線を送る。視線を送られた2人は、

態とらしく咳をしたり、視線を背けてなるべく目を合わせない様にしていた。

少しの時間そんなやり取りをして、冥琳は続きを話始める。

「しかし、今回の戦を語るのなら黄権だと思う。確かに呂布は凄かった。

我らが対抗するなら雪蓮、祭殿、思春、この三人を当らせなければ止める事は出来ないだろう。



しかし今回の北郷軍で一番怖かったのは、呂布の投入の仕方、その導き方、更に後方部隊の投入の時機その投入の仕方だ。その全てが黄権が一流の軍師である事を教えてくれていた。それが解っただけでもあの戦闘を見た価値はある」

そして冥琳は最後に、

「黄権は私に勝るとも劣らない人物だ。稟、風、黄権、徐庶、法正、陳宮。」

正直これだけの軍師を集めた北郷には畏怖すら感じる。そこでお前は如何するんだ？」

その視線は雪蓮と冥琳しか解らない温かな視線であり、

「何を言おうとも私はお前に従おう」と言っている様でもあった。

「そう……冥琳は解ってるのね？私が一刀に聞かれた事を？」

「まあな、大方の事は予想出来た。それに対しお前が如何答えたかもな……」

雪蓮は少しの間を置いて、冥琳、祭の二人に向かって、

「私は江東の地に母様の夢、皆が平和で、平等な国を皆で作る。だから協力して。冥琳、祭」

冥琳は雪蓮と視線を合わせたまま、暫くの間見つめ合って、

「そうか……やっと戻ったのだな雪蓮。一時は如何なるかと思った

ぞ。

しかし、お前の言う紅蓮様の夢は我等の夢。協力しない理由は無。それに紅蓮様に頼まれているからな、お前の事を」

祭も雪蓮の様子が先日より変わった事に安堵し、

「うむ、漸く策殿らしくなったわい。そうなればワシもこの老体に鞭打って、

もうひと頑張りしますかな……堅殿の夢の為、策殿の為、民の為に。恐らく徳謀（程普の字）や、義公（韓当の字）の奴も一緒の事を言うと思いますぞ」

そう言って笑っていた。そして二人を見て、

「そうね、母様が亡くなって少し焦っていたみたい……私。でももう大丈夫。

私には冥琳が居て、祭が居て、蓮華が居て、シャオが居る。

それに母様が居なくなっても居てくれる皆が居る。だから大丈夫」

彼女の瞳は前を向き、遠い彼方にある目標に照準を合わせる。

その後、冥琳と祭と一緒に明け方近くまで話し合っていた。

## 綿竹関 星

星は綿竹関の開かれた門を北郷軍の別働隊総大将として通っていた。

「それにしても劉璋が、どれ程嫌われているのが解る光景だな」

星の目の前には北郷軍将兵の他、劉璋軍の降伏した者や街の住民ま

でもが歓声を挙げていた。  
その光景を同じ目線で見ている稟は言う。

「その他にも我等の政策が正しいと教えてくれている様にも見えませんね。密偵の話によれば、

今回の戦で内通した者達全てが劉璋に良く思われてない者達でしたし、その中には

民間の者達も多数居ました。彼らは一刀様の統治を望んでいます」

今回の綿竹関では戦闘は殆ど行われる事無く、密偵と内通した者達が夜半に門を開け、

北郷軍を向かい入れた時点で終了した。劉循とその副将らは門が開かれた事を知ると、

成都方面に向け撤退して行き、その他の者はその知らせを聞くと呆気無く降伏した。

星と稟が話しているのを見て少し後方に居た風は、

「星ちゃんと稟ちゃんが頑張っているので、風はゆっくり昼寝でもしましうかね」

そう言い馬に揺られながら気持ちよく眠る。

城内に入った星は、兵達に色々と指示が終わりゆっくりしていた。その横では正座している風に先程の事で説教している稟を横目に桔梗や紫苑、焰耶が

話をしながら酒を飲んで居た。星もそれに加わって翌々日の事を話す。

「桔梗と紫苑は周辺豪族への呼び掛けと成都への進路の確保を頼む。

焰耶は私と一緒にここら辺の治安維持を担当する」

盃を傾けながら桔梗が

「ふむ、ではワシはここらの豪族たちに御館様の素晴しさを説いて回るか……」

進路の確保は任したぞ、紫苑」

それを同じく酒を飲みながら聞いていた紫苑は、

「ええ、解ったわ。私は自分の部隊を連れて行けば良いのかしら？」

「ああ、それで構わない。それと本陣からも5千程出そう。それでお主の部隊は1万になる。」

それだけ居れば闇雲に攻撃してこようとはせんだろう？」「

そんな話をしながらその日の夜は飲み明かす事になった。

#### 雪蓮の野営陣地にて

冥琳達と話しをして暫くすると、一刀からの伝令が書簡を持ってやって来る。内容は、

“明日の昼までに追いつくから話がしたい。その場所で待っていてとの事だったので伝令に返事を持たせてから雪蓮は冥琳と話合っていた。”

翌朝、歩兵を部隊長らに任せ騎馬隊5百で雪蓮の下に向かった一刀は、

約束の昼過ぎ少し前に雪蓮達が野営している陣にやってきた。

そこで通された天幕の中で一刀、詠、恋、雪蓮、冥琳、祭の6人は

お互いに机を向き合って  
話し合いを始める。

「本当はゆっくりしたいんだけどね……この後に行かなくちゃいけない場所が有ってね。

だから率直に聞かせて貰うよ」

一息おいて訊ねる。

「我が友、孫伯符に問おう。この後、君たちは如何するんだ？」

君自身の口より聞かせて貰いたい。その返答によっては出来る限りの助力を俺は約束する」

雪蓮は一刀の問いに、

「私は母、孫文台の意志を継ぎ、江南に豊かで民の為の国を、母を信じ、

私を信じてくれる皆と共に創る」

それだけ云うと一刀を意志の籠った目で見つめる。そして暫く見つめ合っていると、

「フツ、アンタの負けよ諦めなさい。そもそもアンタ自身が助ける気満々の癖して……」

一刀の横で話を聞いていた詠が後半部分だけ声を小さくし、そう言う  
うと一刀も、

「あゝあ、雪蓮達をウチの軍に引っ張れると思ったのにな……しよ  
うがない、詠!!」

後は任せる。前に話していた事を説明してやってくれ」

そう言うと詠が、一刀に視線を送り聞く。

本当に良いのね？今なら江陵以外にここら周辺の統治が可能よ？」

そう問われた一刀は何の迷いも無く答えた。

「ああ、構わない。だから頼む」

詠は一刀を暫くの間見つめた後、反対側にいる周瑜に視線を合わせ、

「此処から先はアンタとボクの二人で話したいのだけど、良いかしら？」

冥琳は詠の視線を受け止めて一言、

「ああ、構わない。ではこちらに……」

そう言って自身の天幕に連れて行った。

投稿が遅れ申し訳ありません。少し仕事でゴタゴタしてまして…  
…。  
それとスランプに陥りましてもう一度初めから読み直して、  
プロットの書きなおしをしておりました。

最近自身の職場でインフルエンザが大流行しております  
中々に人が揃わずに困っております。皆様も注意して下さい。

次話は一刀の事とそれ以外の事を書いて行きたいと思っております。  
今話も此処まで御読み頂きありがとうございました。

**雪蓮の選択（前書き）**

皆さんお久しぶりです。

如何しようか悩んでやっと仕上がりました。



## 雪蓮の選択

詠が冥琳に連れられて出て行った後、一刀は雪蓮に色々な話を話していた。

他愛ない話しに始まり、姉妹の話、紅蓮の話、仲間の事、今後の事。話をするにつれ雪蓮は今後の事に頭を悩ましている事に気づく。

それは付いて来た者達の事を中心に、紅蓮の夢であった江東に国を持つ事を

真剣に悩んでいる証拠であり、しかし今の孫策軍はそれを行う力を付ける事さえ困難な状況。

それらを冥琳と必死に考えていたのだろうか、昨夜はあまり眠っていないと言っていた。

彼女の隣に居る黄蓋さんも眠そうな感じである。

対して俺の隣では恋がスヤスヤと寝息を立て、俺に倒れ掛かって寝ていた。

その恋の姿を見て雪蓮は、

「こうして見ると只の女の子ね…その娘が戦場では悪鬼も裸足で逃げると言われる呂布なのよね？」

「ああ、でも普段は思い遣りのある優しい娘だよ」

俺は答えると恋の頭を起こさぬ様に優しく撫でる。

暫くの間、俺がそうしているのを雪蓮と黄蓋さんは黙って見ていた。そして俺が恋の頭から手を放してから少しして、

「ねえ、一刀？貴方に聞きたい事が有るのだけど？」

「うん、何だい？俺に答えられる事なら答えるけど？」

雪蓮に視線を向けると同時に、

「聴きたいのは貴方が母様に送った手紙の事よ。あの時、母様が話を受けたら貴方は如何してた？」

「君はあの手紙を見たのか？」

質問に質問で返されて少しムツとしつつも雪蓮は、

「ええ、母様が見せてくれたわ。私の他にも冥琳と祭も見たわよ」

そう言うつと横に居る祭も頷きつつ一刀を見る。すると一刀は驚きながら、

「そうか……紅蓮は…君に。俺はあの手紙と費緯に頼んだ通りの事をしようと思っただけさ。」

あの時、紅蓮に何か良くない事が起きそうな予感がしたんでね……。しかし紅蓮に断られてしまった。只、それだけが残念だよ……」

と言った後は顔を両手で覆い黙ってしまった。

「一刀……貴方、泣いてるの……？何故……？」

雪蓮は信じられない物を見たという様子で、祭は一刀が何故泣いているのか理解出来ず、

その場で金縛りにあった様に動けなくなってしまう。

その場の雰囲気が変わった事に気付いた恋が起きて、

「……一刀…大丈夫？」

と一刀を心配そうに気遣っていた。

暫くの間、その状態が続き一刀が顔を上げると話を続ける。

「…済まない。あの時紅蓮が俺の提案に乗ってくれていたら、それと俺がもっと

積極的に動くべきだったのかもしれない……そう思うと…ね」

一刀の言葉に後悔が滲んでいる事を察し祭が尋ねる。

「何故お主は、堅殿の為にそこまでしようと思ったのだ？」

すると一刀は祭の方を見て、

「紅蓮は俺を必要としてくれました。例え劉表さんとの勢力争いが有ったとしてもね。

断り話をした後に真名を預けられた時、少し驚きましたが嬉しかったです。

その後、何度か会った時も誘ってくれたし、反董卓連合の時も色々話をしました。

？水関、虎牢関の時も手伝ってくれましたし。何より紅蓮といっとこっちも楽しくなれました」

一刀がとても楽しそうに、それでいて話している紅蓮を敬っているかの様に話すのを見て、

「そうか……堅殿がお主を気に入ったのが解る気がするぞ。堅殿は最後言っておられた。

お主や曹操と一度、恨みつこ無しで勝負したいとな……」

言い終わると祭は天幕から出て行った。祭が出て行ったのを見て、

「そう……貴方の理由はそれなのね？」

雪蓮は一刀を黙って見つめていた。

冥琳の天幕にて

天幕に着くと二人はもう一度名乗りあつて席に着き、話を始めたのは詠からであった。

「貴女なら話は解るわよね？貴女に対しこれから話す事の内容は？」

そう言つて詠は冥琳と孫家の今後の展望を話す。

「ああ、我等がこれから選べる選択肢は「3つ」程か……」

直ぐに詠が

「ええ。「3つ」「よ、周公瑾殿」

すると冥琳は眼鏡を直しつつ、

「ほう？袁術、北郷、長沙。我等にこの中から選べ。そう言つのかな？」

「ええ。貴女達がどれを選ぼうとボクとしては関係無い。例え長沙を選ぼうと。」

その後、周囲から攻められ滅亡しようと僕は構わない。寧ろ北郷の

軍師としては有り難いわ」

詠は眼鏡を直しつつ更に続ける。

「だって成長したら厄介な勢力が、今は弱っている。こんな機会はないわ。ボクなら吸収するなり  
攻め滅ぼすなりするわね。躊躇い無く…ね」

そう言つて冥琳に視線を向けて、

「でも我等が君主は、アイツはそれを望んでない。それは解るわよね、周公瑾殿？」

「ああ。北郷殿が遣ろうと思えば、我等と戦っている劉表軍ごと叩けばよかつたのだからな？」

それをしなかつた、と云う事は何か考えが有るといふ事だ。それに北郷殿とは何度も

話しているのだ。その考えも大分読める様になつたし、紅蓮様が、孫堅様が最後まで

信じておられたのだ。私も彼を信じなくてはなるまい？」

「それなら良いわ。では話を続けるわよ。アンタ達の選択として長沙が下策、

北郷が上策と考えると、袁術が中策となるわね」

「ふむ…では聞こう。我等が北郷殿に従つと、どんな「利」がこちらにあるのかを聞きたい」

そう冥琳が尋ねると詠は、

「貴女自身解っている癖に聞くの、周公瑾？」

と詠は少しイラつきながら冥琳を睨む。しかも冥琳の名を呼び捨てにして。

だが冥琳は気にもせず落ち着いて話す。

「北郷軍の軍師の貴女の口から聞きたいのだよ、黄公衡殿、否、賈文和殿？」

「……………」

「……………」

しばしの間お互いの視線が交差するだけの時間が流れる。だが最初に口を開いたのは詠で  
目を伏せて溜息を吐きながら、

「ボクは黄権公衡。賈文和では無いわ」

詠が言うとお互いの視線が再度交差する。が、冥琳は、

「そうか……………ではそうしておこう。で、話してくれるかな、黄公衡殿？」

「フン、利ね……………まず敵から、主に劉表、袁術からは容易な事では狙われなくなるわね。」

そして貴女達には北郷と云う後盾が出来る。それを背景にしてまた再起を図れる。

それに貴女なら解るでしょう？アイツは我等の主君は降って来た者を巧く使う天才よ。

恐らくは荊州に近い何処かの城を任せて劉表達への盾となって貰う事になると思う」

冥琳は詠が喋っている間、彼女の声を聞きつつ、表情も見逃さずにいた。詠の話が何処まで

本気で真実なのかを見極めようとしていたが、彼女は表情を変えず淡々と話す為

中々見極められないでいた。その間にも詠は話を続ける。

「我等が益州を纏めた後か、張魯の居る漢中を治めた後にアンタ達の手伝いをする。

これは情勢によって変わるから断言は出来ないわ。実際、既に張魯は劉璋からの援軍要請に応じ、

剣閣に攻め寄せて来た。恐らくは益州を纏めた後に張魯を討伐すると思う。

貴女達はその間、任された土地や城で、劉表達に睨みをきかせつつ傷を癒し力を蓄えれば良い」

そこまで言つと詠は冥琳に、

「これが中策の全容。北郷の軍師達の総意と思って貰っても構わないわ。

貴女達の「利」は安全に傷を癒せ、力を蓄えられる。ボク達も劉表達に対し盾が出来る。

これで良いかしら、周公瑾殿？」

詠に問われ冥琳は迷っていた。目を瞑って深く考える。

（中策を聞く限りこちらにも大きな利はある。先ず疲弊してしまつた勢力の回復。

更にその間に生じる危険の減少。雪蓮達の安全の確保。その全てを北郷の領地で行える。

現在、北郷と戦える勢力はこの荊州には存在しない。劉表と袁術が同盟しても互角になるか如何か。

しかし紅蓮様との戦闘で傷付いた劉表は、表だつて大きな戦闘は起こせない筈。

袁術も江夏、夏口の接收から日も浅く、更に劉備との戦闘で紀霊と多くの將兵を失つた代償は大きくこちららも荊州に向けての更なる大きな軍事行動は当分起こせない）

そこまで考えて冥琳は次に別方向から考える。

（北郷の「利」を考えると彼女の言った通り、先ず我等を盾にする事により劉璋、張魯

それに国内に注力出来る事。もし我等が抜かれた場合や裏切つた場合も考えての提案か……。

この策で一番危惧するのは北郷の情勢。劉璋は恐らくもう半月も持たない筈。

だがその後に行われる張魯を討伐に失敗、もしくは時間を掛けてしまえば我等の再起の時間は大幅に遅れる事となる）

そこまで考えると冥琳は思考を止めて、自分の対面に居る詠に向かつて、



「これは私一人で決められる事では無いな。だから少し返答は待って欲しいが良いかな？」

「ええ、直ぐに出せって云うのも酷でしょうし、少しなら良いわよ」  
冥琳は答えを聞き少し安堵して、

「もう一つの袁術は大体想像できるが説明してくれるか？」

そう話すと詠は、

「ええ。貴女達は先ず袁術の庇護の名の下で扱き使われる事になるわね。それも最前線で。

恐らく何度かは使えるかどうかの確認を込めて、現在袁術領内で起こっている反乱鎮圧に  
駆り出される。そして使えたと確認出来たら国境を侵されている劉  
？か劉表の何れかに  
送り込まれる。監視付きでね」

そこで区切って詠は更に話す。

「貴女達が勝てば更に他の地に送られ、疲弊しボロボロになるまで  
扱き使われて、御終い」

と最後はおどけて話し冥琳を見つめる。すると、

「ああ実際そうなる事は容易く想像出来る。だが袁術は紅蓮様の頃  
からの付き合いでもある」

そう言うと良い笑顔で笑いながら言う。

「私が彼女の扱い方を知らぬとても思っていないだろうな、黄公衡殿？」

「勿論。でも相手は腐ったとしても三公を輩出した名門。その武力、勢力共に、今の貴女達に勝ち目は無い。例え貴女達が誇る一騎当千の精鋭であっても。」

しかし時間を掛け、策を巡らせて戦いを挑むなら話は別」

詠はある竹簡を冥琳の前に渡す。冥琳はそれを不審に思いつつも受け取って読みだす。

「……………ッ!？」

その様子を観察しながら詠は、

「本当は「それ」他国の軍師に見せてはいけない物なのよね……………」

詠の呟きなどお構いなしに、冥琳は文頭から出鼻を挫かれ、その書簡を読み終える後まで背中から汗が引かなかった。その文面の文頭。そこには

『現在の袁術の勢力分析（判明不可の場所は予想も含む）』

と書かれており、その内容は冥琳が知るより遙かに詳しく記載されている。

内容は袁術の治める領地の城の強弱、財政状況、軍力、将軍、その配下まで書かれ、

その内容は確かに他国の軍師に見せれるものでは無い。

更に詠は立て続けにもう一本の竹簡を出し冥琳に差し出す。こちらには、

『現状の孫堅軍残党（今後は孫策軍と呼ぶ）戦力状況』

と書かれており、その記載された内容はかなりの精確さを得ていた。その文を読みながら冥琳は、

（これはもう筒抜けと云う状況ではないな……我らも、他国も……）

### 雪蓮

一刀が呂布と天幕より出て行って、私は暫くの間、一刀の事を考えていた。

私は何か凄い者を相手にしていたのかも知れない。初めて会ったのは荊州。

その時の感想は「大した者」でもそれだけ。

しかし母様は違った様だった。何かを覗う様な素振りも、その後直ぐに真名を授けた事も、

今考えれば母様は一刀に何かを感じ取ったのだらう。

その答えが解ったのは、それから半年ほどしてから……。

母様は長沙を。一刀は諷陵をそれぞれ与えられてからの事だった。

母様の長沙は荊州の州都、襄陽に次ぐほどの盛況に沸いていたと思う。

しかし一刀の治める諷陵はその比では無かった。

周囲に散開していた黄巾の残党を一月程で、その殆どを自軍の傘下に加えたばかりか、

討伐と同時進行で諷陵城、白帝城の悪徳官吏、商人の徹底取り締まりを敢行。

その後は税制改革、領内整備を行い、現在諷陵・白帝城は大陸でも屈指の商都となっている。

北郷の報告を受けた時、母様は複雑な顔をしていたのが印象に残っている。

次に会ったのは反董卓連合の時。

その際に前に感じた印象は最早消え、太守として、君主としての心構えと共に、

何かしらの覚悟が彼には芽生えていたのかもしれない。その時の気配は今でも忘れられない。

感じられた気配は母様、曹操が持つ覇道の気、そして桃香、妹の蓮華の持つ王道の気。

その全てを合わせた様な感じ。一重に言って今まで感じた事のない雰囲気だった。

その気を感じたのか母様も曹操も一刀に敵対しようとはせず、連合の主導権争いをしていた

母様と曹操は一刀の話に耳を傾ける。

そして董卓軍との戦い。その全てを一刀は裏から操って見せた。連合を解散させた切っ掛けを作ったのも一刀達だった。

食料不足で苦しむ領主、領内が不安定な領主等を誘い袁紹に詰め寄って堂々と表より撤退。

この後、連合は士気が上がり、長安に撤退した董卓軍を追うも呂布に散々に撃ち負かされ

洛陽に戻ってきた。そして洛陽で解散。何か褒章を期待した者達には散々な結果となった。

私達と桃香、馬超の三隊は洛陽の復興をしていた為、大きな被害も受けずに

民からの感謝を受け、母様、桃香、馬超の名は大陸中に響き渡る。

洛陽復興全てが一刀からの提案であった事を知っているのは十指に満たない。

私達で知っていたのは母様と私、そして冥琳だけ。

その後は母様が玉璽を見つける。これに関しても一刀からの手紙にて書かれていた事。

冥琳はその事を不審に思っていた。「何故自分が見つけ有効に使わないのか？」と。

母様と冥琳はその玉璽を拾った事を、噂として流す。

それが新たな噂を呼び母様の名声は更に高まった。

私が一刀の事を考えていると天幕の外より声がする。冥琳の声だった。

#### 雪蓮の天幕にて

冥琳の声があったので私は考えを止め、冥琳を天幕にと招き入れる。すると、

「何を考えていたんだ？何度か呼んだぞ。寝ているのかと思った」

と冥琳が尋ねるので、

「ええ、ちよつとね」

そう言葉を濁す。そして私は席に着いた冥琳の雰囲気を感じ質問した。

「冥琳の方も終わったみたいね？一刀からの提案は何かしら？」

「フツ、お前に隠し事は出来んな……」

「そうよ。もつどの位の付き合いだと思ってるの？」

と二人で笑いながら冥琳が話すのを待った。

「まず、話の前に言っておく。これは私の考えと北郷殿の考えを纏めた物だ。

それを踏まえて考えて欲しい」

との前置きが入り冥琳は話し出す。

「我等がこれから取るべき道は「3つ」だ。一つ目は袁術に庇護を求め、

再起の機会を覗くと云うもの。これは時間が掛かる上に袁術の駒にされ潰される恐れがある。

只、成功すれば袁術の領地が丸々手に入る上に、紅蓮様の悲願であった江東に国を作れる」

それだけ話すと次の選択肢の話に移る。

「二つ目はこのまま長沙に戻り再起を図ると云うものだ。これはかなり時間が掛かる上、

紅蓮様が屈服させた太守達を相手しなければならず、更にこれに劉表も出てくる可能性が高い。

しかも今集まっている兵、資金、兵糧、武具。その内の半分以上が紅蓮様の名声が集めた物で、

お前の名声で集まった物ではない為、今後はあれ程の兵力も資金も集まらない。

長沙だけの税でやり繰りしながら、劉表や他の太守達の相手をしなければならぬ」

話を聞いていた私は、

「でも、一刀や他の武陵、零陵、桂陽の三太守は話し合いが出来ないかしら？」

「まず、北郷殿は助けしてくれる可能性が高いが、如何せん距離が離れ過ぎている。

夷陵から長沙までどれだけの距離が有ると思っている？

他の太守達は話し合いすら困難だな。紅蓮様には従ったが、それは紅蓮様の力を恐れての事。

北郷軍に負けた勢力を取り戻せば、力を失った我等を攻めてくるのは火を見るより明らかで、

我等は防ぐ事なら出来るが、攻める兵力が足りない。しかもそれに劉表が加わる恐れが大きい。

そうなれば何度かは防げるだろうが、最終的には滅ぼされる公算が高い」

私が黙って聞いているので了承したのと判断し冥琳は続ける。

「最後は北郷殿に庇護を求める事。袁術の時と違うのは私達を扱き使う事は無いと云う事と

袁術や劉表、武陵及び他の太守達からの攻撃はまず無くなると云う事。

全員が連合してくれば別だが、そんな事はまずあり得無い。

ただ小競り合い程度は覚悟して置かねばなるまい。主に劉表辺りと

な……」

冥琳は眼鏡を外して、

「こちらの利は安全に再起を図れると云うもの。今の大陸でも屈指の強者であり、商都として現在の大陸の富を集める白帝城、諷陵を擁す北郷を攻める者が何処にいる？我等は恐らく夷陵か、これから取れば江陵辺りを任されて、北郷の盾とされる」

冥琳はそう言っていると眼鏡をもう一度掛けて、

「只、こちらにも問題が無い訳ではない。もし北郷がこの後に行われる漢中討伐に失敗した時や、

北郷軍内部で心変わりが起きた時は、再起が遅れる事や最悪の場合、我等は北郷の中で餓殺しにされる恐れがある。それを含めて軍師を観察したが、

今の所、黄権にそんな思惑が浮かんでいる様子は無かった」

話し終わると冥琳は、私の方に視線を向けて、

「で、北郷殿は如何だった？何か収穫が有ったのか？」

と訊ねるので、起こった事を在りのまま話す事にした。

そして話し終わると冥琳は溜息を吐いて、

「紅蓮様にそこまでの感情を……北郷殿も紅蓮様と同様に何かを感じたのかもしれぬな」



そう言うと冥琳は少し穏かな表情をして、

「今回の提案は少し考える時間をくれるそうだ。だから皆に相談しても良いが、

なるべくお前自身の考えで出す事を期待している」

言い終わると冥琳は立ちあがって、

「お前がどれを選ぼうと私は、お前と共に在る。だから好きに選べ。袁術であろうが、劉表であろうが、北郷であろうが。例え何が有っても護つて見せる……」

そう天幕の入り口で言うと言って行った。

残された私は目を閉じて、これから起こる事を真剣に考えていた。

## 雪蓮の選択（後書き）

何やら周辺が花粉症で騒がしくなつて参りました！！！！  
アトピー体質の癖に花粉症は無い憂鬱です。

今回は雪蓮がメインです。

少し他の方の作品を読ませて頂きまして、  
他の方と差を出す為に、色々な道筋を考えまして……

私はオリジナルと云う道を進もうかと思えます。

これで有る程度の方は解つてしまつかと思えますが、答えは次回に  
……

何名かの方々に情報を貰いまして、アルカディアの方で自分の事が  
訊ねられていると聞き、見に行つてみました。誠に有り難く存じま  
す。

このような駄文書きですが、これからも宜しくお願い致します。

最後に……誤字脱字がありましたらお知らせください。

今回も此処まで御読み頂きありがとうございます。

**更なる試練、蜀征服（前書き）**

御久し振りです。

真恋姫無双 〱新〱第38話目をお送りいたします。  
後半部分、稟と風が少し黒いです……

## 更なる試練、蜀征服

稟、風、星

一刀が雪蓮と今後の事を話合っている頃、星達は既に成都を攻略し城下の混乱を治める為、軍師勢を中心に色々と指示を出していた。

綿竹関を攻略後、紫苑を先頭に成都について早々、星は稟、風の作戦通り成都を包囲し全兵による一斉の降伏勧告を行う。しかしその包囲は一方の逃げ道を敢えて開けた、不完全な物で、それは暗に「逃げたい者は逃げれば良い」と言っているようであった。

星が率いる威風堂々とした軍勢と絶え間なく続く降伏勧告の大声により、城壁の上より見る兵達の戦意は当初より低かった物が更に低くなる。更に成都を包囲した星達に対し、劉璋始め主だった将達は有効な対策を立てられず、しかも浮立つ将兵を抑えようとしても抑えきれず、3日程の時間が経つと大半の将兵が北郷軍に降伏したり、沈没船から逃げ出す鼠の様に我先に成都より逃亡し、星達が包囲して5日後には主だった将達は居なくなる。

残された兵達は謹慎中だった呉懿、呉蘭、雷銅の屋敷を訪ねて自らの指揮を委ねた。呉懿らはこのまま戦つか迷うが、残った将兵達の戦意の低さを見て

戦えないと判断し、  
降伏勧告を受け入れる事を決め、元同僚でもある桔梗に使者を送り  
降伏した。

ここに成都の平定は完了し、蜀全域を一刀は領土にしたのである。

成都に入城しその一室で稟達が最初に行ったのは、残っていた文  
官、将兵の処遇であった。

主だった将は逃げ出し、残っていた主だった文官は王累、劉巴、鄭  
度で、

稟は三人に先ず登用を打診する。それに応じない王累、劉巴には、

「貴方達の処遇は一刀様に行って頂きます。そこで一刀様を見て今  
後の事を決めれば  
良いでしょう。その為に白帝城に行って頂きます」

と白帝城への移送を命じ、登用に応じた鄭度は、そのまま現在の仕  
事を行う様に命じる。

呉懿、呉蘭、雷銅の3人は自分達の身柄と引き換えに、残された  
将兵に罪を問わない事を

稟に求める。稟は呉懿らの要求を受け入れ、全ての者の罪を問わな  
い事を確約し、  
それに伴い呉懿達も白帝城に移送する事を決め、彼等の処分も一刀  
に委ねた。

文官、将達の処遇を終えると、次は街の状況を把握し、混乱を抑  
える事であった。

「白帝城の万里、昇華、信思にこちらは片付いたので、こちらに向

かう街道沿いに  
混乱が起きてないか確かめる様にと、混乱があればそれを取り除いて欲しいと伝えなさい」

稟がそう伝令に伝えていると、その横で風が紫苑と成都の状況を事細かに分析していた。

「酷いとは聞いていたけど、此処まで酷いなんて……」

「そうですね。風も呆れたとしか言い様が無いですよ」

彼女達が驚いているのは税率の高さと使い道、官吏達の腐敗、そして治安の悪さであった。

稟と風は先ず、高めに設定されていた税率を北郷領と同じ税率に戻すと同時に、劉璋政権内で公金横領・賄賂を行い私腹を肥やした官吏とその者らと結託していた商人を見せしめの為に財産没収の上、国外追放として成都に蔓延る悪習を改めさせた上で、成都の商人達に北郷領と同等の権利と規則を与えて商売を再開させた。

稟達が今後の事で話し合っていると、粗方の兵に指揮を終えた星が部屋に入って来る。

星は稟達を暫くの間、何も言わず眺め続けて彼女等が一息付けそうな所になって話しかけた。

「稟、御主に言われた通りに指示は出して置いたぞ。桔梗、焰耶は2千人ずつ引き連れて

成都の清掃と警備に向かった。後、御主に言われた通り、各門の検問と警備を命令しておいた」

と星が行った事を報告すると、

「ええ、解りました。それとこれを貴女も読んで置いて下さい。王累殿と面会し聴いた、

この国に起こっていた事の顛末です」

稟は星に向かって一枚の用紙を差し出す。星は受け取って読み始める。

「ほう……桔梗や焰耶、紫苑達から聞いた劉璋殿の性格と、今回の我等に対する対応の悪さは  
暗愚な劉璋にしても酷いと思っていたが、蜀の内部でこのような事が起こっていたとはな……」

～ 概要はこうである ～

劉焉が亡くなり劉璋が益州牧となった時、先代劉焉に仕えていた者達を劉璋は突如、

大部分を地方に左遷する。この時劉璋にそう進言した者が居た。

それは黄皓ワウコウと云う宦官であった。

彼は劉璋の側仕えとして仕え、劉璋に御世辞を言っでは出世してきた様な者であり、

その為に全くと言って良い程に政治を知らず、政治は自分の懐を満たすだけの手段でしかなく、

その為に犠牲となる者の事など知る由も無かった。

そんな者が実権を握った為、蜀の政治は混乱を招き、更に黄皓が自身に都合の良い者を

役職に付けた為、政治は末期的な状況にまで追いやられてしまう。

王累達は黄皓を排斥しようとするが劉璋は取り合わず、反対に黄皓によって閑職に追いやられ

抗議すら出来なくなってしまう、黄皓の権力は大きくなり、最早誰も逆らえない様になっていた。

しかし北郷が攻めて来た時、彼は積極的に動かなかった。否、動けなかった。

黄皓は軍隊を動かした事など無く、彼が期待した劉循も綿竹関にて敗北してしまう。

更にその責任を巡って軍部と政治家が対立し、成都に迫る北郷軍に何の対処も出来ずに、成都を囲まれてしまい此処でもその責任転嫁を繰り返し、如何にもならなくなると逃げ出す始末であった。

～ 概要終了 ～

「で、呉懿達に連れられて降伏して来た劉璋は如何する？後、この黄皓と云う宦官を

私は見てないが？何処に居るのだ？」

すると稟は、

「劉璋殿はこの成都の城の一室に居ます。一刀様の決済を頂かねばなりません、

彼には何処かの領地にて隠棲して頂きます」



そう稟は星に向かって説明すると、

「後、黄皓ですが劉璋を見捨てて成都を脱出し逃げていましたが途中の検問で捕縛され、  
今こちらに向かっています。彼には成都に着き次第、混乱の責任を取って頂きます」

星は稟の言葉で黄皓の運命を悟り、

「そうか、捕まったのなら良い。主には事後報告するのだろう、御主達は？」

「ええ、その様な小者の為に一刀様の御心を騒がす訳にはいきません」

星は部屋を出る際に、

「主は果報者だな。御主を始め、聞き耳立てている風や紫苑達みたいな忠臣がいるのだから」

と言って出て行く星に、稟との会話を聞き耳立てていた風が後ろから、

「いいえ〜一番の果報者は御主人様に仕えている皆ですよ〜。  
あの方は風を、稟ちゃんを、紫苑さんを、無条件に信じていますからね〜。」

風達もそれに応えなければと頑張ってしまうのですよ〜」

最後に紫苑が星に向かって、

「それは星ちゃんも解っているのではないのかしら？」

星は紫苑の最後の問いに振りかえらずに、

「そうだな、御主達の言う通り、一番の果報者は仕えている我等だな……」

と呟いて出て行った。

### 一刀、詠、恋

雪蓮達に説明してから一刀達は陣に帰って来て一息ついた後、一刀の天幕で、

「さて、雪蓮達にはこちらから言う事は殆ど言い終えたし、後は江陵に向かった劉表軍の背後を叩くだけかな、詠？」

一刀が詠に聞くと、

「ええ、孫策達がどれを選ぼうと、僕達にはどれでも得する様になつてるからね。

長沙に戻れば、滅ぶまで何もしないのも手だし、向こうが泣き付いて来れば恩を売れる。

また袁術の下に行っても、袁術の勢力を奪うまで時間が掛かるだろうし混乱も起きる。

その間に僕達は孫策達の居ない長沙を含む、南荊州を手に入れる事も出来るし、

上手くいけば夏口、江夏までを奪う事も、劉表と袁術を争わせる事も可能よ」

詠は最後に、

「アンタの下に来るなら孫策達を劉表・袁術の盾として使い、僕達はその間に益州の整備、軍備の充実を図る事が出来る。その間に孫策達にある程度の支援は必要でしょうけど、

自分達で戦うより遥かに被害が少なく費用も抑えられる。それに孫策側にとっても破格の条件でもあるわ」

と詠の言葉に一刀は、

「本当に詠が味方で良かったよ。俺なんか、そこまで考えられないからね」

との一刀の言葉に詠は、

「僕なんかの可愛い方よ。此処だけの話だけど、稟と風は孫策がもし裏切る様なら、

喜んで葬り去るわよ。アンタの為にね……そして残った使える者だけ吸収して…孫家は御終い」

と少し声を落して告げた。そして最後に、

「もし彼女達がアンタの下に来るなら、ちゃんと手綱は握って置きなさいよ」

詠と一刀が密かに話している横で、恋は一刀に寄り掛かり「スースー」と寝息を立てていた。

一刀が恋の髪を撫でようとした時だった。

「北郷様、黄権様に申し上げます!!」

雪蓮、祭、冥琳

雪蓮の天幕で、冥琳は昼間詠に語られた事を雪蓮と祭に説明し終えていた。

「此処までが昼間、北郷殿の軍師黄権より言われた内容だ。二人とも何か有るか？」

「いいえ、内容は良く解ったわ。祭は？」

「うむ、ワシは特に言う事はない。それで冥琳、御主はどれが一番じゃと思っておるのか？」

と祭の問い掛けに、

「私は雪蓮が進む道を付いて行くだけです。それは貴女もそう思っておられる

と考えておりますが……祭殿？」

冥琳の返答に、

「ふっ、言いよるわ。そうじゃな、冥琳の言う通りじゃ」

と祭は立ちあがって天幕から出て行くことし、出口まで行ってから、

「聞いている通りじゃ、策殿。ワシと冥琳は策殿の進む道について行く。」

徳謀や義公達の考えは聞いて無いが、皆同じ考えだと思っぞ」

そう言うと祭は天幕を出て行く。それから暫くしてからだった。一人の伝令が息急き切ってやって、

「孫策様、周瑜様に申し上げます！程普様より伝令です。長沙城留守役の韓玄が謀反！！

孫堅様の御逝去の混乱に乗じ、長沙を内部より攻撃され奪われたとの事。

更に長沙陥落と共に、零陵太守劉度、武陵太守金旋、桂陽太守趙範らが孫堅様との同盟を破棄し、

劉表軍に従う事を表明し、それに韓玄も参加する事を明言しました」

机に座っていた雪蓮は伝令の報告に烈火の如く怒り、机を叩く様にして立ち上がり、

「おのれ韓玄！！冥琳！！今すぐ長沙に戻ってあの狸を叩き殺すわよ」

横に居た冥琳は雪蓮に、

「落ち着け雪蓮！！お前が怒れば怒る程、今の状況は更に悪化して取り返しの付かない

事になって行くぞ。怒るなどは言わん。言わんが余り表に出さぬ様にしろ。

そして自分の中で怒りを抑え込め。そうやって紅蓮様もやっていた筈だ」

冥琳は雪蓮にそう言い聞かせ落ち着かせると、報告に来て雪蓮の怒りを目の当たりにし、

低頭し震えている伝令の側に行き落ち着かせ、

「すまん。大丈夫か？」

「はっ！！申し訳ありません。取り乱しまして……」

伝令が落ち着いたのを確認して、

「徳謀殿は如何すると言っていた？後、その事を蓮華様や穩、陸遜には伝えたのか？」

「程普様はこちらに引き返すと仰せられ、孫権様は陸遜様の御説得により

こちらに向かつております。皆様に何事も無ければ明日の夕刻には合流できるかと」

「そうか御苦労。ゆっくり休んでくれ」

と冥琳は伝令を下がらせて雪蓮の方を向き、

「徳謀殿は長沙を奪い返す事を断念したようだな。そうでなければ引き返す様な真似はしまい。

恐らくだが、我等が全軍で長沙を包囲したと同時に他の三太守達から背後を突かれる事を、  
危惧したのだろうな」

そう言つと雪蓮の元まで行き、

「また韓玄の後ろで糸を引いている劉表の所の軍師連中がその様な謀略を企てて無いとは考えられんな」

そう言うと席に座り別の兵を呼び、

「北郷殿にこちらに来て欲しいと伝えろ、至急だ」

と指示を出し兵が出て行こうとした時だった。

「その必要はないよ、冥琳」

声が聞こえると同時に一刀が天幕を開けて入ってきた。その横には詠と恋も一緒に。

成都城内の一室にて

一刀が雪蓮の天幕を訪れた丁度その時、成都を立て直そうとしていた稟と風の二人は、

休憩を兼ねてと同時に密偵や商人達の情報網より送られて来る報告に目を通していた。

「長沙留守役の韓玄が怪しい動きですか？これは雪蓮さんには更なる試練ですねー」。

後は御主人様に付くか、袁術に飼い殺されるか。ここでの道の間違いは

致命的に成りますからねー」

そう風が呟くと横で聞いていた稟は、飲んでいた御茶を片手に、

「そうですね。これで孫家は孫堅と云う大黒柱を失い、更に本拠地までも失う事になりますか…」

これで私達が立てた策の一つは潰れてしまいましたね、風？

孫家を長沙と云う檻に縛り付けると云う……」

「そうですねー。虎の子を大人しくさせる良い機会だったのですかね。」

これは仕方ないかと思うのですよ。違う意味でいえば天はまだ孫家を見離してないのですよ。」

沈み掛けている船と思い我先に逃げ出そうとするのは人間としては仕方のない事なのですよ。」

風が言い終わると稟が続ける。

「天が見離して無いですか……それと本当に沈んでいるのか如何かの判断は別にしてですね。」

孫家の場合はまだ傾いた位ですか……孫家には優秀な船頭が居ますからね、冥琳と云う者が。」

それらを加味すれば幾らでも立直れそうな状態と気が付く筈ですがね、良く考えれば」

稟の後に一緒に居た紫苑が尋ねる。

「噂で周瑜殿の事を聞いた事がありますが、御二人がそこまで気になる程の方なのですか？」

との問いに稟は、

「策略や謀略、戦略と云う点では、恐らく私や風、詠が知恵を出し合い互角と云う処ですかね？」

今彼女が私達と立場が変わって居れば、容赦なく私達を潰し、その勢力と必要な者を

孫家に組み入れるでしょうね。私達は一刀様が反対なさるのでしま



せんが……」

と返答すると風が、

「成るべくなら、こちらに引き入れるか潰すかをして置きたい人ではありますね〜。

その為の策だったのですがね〜。長沙で周囲の太守さんと劉表さんに囲まれ攻撃され、

孫家からの援軍要請が有るまで動かず、要請が来たら人質を取ると云う策だったのですよ」

更にその後を稟が続ける。

「妹の孫権殿、孫尚香殿の何れかをこちらに預けて貰い、その上で援軍として駆け付ける。

その際に一刀様が反対なさるでしょうが、その時には別の条件を考えただけです」

そして最後に、

「雪蓮殿の資質、冥琳殿の知謀、黄蓋、程普、韓当の宿将の力、そして孫権殿を始め、

それを支える陸遜、甘寧、周泰と云う次世代への希望もあります。

これだけの潜在力を秘めた者達を江東に放てばどれだけの脅威になるのか想像もつきません。

要はまだ幼い虎の子を長沙と云う檻に閉じ込めたいのですよ。人質と云う鎖付きでね」

そう言って稟は風と共に部屋を出て行った。残った紫苑は、

「貴女達はそう言っているけど、私には全て御主人様の為としか聞  
こえなかったわね」

そう呟くと彼女も部屋を後にするのであった。

## 更なる試練、蜀征服（後書き）

今回の震災で被害に遭われた方の対し心よりのお見舞いを申し上げます。

今回の震災で自分の会社の部品工場が福島県いわき市にあるのですが、その工場も大変な状況になってました。

写真で見たのは大きな段差が出来て機械が横倒しになっていたり、積んでいた部品が落下して通路を塞ぎ動けなくなっていたりしていました。

それらの対応の為、自分達の工場からも復旧の為に応援に行ったり、部品が届かない為に工場を休みにしたりして大変でした。

また毎日のニュースで見る原発関連の報道や避難された方々の生活を見て、少し暗い気持ちになっていましたが、被害にあった友人が思いの外元気で、反対に励まされてしまいました。

そんなこんなで、本当に久しぶりですが更新いたします。何度か見直しましたが誤字脱字などが有るやもしれません。みづかりましたら御教え下さい。直ぐに修正いたします。

今回も此処まで御読み下さり誠に有難う御座いました。

## 雪蓮の決断（前書き）

更新が大幅に遅れ申し訳ありません……

まだ課題が出てきてない……試験は追試……昇格したくない……

何か色々と頭を巡っておりますが、気にせず行きましょー！！！！！！

## 雪蓮の決断

一刀が冥琳の許可を得て天幕内に入って行くと、そこには雪蓮が苦しそうに

自分の身体を掴んでいる姿が目に入る。その側では冥琳が雪蓮の身体を後ろから支えて

席に着かそうとしていた。そして、一刀に気づいた冥琳がこちらに向き声を掛ける。

「北郷殿、申し訳ないがもう暫くお待ちいただけませんか？」

「ああ、構わないけど……雪蓮は如何したんだい？」

冥琳は雪蓮を席に着かせてから、

席に着き何かを耐えてるような雪蓮を見ながら答えた。

「雪蓮は気が昂ぶると自我を制御出来にくくなるのです。紅蓮様もそうでした。

孫家の者だけの血がそうさせるのでしょう。主に戦いや血を見るとこうなるのですが、

雪蓮の場合は更に怒り等でもこうなってしまうのです」

雪蓮の背を優しく撫でながら冥琳は続ける。

「今は自制する事が難しいですが、自制出来る様になれば雪蓮は更に大きくなれると信じています」

そう言う冥琳の顔は心の底から雪蓮の事を安じる様に穏かだった。

暫くの間、雪蓮が元に戻るまで他の天幕で待つ事にした。

一時待っていると天幕の中から冥琳が呼びに来て中に入る様に言われる。

一刀は恋に外で待っているように言っていて中に入っていた。恋は少し不満そうな顔をしながらも外で待つていることに頷く。

天幕に入って行き席に着いた雪蓮を見ると、いつもと変わらぬ様な雰囲気はこちらを見て、

「一刀、待たせてごめんなさいね。もう大丈夫だから。

それで……態々、貴方が私達の所に来た理由は長沙の事でしょう？」

といきなりこちらの用事を言い、一刀が答える前に更に続ける。

「今回は私達にとっても誤算だったわ…私達を裏切った韓玄は母様には従順だった。

それを母様は信頼して今回留守役にしたのだけど…確かに強者に媚びる性格ではあったわ。

それにしても母様が亡くなってから、こんなに早く掌てのひらを返すとは思ってもみなかったわよ」

そう言う雪蓮の様子が少し変わってきているのを見て、また心配になり冥琳は、

「雪蓮、落ち着け。北郷殿、この先は私が答えさせて貰う」

冥琳が後を続ける。

「先ずこちらの被害は長沙を失った以外は特に無い。先行させてい

た程普殿、その後に住た孫権様

及びその他の者に被害は無い。また長沙に住た孫家の親族らも無事逃げ出しこちらに向かっている。

明日中には全員がこちらに揃っている事だろう」

そう言つと冥琳は一度雪蓮へ視線をやり、今度は雪蓮が頷いて続ける。

「ここからは私が言つわ」

そう言つて一度呼吸を整えてから、

「私達を貴方の下に匿つて欲しい。冥琳から色々聞いたわ。そちらの軍師と話した事を。」

その際の話とは別に私達から一つ認めて欲しい事が有るの。良いかしら?」

一刀は「とりあえず言つてくれるかい?」と、言つて黙り雪蓮を見る。

「認めて欲しい事は……私の妹の蓮華、孫権を貴方の国で客としてあの娘を預かつて欲しいの。」

そして出来るなら貴方の側で政治の事を勉強させてやって欲しいの」

雪蓮の言葉に一刀は横に居る詠に視線を向ける。

すると詠は冥琳をジツと見つめ、冥琳も詠を見つめていた。

暫く見つめ合い詠は、

「そう……そう言つ事。ちょっとコイツと話して良いかしら?」

そう言つて冥琳に許可を取ると一刀を天幕の外に誘いだして、

「アンタは如何したい？向こうは稟や風の人質と云う手を見越して手を打つて来たわ。」

これでアンタが孫権をいい加減に扱えばアンタの名は下がるし、大事に扱えばその分、

孫権は北郷の庇護の下、生命の保証と北郷の状況を知る事が出来て、孫家の損には成らない」

「状況を知られるのは構わないが、機密を知られるのは困るな……けど、

俺には雪蓮が妹を心配して言っている様に聞こえたけどね」

そう一刀が自分の考えを呟く。そして、

「でもまあ、重要な事は基本的に君や稟、風達に一任してるし、機密は皆、自分で保管して

いるだろうし、大事な物は保管庫に置いてあるから大丈夫だろう。

ただ詠が心配しているのは孫権さんが来た時、護衛と一緒に密偵や暗殺者が来る事だろう？」

そう問うと詠は黙って頷き、

「そうよ。もし孫策が裏切ろうとした時、ボク達を混乱させる為にアンタや僕や他の軍師を

襲つて混乱させる。その隙に孫権を脱出させ人質を救出してから万全な状態で戦いに挑む。

そんな事も考えられるのよ。まあ周公瑾がこんな愚かな方法を取るとは考え難いけどね。

確かに孫策はそう言う気持ちかもしれないけど、周公瑾は明らかに



別の思惑があるわ」

そう一刀に向けて言うと詠は最後に、

「この孫策からの要求の根底にあるのは、軍師達の思惑とは別にアンタ自身の思惑を探る為とボクは見たわ。この要求を呑む事でアンタが軍師達とは別の思惑があり、

それに基づいて行動していると考えられるし、呑まなければ軍師達の思惑が主だと考えられる。

これはそういう別の所での腹の探り合いでもあるのよ」

「……………俺にはそんな気持ちなんて無いのにな」

そう語る一刀の横顔が少し哀しそうに見えたが、一刀がこちらを振り向くと、

「じゃあ詠、戻ろうか。この件は俺に任せて貰って良いか？」

そう言うと詠は少し考え、

「アンタは如何すんの？」

詠の問いに対し一刀はにこやかに笑って、

「その探り合いに敢えて乗ってやる義理は無いだろう？俺にはそんな気も無いし」

そう言って天幕に入って行った。その後ろ姿を見ながら詠は、

「フン、好きにすればいいじゃない」

そう呟き一刀に続いて天幕に入ってしまった。

~~~~~

天幕に入っの一刀の第一声は穩かにこう告げた。

「その条件を受け入れるよ、雪蓮。ただウチの中枢部の事は教えられないし教える気も無い。

それだけは覚えておいて。孫権さん自身が見て何かを感じ取ったと云うならそれは構わない。

後は詠が冥琳に話した事と変わらないと思う」

しかし、そう言つと一呼吸置き真剣な表情をして、

「只、一つだけ覚えておいて欲しい。もし……もしだよ。

謀略で俺の国を混乱させようとした時や誰かを殺め様とした時は……

……覚悟して欲しい」

そう言つて一刀は雪蓮と冥琳の顔を交互に見て表情を崩し、

「それだけを守ってくれれば俺から何も云う事は無い。また稟や風にも俺からちゃんと

話はして置くし、君達に危険な無茶な真似をさせたりはしない」

雪蓮と冥琳は少し驚いた顔をしたが直ぐに立ち直る。

もう一度、一刀を見ると何時もの顔に戻っており、先程の表情が嘘の様であった。

二人が呆けている中、一刀は、

「後の細かい事は全て詠に聞いてるよね？」

と二人の方を向き尋ねる。二人は黙って頷いたので更に続ける。

「俺から一つだけ条件を追加したいのだけど聞いてくれるかい？」

一刀は話すと雪蓮と冥琳とで交互に視線を合わせる。

雪蓮は冥琳を見て二人がどちらとも無く頷くと「聞かせて」と一言だけ話し今度は雪蓮が黙り込む。

一刀は雪蓮を見ながら、

「ウチの主要産業の一つである水運業に支障が出るくらい、最近ウチの商船や  
一般人を襲う輩やからが出没しててね。ウチにも水軍が居るけど数も少なくて、  
練度も低くてね。そいつらを何とかしたいので手伝って欲しい」

一刀が言い終えると冥琳は空かさず、

「我らが手伝うのは構わないが、主に何をしたら良いのか教えて欲しいのだが？」

と訊ねて来たので、

「出してくれるなら甘寧を借りたい。もしくは新兵の訓練を頼みたい」

と一刀が云うと冥琳は少し悩みながらこう答えた。

「これは雪蓮や皆と相談してからで返答しても宜しいか？」

冥琳の返答に一刀は笑顔で「構わないよ」と応えて、

「俺からの追加条件はそれだけだ。追加条件の話だけど断つても俺の機嫌が悪くなるとか考えなくて良いからさ。他の事で聞きたい事が有るなら、今聞くけど？」

そう一刀が二人を見回しながら尋ねると、

「私は特に言う事は無い。北郷殿を信じる事としよう」

それだけ言うと静かに何かを考える様に一刀を凝視していた。雪蓮は冥琳が何も言わなかったのを不審に感じ冥琳を見るが、冥琳は何も言わず雪蓮の方を一度だけ振り向いて頷いた為、

「ふーん、まあ冥琳が何も言わないから私は何の問題も無いわよ」

と雪蓮の返事の後、今度は詠が二人に向かって今後の事を話し始める。

「コイツの所に来てから貴女達には色々とやって貰う事が有るわ。街道の治安活動の手伝い。未開拓地の開墾、各都市の清掃活動。そしてコイツの提案の事。」

それと同時にやって貰いたい事が有るのよ」

詠は言うつと懐から一枚の書状を出して冥琳に見せる。それを見て冥琳は、

「我等に袁術勢力の切り崩し工作を行えと？」

「ええ、これ位は独立を考えている貴女達でやって貰わないと、こちらとしても困るのよ」

詠は冥琳に向ける視線を幾分か穏かにして、

「いきなり、やれって事じゃないわよ？ある程度はこちらが御膳立としてある。

貴女達の名を騙<sup>かた</sup>って、袁術の周りには不自然にならない程度には話をしてあるし、

袁術自身には大好物の蜂蜜を結構な量、孫策の名で送ってあるわ。

それに……」

詠は最後に雪蓮達にとっては衝撃的な言葉を呟く。

「貴女達が袁術と接触した事を、僕たちが知らないと思っているのかしら？」

そう言うと詠と冥琳の視線が交差しながら詠は話を続ける。

「此処まで言えば解るでしょう？この後如何するか、貴女なら」

すると冥琳が天幕の外に居るであろう衛兵に向かって、

「誰か」

と言うと衛兵の一人が天幕の中に入って来る。冥琳はその衛兵に向かい、

「袁術殿に使者を出せ。内容は、『我らは当初の予定通り、北郷軍の内部に偽り降って潜入する。北郷の情報を持って、袁術殿の下に戻る。我等は袁術殿の為に働く所存』とだけ伝えてくれ」

と衛兵に告げ、衛兵は去って行く。そして冥琳は、

「これで良いのだろう、黄権殿？」

「ええ、上出来よ」

次に冥琳は一刀に向かって、

「北郷殿。この件の後の事はこの私に任せて貰っても宜しいか？」

と尋ねる冥琳は自信に満ち溢れていた。一刀が詠に視線を向けると、詠は少し考えて黙って頷いたので一刀は、

「ああ、周公瑾の御手並み拝見とするよ」

「それにしても……」

冥琳は言葉を止めると一刀と詠を見回して、

「我らが袁術に接触していた事まで知っていたとは驚きましたな。ですが、

これで漸く分かりました。我らが袁術に接触した時に何の疑いも無く袁術が話を聞いてくれたのは

貴方達のお蔭だったのですな」

冥琳は何かを隠す様にそう話すと、それから詳細な話を詠と冥琳、そして一刀、雪蓮の四人で話しあってから一刀達は帰って行った。

く その帰りがけの一刀達 く

馬に揺られながら一刀は独り言のように呟いた。

「さて残るは江陵か……」

「ええ、後は明実達と合流して考えた方が良くもね。落とせそうなら落とせば良いし、時間が掛かりそうならば、そのままにして白帝城まで帰るのが一番ね」

一刀の言葉を聞き洩らさなかった詠はそう答えくぎを刺すように言う。

「後、何度も言うけど、孫策達の事はこっちでも目を光らせて置くけど、

アンタも良く見張って置きなさいよ。もし周瑜辺りが何か仕出かしたりしたら

孫家の面々は本当に只じゃ済まないわよ」

その詠の問いかけに一刀は「ああ」と言うだけに留めただけだった。

く その頃、雪蓮達は く

「何か言いたそうだな、雪蓮？だが少しだけ待ってくれるか？これ

が終わった話す」

先程から黙って自分を見ている雪蓮に、これからやる事を頭の中で整理している冥琳は

そう雪蓮に言って集中した。それから5分ほどして、

「お前が聞きたいのは北郷殿の提案のことだろうか？」

「ええ。貴女が何も言わない事に違和感を感じたのよ。普段の冥琳ならもう少し詳しい事まで

話を詰めると思ったわ。それが何も言わずに一刀を信頼するなんて言うもんだからさ……」

すると冥琳は何事も無かった様に、

「私に考えあつての事だ。まだお前にも話す事ができないほどの物だがな……」

そう答えると冥琳は雪蓮に向かって、

「お前も色々やる事があるだろう？そろそろ私は自分の天幕に戻る事にするよ」

何か言おうとする雪蓮を他所に、話をそこで中断させて天幕の外に出て行った。

天幕を出た冥琳は、急ぎ早に自分の天幕に戻ると其処には周泰と明命が待っており、



「おかえりなさいませ、冥琳様？」

「ああ、明命か。如何した？」

冥琳は自分を迎えた明命が自分を気にしているのが分かった為、なるべく自然に振る舞いながら、

「私の事は気にするな。それよりもお前に聴きたい事がある。お前に袁術への接触を頼んだが、誰かに悟られたり、接触して来たりはしてないか？」

冥琳のいきなりの言葉の意図が良く解らずも、

「私が袁術に接触した時、袁術の側に居たのは腹心の張勳だけでした……。」

確かにすぐに受け入れてくれたのは不審に思いましたが、誰にも気づかれ無かったと思います」

明命はその時の事を良く思い出しながら話す。すると冥琳は、

「そうか……明命少し近くに寄れ」

言葉に従って明命は冥琳の傍に近寄ると、

「我らが袁術に接触した事を北郷はなぜか知っていた。

私がお前に頼んだ為、この事はお前と私しか知らぬ筈。明命すぐに

北郷の

「  
そう冥琳が囁いていると明命は冥琳の話が終わる前に慌てて、

「ちよつ、ちよつとお待ちください、冥琳様。その事は私しか知らされていませんし、私も細心の注意を払って袁術の下に赴おもむきました。道中は変装していましたが、主に夜間に移動しましたので尾行されていたら気づきます」

明命の慌てる姿を見て冥琳は明命の混乱の原因に気づき、

「まあ待て、落ち着け明命。私はお前が裏切ったとは思っておらんし、その様な事をする奴で無い事は良く知っている。だからお前に頼むのだ」

その言葉に安心したのか明命は落ち着いたので冥琳は、

「ここまで言えば解るな？恐らくは袁術の側近の中に北郷への内通者が居るのだろう。それが誰なのかを探る事だ。それと北郷領への密偵を更に多く潜入させる」

冥琳からの命令に「了解しました」と答え、その場を後にした。

その夜、冥琳の天幕では夜明けまで明かりが消えなかったと云う。

## 雪蓮の決断（後書き）

G・W明けに研修を入れられて、反抗しましたが無理でした…  
r z 0

何とか追試も終わり投稿できるまでに漕ぎ着けました。

これも研修中に応援して下さいました皆様のお蔭です。

この場を借りて御礼申し上げます。

今回は姉妹喧嘩を入れてから、他の方々の話に移りたいと思います。

静寂 ～嵐の前の静けさ～（前書き）

更新しました。行進します。宇宙と交信してます。孝心しているつもりです。

日本語って難しいですね。

今回は雪蓮達がメインですが、一刀の話は次回への前振りです。

## 静寂　　嵐の前の静けさ

その夜は特に何も大きな騒動も無く、雪蓮達は久しぶりに静かな朝を向える。

彼女に付いて来た者たちも寝ずの番の者達を除き、静かに寝静まって翌朝を向かえていた。

昨夜の内に後方からやってくる蓮華や程普達には使者を出しており、今日の夕刻には現在、雪蓮に属する全ての者が揃う事になっている。

昼近くになって雪蓮は自分の天幕の寝台から起きて来て、天幕の机にだらしなく伏せる。その様子を一部始終を見ていた冥琳は、

「お前は私の存在に気づいていながら挨拶の一言も無いのか？」

「う…ん、おはよう冥琳。もう少し寝させて……」

そう言つて冥琳の顔を見て一応、机から顔を上げて挨拶をすると、また伏せて眠りに入ろうと目を閉じた。

しかし冥琳は溜息を吐いてから雪蓮の後ろに回り込み持っていた竹筒を握り占めて、

「それに言い忘れたが…もう『おはよう』ではなくて『こんにちは』だ!!!」

雪蓮を文字通り叩き起こした。

「うつつ、痛い……」

冥琳に叩かれた所を擦りながら食事を終えた雪蓮はその後、色々と冥琳に押し付けられて

その日一日は自身の天幕より出る事を許されず夜を迎える。

合流予定時間より少し遅れてその日の夕方過ぎに蓮華こと孫権が、更に遅れる事、

3時間程して程普が戻って来て、挨拶を含めた会合を行う事となり大天幕に集まる事となった。

そこで一言目を発したのは雪蓮で、

「皆、無事で何より。祖茂の事は残念だったけど…彼女のお蔭で私は生きていける事を忘れない。

余り暗いのも何なんで、せっかく久しぶりに集まったのだから宴会でもしたいけど……

一人睨んでいるのがいるから今度にするわ」

と横から冥琳の視線を感じて話を戻して席に座る。すると次に冥琳が立ち上がった話が始めた。

「皆様ご無事で何よりでした。徳謀（程普）殿、蓮華様も良く無事に戻って来て下さいました。

特に徳謀殿は孫家の皆の家族、親類縁者を保護して下さい感謝の言葉もあります」

そう言って頭を下げた素直に感謝する。それに対し程普は、

「礼を言うに及びませんよ、公謹（周瑜の字）。それに礼を言わな

ければいけないのは私ではなく、皆を逃がし、その指揮を執った朱然、そして彼女の指揮に従った長沙の兵達に言うべきでしょう」

そう冥琳に言う。冥琳は「そうですね」とだけ言って穩や思春の方を向き、

「穩、それに思春も蓮華様の付添い、護衛御苦労だった」

そう冥琳に言われた二人は「いえいえ」「はっ」とだけ応えて席に座る。

皆に挨拶とお礼を言った後、冥琳は皆を見回し雪蓮に視線を向けると、

「さて、皆に集まって貰ったのは他でも無い。これからの方針の事だが……」

「待つて冥琳。それは私が言わないと駄目でしょう?」

雪蓮は冥琳と視線を合わせ、暫くの間お互いを見つめあう。

その間、程普、韓当の二人は何日前の雪蓮とは雰囲気が違う事を不思議に思いつつも、今の雪蓮の精神状態が決して悪く無い事を察し、見詰め合っている二人を見守る事とした。

それとは反対にまだ人の様子を観察する事が得意ではない蓮華（孫権）は、

二人が仲違いしたものと思い、止めようと席を立とうとするが、横

に座っていた穩に  
いきなり腕を掴まれ彼女を睨みつけるが、穩は二人の邪魔にならぬ  
様に小声で話す。

「大丈夫ですよ、蓮華様。お二人をよく見て下さい。何日か前の  
雪蓮様とは  
別人の様に雰囲気が変わりますから」

穩の言葉にもう一度姉の姿を見ると、確かに冥琳と見つめ合っては  
いたが、  
二人の間には仲違いの気配はなく、何か視線で会話して居る様にさ  
え感じられた。

「穩、姉様に何があったのか知っているの？」

姉の変化に気付いた蓮華は穩に尋ねるが、

「いいえ。冥琳様に訊ねましたけど教えてくれないのですよー」  
と言いつつも穩は何となくではあるが予想は出来ていた。雪蓮を元  
の雪蓮に戻した、  
自分が直接話して確認した人物の事を……

程普と蓮華が相違う事を考え見守ってから少しの間を置いて「解  
った」とだけ呟いて、  
冥琳は席に座る。そして今度は雪蓮が立ち上がった、

「冥琳と祭とも話し合ったのだけど……私達の状況は今現在、最悪に  
近いわ」



第一声にそう話すと天幕内は諸将達のざわめきで騒然となったが、雪蓮はそのざわめきを気にせず話し続ける事とした。

「皆も知っている様に母様が亡くなり、多くの者達は私を、孫家を見限って去って行った。

また昨日には韓玄が私達の本拠であった長沙を奪い、太守を自称したのは知っての通りよ」

雪蓮の言葉に歯ぎしりする者、机の上に出している拳を握りしめる者など、

雪蓮が見渡せる限りの者が何かしらの行動で韓玄への怒りを鎮めようとしているのが見える。

それを見ながら雪蓮は本題に移る事とした。

「私達の進むべき道は最終的に考えて「2つ」しか無いわ。

母様と親交があるけど斜陽の感が否めない袁術を頼るか、

旭日昇天きりぎりすの勢いの北郷に保護を求めるか」

そう告げると雪蓮は皆の反応を確かめず、

「私は一刀に、北郷に保護を求める事にしたわ。この考えに至った理由は3つ。

一つ目は北郷に近寄ればその威を恐れて私達に手を出してくる者は皆無に近いと云う事。

二つ目は北郷一刀自身がやって来て私に来いと誘ってくれた事。そして、

三つ目は北郷の条件が私達にとって有利になっている事の三つよ」

雪蓮は話し終えると周りを見渡すと、

蓮華の隣に座っている穩が冥琳に視線を向けている事に気づき、それに冥琳も気づき、

一回だけ頷いて視線を逸らした。それを見ながら雪蓮は、

「私の考えに異論の有る物は居るかしら？異論が有るなら言って」

言い終えると自分の隣に座っている妹の蓮華（孫権）から手が上がっているのが見えた為、

蓮華を指し、自身はそのままの体制で蓮華の発言を聴く事にした。

「私は反対です。北郷がどのような言葉で姉様に近づいたのかは知りませんが、

私達には他に取るべき道が有るのでは無いですか？」

「では、言ってみなさい蓮華」

落ち着いた声で雪蓮は言うと、蓮華の答えを待つ事にした。

「今ここに居る兵で長沙を落とすというのは？」

「それは現実的に無理ですー、蓮華様」

それを即答で横に居た穩は否定し、蓮華に向かって

「今の私達の状態は先程雪蓮様が仰っていた通り、最悪に近いです。兵の士気は一向に上がらず落ち続けていますし、脱走者も未だに後を絶ちません」

そう告げると更に、

「今の私達は総勢で4万を超えますが、その半分以上が長沙から逃げてきた者達で  
女子供が半数以上を占め、私達で戦える者もそれほど多くありません。」

更に食料や資金の蓄えも残り僅か。この状況で城攻めなんて以ての外としか言えません」

穩にそう否定され蓮華は、

「では姉様が言った袁術に庇護を求めるのは如何なのだ？」

袁術に庇護を求め、その内部に取り入って袁術の勢力を私達のものにするに云うのは？」

しかしこれは冥琳が否定する。

「それも今の袁術の勢力では無理としか言いようがありません、蓮華様。

まず、袁術の勢力が大きく北郷と互角、もしくは勝っているなら話は別ですが、

最近の無節操な侵略戦争によって大きく勢力が落ちています」

そう話すと冥琳は眼鏡の位置がずれたのか、眼鏡を指で持ち上げつつ続きを話す。

「その侵略戦争も勝っていれば何の問題も無いのですが全て惨敗に近く、袁術軍の戦場指揮官で

まともだった紀霊すら劉備に討たれてしまい、江南の戦いでは劉に押されています。」

そんな中で我らが袁術に庇護を求めれば如何なるかは火を見るより

明らかでしょう」

冥琳の説明に穩が続く。

「そうですねー。私達は弱っているとはいえ、将も兵も精強で知られていますし、それを解っている張勳さんは『此れ幸い』とばかりに私達に休息を与えた後、戦場に行く様に仕向けるでしょうねー。しかも勝ち続ければまた何処の戦場に行く様にされて…」

更にそれを冥琳が補足する。

「もし袁術の勢力が北郷と同程度で紀霊がいれば、張勳は我らを自分の目の届く所に置き、蓮華様か小蓮様を人質にして雪蓮を前線に赴かせる事でしょう。何故なら上手くいけば、雪蓮を亡き者に出来るかもしれませんし、出来なくとも袁術の敵を討つ駒としてまた次の敵に回す。それを繰り返し行えば自分達の被害は抑えられ損は無いのです」

しかし冥琳は少し笑みを浮かべ、

「しかしその場合なら我らにも機は巡ってきます。戦場で戦いつつ名を上げて

張勳の目を欺きつつ、袁術勢力の内部を侵食する事も出来ましょう」

そう冥琳の考える予想を話すと、

「しかし、今の袁術達の状況では悠長に構えている時間を周りが与えてくれません。」

北は曹操に攻め込んだのは良いが打ち負かされて寿春・汝南を脅かされ、西を劉表、張繡が、東は劉？に圧迫され、南は会稽の山越、潘臨はんりんに領内を荒らされている状態です」

袁術の状況を説明し、そして冥琳は最後に、

「今の状況がもう少しマシな状況で、且つ袁術の所に張勳が居なければ

袁術の下へ行くことも考えたのですが……」

そう言っつて話を締めた。

冥琳、穩の軍師二人が蓮華の案を否定したので、それ以外の事を思い付かない蓮華は

黙って席に座ってしまふ。しかし雰囲気は明らかに北郷の所に行く事を拒絶している様であり、  
気になつた雪蓮は、

「蓮華。貴女はなぜそこまで一刀を拒否するの？」

と尋ねると蓮華はいきなり取り乱して、

「そんな事はありません！！わっ、私は北郷みたいな者に我らを孫家の者を託して良いのか、

それが心配なのです。それ以外の感情はありません！！」

「みたいな者？」

雪蓮は蓮華のその発言が気になり訊ねる事とした。

「貴女、一刀と何かあったの？」

「ええとですねー雪蓮様。実は」

すると穩が雪蓮にこちらに向かう途中で一刀に会った事、そこで話した内容を話し出す。

穩が詳しく説明し終わると雪蓮は少し黙ってから、

「ッ!? くつくつくつ……はは、あはははははは!!!」

突然笑い出した彼女を皆が何事かと注視すると雪蓮は、

「くつくくく。蓮華、貴女、一刀にそんなこと言われたの!!!」

あっはははは、もう可笑しい!!! 確かに一刀も言えた口じゃないわよ。あっはははははは」

雪蓮がお腹を抱えて笑っているのを見て冥琳や程普、祭の他、その場にいる者達が、

「（雪蓮（様）（策殿）がこれ程笑っている姿は久しぶりだな（です）ね）（じゃな）（）」

そう思いつつ雪蓮の方を暖かな視線を送っていた。しかし笑われている蓮華は、

いきなり姉が笑い出したのが自分の話だと云う事もあり、

「何が、何がそんなに可笑しいのです!!! 姉様!!!」

そう憤慨しだすが雪蓮はあまり相手にせず、目に涙をつつすらと浮かべたまま、

「あゝ可笑しかった。あのね蓮華。貴女は一刀の事を良く知らない筈だから言っとくわ。

私は貴女より一刀に何度も会っているから解るのだけでもね」

雪蓮は蓮華を見ながらそう話す。目にはまだ先程の笑泣いた涙の後に薄らとみえる。

「貴女はまだ一刀の怖さを知らないのよ。確かに貴女には母様も私も期待しているわ。

でも貴女はまだ巢立っても無い虎兇に過ぎない。まだ巢の中と周辺を知っているだけ。

反対に一刀はこの大陸に早くも自分の巢を持ち、他の巢を力づくで覗くだけの力を持った龍ね」

その言葉の意味を悟った蓮華は、

「たとえ北郷一刀が龍だとしても、流石に私達や袁術、劉表の三つの勢力を一斉に

相手には出来ないでしょうし、私達の巢の中を詳細にまで知っている事は無いのでは？」

蓮華の問いに冥琳が答える。

「蓮華様。残念ながら……もう我らの情報は筒抜けと言って良いほど知られています。

更に言えば袁術に関してはもう詳細にまで……北郷の情報網に私は

恐怖すら覚えます」

冥琳の話聴き蓮華は

「冥琳、貴女何か知っているの？」

「ええ私は北郷の軍師、黄権からその証拠を見せられましたからね。私達と袁術の内情と詳細な情報をね…」

と蓮華の問いに冥琳は答えると一斉にその場が静かになるのが分かった。すると、

「北郷が怖いのはその情報を司る軍師達つかやが全て同じ方向を向いている事。

これは武将達も同じ。そして北郷の頭脳達は一刀の意思とは別の方向に思考を向ける事が出来る。

それは単に一刀ひっえの事を思つての他ならないと云う事。これに関して武将も同じ事」

と雪蓮は冥琳と話し合つた北郷に関する事を、蓮華だけで無く皆に話す。

「その情報力の他に益州を制した巨大な力があるわ。そして一時休めば、

その力は更に大きくなってこの大陸を飲込まんとして動き出す事は間違いないわ」

雪蓮がそこまで言うと蓮華は何かを閃き姉に向けて話し出す。

「それでは北郷の勢力を奪い取るというのは？」



そう言った瞬間、

「私も同じ事を考えた。でも私には出来そうに無いし恐らくそれを行動に移した瞬間…」

そこで区切って雪蓮は一刀の事を思い出し、蓮華を見て、

「私達は、孫家は……この大陸から消されると思いなさい。これは皆にも言っておくわ。」

私と冥琳はもう一刀に言われているのよ。誰かを傷つけたりしたら許さないとね」

と妹に、皆に言い聞かせる様に言った。

それから暫くは誰も話そうとせず5分ほどが立った時、

「ねえ、雪蓮お姉ちゃんに聴きたいのだけど」

と末妹の小蓮（孫尚香）が不意に質問してきたので「何？小蓮」と尋ねて小蓮の言葉を待った。

「雪蓮お姉ちゃんには北郷の所に行く条件を出されたのでしょうか？」

それを詳しく説明して欲しいのだけど。何か言い難い事なら無理に話さなくても良いのだけど…」

条件の事を話す前に冥琳と見つめ合い、その後に蓮華の質問に答えていた事もあり、

完全に忘れていた雪蓮は（冥琳もだが彼女は何事も無かった様に振舞っていたのは流石である）

「アッ」と小さく声を出して、

「ありがとだね、シャオ。貴女が言ってくれなかったら忘れてたわ」  
そう小蓮に頭を掻きながらお礼を言つと皆に向けて条件の事を話す事にした。

一刀からの条件とこちらから出した条件を話し終えると、

「冗談ではありません。そんな条件を信じられる訳ないでは無いのですか!!!」

それに私がなぜ北郷の下に行かなくては行けないのですか!!!」  
そう横に座っていた蓮華と数人が立ち上がって猛抗議するが、雪蓮も冥琳も掛け合おうとせず、雪蓮は蓮華に落ち着く様に言い、

「貴女が行かないのなら仕方ないわ。私かシャオが行くしかないわね。」

いっその事二人で行きましょうか、シャオ？」

そう告げられた小蓮は少し考えて（しかし雪蓮は冥琳に頬をつかられていた）

「うん面白そうだし他所の国も見てみたいから私が行っても良いでしょう？駄目、冥琳？」

小蓮に問われた冥琳は雪蓮の頬を引っ張りながら、

「如何でしょうね？私は小蓮様よりも蓮華様に行って頂きたいのですが……」

そう話しながら蓮華の方へ視線を向けると、それに気づいた蓮華は、  
「如何して小蓮ではなく私で無いといけないのか説明してして欲しいのだけど、冥琳？」

蓮華は冥琳に問い掛けるが、当の冥琳は、

「貴女に政治を勉強して頂く為です、蓮華様」

そうきっぱりと蓮華の問い掛けに応え、

「紅蓮様が無事で計画通りなら今頃、襄陽を制圧して夏口、江夏の制圧に掛かっている頃。」

その場合なら穏か私が教える事も出来ましたが、今の状況では話になりません。

領地すら無く、守る民すら持たぬ今の状況では……」

冥琳の言葉に蓮華は何も言い返せず、心の奥底で

『冥琳は私を北郷に取り入る為の生贄としようとしているのでは』  
等と考えてしまった自分を恥じていた。そんな蓮華の事などお構い無しに、

「しかし北郷には未だにその強大な経済力を背景とした力を頼って来る者が多く、

人口はそれに比例する様に増えています。しかし人口が増えると治

安を維持するのが  
難しくなるのです。ですが北郷はそんな状況でも治安は然程悪く  
なっていない「

横で見えていた雪蓮は蓮華が何やら良く無い事を冥琳に対し考えて  
いる事を感じていたが、  
疑われた冥琳が特に気にもせず言葉が続けているのを見た雪蓮は  
黙って成り行きを見守る。

「北郷の政治を司っているのは徐庶と??であると報告があります。  
恐らく政事の能力では  
私では歯が立ちません。ですから蓮華様には彼女らの政治能力を盗  
む事、北郷の政治を理解  
する事をお願いし、そして学んだ事を雪蓮の作る国に生かして欲し  
いのです」

冥琳の言葉が重く感じられる。今までも冥琳に何度も叱られたこと  
はあったが、  
その時の言葉より遥かに重く、更に自身の心に先程の冥琳への疾し  
さがある為か、  
心に直接響いてくるようであった。

蓮華は黙って下を向いて冥琳の言葉をもう一度思い出し、そして  
上を向き、

「解ったわ。私が北郷の政治を物にして見せる」

「よくぞ仰って下さいました、蓮華様。それでこそ雪蓮や私達の希  
望なのです。」

北郷の所には亞莎（呂蒙）を連れて行ってください。武官としても

護衛としても

お役に立つでしょう」

蓮華に言うと、そのまま思春（甘寧）に向かって、

「思春、お前は北郷から依頼されている江賊討伐、水軍強化の方を頼む。後、

解っているとは思いますが、北郷水軍の錬度と北郷の將軍や兵器の事も調べてくれ」

思春に支持を出した後、明命（周泰）にも、

「明命、お前は北郷の領内の様子や警備状況の変化、そして新たに支配下に置いた成都の

様子を頼む。それとやはり北郷の情報精度が高すぎるのが気になる。お前には袁術の事も

頼んだばかりだが下手な者では只でさえ少ない密偵を失い兼ねん。苦勞を掛けるが頼むぞ」

冥琳からの指示を受けて明命はその場を立ち上がり、天幕の外へ消えて行った。

それから冥琳からの指示及び、北郷の下へ行く際の注意点など、軍議は夜遅くまで続いた。

一方、一刀達は陣を払ってそのまま夜間中に江陵に近づこうとしていた。

その先陣を切るのは恋（呂布）であり、すぐ後ろの部隊には一刀や詠の姿も見える。

その周囲は精兵である親衛隊で囲まれており、その後方を残りの部隊が続く。

一刀が戦で前線近くに出る事を稟や風、その他大勢の者達が諫めるが、その都度一刀に

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。俺の前には恋もいるし親衛隊も守ってくれてる。

これ程安全な所もないし、危なくなったら後方に下がるから勘弁してくれ」

と笑顔と真顔で言ってくる一刀にそれ以上のことは言えず、更に一刀に、

「君みたいに俺の身を心配して進言してくれる。俺にはそれが何よりも嬉しいよ」

と返されていつも顔を真っ赤にして出て行く稟や万里（徐庶）、昇華（蔣？）らが目撃されている。

（兵士たちには日常の光景として認識されている為、次は誰が来るのかという賭けまであった）

少し休憩をとる傍らで一刀の横で黙って付いて来ていた詠は、

一刀が何かを聞いたそうな顔をしていた為、敢えて一刀に視線を合わせてから一刀の言葉を待つ。

「今の江陵の様子は？それと諷陵の昇華に頼んでいた事の返事は来た？」

詠は一刀からの問い掛けを懐から取り出した書簡を読みながら答え

る。

「江陵は僕達に敗れた奴らがそのまま援軍として向かって、今現在交戦中との事よ。」

霞の部隊と文聘の部隊が睨み合い、張允の本隊と華雄が何度かぶつかったみたいね。

こちらの被害は軽微だとの事よ。張允達は僕達や孫策達とも戦って疲弊しているので、

僕達が行けば逃げるか城に籠るかする筈よ」

「一方の江陵城はこちらが流した噂が城内で大きくなってそれを鎮める為、

大きな動きが出来なくて将兵に至っては段々と疑心暗鬼に陥っているとの事ね。」

本来なら援軍が来た時に挟撃され兼ねないけど、城内がそんな様子では無理だったみたい」

その報告を聴き一刀は、

「うん、順調みたいだね。昇華の方は？」

と頷きながら更に尋ねると詠は、

「一応用意は出来たみたい。夷陵に1万から1万5千程を駐留させてこれを孫策達に割当て

他の戦えない者達や負傷者には諷陵の先の開拓地に家を建てているとの事よ。」

そこで開拓を手伝ってもらう様に考えてると記しているわ。ただ飯食らいは許さない様ね。

一族の有力者やその家族達は白帝城の屋敷やアンタや他の者の別邸

に仮住まいさせるとあるわ」

詠の返答に満足した一刀は喜びつつ、後方にいる兵士達に向けて、

「よし！皆、疲れているだろうが、今回の戦闘を荊州最後の戦にしよう」

一刀が皆に言うとは後方に続く者達は確かな意思を持って一斉に頷き、その場を出発した。



静寂　く嵐の前の静けさ（後書き）

日報に色々誤字があつて、面白い日報を書いてくれる反対班がいると

朝、日報を読むのが楽しいですね。

最近めつきり寒くなり、夜中に目が覚める事が多々あります。そろそろインフルエンザの季節に突入しますので、皆さんも風邪など引かぬ様に気を付けてください。

来週は江陵の事、一刀の領内に雪蓮達が入る所までかけたらと思っております。

誤字脱字などありましたら遠慮なくお願いします。作者も人の事、反対の班の事は言えませんが……

今回もここまで御読み下さり有難う御座いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6216h/>

---

真恋姫無双～新～

2011年10月17日02時14分発行